国史跡　山王囲遺跡

発掘調査報告書Ⅲ

1998

一迫町教育委員会

国史跡　山王囲遺跡

発掘調査報告書Ⅲ

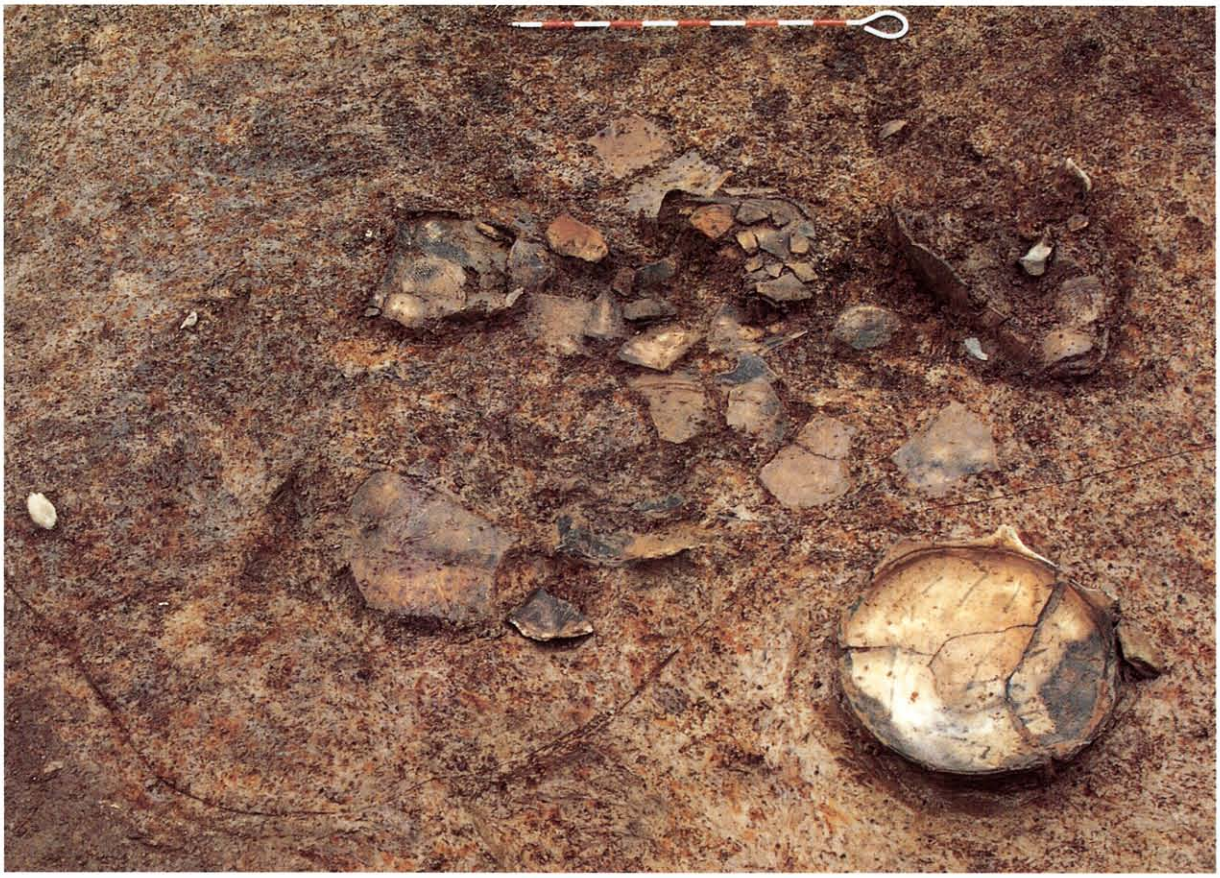
1　山王囲遺跡Ｐ区全景（東から）
View of excavated trench from the east

2　山王囲遺跡第15号土器埋設土壙
Pit15 with buried pottery

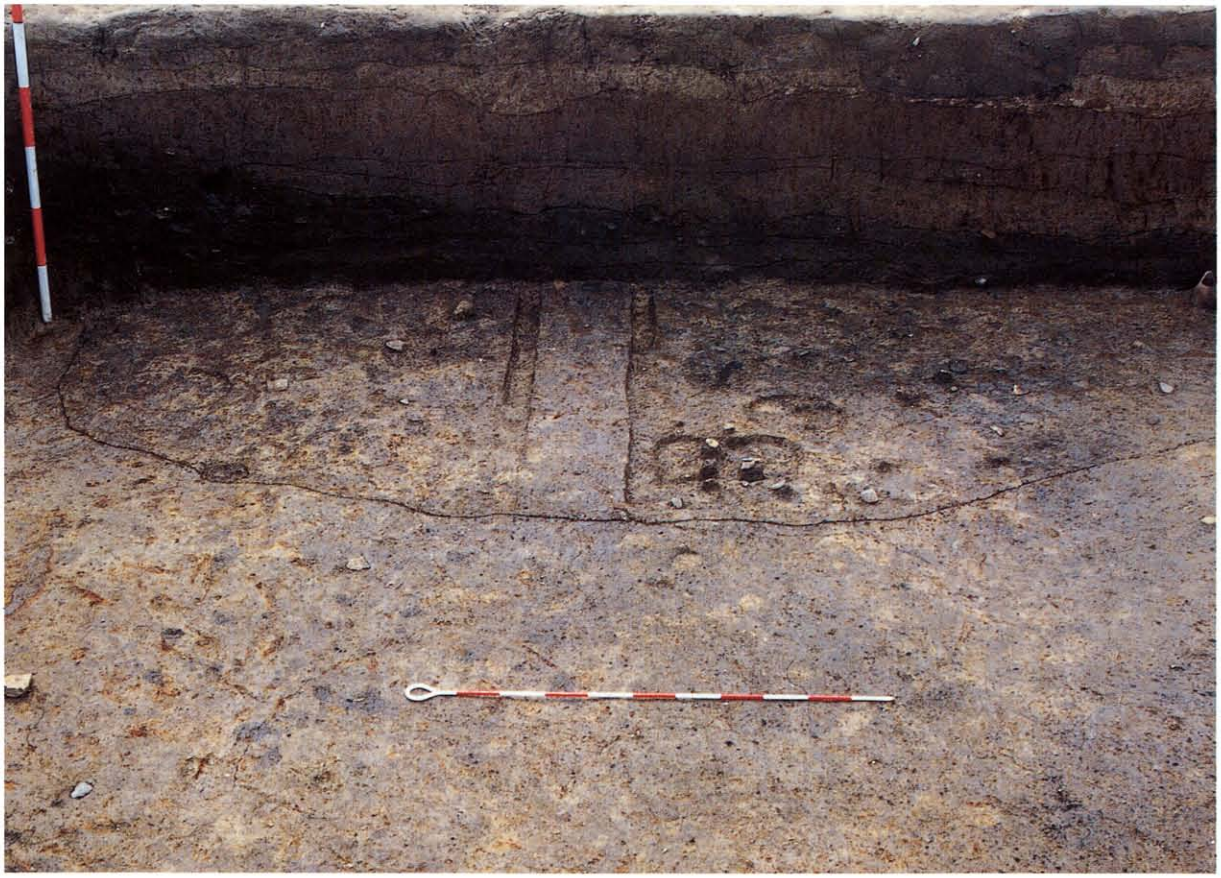
図 版 2

1　山王囲遺跡Ｐ区第３号配石遺構半截状況（南から）
Bisected Stony feature 3 looking from the south

2　山王囲遺跡Ｐ区第５号配石遺構半截状況（南から）
Bisected Stony feature 5 looking from the south



1　山王囲遺跡Q西区土器出土状況　24層　一括土器No.292～297（北から）
View of excavated pottery from the north



2　山王囲遺跡Q西区第1号竪穴状遺構（北から）
Pit 1 excavated at the Q west trench

図 版 4

1　山王囲遺跡Q南区・Q北区全景（南から）
View of excavated Q north and south trench from the south

2　山王囲遺跡S区全景（西から）
View of excavated S trench from the west

序

平成７年度より開始いたしました山王囲遺跡の発掘調査も、本年度で第３次を迎えました。今回の調査では、昨年度の第２次調査に引き続き、弥生時代前期の遺構群が発見されたほか、縄文時代晩期の有機質土層が非常に良好な状態で保存されていることが確認されるなど、山王囲遺跡の価値をあらためて知ることができる結果がでております。

また、町では今年度より文化庁、宮城県の補助をいただきながら「埋蔵文化財センター」の建設を開始いたしました。平成10年度完成のこの「埋蔵文化財センター」は、一迫町における発掘調査と史跡整備の拠点となるべき施設であり、文化財の保護と積極的な活用に取り組むための拠点でもあります。

先人の残した財産である文化財を保護し、後世に伝えていくことは我々の責務です。

今回の調査の成果が広く活用され、地域の歴史の解明と文化財の保護の一助となれば幸いです。

最後に調査にご参加いただいた皆様方、本書を作成するにあたってご助言、ご協力をいただきました諸先生方、ならびに関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年３月

宮城県一迫町教育委員会

教育長　遠藤昭吉

例　　言

1　本書は宮城県栗原郡一迫町字山王に所在する国史跡山王囲遺跡の第３次発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、一迫町教育委員会が調査主体となり、遺構分布確認のための国庫補助事業として平成９（1997）年７月28日から同年11月14日にかけて面積約1,400㎡の調査対象地について行った。

3　調査体制

調査担当　一迫町教育委員会

調査指導　須藤　隆（東北大学文学部教授）

加藤道男（宮城県教育庁文化財保護課調査第一係係長）

調査指導・協力機関　文化庁

東北大学文学部考古学研究室

宮城県教育庁文化財保護課

調　査　員　阿子島香（東北大学文学部助教授）

村田晃一（宮城県教育庁文化財保護課技術主査）

大場亜弥（一迫町教育委員会生涯学習課学芸員）

調査補助員　氷見淳哉（東北大学大学院博士課程）、荻原研一、西村　力、高橋　哲、玉橋さやか、藤原弘明、高木暢亮、小山有希、坂田由紀子、西井　亨、鹿又喜隆、熊谷宏靖（東北大学大学院修士課程）、福壽規人、鈴木　隆、北村浩貴、杉山陽亮、池谷考史、川口貴史、千葉直樹、三上紅美子、丹羽美智子、京野恵子、廣田英一郎、藤田直行、真田朱美、竹ヶ原亜希、小原恒夫、神田和彦、飯塚洋介、鎌田英司、羽石智治、早瀬亮介、馬場龍一郎、荒井　誠、小野章太郎、神野高慶、斎藤慶吏、山崎　健（東北大学文学部）

調査作業員　佐藤幸一、津田小砂、曽根義秋、笹川義春、門伝保輝、佐藤運之亟、佐藤ひさよ、松田セツ子、三浦精喜、菅原清喜、門伝千恵子、三浦清男、佐藤道子

調査参加者　中鉢琢也（奈良大学）

4　編集は須藤　隆の指導のもとに、大場亜弥、氷見淳哉が担当した。一迫町教育委員会、東北大学文学部考古学研究室の構成員が協力して整理・分析・図化、属性観察表の作成等の作業を行った。

資料整理・分析作業の体制

整理参加者　高橋　哲、玉橋さやか、小山有希、荻原研一、西村　力、藤原弘明、高木暢亮、坂田由紀子、西井　亨、鹿又喜隆、熊谷宏靖、福壽規人、鈴木　隆、北村浩貴、澤田純明、杉山陽亮、池谷考史、川口貴史、粟野昌之、千葉直樹、三上紅美子、丹羽美智子、京野恵子、廣田英一郎、

藤田直行、真田朱美、竹ヶ原亜希、鈴木寿幸、小原恒夫、神田和彦、飯塚洋介、鎌田英司、羽石智治、早瀬亮介、馬場龍一郎、荒井　誠、今井あゆみ、大橋　純、小野章太郎、神野高慶、斉藤慶吏、佐藤　恵、種石　悠、松田瑞穂、山崎　健（東北大学文学部）、斎藤幸子、佐藤勝子、菅原みさ子、阿部辰江、池田道子、井上文子、大豆田睦月、鈴木明美、曽根義秋、佐藤運之亟（一迫町）

5　本報告書の各章・節の分担執筆者は、文章末（　）内に付記した。

6　発掘調査および報告書をまとめるにあたって、次の方々のご協力とご助言をいただいた。
小井川和夫氏、富岡直人氏、吉川昌伸氏

7　地形および地質の調査と分析については阿子島功氏（山形大学）に依頼した。

8　植物の鑑定と分析は鈴木三男氏（東北大学）に依頼した。

12　石材の鑑定は蟹澤聰史氏（東北大学）に依頼した。

13　自然科学分析は（株）パリノ・サーヴェイに委託した。

14　地図は建設省国土地理院発行の1/50,000「岩ヶ崎」を複製、使用した。

15　土色については『新版土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1994）を使用した。

16　遺物図面、写真図版中の（　）内の番号は遺物観察表中の登録番号に対応する。

17　平成9年3月発行の『国史跡山王囲遺跡発掘調査報告書Ⅱ』で報告した第7号溝跡については、この第3次調査によってその北部が2本に分岐することが確認された。この新たに確認された溝跡の名称を第8号溝跡とした。

目　　次

はじめに …… 1

第1章　調査の目的と経緯 …… 3

第2章　調査の概要 …… 7

第1節　調査の方法 …… 7
第2節　発掘調査区の設定 …… 7
第3節　調査の経過 …… 8

第3章　調査の成果 …… 10

第1節　層　　序 …… 10
第2節　遺　　構 …… 18
第3節　出土遺物 …… 29

第4章　考　　察 …… 59

第1節　P区検出配石遺構・土壙の性格と時期 …… 59
第2節　V字溝の時期と性格 …… 59
第3節　Q西区竪穴状遺構と包含層について …… 60
第4節　Q区包含層出土弥生土器 …… 61
第5節　出土石器について …… 67

結　　語 …… 69

引用・参考文献 …… 70

付章1　山王囲遺跡の灰白色火山灰の分析結果 …… 71

付章2　山王囲遺跡出土木材の樹種 …… 74

付　　表

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表 …… 86
付表２　山王囲遺跡出土土製品観察表 …… 91
付表３　山王囲遺跡出土石器・石製品観察表 …… 91

図　　版

第１図版　山王囲遺跡発掘区配置図
第２図版　山王囲遺跡遺構配置図（Ｅ～Ｓ区）
第３図版　山王囲遺跡遺構配置図（Ｑ・Ｒ区）
第４図版　山王囲遺跡出土土器実測図
第５図版　山王囲遺跡出土土器実測図
第６図版　山王囲遺跡出土土器実測図
第７図版　山王囲遺跡出土土器実測図
第８図版　山王囲遺跡出土土器実測図
第９図版　山王囲遺跡出土土器・土製品実測図
第10図版　山王囲遺跡出土石器
第11図版　山王囲遺跡出土石器
第12図版　山王囲遺跡出土石器
第13図版　山王囲遺跡出土石器
第14図版　山王囲遺跡出土石器
第15図版　山王囲遺跡出土石核
第16図版　山王囲遺跡出土石核・剥片
第17図版　山王囲遺跡出土接合剥片

写　真　図　版

PL. 1　Ｐ区第3号配石遺構・第15号土器埋設土壙およびＰ区第1号焼土遺構
PL. 2　1965年時調査区北壁
PL. 3　Ｑ東区全景および第１号近世墓
PL. 4　Ｒ区蓋形土製品出土状況およびピット402
PL. 5　山王囲遺跡出土土器
PL. 6　山王囲遺跡出土土器
PL. 7　山王囲遺跡出土土器
PL. 8　山王囲遺跡出土土器
PL. 9　山王囲遺跡出土土器
PL.10　山王囲遺跡出土土器
PL.11　山王囲遺跡出土土器
PL.12　山王囲遺跡出土土器
PL.13　山王囲遺跡出土土器
PL.14　山王囲遺跡出土土器
PL.15　山王囲遺跡出土土器
PL.16　山王囲遺跡出土土器
PL.17　山王囲遺跡出土土器
PL.18　山王囲遺跡出土土器
PL.19　山王囲遺跡出土土器
PL.20　山王囲遺跡出土土器
PL.21　山王囲遺跡出土土器
PL.22　山王囲遺跡出土土器
PL.23　山王囲遺跡出土土器
PL.24　山王囲遺跡出土土器
PL.25　山王囲遺跡出土土器、土製品
PL.26　山王囲遺跡出土石器、石製品
PL.27　山王囲遺跡出土石器
PL.28　山王囲遺跡出土石器
PL.29　山王囲遺跡出土石器
PL.30　山王囲遺跡出土石器

はじめに

国史跡山王囲遺跡は、晩期縄文時代の低湿地遺跡として全国的によく知られている。1964・65年に、この遺跡の「泥炭層」が調査され、植物質の自然遺物、生活資材が豊富に出土したことから遺跡の重要性が明らかになり、国史跡に指定されたものである。ことに、その晩期後半の2mにおよぶ包含層から出土した装飾的で精巧な作りの籃胎漆器は、極めて貴重な縄文時代の工芸品として、その評価が確立している。

また、低湿地包含層の下部に形成された「泥炭層」と呼ばれる有機質土層からは、膨大な量の亀ヶ岡式土器、石器とともに、精巧な朱漆塗りの櫛が多数出土している。この櫛は、細いヒゴと紐で極めて複雑に組み立てられ、漆が繰り返し厚く塗り重ねられている（中里他　1971）。これらの漆塗り製品の存在によって、縄文時代晩期における漆塗り技術の優れた水準が明らかになった。さらに、この縄文時代晩期後半の有機質土層からは大型のヌマガイに朱漆を厚く塗った容器が出土している（伊東他　1985）。このような遺物は、この地域の縄文人がその生活域の資源をきわめて有効に活用していたことを裏づけるものである。

さらに、この低湿地包含層からは編布の断片が出土している。この編布もきわめて重要な資料である。縄文人の衣類がどのような材料でどのように作られていたのか、この布の断片は、縄文時代の布についての得がたい情報を提供した。1965年度の発掘調査を指導した故伊東信雄東北大学名誉教授は、この資料を入念に研究し、この布が編物であることを明らかにした（伊東　1966）。その編み方は、近年まで新潟県津南町などで編み続けられてきた「アンギン」（本山他　1963）ときわめてよく類似していることが伊東の観察で初めて確認された。また、この編布を詳細に調べ、アンギンの編み機、コモツチを用いて縄文時代における編み方を実験した（伊東　前掲）。その編み方は、米俵、炭俵、ムシロの編み方と共通するものである。同様な編布の断片は、北海道朱円後期縄文遺跡などからも出土しており、また、九州では長崎県雲仙岳東麓にある山ノ寺遺跡から晩期後半の土器に山王囲資料と類似した編布圧痕のみられる土器底部が早くから知られている。さらに、山王囲遺跡の1965年度調査の後、秋田県五城目町中山遺跡（高橋他　1984）、青森県亀ヶ岡遺跡、福島県三島町荒屋敷遺跡（渡辺　1990）などの低湿地遺跡における調査でも山王囲遺跡出土編布と共通した資料が出土しており、その類例が確実に増加している。このような資料によって、縄文時代後、晩期には日本列島において広く山王囲遺跡の編布の編み方と共通した技術が発達していたことが明らかになった。

最近、東北大学考古学研究室では、この編布の材質、保存状況を検討するために、東北大学理学部植物園の鈴木三男教授に資料の分析と拡大写真撮影を依頼した。顕微鏡観察では、この編み布の撚糸が、漆と推定される透明な樹脂様物資で厚く覆われ、その皮膜によって撚糸の安定した保存環境が維持されていたことが明らかにされている。[註1]

漆と推定される樹脂様物資の付着状態から、この編布は、秋田県五城目町中山遺跡出土の編布と同様に、漆を精製するための絞り布として使用されたと推定される。[註2] この編布を含めて山王囲遺跡出土の漆塗り関連資料の内容から、縄文時代の東北地方では広く漆製品の生産が盛んに行われていたこと、迫川最上流域の山王囲遺跡においても木胎、籃胎漆器、櫛、耳飾り、彩色土器など、様々な漆塗り製品の製作が目覚しい発達を遂げ、精巧な漆塗り製品を日常的に生産していたことがあらためて確認された。

なお、この遺跡は、2500年間、地下水がきわめて安定した状態に保たれ、2～3ｍ地下に埋没する有機質遺物、植物遺存体が最適条件のもとで保存されつづけたと考えられている。このきわめて特殊な環境のもとに保存されてきた重要遺跡を永く後世に伝えるためには、地下水の流れが大きく変化することで遺物の保存状態が急速に劣化することのないように、地下水を安定した状態に管理し、環境を整備しておく必要がある。

さらに、山王囲遺跡は、迫川流域の縄文時代晩期における拠点集落のひとつであり、多種多様な生活資材、物質文化が出土する。亀ヶ岡式土器、土偶、耳飾り、首飾り、腕飾りなどの土製・石製品、鹿角製装身具、石鏃など多様な打製石器、磨製石斧、石棒、石刀、独鈷石といった磨製石器、円盤状石器、磨石、凹石、石皿などの礫石器、骨角製の漁撈・狩猟具など、縄文時代晩期の出土遺物は実に多種多彩であり、縄文時代晩期の生活文化の豊かさをうかがうことができる。

また、植物の葉、茎、樹木、種子、ニホンジカ、イノシシ、サケ科魚類の椎骨などもみられ、出土する自然遺物の内容は多様であり、2500年前の人々の生活環境と身のまわりの資源の内容の豊かさを示している。

このように、山王囲遺跡は、縄文時代の人々の生活、文化、生業、集団関係、そして社会と自然環境に関するきわめて豊かな情報を提供する。ことに、本遺跡では実態のまだ明らかにされていない集落の構造とその変遷を調査することによって、晩期縄文社会に関する重要な手がかりが多数得られるものと期待される。

さらに、この遺跡の重要な特質のひとつは、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて継続して発展を遂げたこの地域の拠点集落の跡である点にある。本遺跡は、東北地方において縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての変革期に人々がどのように生活し、いかなる文化、社会を構築したのかを追求することのできる、得がたい重要な遺跡である。この遺跡についての綿密な調査と研究によって、縄文時代から弥生時代にかけての文化・社会がどのような過程をへて展開したのか、変化したのかを明らかにし、さらに進んでその変動のメカニズムを解明することは、日本の歴史、文化の研究にとってきわめて重要であるといえよう。

なお、山王囲遺跡は、多種多様な有機質遺物、植物遺物を出土する埋没有機質土層の厚い堆積が重要な特色となっている。この低湿地包含層は地下水の安定した保水状態によって保護され続けたものと考えられる。遺物・包含層・遺跡の保護にとって地下水が大きく変動せず、一定の状態を維持していることは大切なことと考えられる。今回の調査では、伊東の調査した1965年度の発掘区を確認し、その後の変化を精査し、今後の地下水保全のための対応策を併せて検討しておくことが重要な課題と考えている。（須藤）

註１　東北大学理学部植物園長鈴木三男教授の御教示による。現在分析途中であり、結果については、４次調査報告書で掲載予定である。

註２　名古屋大学文学部渡辺誠教授の御教示と写真提供による。

第１章　調査の目的と経緯

国史跡山王囲遺跡は、宮城県栗原郡一迫町真坂山王に所在する。宮城、岩手、秋田の三県にまたがる、奥羽山系の秀峯のひとつである栗駒山（須川岳、最高峰大日岳、標高1628ｍ）の西南麓、山裾を西から東南に開析する迫川右岸の自然堤防上に本遺跡が立地する。遺跡は、東西240ｍ、南北180ｍの広がりをもつ微高地にあり、北西を一迫川が流れ、南を長崎川が縁どる。この微高地は、二つの河川にはさまれた合流点にあって、東西約10km、南北約５kmの一迫川沖積地のほぼ中央に位置する。遺跡の面積は、約62,000㎡に及ぶ。遺跡の立地する自然堤防の標高は39ｍ、周囲の沖積地や長崎川との比高は３ｍ程である。

1964年から1965年にかけて、東北大学文学部考古学研究室は、伊東信雄教授の指導のもとに、３ヶ月間にわたる山王囲遺跡の発掘調査を実施した。この調査で遺跡の北東に広がる低湿地の厚い包含層から多量の縄文土器、弥生土器、石器、朱塗り土製装身具、土偶、骨角器、漆塗り貝製容器、朱漆塗り櫛、腕輪、籃胎漆器、編布など、縄文時代晩期中頃から弥生時代前期にかけての多彩な遺物が層位的に出土し、この遺跡の重要性が明らかになった。ことに次のような重要な成果がえられた（伊東他　1966）。

①厚さ３ｍ程の包含層において50層を超す堆積層が認定され、層位的に晩期中頃から終末にかけての膨大な量の亀ヶ岡式土器が出土し、その型式変遷を明らかにすることができた。

②包含層最上層のⅢ層において、弥生時代初期の土器、石器などの遺物が多量に出土し、東北地方における成立期の弥生文化を理解する手がかりがえられた。

③包含層の下半は低湿地の有機質土層がシルト質砂土、粘土などと多数の互層となっており、籃胎漆器、朱漆塗り櫛、編布などの植物質文化遺物、クルミ、トチ、クリなどの堅果類、種子類、樹木、葉、茎といった植物遺存体が豊富に出土し、縄文時代の植物製の生活資材、装身具などの物質文化とその技術、植物質食料資源の内容を明らかにすることができた。

④晩期中葉から弥生時代前期にかけての土偶、土製・石製・骨角製の装身具、石製・骨角製の狩猟具といった多彩な資料がえられ、この変革期における物質文化の構成と変遷を捉えることができた。

1971年に、本遺跡は、縄文時代晩期の物質文化の豊かさと高い技術内容を知ることのできる得がたい低湿地遺跡として、国史跡に指定された。その後、一迫町教育委員会は国・県の補助によって、遺跡南東部を中心に史跡公園の整備作業を進めてきた。しかし、遺跡の半分が一迫小学校の敷地であったため、全体的な整備にはいたらず、学校敷地を除いた公有地に盛土し、植栽を施し、あずま屋を設けるなどの部分的整備が進行した。

1995年に、史跡内西辺から中央部に敷地をもつ一迫小学校が移転し、その跡地全体が開地となり、史跡全面を整備することが可能となった。

この小学校跡地を含む史跡の整備に新たに取り組むにあたり、従来の調査資料では、全体的整備の計画を策定するには不十分であるため、遺跡における遺構群の埋没状態と範囲、遺物包含層の広がりと保存状態、形成時期、遺跡全体の微地形、有機質層の変性状況、地下水の滞水と流水、変動の状況をあらためて確認し、遺跡の範囲と構造を可能な限り正確に把握しておくことが急務となった。ことに、今後の遺跡整備では史跡の活用といった観点からも、遺跡の古環境、住居跡、貯蔵穴、墓壙などの遺構復元が強く期待されており、史跡範囲内での遺構、

第１図　山王囲遺跡周辺の縄文・弥生時代遺跡分布図〔Scale 1：50000〕　（国土地理院発行「岩ヶ崎」「真坂」転載）

Distribution of the Jomon and Yayoi sites around the Sanno-gakoi site

包含層のあり方、古地形の確認調査が不可欠と考えられるにいたった。

また、本遺跡の特徴である低湿地包含層の保存を図るために、遺物を包含する有機質土層の保存状態、特に有機質遺物の保存に決定的な影響を与える地下水の状態を捉えておく必要が指摘された。さらに今後の整備のなかで、遺跡の古環境、ことに植生の復元を計画するうえで、包含層の埋没樹木、草本類など植物遺存体の調査が不可欠であり、環境考古学的調査を含めた総合的調査が必要と考えられるにいたった。

1995年から、一迫町は、国、県の補助と指導をえて、今後の全体的史跡整備のために必要な遺跡構造の確認調査を、東北大学文学部考古学研究室の協力のもとに1999年までの５ヵ年計画で開始した。第１年次には、遺跡南側の東西にのびる自然堤防の高まりの調査に取り組んだ。その結果、遺跡中央の微高地で、縄文時代晩期後半に属する住居跡の柱穴が多数検出された。ことに、Ｋ区の調査では、柱穴と焼土の広がりから住居跡２棟が確認された。さらに、Ｋ区東北隅では竪穴住居の壁と推定される掘り形が検出され、発掘区の北側と東側に遺構が広がることが確認された。また、Ｋ区南側の自然堤防南半部にも晩期の遺構群の広がりが予想された。

また、遺跡東部に設けたＡ～Ｄ発掘区では、縄文時代の陥穴、土壙、ピット、弥生時代の土壙、古代の住居跡、土壙などの遺構が検出された。しかし、遺構の密度は希薄であって、Ｋ区を中心とする縄文時代晩期居住域の東限が明らかになった。

さらに、北側、北西側に設けたＥ、Ｆ、Ｇ区の南北発掘トレンチでは、３棟の竪穴住居跡、配石遺構、５基の埋設土器などの晩期最終末から弥生時代前期にかけての遺構が次々と検出された。このような調査成果によって、本遺跡が縄文時代晩期中葉から弥生時代前期にかけての大規模な拠点集落跡であることがあらためて明らかになり、集落のひろがりについてもその主要部分が確認された。

1996年に第２次調査を行った。この調査では前年度に検出したＫ区の晩期遺構群の北側における広がりとＦ区

第１表　山王囲遺跡周辺遺跡地名表

List of the prehistoric sites around the Sanno-gakoi site

No.	遺　跡　名	種　別	縄　文	弥生	No.	遺　跡　名	種　別	縄　文	弥生
1	堰場遺跡	包含地	早・前		22	国史跡山王囲遺跡	集落跡	晩	○
2	嶋躰日向遺跡	包含地	前		23	祇園遺跡	包含地	晩	
3	清水畑遺跡	包含地	○		24	町史跡向芳沢遺跡	包含地	前・晩	
4	境田前遺跡	包含地	中		25	小古遺跡	包含地	前～後	
5	河童淵遺跡	包含地	晩	○	26	町田遺跡	包含地	前・中	
6	青木畑遺跡	集落跡	中～晩	○	27	運難下遺跡	包含地	縄文	
7	南反町遺跡	包含地	中	○	28	小畑前遺跡	集落跡	前・中・晩	○
8	的場前遺跡	包含地	中・晩		29	上野原遺跡	包含地	○	
9	門前遺跡	包含地	中		30	上野遺跡	包含地	中・後	
10	法師渕遺跡	包含地	○		31	堰田Ａ遺跡	包含地	前	
11	青符Ａ遺跡	包含地	早～中	○	32	堰田Ｂ遺跡	包含地	中	
12	青符Ｂ遺跡	包含地	中・晩		33	金矢遺跡	包含地	晩	○
13	青符Ｃ遺跡	包含地	○		34	柳目館跡	包含地　城館	なし	○
14	青符Ｄ遺跡	包含地	前		35	妙教寺遺跡	包含地	晩	
15	青符Ｅ遺跡	包含地	晩		36	穴ノ原遺跡	包含地	早・中	
16	妙円遺跡	包含地	晩		37	花栗遺跡	包含地	○	
17	室ノ沢遺跡	包含地	晩	○	38	堂の沢遺跡	包含地	早・晩	○
18	鶴町Ａ遺跡	包含地	晩		39	北沢遺跡	包含地	晩	○
19	高田Ｂ遺跡	包含地	○		40	機織遺跡	包含地	中	
20	高田Ａ遺跡	包含地	晩	○	41	赤新田遺跡	包含地	早	
21	要害原遺跡	包含地	○		42	袖山遺跡	包含地	前	○

の前期弥生時代竪穴住居跡を精査した。K区の北側と東側に設けた発掘区では晩期後半の土壙群、ピット群が検出された。そして前年に竪穴住居跡の一部と推定された掘り形は弥生時代のV字溝であることが判明した。溝の幅は1.5m、深さは1mに及ぶ。さらに、複数のトレンチを設けてこの溝を追求した結果、V字溝は東南と西北にそれぞれ約70mのび、全長140mを超すことが確認された。

また、F区の弥生時代前期後半の2・3号竪穴住居跡については西側に調査区M区を設け、遺構全体の精査を行った。この住居跡には2条の壁溝がめぐり、2号住居が径約6m、3号が2号の拡張住居で径8m、深さはいずれも15cm程度である。炉跡は2基が重複している。5本柱、中央に地床炉をもつ住居であり、2棟がほぼ同一構造である。また、この住居の西側に約3m離れて同時期の8号住居跡が新たに検出された。

さらに自然堤防の北側にひろがる低湿地に臨むI区で、V字溝から北にのびる幅1～3.5m、深さ30cm程の浅い溝が検出された。この8号溝の埋土からは山王Ⅲ層式土器が出土し、溝は弥生時代前期に機能していたと判断された。また、溝の東側には土手状の高まりが旧河道にそってのび、自然堤防と土手・旧河道との間のくぼ地に洪水層と推定される灰白色シルト質土層の広がりが認められた。

この8号溝の南から北にのびる延長部の断面をI区北壁で掘り下げて検討した結果、溝が掘り込まれている下層の包含層601層から605層にかけて晩期終末から弥生時代前期前半の土器が出土した。さらに下層の606層から611層では大洞A式の中・古段階の土器が出土し、晩期後半の包含層が確認された。また、この611層からは、竪杵、加工木材など木製品が出土した。竪杵は晩期後半大洞A式期のもので、全国的にもきわめて貴重な資料である。仙台市中在家南遺跡（工藤他　1996）など弥生時代中期の竪杵とはまったく異なった特徴がみられる。また、611層からは、ヒエとアサの種子が出土しており、晩期後半にこの種の栽培植物がすでにこの集落で利用されていた可能性が指摘された。

第1、2次調査の成果をうけて、1997年の調査では、つぎのような調査目的が設定された。

① 遺跡中央部の低湿地に臨む平坦地にのびる8号溝と自然堤防との地形的関係の把握

② 遺跡東北部に広がる低湿地の微地形、1965年度発掘区周辺堆積層の把握

③ 8号溝北側にひろがる低湿地における利用状態－水路跡、水田遺構など－の把握

④ 北西部を流れる旧河道と低湿地との関係の解明

⑤ 晩期遺構の北西部への広がりの確認

⑥ 弥生時代生活面の広がりの確認

⑦ 遺跡東北部にのびる自然堤防上における遺構の確認

こうした縄文時代晩期中葉から弥生時代前期にかけての山王囲遺跡において営まれた集落の構造、規模、その変遷について十分な検討資料を確保するために、第3次調査では、1，2次調査地をさらに北側と西側へひろげより広い範囲で、層位的、平面的に遺構の検出、精査確認を進めた。さらに、遺跡の北端部では1965年度に調査された低湿地の有機質遺物包含層の現状把握に努めた。　（大場、須藤）

第2章　調 査 の 概 要

第1節　調査の方法

第3次調査では、1996年度までの調査で確認された史跡中央部の低湿地、旧河道から南側を東西に弓なりにのびる自然堤防の高まりにかけての微地形の把握を目的に、1996年度のＩ区の北側に東西24ｍ、南北12ｍの発掘区Ｐ区を設けた（第１・２図版）。この調査区において西辺にのびる旧河道の東と８号溝の北側にひろがる灰白色シルト、砂質土の広がりを確認し、旧河道の一部とともに層位的に掘り下げ、その河道が機能した時期、シルト、砂質土による埋没の過程を確認することをめざした。

また、灰白色シルト質土層の広がるくぼ地（第９号溝跡）では、水田土壌の可能性を検討するため、イネのプラントオパールの採集と分析を行った。分析資料の採集は、１ｍ方眼区域割で、灰白色シルト質土層の下に広がる灰色粘土層から採集し、50地点で資料のサンプリングが行われた。採集土壌に汚染を生じないように極力注意し、資料採集と分析はパリノ・サーヴェイに依頼した。

さらに、Ｐ区東半で検出された礫群の集中－配石遺構－については、遺構確認のため、実測ののち、土壙の検出、精査、断面観察を行った。特に埋設土器、埋土出土遺物を精査した。掘り下げた土壙の土壌は東北大学考古学研究室で２㎜の金属篩装置で水洗し、微細遺物の抽出と検討を行った。

遺跡北東部の低湿地では、一迫小学校体育館の基礎部分の内側に東西36ｍ、南北23ｍの範囲で発掘区Ｑ区を設定し、1965年度発掘調査区の掘り形を確認するとともに、この調査区の北、東、西側において遺構、包含層の検出に努めた（第１・３図版）。また、旧発掘区については、包含層の堆積状態を確認するために、北壁と西壁を掘り出し、検討した。また、低湿地包含層における植物遺存体の包含状態、湿地埋没の進行状態などを明らかにすることを目的に、植物学、地理学の専門家に包含層の土壌分析を依頼した。

遺跡東北部に設けた調査区Ｑ区の西側において、遺跡の北側への広がりを確認するために土器包含層、土壙などの遺構の調査を入念に進めた。Ｑ区東側に広がる自然堤防の高まりに、発掘区Ｒ区を設けて包含層と遺構の検出を行った。この地区は1962年に明治大学の杉原荘介教授が弥生土器の調査を目的に発掘し、縄文時代晩期の土壙群が検出された場所に相当し（明治大学考古学博物館　1991）、晩期遺構の存在が予想された。

また、Ｐ区の南、1996年度に行った第２次調査のＫ区拡張区の北西にＳ区を設けて７号溝の北西方向への延長部分を追求し、西端部の精査を行った。

第2節　発掘調査区の設定

調査のための基準点は国土座標第Ｘ系に基づいている。山王囲遺跡地内には、1987年および1996年にコンクリート杭による基準点が設置されており、今回の調査ではそのうちのＡ点、Ｂ点、基準点１～３を使用した。各点の座標値を第２表に示す。なお、第１次および第２次発掘調査で任意に設定した基準点は、仮設の基準杭を使用しており、数年にわたっての原位置保持に耐えられるものではなかったため、本次調査では基準としていない。

第２表　山王囲遺跡内基準点一覧

List of bench marks in the Sanno-gakoi site

点名	座　標　値		
	X	Y	Z
基.1	－140109.529	10324.855	38.240
基.2	－140099.607	10412.411	38.815
基.3	－140000.693	10418.339	37.821
基.4	－139997.982	10202.832	37.964
L1L1.111－4	－139985.753	10386.946	－

また、トータルステイションの使用により座標値の有効桁数に制限が生じるため、以下の式で国土座標値を３桁に変換し、調査の際の座標値としている。

Ｘ座標値＝（国土方眼座標のＸ値）＋140,000

Ｙ座標値＝（国土方眼座標のＹ値）－10,000

以下座標値については、この調査座標値を用いる。

グリッドの設定にあたっては、第１次、第２次調査と同様の基準で行った。遺跡の南西に原点を設定し、南北を基軸とした一辺３ｍのグリッドを基準としている。東西軸には北に向かってＡＡ、ＡＢ、ＡＣ、…南北軸には東に向かって１、２、３、…と名称をあたえた。グリッド名は南側の東西軸名および西側の南北軸名をその区名としている。原点（ＡＡ、０）の座標値は（－153、198）である。

原則的にはこの座標軸を使用したが、一部Ｑ区に関しては、設定箇所である小学校体育館跡地に建物の基礎が残っているため、基礎の形に沿って軸を設けた。この場合の原点の座標値は（－5.5、339）である。３ｍおきに、西北－東南軸にＸ１、Ｘ２、……、南西－北東軸に、Ｙ１、Ｙ２、……と名称を付した。グリッド名は他調査区と同様に南西の交点軸名をあてている。

測量については、トータルステイションおよび平板を使用した。平面図については遺構および遺物包含層の分布と遺物の出土状況を記録した。あわせて写真撮影を行った。また、遺物の出土地点、垂直位置については、トータルステイションによる記録を可能な限りもれなく行った。

なお、植物の種子、骨、貝、玉類などの微細遺物を悉皆採集するために、遺構の埋土、包含層の一部を東北大学考古学研究室製作装置の改良型フローティション装置２台と２㎜金属篩によって水洗し、人工遺物、自然遺物の選別を行った。

第３節　調査の経過

第３次調査の発掘区はＯ・Ｐ・Ｑ・Ｒ・Ｓ区の５地点である（第１～３図版）。

このうちＱ区については1995年度に解体した一迫小学校の体育館基礎の内側に設定した。これは1964・65年の調査区を全体的に取り込んだものである。このＱ区の表土除去を７月28日から行った。表土の除去中、体育館のほぼ中央で径20～30㎝の円礫が方形に敷き詰められていることが判明したため、礫の敷き詰められた中央とその東西とを三つの区に分けて調査することとした。７月30日までに中央区の礫を撤去した。この中央区をさらに円礫の多い南側と比較的少ない北側とに区分けし、Ｑ区をそれぞれＱ東区、Ｑ西区、Ｑ北区、Ｑ南区とした。翌、31日にはＱ東区の残った表土を除去し、遺構確認面まで掘り下げを進めた。

８月４日に、Ｐ区発掘区を設定するとともに、Ｑ西区の表土を除去した。Ｑ東区では５層からの精査、Ｑ西区においても11層から層位的に慎重に調査を行った。

８月５日にＰ区北区と南区の境に幅60㎝のベルトを設定した。Ｑ東区では５層上面で近世の墓や、第10号土器埋設土壙などの遺構を検出した。

8月6日にはP区の東西ベルトの3a層から石庖丁破片1点が出土し、P区発掘区東半で弥生時代の包含層である8a層を検出した。P区発掘区南壁及び北壁に沿って幅50cmのサブトレンチを設定し、下層の堆積状況を確認した。8月6日から8日にかけてQ東区の近世墓の精査を行った。

8月18日にP区では10層（黒褐色土層）を検出した。この層において配石遺構、土器埋設土壙、焼土遺構が検出され、弥生土器など多くの遺物が出土した。遺跡の微高地東北端に設定されたR区では1962年の明治大学の発掘区を確認した。

8月19日に、Q西区南端および南西端にトレンチを設定し、下層の堆積状況を確認した。R区では多くの遺構が検出された。8月21日にQ西区で確認された第14号土器埋設土壙を精査した。R区では遺構の性格を十分に検討するため、R（東）区の西端で南北方向にのびるトレンチをT字形に拡張してR西区の設定を行った。8月22日にR区の2b層中から縄文晩期土偶の上半部とともに晩期後半の土器、石器などの遺物が出土した。8月25日にP区の南北ベルトを除去した。8月26日にQ南区で1965年の発掘区の西北部を検出した。8月27日には、P区において第3号配石遺構を検出し、精査を行った。またR西区において4層を検出面とした遺構群の精査を開始した。この調査区における精査は9月9日まで行った。

8月28日にP区で第4、5号配石遺構を検出し、精査を行った。また、Q西区では南東壁に沿って小トレンチを設定し、包含層、遺構、埋土の確認を行った。8月29日にP区において礫群のひろがりの中で第3号焼土遺構を検出した。R西区では2b層中から土製品が出土した。9月1日～15日にQ南区で1965年の発掘区を掘り下げ、発掘区の北壁を精査し、観察、記録した。9月2日にP区で第1、2号焼土遺構を検出した。9月8日にP区西側の河川跡南端に深掘区を設定し、9日から精査を行った。9月12日にはQ西区で竪穴状遺構を検出し、24、25日に精査を行った。埋土から樹木の炭化物破片が比較的多く出土した。

10月28日にP区で第11、12、13、15号土器埋設土壙を検出し、遺構の半截掘り下げを行い精査した。

8月22日に山形大学阿子島功氏が来跡し、地形の分析を行った。9月11日および10月4日に鈴木三男氏、吉川昌伸氏が来跡し、植物遺存体の出土状況について観察を行った。また、有機物遺物処理の方法について助言をいただいた。9月11日、パリノ・サーヴェイによる自然環境分析を目的とした土壌サンプルの採取が行われた。9月13日午後2時から現地説明会を開催した。

遺構および遺物の出土状態の実測、写真撮影、記録については8月8日から11月13日にかけて随時行った。

11月13日に遺構、発掘区壁面包含層堆積関係の実測図、土層観察表の作成を終了した。　（大場）

第3章　調査の成果

第1節　層　　序

P区における層序関係

P区の堆積層の関係は複雑であるが、基本的に広範囲の整地盛土を排土すると、旧耕作土、表土がひろがり、この旧表土、耕作土、旧水田床土層の下に遺物を包含する堆積層、無遺物層が堆積している。この盛土、旧表土以下の層を1層から2、3a、3b、4、…、12層まで22枚の堆積層を認定した（第3～5図、第3表）。

1層は白色砂粒や鉄分を含んだ灰黄褐色シルト層である。**2層**は、暗褐色シルト層で、やはり白色砂粒と鉄分を含んでいる。これらの層は、1995年に行った第1次調査のE～J区で検出された2層に対応し、河川氾濫土壌と推定される。

3層は黒褐色で粒度、含有物の違いからa、bの2層に細分される。3a層は、黒褐色シルト層で白色粒子や鉄分を含んでいる。層中からは、土師器が出土している。また、弥生時代中期の紡錘形石庖丁破片が1点出土している。この層は、E～J区の3層に対応する。3b層は、黒褐色砂質シルト層で白色粒子や鉄分、炭化物をわずかに含んでいる。3b層は3a層と4層の漸移層であり、P区北東部にひろがる。

4層は灰黄褐色シルト層でブロック状の灰白色火山灰を多量に含み、鉄分や白色粒子を少量含んでいる。4層は、遺跡をひろく覆っており、この灰白色火山灰は、10世紀頃の火山灰と推定されている（付章1参照）。

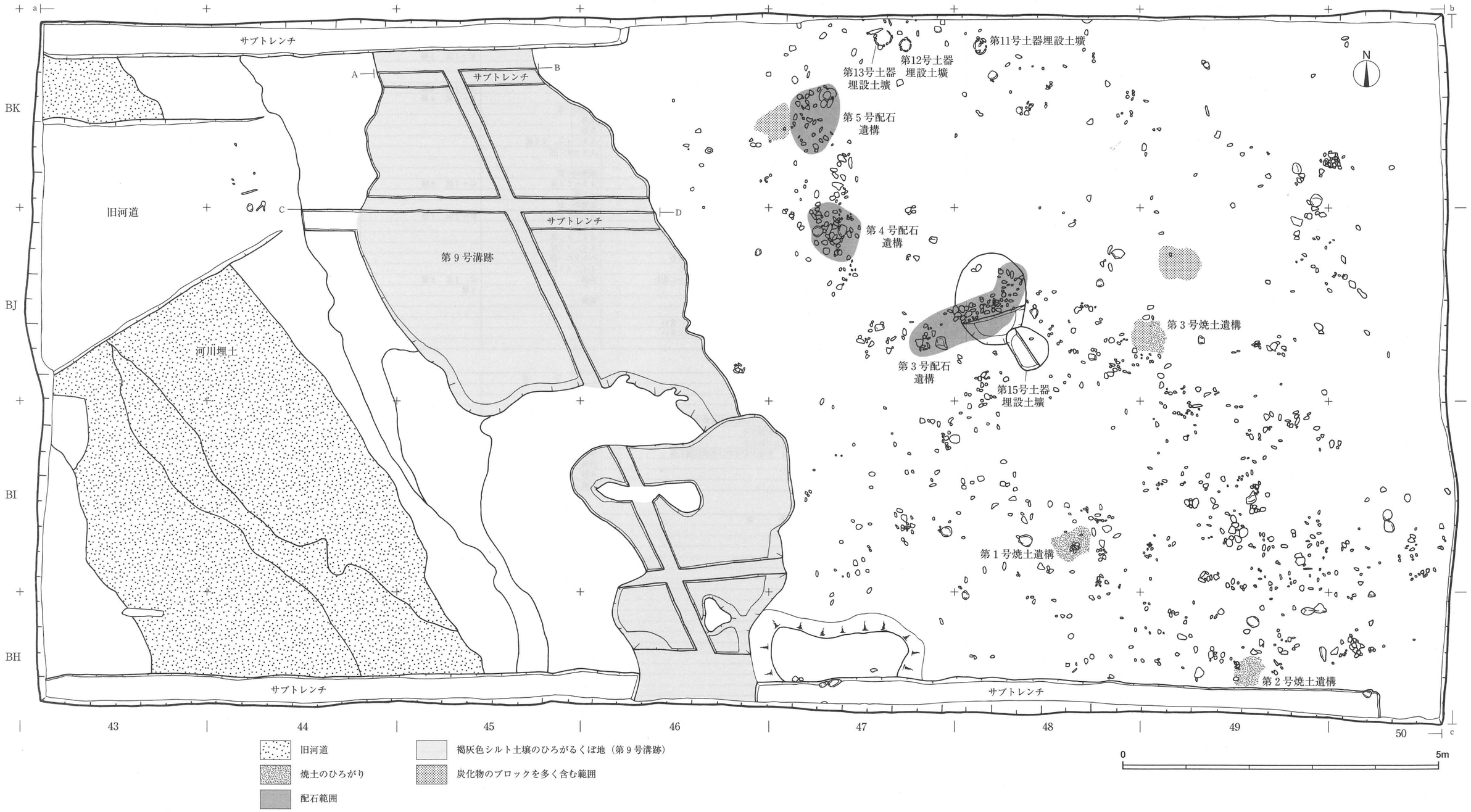
5層は灰黄褐色砂質シルト層で、鉄分の含有量の違いからaとbの2層に分けられる。5a層は、鉄分が多く、白色粒子、炭化物を含み、4層と5b層の漸移層といえる。5b層は、5a層より鉄分が多く、炭化物と白色粒子が含まれる。E～J区にひろがる5層に対応する。遺物は極めて少ない。

6層は、灰黄褐色シルト質砂層である。少量の鉄分とブロック状の砂が含まれる。6層は、P区西側で確認されている。

7層はシルト層で、土色や鉄分の含有量の違いからaとbの2層に識別された。7a層は暗褐色をおび、鉄分の含有量が著しく、炭化物と白色粒子が若干含まれる。7b層は褐灰色を呈し、7a層よりも鉄分が多い。

8層は灰黄褐色シルト層で粘性が強く、土色や鉄分の含有量の違いからa～hの8層に細分された。8a層は鉄分を多量に、炭化物をやや多く含む。8a層はP区東側で厚く、最大で25cmに達する。遺物は出土せず、洪水層と考えられる。G～I区の6層に対応する。8b層は灰黄褐色で鉄分が8a層よりも多い。8c層は灰黄褐色で鉄分を多量に含み、8b層よりも粘性が強い。8d層は灰黄褐色で鉄分が8a層よりも多く含まれる。H～J区にみられた7層に対応する。8e層も灰黄褐色で鉄分と炭化物を含む。P区西側にひろがる8b層の下層にひろがり、局所的に分布している。8f層は褐灰色砂質シルト層で鉄分と炭化物を多量に含む。P区西側の7、8e層の下層にひろがり、分布範囲は8e層とほぼ一致する。8g層は褐灰色砂質シルト層で、鉄分と炭化物を含む。P区西側の8f層の下層にあって、8e、8f層と分布範囲がほぼ一致する。8h層はにぶい黄褐色を呈し、鉄分や炭化物を含んでいる。

これらの層のうち、8b、8c、8e～h層は、P区にひろがる10層が西側に向かってゆるやかに傾斜する斜



第２図　山王囲遺跡Ｐ区遺構検出状況平面図

Plans of archaeological features at the P trench in the Sanno-gakoi site

第３表　土層観察表

Ｐ区層序

層名		土色	粒度	粘性	しまり	含有物	分布	層の対応関係	備考
1		１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	砂質シルト	弱	強	径２㎜白色粒子、径２㎜～５㎜程の鉄分をわずかに含む	全体		
2	北壁	１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	砂質シルト	弱	やや強	径２㎜白色粒子、径２㎜～５㎜程の鉄分を多量に含む	全体	Ｅ～Ｊ区　２層	
	南壁	１０ＹＲ３／４　暗褐色	シルト	弱	強	径２㎜の白色粒子をわずかに、鉄分を多く含む	全体	Ｅ～Ｊ区　２層	
3 a	北壁	１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	砂質シルト	弱	中	径２～３㎜の白色粒子と鉄分をわずかに含む	全体	Ｅ～Ｊ区　２層	石庖丁、土師器が出土
	南壁	１０ＹＲ３／２　黒褐色	シルト	中	強	径１～２㎜程の白色粒子、径２～３㎜の炭化物をわずかに含む　マンガンを少量含む	全体	Ｅ～Ｊ区　２層	
3 b	北壁	１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	砂質シルト	弱	中	径２～３㎜の白色粒子と鉄分をわずかに含む	全体		
	東壁	１０ＹＲ２／２　黒褐色	砂質シルト	やや弱	やや弱	径２～３㎜の白色粒子、鉄分、径１㎜の炭化物をわずかに含む　部分的に黒褐、黄褐色土を含む	全体		
4	北壁	１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	砂質シルト	弱	中	灰白色火山灰を多量に含む　鉄分をまばらに含む	全体	Ｅ～Ｊ区　４層	
	南壁	１０ＹＲ５／２　灰黄褐色	シルト	中	中	灰白色火山灰を多量に含む　白色粒子をわずかに含む	全体	Ｅ～Ｊ区　４層	
5 a		１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	砂質シルト	やや弱	中	径２～３㎜の白色粒子、径１㎜の炭化物をわずかに含む　５ｂ層に比べて鉄分が少ない	南壁の一部		
5 b	南壁	１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	砂質シルト	中	中	鉄分を多く含む。径２～３㎜の炭化物、白色粒子をわずかに含む	全体		
	北壁	１０ＹＲ４／３　にぶい黄褐色	砂質シルト	中	やや弱	径１㎜程の白色粒子、炭化物をわずかに、鉄分をまばらに含む	全体		
6		１０ＹＲ６／３　灰黄褐色	細砂･シルト質砂	弱	やや弱	鉄分をまばらに含む　砂をブロック状に含む	４４，４５，４６区		
7	北壁	１０ＹＲ３／４　暗褐色	シルト	中	中	鉄分を多く含む　径２～５㎜の炭化物、径３㎜～３㎜の白色粒子をわずかに含む	４４～４７区		
	南壁	１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	砂質シルト	中	やや弱	鉄分を多く含む　径２～３㎜の炭化物をわずかに含む。			
7 b		１０ＹＲ４／１　褐灰色	シルト	強	弱	径２～３㎜の炭化物をわずかに含む　鉄分がグライ化したもの？	南壁の一部		
8 a		１０ＹＲ５／２　灰黄褐色	シルト	強	やや弱	鉄分を多量に含む　径２～３㎜の炭化物を多く含む	４５～５０区	Ｇ～Ｉ区　６層	
8 b		１０ＹＲ５／４　灰黄褐色	シルト	強	中	８a層よりも多量の鉄分を含む　径２～３㎜の炭化物を多く含む	４５区		
8 c		１０ＹＲ５／２　灰黄褐色	シルト	強	やや弱	鉄分を多量に含む　８ｂ層より粘性が強い　径２～３㎜の炭化物を多く含む	北壁の一部		
8 d		１０ＹＲ５／２　灰黄褐色	シルト	強	弱	８ｂ層よりも多量の鉄分を含む　径２～３㎜の炭化物を多く含む	４５～５０区	Ｈ～Ｊ区　７層	
8 e		１０ＹＲ５／３　灰黄褐色	シルト	強	弱	鉄分をまばらに含む　径２～５㎜の炭化物をわずかに含む	４５区		第９号溝跡を覆うシルト層
8 f		１０ＹＲ５／２　褐灰色	砂質シルト	強	弱	鉄分をまばらに含む　径２～３㎜の炭化物をわずかに含む	４４，４５区		第９号溝跡を覆うシルト層
8 g		１０ＹＲ４／２　褐灰色	砂質シルト	強	弱	鉄分をまばらに含む　径２～３㎜の炭化物を８ｆ層よりわずかに含む	４４，４５区		第９号溝跡を覆うシルト層
8 h		１０ＹＲ５／３　にぶい黄褐色	シルト	弱	中	鉄分をまばらに含む　径１～５㎜の炭化物、径１㎜程の白色粒子をわずかに含む	ベルトの一部		第９号溝跡を覆うシルト層
9		１０ＢＧ４／１　暗青灰色	シルト	強	弱	鉄分をわずかに含む　径２～５㎜の炭化物をまばらに含む　グライ化している	４４，４５区		サブトレンチ、南北にのびるゆるやかなくぼ地で検出
１０		１０ＹＲ２／３　黒褐色	シルト	やや強	やや弱	炭化物と鉄分を含む　径１～５㎝の礫を含む　径２～３㎜の白色粒子をわずかに含む	東側	Ｇ，Ｉ区　８層	弥生Ⅱ期の土器を主体とした多量の遺物が出土　遺構検出面
１１		１０ＹＲ２／１　黒色	シルト	強	弱	径２～５㎜の炭化物を多く含む　径３㎝以上の礫を含む		９層	サブトレンチでのみ検出
１２		１０ＹＲ４／４　褐色	砂	弱	弱	径１～２㎝の礫を多く含む　鉄分を含む	東側		第３号配石遺構が掘り込まれている
１２ａ		５ＹＲ４／１　灰色	砂	無	弱	鉄分をごくわずかに含む			第５号配石遺構断ち割りセクションで検出
１２ｂ		５ＹＲ４／４　にぶい赤褐色	砂礫	弱	弱	全体的にブロック状に鉄分を含み赤化している　径１～５㎝程の礫をまばらに含む			第13号土器埋設土壙断ち割りセクションで検出
１２ｃ		2.5ＹＲ４／２　暗灰黄色	砂	無	弱	径１～２㎜の鉄分を含む　径１㎝程の礫を少量含む　12ａ層よりも砂の径が大きい			第11～13号土器埋設土壙断ち割りセクションで検出
河川理土									

Ｑ東区層序

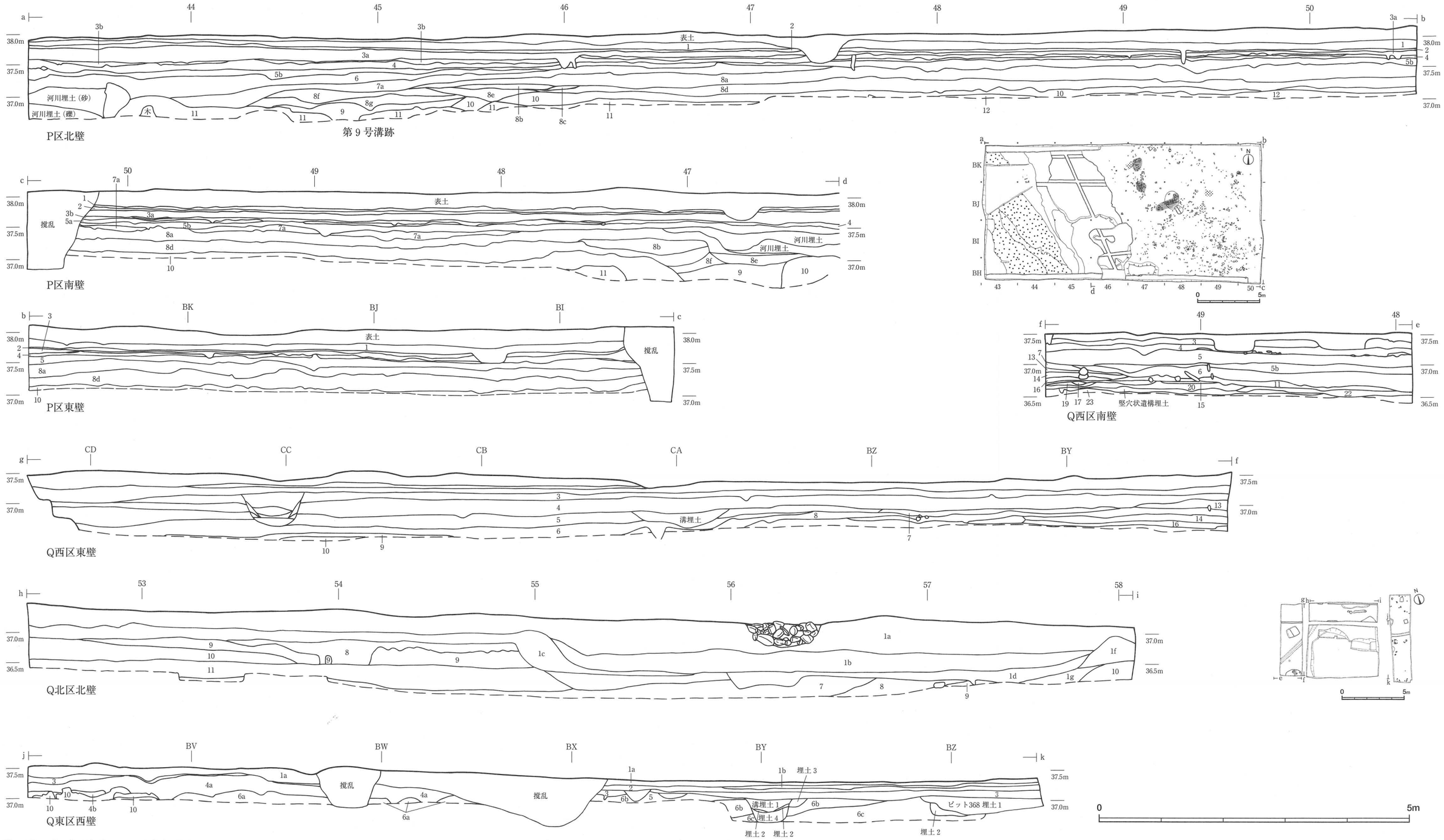
層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	分布	層の対応関係	備考
１ａ	１０ＹＲ５／２　灰黄褐色	シルト	弱	中	径１㎜程の鉄分をごくわずかに含む	全体		
１ｂ	１０ＹＲ　明灰黄褐色	シルト	弱	中	鉄分を多く含む	北半		
2	１０ＹＲ５／２　灰黄褐色	シルト	弱	中	鉄分を非常に多く含む	全体		
3	１０ＹＲ５／２　灰黄褐色	シルト	弱	中	径２～３㎜ほどの炭化物、鉄分をわずかに含む　径１～２㎜程の白色粒子を含む	全体		
４ａ	１０ＹＲ４／６　褐色	シルト	中	弱	径２～３㎜程の炭化物、鉄分を多量に含む。灰色土が混じる	南半		
４ｂ	１０ＹＲ４／３　にぶい黄褐色	シルト	中	弱	径１～２㎜程の炭化物を含む　鉄分を含む　灰色土が混じる	南端		
5	１０ＹＲ　にぶい黄褐色	シルト	やや弱	やや弱	径２～３㎜程の炭化物、２～５㎜程の鉄分を含む　灰色土がブロック状に混じる	南端、中央	Ｅ～Ｊ区10層、Ｑ北区５層	部分的に黄褐色や暗褐色の砂層となっている
６ａ	7.5ＹＲ４／２　灰褐色	砂礫	弱	弱	径２～３㎜程の炭化物を含む　鉄分を含む	南側		
６ｂ	１０ＹＲ４／８　赤褐色	砂礫	弱	弱	径２～３㎜程の炭化物を含む　鉄分　を含む	北側		
６ｃ	１０ＹＲ３／４　暗褐色	砂礫	弱	弱		北側		黄褐色砂をラミナ状に含む

Ｑ北区層序

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	分布	層の対応関係	備考
１ａ	１０ＹＲ４／３　にぶい黄褐色	シルト	弱	中		全体		黒色や暗褐色などの土と混ざりあっている
１ｂ	１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	シルト	中	やや弱	径１㎝ほどの黄色土ブロックを少量含む	東半分		
１ｃ	１０ＹＲ４／３　にぶい黄褐色	シルト	やや弱	中	鉄分を部分的に含む	西半分		
１ｄ	2.5ＹＲ４／３　にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや弱	中	径１㎝程の青灰色土粒を含む	東側		
１ｅ	１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	砂質シルト	弱	中	径１㎝程の円礫を少量含む	東側		
１ｆ	１０ＹＲ３／３　暗褐色	シルト	中	やや弱	径１～２㎝程の小礫を含む	東端		
１ｇ	１０ＹＲ３／２　黒褐色	シルト	中	中	径１㎝以下の小礫を少量含む	東端		
2	１０ＹＲ４／３　にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	中	鉄分を含む	西側		
3	１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	シルト	中	中	上部の鉄分が酸化している	西側		
4	１０ＹＲ４／２　灰黄褐色	シルト	中	中	灰白色火山灰を多量に含む	西側	Ｅ～Ｊ区４層	
5	１０ＹＲ３／３　暗褐色	砂質シルト	弱	中	鉄分を含む。マンガン粒を多量に含む	西側		
6	１０ＹＲ４／３　にぶい黄褐色	シルト	弱	中	鉄分を含む。マンガン粒を少量含む	西半		
7	2.5ＹＲ６／２　灰黄色	粘土	強	中	鉄分を多量に含む	西半		調査区西部ではグライ化している
8	１０ＹＲ５／６　黄褐色	砂	弱	中	径１～２㎝の灰色土粒、径５㎜程の炭化物を多く含む	西側	Ｑ東区５層、Ｅ～Ｊ区10層	
9	7.5ＹＲ２／１　黒色	シルト	中	中	径２～５㎜程の炭化物を多く含む	西側		晩期Ⅵ期の土器、石斧が出土
１０	１０ＹＲ４／３にぶい黄褐色	砂礫	なし	弱		東端		

Ｑ西区層序

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	分布
12	１０ＹＲ２／３　黒褐色	シルト	中	中	鉄分を多く含む　白色粒子、径５～10㎜の材状の炭化物を含む	X０Y０c，X１Y１a～c，e，f，g～h，X１Y２a，d，g，X２Y０i，X２Y２b，d，e，g，h
13	１０ＹＲ２／３　黒褐色	シルト	やや強	中	鉄分を多く含む　白色粒子、経５～15㎜の炭化物を若干含む	南東部
14	１０ＹＲ２／２　黒褐色	シルト	中	中	鉄分を多く含む　径５～15㎜の炭化物を比較的多く含む	X０Y２b，X１Y２b，d，e，g，h
15	１０ＹＲ３／２　黒褐色	シルト質砂	やや弱	中	鉄分、径３～５㎜の炭化物をまばらに含む	X０Y１c，X０Y２a，X１Y１e，f，h，i，X１Y２d，g
16	１０ＹＲ２／２　黒褐色	シルト	中の弱	中の弱	鉄分、白色粒子、径８～12㎜の炭化物を非常に含む	X０Y１c，X０Y２a，b，X１Y１f，X１Y２f，X１Y２a，b，d，e，g，h，X２Y２h
17	7.5ＹＲ２／３　極暗色	砂	なし	中	鉄分、径１～２㎜の炭化物を微量に含む　白色粒子をまばらに含む	X０Y２b
18	１０ＹＲ４／３　にぶい黄褐色	シルト質砂	弱	中	鉄分、径１～３㎜の炭化物を微量に含む	東南部
19	7.5ＹＲ３／４　褐色	シルト質砂	中	強	鉄分、径２～３㎜の炭化物を多く含む　白色粒子を含む	X０Y２b，X１Y２a，b，d，e，g，h，X２Y２h
20	１０ＹＲ３／２　黒褐色	シルト質砂	中	中	鉄分、白色粒子、径７～15㎜の炭化物を多く含む	X０Y１b，c，X０Y２a，b，X１Y１f，i，X１Y２a，d，g，h
21	１０ＹＲ２／２　黒褐色	シルト	中	中	鉄分、白色粒子、径５～10㎜の炭化物を含む	X１Y１a～ｅc，e，f，X１Y２a，X２Y１g～i，X２Y２g
22	１０ＹＲ３／３　黒褐色	シルト	中	中	鉄分、径５㎜の炭化物を比較的多く含む　白色粒子をまばらに含む	X０Y０c，X０Y１a，b，X０Y０i，X１Y１a～h，X１Y２a，d，X２Y１g～i，X２Y２g
23	１０ＹＲ４／１　褐灰色	シルト	中	中	鉄分、白色粒子を若干、径１～３㎜の炭化物を比較的多く含む	X０Y０c，X０Y１a～c，X０Y２a，b，X１Y１b～e，f，h，i，X１Y２d，g，h，X２Y１h，i
24	１０ＹＲ５／１　褐灰色	シルト	中	中	鉄分、白色粒子を若干、径１～３㎜の炭化物をまばらに含む	X０Y０c，X１Y０c，f，h，X１Y１a，d，g，X２Y０i，X２Y１g，h
25	１０ＹＲ７／４　にぶい黄橙色	シルト	弱	中	鉄分をまばらに、径３㎜の炭化物を比較的に多く含む	南端部



第3図　山王囲遺跡P・Q区壁面図

Stratigraphic sections of the P,Q trench in the Sanno-gakoi site

面と河川跡の間の幅６ｍ程に分布しており、ことに８ｅ～ｈ層は、第８号溝の北にのびるくぼ地（第９号溝跡）の覆土である。

9層は暗青灰色シルト層で鉄分と炭化物を含み、グライ化している。Ｐ区西側および旧河川の層位確認のために設定した北壁西部の小トレンチ内で検出された。

10層は黒褐色シルト層である。炭化物、鉄分、白色粒子を含み、径１～５㎝の礫が含まれる。Ｐ区の遺物のほとんどが10層から出土した。配石遺構、焼土遺構、土器埋設土壙も10層下で検出された。遺物は弥生Ⅱ期の山王Ⅲ層式土器が主体であり、この時期の生活面であったと考えられる。Ｐ区東側に分布する８ｄ層の下層にあり、西側に向かって傾斜する。1995年に調査したＧ、Ｉ区の層序の８層に対応する。

11層は黒色シルト層で炭化物を多量に含み、径３㎝程度の礫を含む。縄文時代晩期Ⅴ期（大洞Ａ式期）～弥生Ⅱ期の遺物が出土している。Ｐ区北西側に設けた小試掘トレンチと旧河川跡で確認された。

12層は砂礫層である。Ｐ区東側の10層の下層にひろがる。無遺物層である。　（氷見、西井、福壽）

Ｑ西区における層序関係

北東のＱ発掘区では、１層から25層まで25枚の堆積層が確認されている。ここでは遺物包含層である12層から25層について記述する。**12層**は黒褐色シルト層である。鉄分を多量に、白色粒子と径５～10㎜の木材の炭化物をまばらに含む。**13層**は黒褐色シルト層で、鉄分を多量に、白色粒子と径５～15㎜の炭化物を含む。**14層**は多量の鉄分と径５～15㎜の炭化物を含む黒褐色粘土質シルト層である。**15層**は黒褐色シルト質砂層で、鉄分と径３～５㎜の炭化物をわずかに含む。**16層**は黒褐色シルト層である。下部は灰褐色を呈し、鉄分と白色粒子、径８～12㎜の炭化物を非常に多く含む。**17層**は暗褐色砂層である。鉄分と径１～２㎜の炭化物を若干、白色粒子をまばらに含む。**18層**は鉄分と径１～３㎜の炭化物を若干含むにぶい黄褐色シルト質砂層である。**19層**は褐色シルト層で、鉄分と径２～３㎜の炭化物を多量に、白色粒子をまばらに含む。**20層**は黒褐色シルト層で、鉄分と白色粒子、径７～15㎜の炭化物を含む。**21層**は黒褐色シルト層で、鉄分と白色粒子、径５～10㎜の炭化物をまばらに含む。**22層**は暗褐色シルト層で、鉄分と径５㎜の炭化物を多量に、白色粒子を若干含む。

23層は褐灰色シルト層で、鉄分と径１～３㎜の炭化物を比較的多く含む。23層上面で弥生Ⅱａ期の竪穴状遺構が検出され、竪穴状遺構は23、24、25層に掘り込まれている。**24層**は褐灰色シルト層で、鉄分と白色粒子、径１～２㎜の炭化物をまばらに含む。**25層**はにぶい黄褐色シルト層で、鉄分をまばらに、径３㎜程度の炭化物を比較的多量に含む。

10～25層は遺物包含層である。西側から東側に向かってゆるやかな傾斜をもってひろがっている。縄文時代晩期Ⅳ期から弥生時代Ⅱｂ期の遺物が層位的に出土しており、10～17層が弥生Ⅱｂ期に、20、22層が弥生Ⅱａ期に、24、25層が弥生Ⅰ期の堆積層と考えられる。　（坂田）

Ｑ東区における層序関係

1965年に泥炭層を調査した発掘区の東よりの調査区Ｑ東区では、表土、盛土を除いて１ａ層から６ｃ層まで10枚の堆積層が確認されている。

1層は灰黄褐色シルト層である。鉄分の含有量により、ａとｂに細分される。１ｂ層の方が１ａ層よりも鉄分

を多く含む。**2層**は明灰黄褐色シルト層である。**3層**は灰黄褐色シルト層で炭化物や白色粒子を含む。**4層**はシルト層であり、土質と色調によりａとｂに細分された。４ａ層が褐色、４ｂ層がにぶい黄褐色である。４ｂ層は区南端付近に分布する。**5層**はにぶい黄橙色砂質シルト層であるが、部分的に黄褐色や暗褐色の砂層となる。６層のくぼみに堆積している。第１、２次調査のＥ～Ｊ区基本層序の10層に相当する。**6層**は砂礫層であり、土色によって３層に細分される。６ａ層はにぶい黄橙色、６ｂ層は赤褐色、６ｃ層は暗褐色で、いずれも礫の大きさは径10cm程度である。６層は北から南に向かってゆるやかに傾斜している。いずれの層も遺物の包含は少ない。５層上面で遺構が確認されている。

Q北区における層序関係

1層は旧体育館建設に伴う盛土、整地土層で、ａ～ｇの７枚で構成される。**2層**は鉄分を含むにぶい黄褐色砂質シルト層である。**3層**は灰黄褐色シルト層で、上部が酸化している。**4層**は灰黄褐色シルト層で灰白色火山灰の小ブロックを多量に含む。**5層**は暗褐色砂質シルト層で、鉄分、マンガンが多量に認められる。**6層**は鈍い黄褐色シルト層で、鉄分、マンガンを含む。５、６層中には砂の薄い層がみられ、水成堆積層と考えられる。**7層**は灰黄色粘土層で上部に鉄分を多く含み、西側ではグライ化して灰色になる。**8層**は黄褐色砂層で、炭化物を含む。Ｑ東区の５層、Ｅ～Ｊ区の10層に相当する。**9層**は炭化物を含む遺物包含層であり、黒色シルト層である。出土する土器は縄文晩期Ⅳ期の大洞C_2式期のものであり、９層は晩期中頃の堆積層と考えられる。**10層**はにぶい黄褐色砂礫層で、主に径５cm程度の小礫で構成されている。

Ｑ北区では、８層から下の層は東から西へと傾斜して堆積している。

R区における層序関係

遺跡北辺のＲ区は自然堤防の突端にあたる。最上層は史跡公園造成時の50cm程の盛土が覆っている。盛土の下に１層から４層まで８枚の堆積層が確認された。**1層**はシルト層であり、色調やしまり、含有物によってａ～ｄの４枚に細分される。１ａ層は黒色で、径２cm程の礫を含む。Ｒ西区に分布している。１ｂ層は黒褐色で、層の上面に鉄分が酸化し、層状をなしている。しまりが弱く、径５mm程度の炭化物をまばらに含む。Ｒ区全体に分布する。１ｃ層は暗褐色であり、Ｒ西区の南側にひろがる。１ｄ層は黒褐色であり、炭化物を多く含む。Ｒ西区南側に分布する。

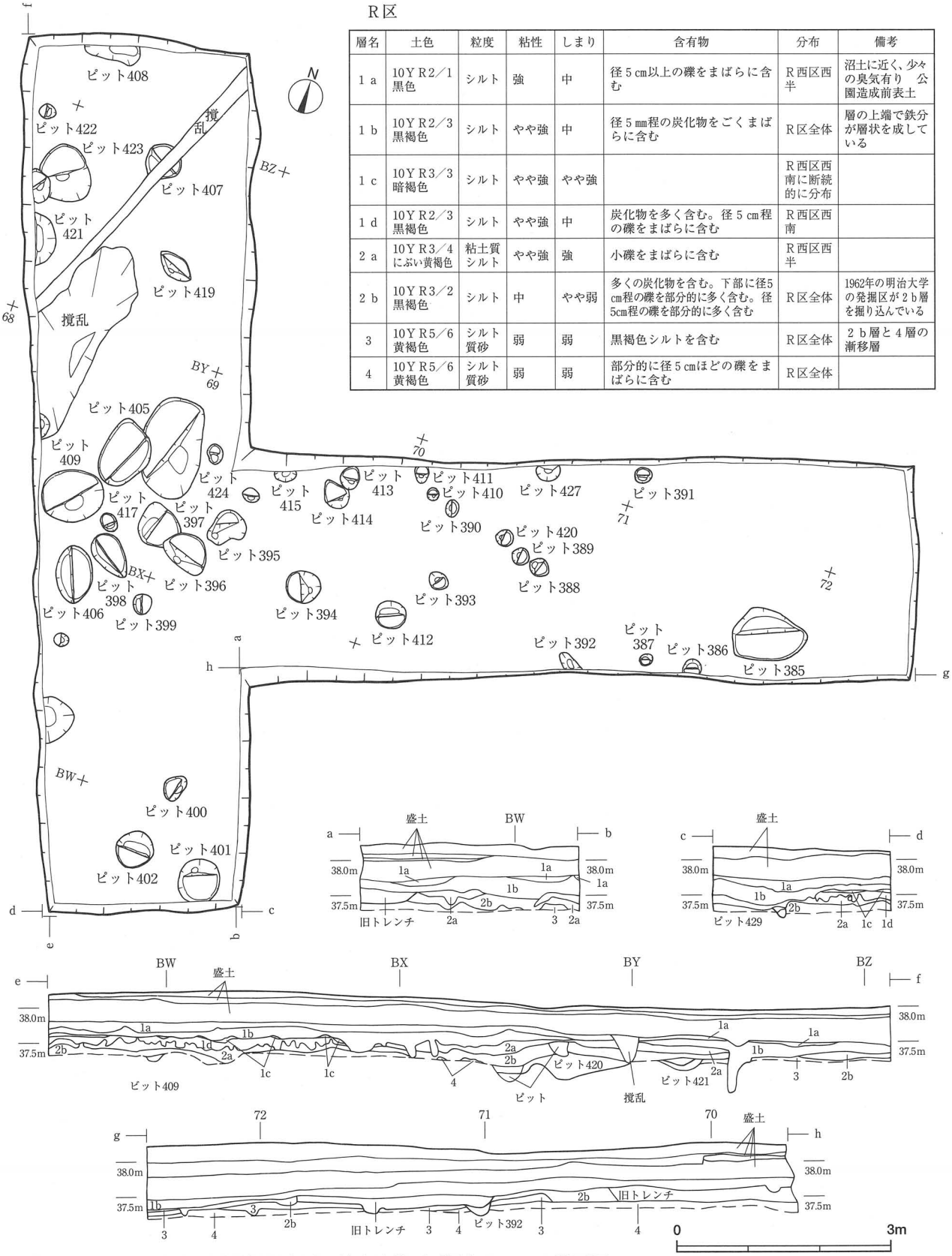
2層は粒度や色調によってａ、ｂの２枚に細分される。２ａ層は２ｂ層に比べると、粘性があり、にぶい黄褐色粘土質シルト層であり、礫をまばらに含む。Ｒ西区の南西に分布する。２ｂ層は黒褐色シルト層であり、１ｂ層に類似するが、より多くの炭化物を含む。下部に径５cm程度の礫を含む。Ｒ区全体にひろがる。

3層は２ｂ層と４層の漸移層である。**4層**は黄褐色シルト層であり、Ｒ東区の西側からＲ西区の南側にかけて径５cm程度の礫を多量に含む。Ｅ～Ｊ区の10層に相当する。

1962年に明治大学が行った発掘区がＲ西区南側からＲ東区において一部検出されており、２ｂ層から掘り込んでいる。また、１ａ～２ｂ層からガラス片や陶器片が出土しており、この層は撹乱を受けていると推定される。遺物は２ｂ層から最も多量に出土し、縄文晩期Ⅳ期（大洞C_2式期）から弥生Ⅱｂ期（山王Ⅲ層式期）までの土器が出土している。弥生Ⅱｂ期の遺物が多い。遺構は４層上面で検出されている。（鹿又）

R区

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	分布	備考
1 a	10Y R2／1 黒色	シルト	強	中	径 5 cm以上の礫をまばらに含む	R西区西半	沼土に近く、少々の臭気有り　公園造成前表土
1 b	10Y R2／3 黒褐色	シルト	やや強	中	径 5 mm程の炭化物をごくまばらに含む	R区全体	層の上端で鉄分が層状を成している
1 c	10Y R3／3 暗褐色	シルト	やや強	やや強		R西区西南に断続的に分布	
1 d	10Y R2／3 黒褐色	シルト	やや強	中	炭化物を多く含む。径 5 cm程の礫をまばらに含む	R西区西南	
2 a	10Y R3／4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや強	強	小礫をまばらに含む	R西区西半	
2 b	10Y R3／2 黒褐色	シルト	中	やや弱	多くの炭化物を含む。下部に径5 cm程の礫を部分的に多く含む。径5cm程の礫を部分的に多く含む	R区全体	1962年の明治大学の発掘区が 2 b層を掘り込んでいる
3	10Y R5／6 黄褐色	シルト質砂	弱	弱	黒褐色シルトを含む	R区全体	2 b層と 4 層の漸移層
4	10Y R5／6 黄褐色	シルト質砂	弱	弱	部分的に径 5 cmほどの礫をまばらに含む	R区全体	



第4図　山王囲遺跡R区発掘調査区の検出遺構平面図とトレンチ壁面図

Plans and sections of the R trench in the Sanno-gakoi site

第2節　遺　　構

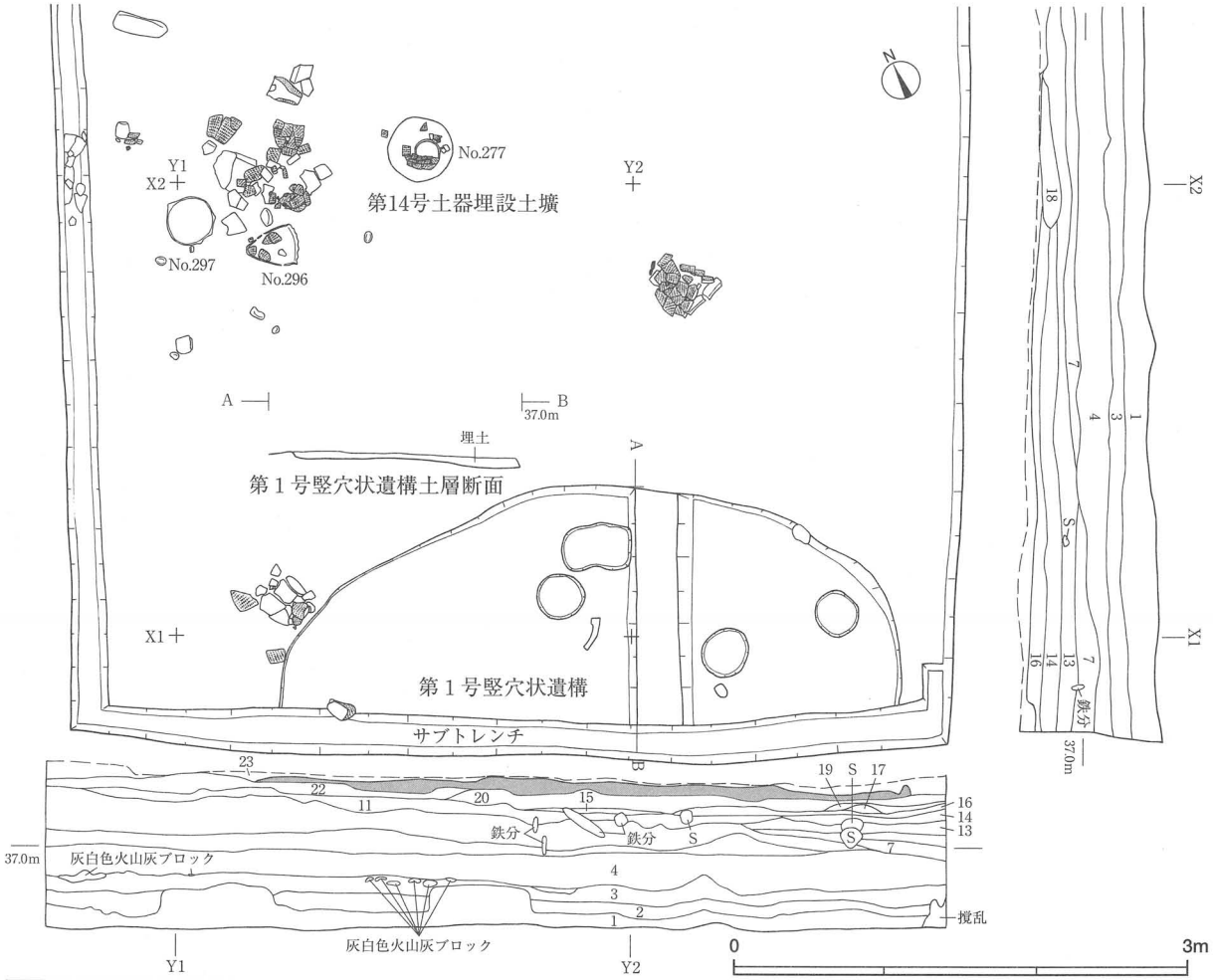
遺構の概要

第3次発掘調査では、Q西区で弥生時代前期の竪穴状遺構1基、P区で配石遺構3基、土器埋設土壙6基、弥生時代前期以後のものと推定される溝跡1条が検出された。また、第2次調査で検出された第7号溝跡の西側延長部を精査した。ピットは各調査区において多数検出されており、ここでは遺物の出土しているピット6基をとりあげた。これらの遺構の大部分が弥生時代に属するが、近世墓がQ東区において1基検出されている。

1）竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構（第5図、図版3－2）

Q西区の南端において竪穴状遺構1基が検出され、その北半分を掘り下げ精査した。遺構は23層の上面から掘り込まれている。規模は、東西4.1m、南北1.5mで、全体のプランは径4m程度の不整円形を呈するものと推定される。北壁から東壁にかけて壁の立ち上がりが認められ、東側で最大5cmである。ただし、西側では明確な立



遺構名	区名	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
第1号竪穴状遺構	Q西	埋土	10YR3／2 黒褐色	シルト	中	中	多量の炭化物を含む

第5図　山王囲遺跡Q西区第1号竪穴状遺構・第14号土器埋設土壙平面図と発掘区南壁・東壁断面図
The excavated plans and sections of the western part of the Q trench in the Sanno-gakoi site

ち上がりが捉えられなかった。埋土は1枚で、多量の炭化物を含む。炭化物集中地点が数カ所でみられ、特に東側で多く認められる。遺構の底面には凹凸があるが、柱穴や炉跡は検出されなかった。

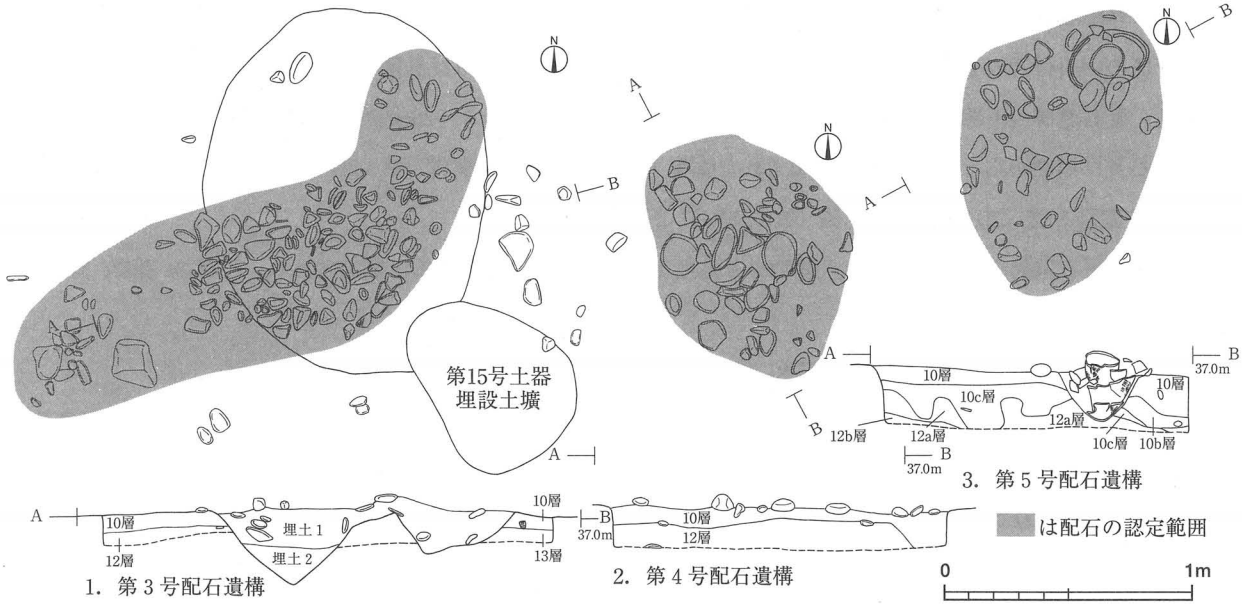
埋土中から土器、石器、樹木質の炭化物が出土した。土器は晩期Ⅵ期（大洞A式期）から弥生Ⅱ期の深鉢（第16図7、8）、弥生Ⅰ期（山王Ⅳ上層式期）からⅡ期の甕（同図5）と壷（同図10）、弥生Ⅱa期（青木畑式期）の深鉢（同図13）と高杯（第5図版7）、弥生Ⅱb期（山王Ⅲ層式期）の甕（第16図6）と高杯（同図9）がみられ、石器では石錐（第10図版21）、楔形石器（第11図版1）などが出土している。

この竪穴状遺構は、層位、出土遺物の検討から弥生Ⅱa期に属すると判断される。（坂田、鈴木、羽石、真田）

2）配石遺構

遺跡の所在する自然堤防の北西部に設けたP区からは中央付近と東半部において3基の配石遺構が検出された（第2図版、図版1－1、第2図）。これらの配石遺構は全て10層上面で確認された。第3号配石遺構はP区中央東よりBJ48区で検出され、西側に2m程離れて第4号配石遺構、その北側に1.2m程の位置に第5号配石遺構がある。第5号配石遺構の北東に約80cm離れて第13号土器埋設土壙が検出されている。配石遺構はいずれも楕円形に礫が密集しており、形態、規模は共通している。第3、5号配石遺構では浅い不整楕円形の土壙が確認されている。配石の埋土や周囲からは土器や石器が多く出土している。検出層位、出土遺物から配石遺構群は縄文晩期Ⅵ期から弥生Ⅱ期の遺構と考えられる。

山王囲遺跡では第1次調査で第1号配石遺構、第2次調査で第2号配石遺構が検出されている。第1号配石遺構はG区中央に位置し、9層（G区基本層序）を掘り込んでいる。今回検出されたP区の配石遺構群とは10m程



遺構名	区名	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
第3号配石遺構	P	埋土1	10YR4／1　褐灰色	シルト	やや強	中	径1cm程の炭化物をまばらに含む　鉄分と径1～10cm程の礫を多く含む	
		埋土2	10YR5／1　褐灰色	シルト質砂	弱	弱	鉄分をわずかに含む　径1～5cmの礫をまばらに含む	
第4号配石遺構	P							土壙は無し
第5号配石遺構	P	埋土	10YR3／1　黒褐色	砂質シルト	中	弱		

第6図　山王囲遺跡P区検出配石遺構平面図・断面図
The stone concentrations of the P trench in the Sanno-gakoi site

の距離である。第１号配石遺構の上部や周辺では弥生Ⅱｂ期の山王Ⅲ層式土器が出土しており、Ｐ区の配石遺構よりやや新しい遺構とみられる。第２号配石遺構はさらに西へ約40ｍ離れたＥ区で検出された。配石の下に土壙が確認されている。（西井）

第３号配石遺構（図版２－１、ＰＬ．１－１、第６図１）

Ｐ区東のＢＪ48区10層上面で検出された。配石の下部で土壙のひろがりを追求した。土壙は、12層まで掘り込まれていた。土壙は長軸1.4ｍ、短軸1.1ｍの楕円形であり、深さは最大で30cmである。配石の範囲は、土壙南半部で幅60cm、長さ２ｍ程のひろがりをみせる（第２，６図１）。配石は径５～12cmの円礫で構成され、特に土壙の西南側で長軸1.0ｍ、短軸0.5ｍの範囲に密集している。土壙の壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は２層確認された。埋土１は褐灰色シルト層で鉄分と炭化物をまばらに含む。配石を構成する礫が埋土１に落ち込んでいる。埋土２は褐灰色シルト質土層で鉄分を若干含み、径１～５cm程の礫を含む。掘り込みは明確であるが、底面は凹凸が著しい。

縄文晩期Ⅵ期の深鉢（第13図３）、弥生Ⅱ期の甕（同図１）、弥生Ⅱ期の長頸甕（同図２）が埋土１から出土している。配石中には蛤刃磨製石斧（第12図版２）、石皿（第13図版７）が含まれていた。

配石の下部の土壙は、出土遺物が多く、配石が埋土に落ち込んでいることなどから墓壙の可能性がある。この土壙の南側の一部は弥生Ⅰ期から弥生Ⅱ期に属する第15号土器埋設土壙と重複し、15号土器埋設土壙が新しい。第３号配石遺構は層位的関係、出土遺物、15号土器埋設土壙との遺構重複関係から弥生時代Ⅱ期に属すると考えられる。（西井、小原）

第４号配石遺構（第６図２）

Ｐ区の中央付近のＢＪ47区の10層上面で検出された。礫のひろがりは長径１ｍ、短径0.8ｍのほぼ楕円形を呈する。配石遺構の下部において土壙は確認できなかった。配石は径５～20cmの円礫で構成されている。

配石及び周囲からは器面に朱が塗布された弥生Ⅰ～Ⅱａ期の高杯脚部（第４図版１）、弥生Ⅰ期の深鉢（第13図４）、不定形石器（第11図版２）、石錐（第10図版19）が出土している。

第４号配石遺構は検出層位、出土遺物より弥生Ⅰ期ないしⅡ期に属すると推定される。（西井、福壽、竹ヶ原）

第５号配石遺構（図版２－２、第２図版、第２，６図）

Ｐ区の北東部ＢＫ47区の10層上面で検出された。配石の範囲は、長径1.1ｍ、短径0.8ｍの不整楕円形である。配石には径10cm程度の円礫が主として用いられ、磨石１点（第12図版４）が出土した。配石の下層の一部では炭化物の薄い層がひろがっている。配石から、弥生Ⅰ期の深鉢（第13図５）が出土している。

配石下部の土壙は第５号配石遺構の北半に位置し、長径30cm、短径20cmの楕円形を呈する。10層上面で検出され、12層まで達している。深さは20cmである。土壙の埋土は黒褐色砂質シルト層であり、土器が埋設されていた。この埋設土器は外側に縄文時代晩期から弥生時代前期の深鉢の体部下半（第４図版２、ＰＬ．５－２）、内側に弥生Ⅰ期とみられる深鉢（第４図版３、ＰＬ．５－３）が入れ子状に出土した。いずれも正立した状態である。内側の小型深鉢はほぼ完形であり、短い口頸部をもち、体部全体にＬＲ縄文が施された土器である。外側の深鉢は底部が

わずかに残存している。

第5号配石遺構は層位的関係、出土遺物によって、縄文時代晩期Ⅵ期から弥生時代前期に属すると考えられる。

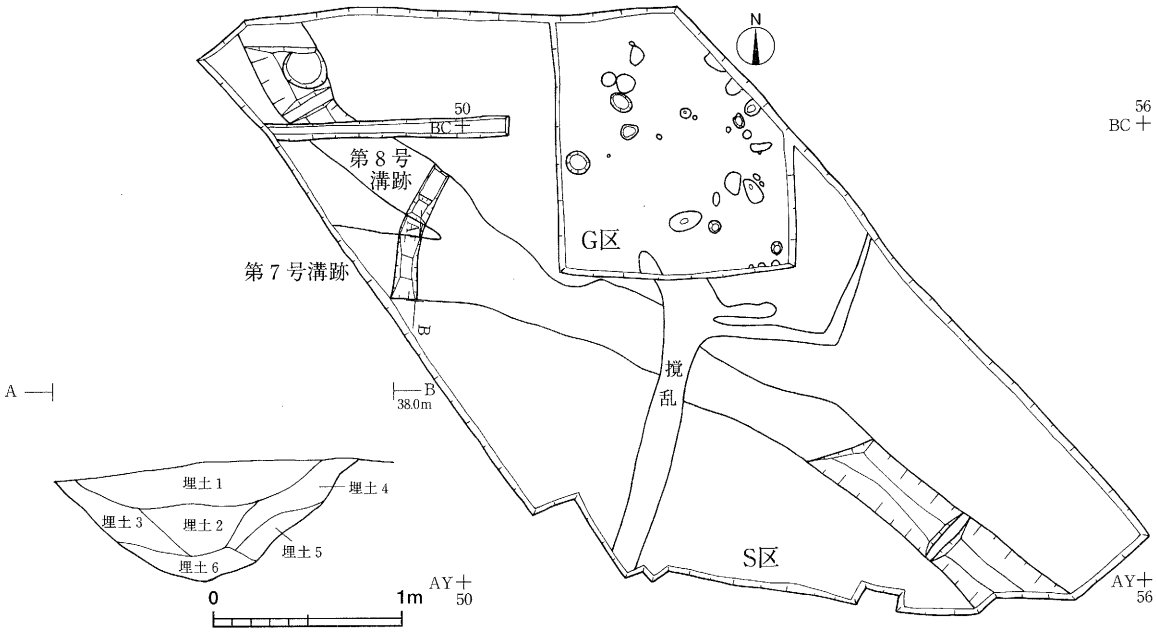
（鹿又、神田）

3）溝　　跡

第7号溝跡（図版4－2、第2図版、第7図）

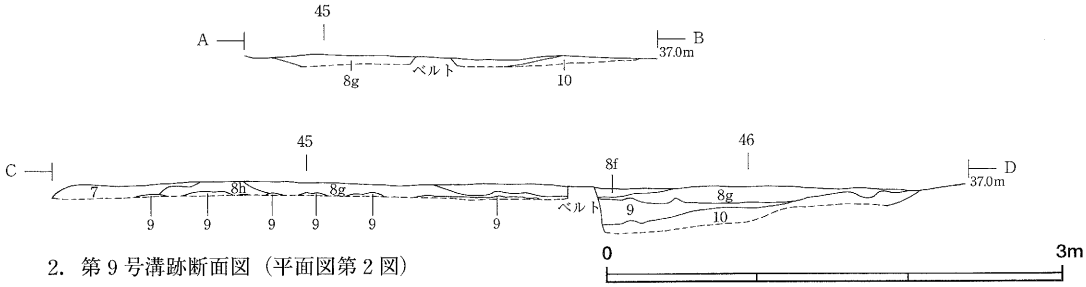
1996年度の第2次調査で精査された第7号溝跡の延長部分にあたる。N区の微高地中央部を南東から北西にのびる7号溝はS区西端において分岐し、北に折れてⅠ南区の8号溝に連なる。また、一方（7号溝）は西にのびることが確認された。

S区における第7号溝の幅は約1.6m、確認面から底面までの深さは約65cmである。埋土は6枚堆積している。



1. 第7号溝跡断面図・平面図

遺構名	区名	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
第7号溝跡	S	埋土1	10YR3/3 暗褐色	シルト	弱	中	鉄分を縞状に含む　マンガンを含む　径1～5cmの小礫をまばらに含む
		埋土2	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	強	強	径1～3mmの炭化物をまばらに含む　鉄分を含む　マンガンを含む　径1～10cmの礫を多く含む
		埋土3	10YR3/4 暗褐色	シルト	弱	中	径1～3mmの炭化物をまばらに含む　鉄分、マンガンを含む
		埋土4	10YR2/3 黒褐色	シルト	中	中	鉄分を含む　径1～3mmの炭化物をまばらに含む　径3cm程の小礫を含む
		埋土5	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	中	強	径1～3mmの炭化物をまばらに含む　鉄分を含む　径1～5cmの礫をまばらに含む
		埋土6	10YR2/2 黒褐色	粘土	強	強	径1～5mmの炭化物をまばらに含む　鉄分を含む　径1～5cmの礫をまばらに含む



2. 第9号溝跡断面図（平面図第2図）

第7図　山王囲遺跡7、8号溝跡平面図・断面図及び9号溝跡断面図

Plan and sections of the excavated Ditch 7, 8 and 9 in the S and P trench of the Sanno-gakoi site

改修などの時期差は認められなかった。S区における第7号溝跡の埋土には、K区の溝埋土と比較して礫が多く認められた。底面のレベルは標高約37mであり、I、N、K区の溝底面とほとんどレベル差は認められない。

第9号溝跡（第2図、第7図）

P区西半において検出された。弥生時代前期の生活面である10層とその下層の11層を底面とする溝状の浅いくぼ地である。8号溝跡の北に連なる。

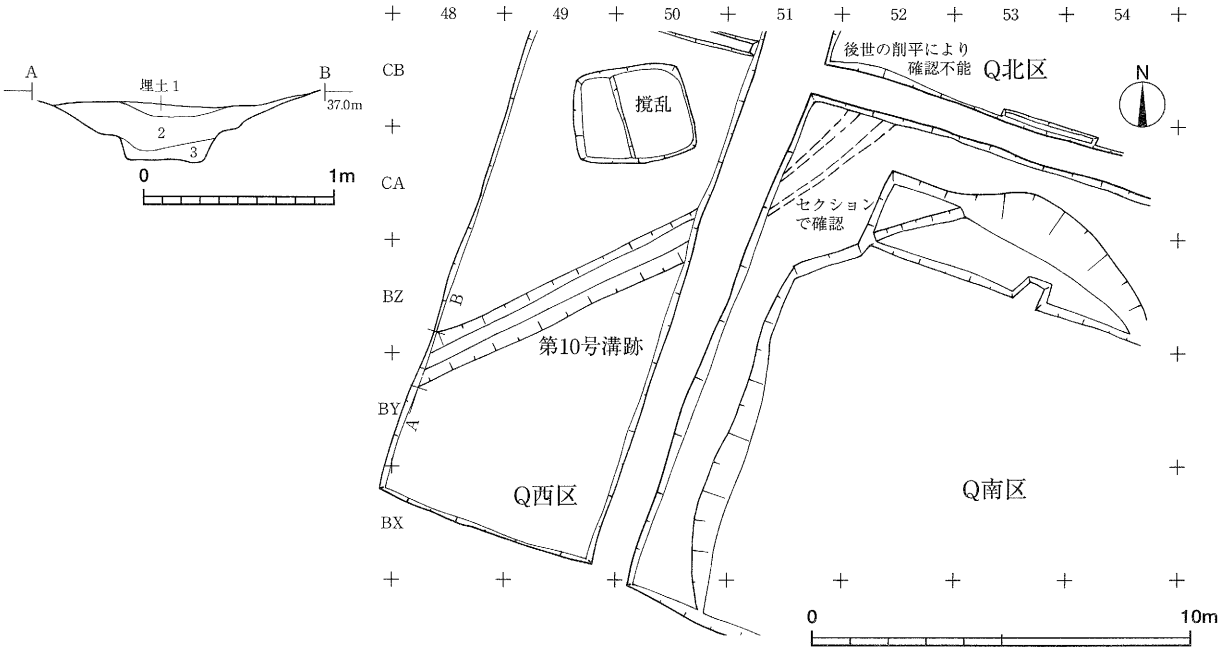
幅は約5.5m、確認された深さは25cm程度であり、底面の標高は36.7mである。明確な掘り込みは認められなかった。

このくぼ地状の幅広い溝の一部を埋めるように9層が堆積しており、9層中からは弥生Ⅱa期の甕と高杯が出土した（第13図16－19）。さらに全体が8e～h層によって覆われているが、これらの層からは遺物は出土せず、第9号溝状遺構が埋没した時期は不明である。

第10号溝跡（第3図版、第8図）

Q西区において検出された第10号溝跡は確認面での幅約1.1m、底面の幅30～50cm、深さ約30cmである。遺物は出土しなかった。弥生時代前期の遺物包含層を掘り込んでつくられていることから、弥生時代前期以後の遺構であると考えられる。

（大場）



遺構名	区名	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
第10号溝跡	Q西	埋土1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	中	中	鉄分、マンガンを含む
		埋土2	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	中	中	鉄分、砂、マンガンを含む
		埋土3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	中	中	鉄分、砂、マンガンを含む

第8図　山王囲遺跡Q区第10号溝跡平面図・断面図
Plan and section of Ditch 10（Q trench）in the Sanno-gakoi site

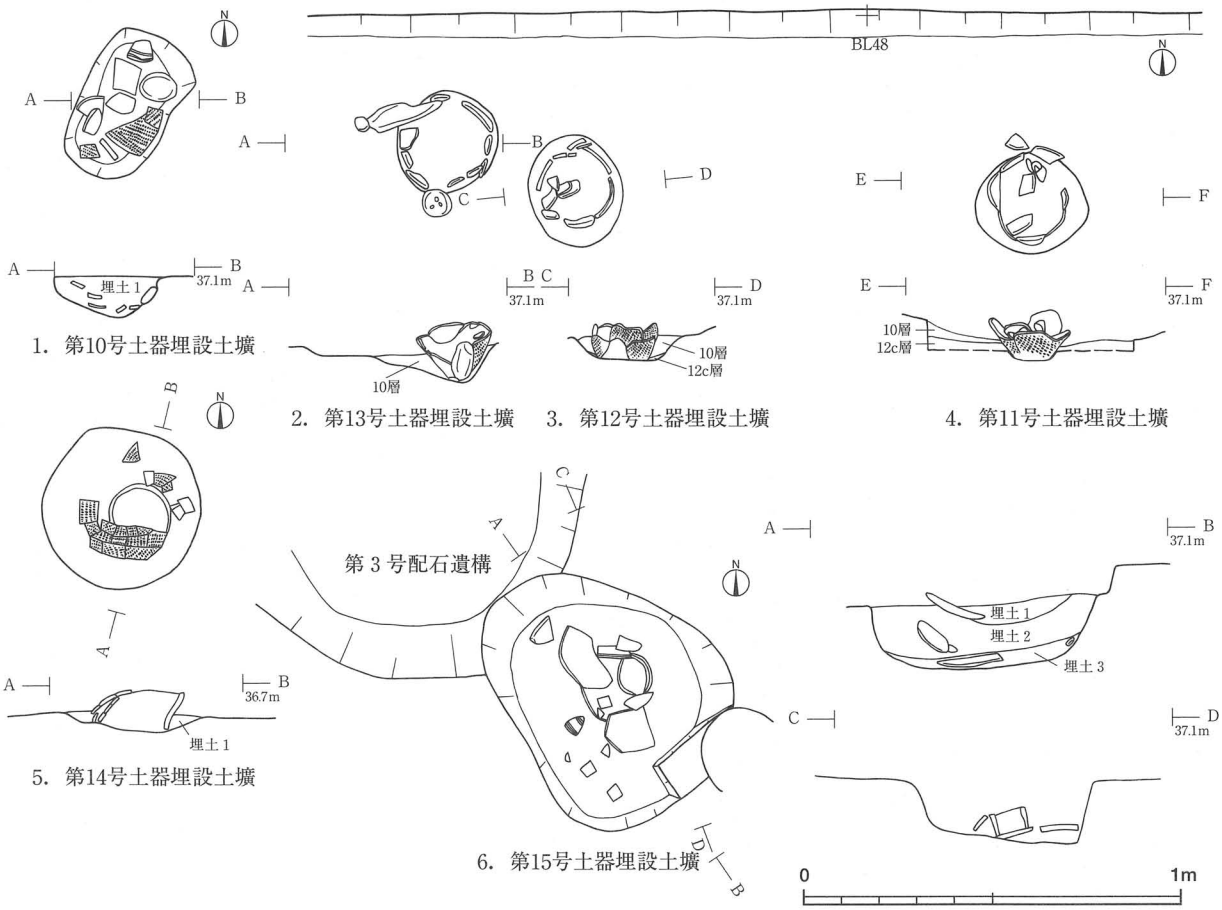
4）土器埋設土壙

Q、P区では土器の埋設された小土壙が合わせて6基検出された。これらの遺構は晩期終末から弥生時代前期前半に属すると推定される。P区の埋設土器群は第5号配石遺構中の埋設土器を含め、発掘区の北壁中央付近の4m四方程の範囲に集中しており、墓域の一部を構成していると考えられる。

第10号土器埋設土壙（第3図版、第9図1）

Q東区BX58区の5層上面で検出された。長径40cm、短径25cmの楕円形を呈し、深さは10cmである。埋土は灰黄褐色シルト層である。遺物は土壙底面から出土している。平行沈線文を有する弥生Ⅱ期の壷の口縁部（第23図4）と弥生Ⅰ期の深鉢の口縁部（同図6）、深鉢の体部（同図5）、凹石（第13図版4）が出土している。

層位的関係、出土遺物から、第10号土器埋設土壙は弥生Ⅱ期に属すると考えられる。　（熊谷、鹿又、福壽）



1. 第10号土器埋設土壙
2. 第13号土器埋設土壙
3. 第12号土器埋設土壙
4. 第11号土器埋設土壙
5. 第14号土器埋設土壙
6. 第15号土器埋設土壙

遺構名	区名	層名	土色	粘性	しまり	粒度	含有物	備考
第10号土器埋設土壙	Q東	埋土1	10YR4／2　灰黄褐色	やや弱	中	シルト	径5mm程の炭化物を含む　黄褐色土をまばらに含む	
		埋土2	10YR4／6　褐色	中	中	シルト	径2～3mmの炭化物を含む	
第11号土器埋設土壙	P							
第12号土器埋設土壙	P	10層	10YR2／3　黒褐色	やや強	やや弱	シルト	炭化物を含む　鉄分をブロック状に含む 径1～5cmの礫を含む　径2～3mmの白色粒子をわずかに含む	12層が落ち込んで、10層が覆っている
第13号土器埋設土壙	P	10層	10YR2／3　黒褐色	やや強	やや弱	シルト	炭化物を含む　鉄分をブロック状に含む 径1～5cmの礫を含む　径2～3mmの白色粒子をわずかに含む	
第14号土器埋設土壙	Q西	埋土1	10YR7／4　にぶい黄橙色	弱	中	シルト	径3mmの炭化物を多く含む　鉄分をまばらに含む	
第15号土器埋設土壙	P	埋土1	10YR5／3　にぶい黄橙色	強	中	粘土質シルト	鉄分を多く含む	
		埋土2	10YR4／2　灰黄褐色	中	中	シルト	径1cm程の炭化物と鉄分をわずかに含む	
		埋土3	10YR2／3　黒褐色	中	中	シルト	炭化物を非常に多く含む	

第9図　山王囲遺跡P、Q区土器埋設土壙平面図・断面図
Plans and sections of pits with pottery（P and Q trench）in the Sanno-gakoi site

第11号土器埋設土壙（第２図、第９図４）

Ｐ区の北よりＢＫ48区の10層上面で検出され、土壙底面は12層に達する。縄文時代晩期から弥生時代前期の深鉢の底部（第４図版４、ＰＬ．５－４）が正立して出土している。（鹿又、鎌田）

第12号土器埋設土壙（第２図、第９図３）

Ｐ区ＢＫ47区の10層上面で検出された。平面形は長径30cm、短径25cmの楕円形である。深さは６～７cm程である。深鉢（第４図版５、ＰＬ．５－５）は口縁部と底部が欠損しており、体部が正立した状態で出土した。

（福壽、馬場）

第13号土器埋設土壙（第２図、第９図２）

Ｐ区ＢＫ47区において第12号土器埋設土壙と並んで、10層上面で検出された。土壙底面は12層まで達している。平面形は直径27cmの円形を呈する。土壙の幅は土器よりもわずかに大きく、掘り込みは土器の周囲に接して確認された。縄文時代晩期後半から弥生時代前期の深鉢の底部（第４図版６、ＰＬ．５－６）であり、正立した状態で出土した。第13号土器埋設土壙は縄文時代晩期終末から弥生Ｉ期に属すると考えられる。（西井、馬場）

第14号土器埋設土壙（第２図版、第９図５）

Ｑ西区Ｘ２Ｙ１区で検出された。確認面での平面形は直径約43cmの円形を呈している。上層では掘り形の検出が困難であったが、土壙底面近くで確認された。深さは約６～７cmである。晩期Ⅵ期から弥生Ｉ期の深鉢（第５図版５、ＰＬ．６－６）が倒立した状態で埋設されていた。（大場）

第15号土器埋設土壙（第２図、第６図６）

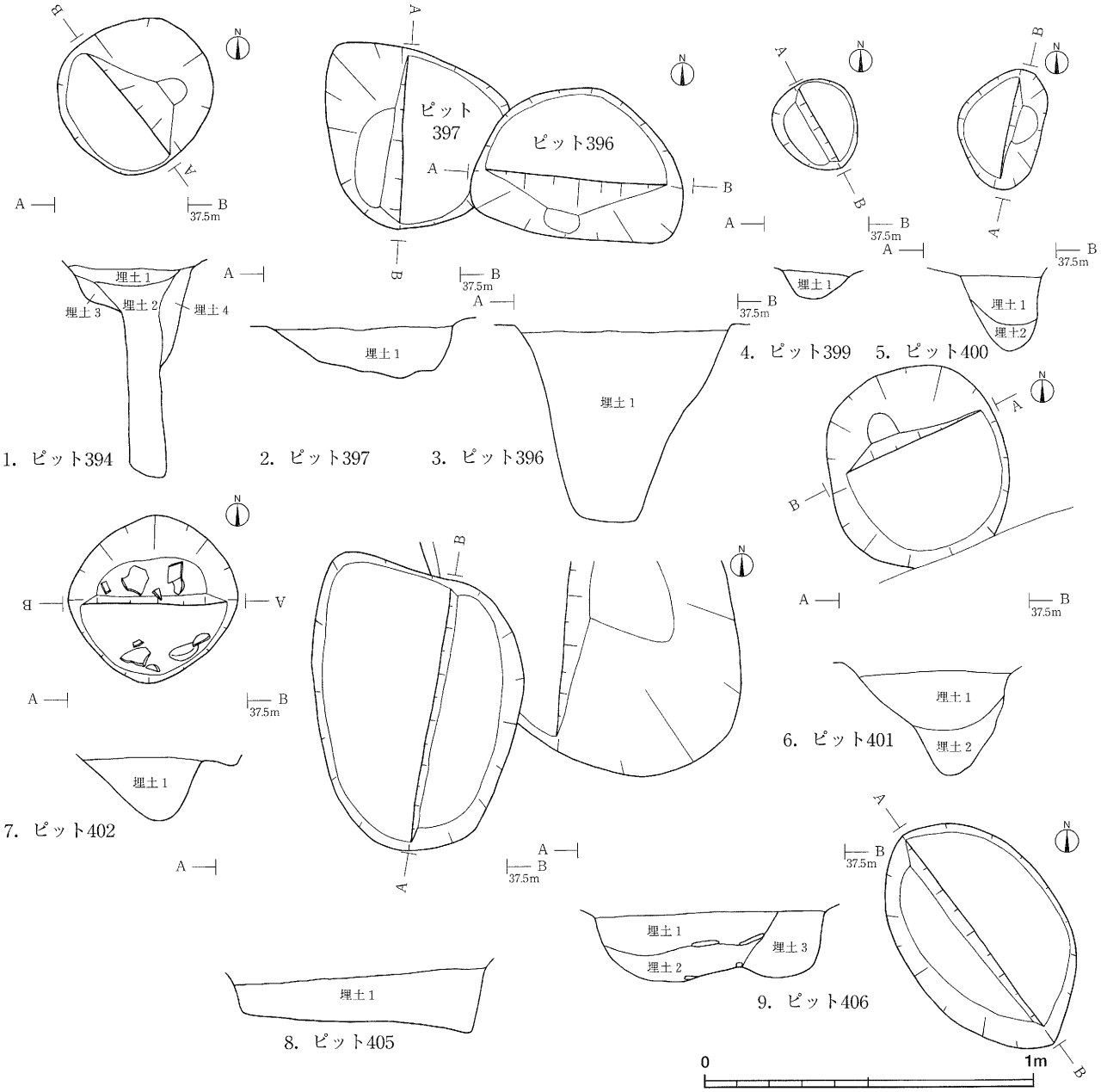
Ｐ区ＢＪ48区で検出された。第３号配石遺構の南東にその一部を壊して掘りこまれている。上層での掘り形の検出が困難で、11層上面で確認された。確認面での平面形は長径70cm、短径55cmの長楕円形を呈しており、検出面からの深さは約25cmである。弥生Ｉ期の壷の上半部（第４図版７、ＰＬ．６－１）が出土した。また、弥生Ⅱ期の深鉢、弥生Ｉ期の鉢、晩期Ⅵ～弥生Ｉ期の鉢、晩期Ⅴ～Ⅵ期の壷の破片（第13図６～９）などが出土している。第15号土器埋設土壙は、出土した遺物から弥生Ｉ期から弥生Ⅱ期に属すると考えられる。（大場）

５）ピット群

Ｒ区において４層上面で、44基のピットが確認された。（第４図）

ピット394（第10図１）

ピット394は径47cm程の円形を呈し、深さは64cmである。径10cm、深さ60cmの柱痕跡が確認されている。その他のピットには柱痕跡は確認されていない。



ピット番号	区名	層名	土色		粒度	粘性	しまり	含有物	備考
ピット394	R(E)	埋土1	5YR3／1	黒褐色	シルト質砂	弱	弱	径2mm～3cm程の礫をわずかに含む	柱痕跡有り
		埋土2	7.5YR3／1	黒褐色	シルト質砂	弱	弱	径2mm～3cm程の礫をわずかに含む	
		埋土3	7.5YR2／2	黒褐色	シルト質砂	弱	弱	径2mm～1cm程の礫をわずかに含む	
		埋土4	7.5YR2／2	黒褐色	シルト質砂	弱	弱	径2mm～1cm程の礫をわずかに含む	
ピット396	R(W)	埋土1	7.5YR3／1	黒褐色	シルト	中	中	黄褐色土粒をわずかに含む	弥生Ⅰ～Ⅱ期の高杯、石鏃出土
ピット397	R(W)	埋土1	10YR3／2	黒褐色	シルト	中	弱～中	径1～3cmの礫を少量含む	弥生Ⅱ期の高杯、弥生Ⅱa期の甕、縄文晩期Ⅵ期～弥生Ⅱ期の深鉢出土
ピット399	R(W)	埋土1	5YR3／1	黒褐色	シルト	中	中	径2～3cmの礫、黄色土粒をわずかに含む	弥生Ⅰ期の高杯出土
ピット400	R(W)	埋土1	10YR3／2	黒褐色	シルト	中	中	黄色土粒、赤色土粒、径1cm程の礫を少量含む	石錐、剥片出土
		埋土2	7.5YR3／2	黒褐色	シルト	中	中	黄色土粒、径2cm程の礫を少量含む	
ピット401	R(W)	埋土1	10YR2／2	黒褐色	シルト	強	中	径3～5cmの礫をやや多く、黄色土粒を少量含む	円盤形石器出土
		埋土2	10YR2／2	黒褐色	シルト	中	中	径2cm程の礫を多く、黄色土粒を少量含む	
ピット402	R(W)	埋土1	10YR2／3	黒褐色	シルト	中	中	赤色土粒、黄色土粒をわずかに含む	弥生Ⅱ期の高杯、弥生Ⅱa期の鉢、弥生Ⅱbの甕、弥生Ⅱb期の高杯出土
ピット405	R(W)	埋土1	7.5YR4／2	灰褐色	シルト	中	中	径5mmの炭化物をわずかに含む　にぶい赤褐色土粒と径3cm程の礫を少量含む	縄文晩期Ⅵ期～弥生Ⅰ期の高杯出土
ピット406	R(W)	埋土1	7.5YR3／1	黒褐色	シルト	中	やや弱	炭化物、径1cm程の小礫を少量含む	底面で土器片が出土　弥生Ⅱ期の高杯出土
		埋土2	7.5YR3／2	黒褐色	砂質シルト	中	やや弱	炭化物、径3cm程の小礫を少量含む	底面で礫が出土
		埋土3	10YR3／1	黒褐色	シルト	中	やや弱	炭化物を含む	

第10図　山王囲遺跡R区検出ピットの平面図・断面図

Plans and sections of pits in the R trench of the Sanno-gakoi site

ピット396（第10図３）

ピット396は長径65cm、短径46cmの楕円形を呈し、深さ60cmである。埋土は黒褐色シルト層であり、弥生Ⅱａ期の高杯（第23図９，10）と調整剥離の入念に施された横型石匙（第10図版23）が出土している。

ピット397（第10図２）

ピット397は径56cmの円形で、深さは15cmである。埋土は黒褐色シルト層であり、弥生Ⅱａ期の甕（第23図11）、縄文晩期Ⅵ期から弥生Ⅱ期の深鉢（第23図12）、弥生Ⅱａ期の高杯脚部（第23図13）が出土している。

ピット399（第10図４）

ピット399は径28cm程の円形を呈し、深さは９cmである。埋土は黒褐色シルト層であり、弥生Ⅰ期の高杯の体部（第23図14）が出土している。胎土、浅い縄文施文の特徴からこの高坏は砂沢式土器と近似する。

ピット400（第10図５）

ピット400はＲ区の西南部にある長軸37cm、短軸26cmの楕円形を呈し、深さは25cmである。埋土が２枚あり、ともに黒褐色シルト層である。棒状石錐（第10図版18）と剥片が出土している。

ピット401（第10図６）

ピット401はＲ区西南部にあり、径60cm程の円形を呈し、深さは34cmである。埋土は２枚あり、ともに黒褐色シルト層である。円盤状石器（第14図版４、ＰＬ.28－10）が出土している。

ピット402（第10図７）

ピット402は径52cm程の円形を呈し、深さは20cmである。埋土は黒褐色シルト層である。弥生Ⅱａ期の鉢（第24図３）、弥生Ⅱ期の甕（第23図15）とⅡｂ期の高杯（第24図１）、弥生Ⅱ期の高杯脚部（第24図２）が出土している。

ピット405（第10図８）

ピット405は長軸84cm、短軸67cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。埋土は灰褐色シルト層であり、晩期Ⅵ期から弥生Ⅰ期と推定される高杯口縁部（第24図４）が出土している。

ピット406（第10図９）

ピット406は長軸79cm、短軸48cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。埋土は３枚あり、埋土１、３が黒褐色シルト層、埋土２が黒褐色砂質シルト層である。弥生Ⅱ期の高杯（第24図５）が出土している。

Ｒ区の遺構群は発掘区の北西隅、中央、南端部、南東部に密集する。このうち中央と南端のグループのピットからは弥生時代Ⅱ期の土器が比較的多く出土している。これらのピットは、出土遺物から、弥生Ⅱ期に属するものが主体であると推定される。

（鹿又）

6）焼土遺構

Ｐ区の東南部では礫の散在する範囲において３ヶ所の焼土のひろがりが認められた（第２図）。焼土のひろがりの付近に柱穴は確認されておらず、特に住居との関わりはないと判断した。Ｐ区東半部にひろがる礫集中群、土器埋設土壙群、土壙を伴う礫群などの遺構群と深く関わりをもつものと考えられる。

第１号焼土遺構（第11図１）

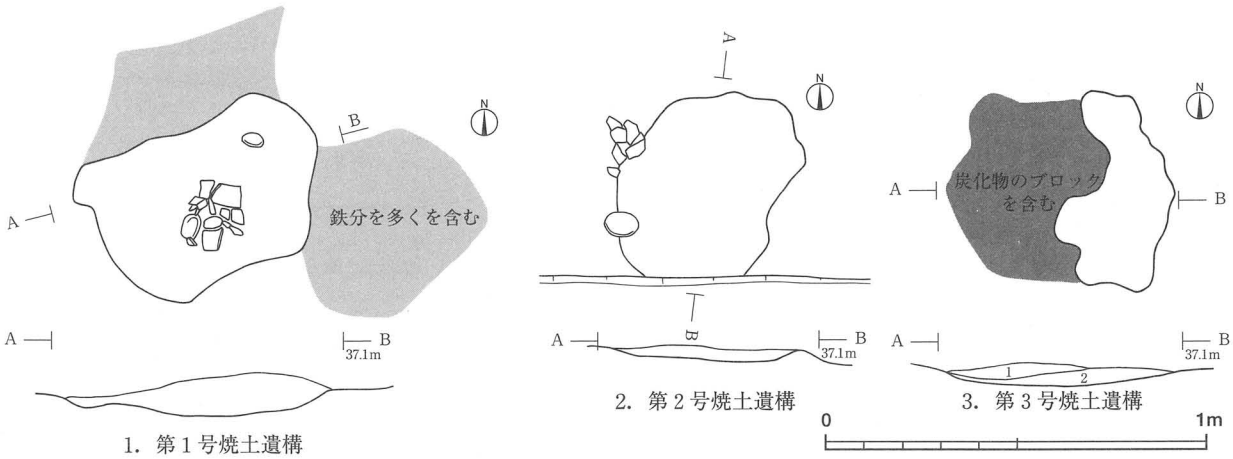
Ｐ区のほぼ中央南よりのＢＩ48区の10層において検出された。平面形は長軸60cm、短軸40cmの不整楕円形を呈する。断面はレンズ状であり、最大厚は10cmある。炭化物は含まれていない。長期に使用されたものと推定される。焼土上面から剥片が出土している。３号焼土遺構と共通した性格が考えられる。

第２号焼土遺構（第11図２）

Ｐ区の南壁東よりのＢＨ49区において12層上面で検出された。平面形は長径58cm、短径38cmの不整楕円形を呈する。浅いくぼみに焼土が堆積しており、３cm程の厚さをもつ。炭化物は含まれていない。遺物は焼土上面から大型の剥片（第16図版３、17図版４）が２点出土している。このうちの１点石器№66（第17図版４）は近接して出土した剥片№64，65（同図版２，３）２点と接合した（同図版１）。この接合資料は、焼土遺構の性格を推定するうえでの重要な出土遺物といえる。第２号焼土遺構は層位的関係から縄文晩期Ⅵ期から弥生Ⅰ期に属すると考えられる。

第３号焼土遺構（第11図３）

Ｐ区の東より中央のＢＪ49区の10層上面で検出された。12層まで掘り込んでいる。平面形は、長径50cm、短径30cmの不整形を呈する。焼土面は中央部で深さ６cm程あって浅いくぼみとなっている。焼土層は10、12層が熱を受けて変化したものであり、この変化した10層には径１～２cmの炭化物が多く含まれ、灰が混じる。なお、12層



1．第１号焼土遺構　2．第２号焼土遺構　3．第３号焼土遺構

遺構名	区名	層名	土色	粘性	しまり	粒度	含有物	備考
第１号焼土遺構	P		5YR4／8　赤褐色	中	弱	砂質シルト	特になし	
第２号焼土遺構	P		5YR4／4　にぶい赤褐色	中	中	シルト	特になし	
第３号焼土遺構	P	1	7.5YR4／3　褐色	やや強	中	シルト	径１～2cmの炭化物を多く含む。灰をわずかに含む	
		2	5YR4／8　赤褐色	弱	弱	シルト質砂	灰をわずかに含む	

第11図　山王囲遺跡Ｐ区検出焼土遺構平面図・断面図
Plans and sections of burned soil features（P trench） in the Sanno-gakoi site

も灰をわずかに含んでいる。

第３号焼土遺構の西半部分に炭化物の集中区域が確認されている。平面形は長軸50cm、短軸40cmの不整形を呈する。この炭化物の集中地点は焼土遺構と重複関係が認められ、焼土遺構の上に炭化物の集中域が検出されている。

これらの遺構は、焼土と灰を含み、炭化物の分布域が重なり合っている関係から、比較的長期にわたって繰り返し火を焚いた跡と推定される。第３号焼土遺構は層位的関係から縄文晩期Ⅵ期から弥生Ⅱ期に属すると考えられる。

（西井、早瀬、竹ヶ原）

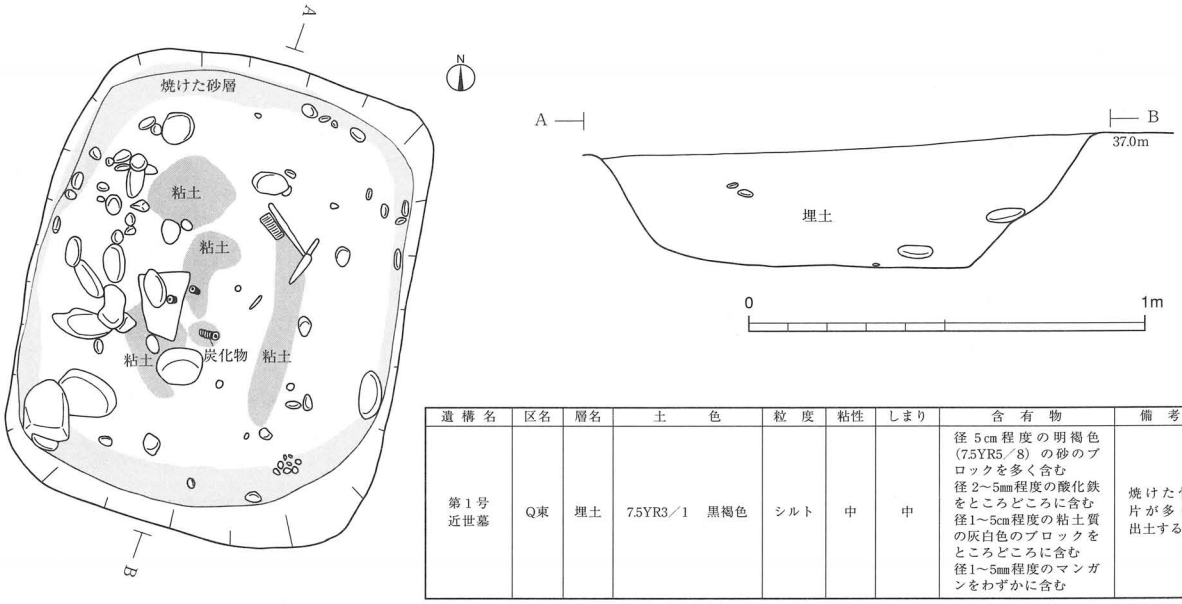
７）旧　河　道（第２図、第２図版）

Ｐ区西端において検出された。幅は６ｍを超える。旧河道を埋める砂層は５ｂ層及び６層によって覆われている。これより更に上層の４層中で十和田ａ火山灰と推定される火山灰が検出されていることから、10世紀までに埋没したと考えられる。

（大場）

８）近　世　墓

Ｑ東区の北東隅において、近世の墓壙１基が検出された。５層の上面で確認された。平面形は、長軸1.2ｍ、短軸0.95ｍの隅丸長方形を呈し、深さ36cmである。埋土は黒褐色シルト層で、明褐色の砂のブロックを多量に、灰白色土粒と鉄分、炭化物、マンガンを若干含む。埋土中からは焼けた骨片が出土している。底面からは古銭が計７枚、うち墓壙中央付近から出土した古銭は３枚の癒着銭で、孔に紐の一部が残存していた。また、表面には編物状の布が付着していたことより、紐で結ばれ袋に納められていたと考えられる。他に煙管１点、刀子１点、鉄製の管１点、不明鉄製品１点、不明木製品２点が出土している。煙管は木製の羅宇部分が残存しており、その



遺構名	区名	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
第１号近世墓	Ｑ東	埋土	7.5YR3／1　黒褐色	シルト	中	中	径５cm程度の明褐色（7.5YR5／8）の砂のブロックを多く含む 径２～5mm程度の酸化鉄をところどころに含む 径1～5cm程度の粘土質の灰白色のブロックをところどころに含む 径1～5mm程度のマンガンをわずかに含む	焼けた骨片が多く出土する

第12図　山王囲遺跡Ｑ東区検出第１号近世墓
Grave 1 in the Edo era of the Q trench in the Sanno-gakoi site

側から出土した木製品は煙草入れの可能性がある。刀子は、刃部が長さ8㎝、幅1.8㎝、柄の幅は1㎝である。これらの出土品は副葬品と考えられる。また底面からは、有機物が腐食したと考えられる褐灰色の粘土が検出されている。墓壙底部付近には焼けた多量の礫が認められ、底面や壁面には焼けた砂も認められる。この墓壙の時期は、出土した寛永通寶の年代より江戸前期頃と推定される。この近世墓は、北側の段丘崖にひろがる可能性があるが、地形的にみて小規模なものと推定される。（坂田）

第3節　出土遺物

(1) 出土遺物の概要

第3次調査では、自然堤防の北西部にP区、1964，65年の調査区の上に建設された体育館跡地にQ区、遺跡のひろがる自然堤防の北辺にR区と3ヶ所の調査区を設定し、発掘調査を進めた。

これらの調査区からは、縄文時代晩期中葉から弥生時代前期までの遺物が多量に出土した。ことに、P、Q、R区いずれの発掘区からも弥生時代Ⅰ期とⅡ期の土器が豊富に出土している。弥生時代前期に、自然堤防の広い範囲で生活が営まれ、住居、区画溝などの遺構群と遺物包含層が形成されたことが確認された。

第3次調査では、P区において遺物包含層の下から配石遺構、焼土遺構などが検出され、縄文時代晩期終末から弥生時代前期の土器、石器が出土した。さらに、晩期終末、弥生前期の埋設土器が4基、配石遺構群のなかで検出されている。また、包含層からは弥生前期後半の山王Ⅲ層式土器が主体的に出土し、さらに晩期後半の山王Ⅴ層式、終末の山王Ⅳ下層式、前期前半の山王Ⅳ上層式土器など多様な型式の土器が出土している。なお、わずかであるが、弥生時代中期前半の寺下囲式相当の土器が出土している。

なお、P区からは、多数の打製石器とともに、整った形態の磨製石斧が出土した。2点は蛤刃石斧とみられる。さらに、3層からは弥生時代中期と推定される紡錘形の粘板岩製石庖丁の破片1点が発見された。山王囲遺跡では、この資料を含めて2点の石庖丁が出土したことになる（須藤　1986)。これらの資料は、宮城県における北限資料である。

遺跡北辺に設けたQ区では、その西区から径4ｍ程の竪穴状遺構が1基検出され、その埋土から豊富な量の山王Ⅲ層式期の土器、石器が出土した。また、遺構を覆う包含層からもこの弥生Ⅱ期の土器が豊富に出土した。さらに、下層においても晩期終末から弥生Ⅰ期の遺物がまとまって出土している。

さらに、1962年に明治大学が調査した自然堤防の北東辺に設けたR区では、旧発掘区の位置が確認された。このR区では多数のピットと小土壙が検出されたが、この遺構とそれを覆う遺物包含層から縄文時代晩期後半から弥生時代前期の土器、晩期後半の飾髪土偶、蓋形土製品などの遺物が出土している。

(2) 土　　器

出土土器は、全てで平箱22箱分、重量で80kgに達した。ここでは、主要な包含層と遺構から出土した資料を整理し、そのうち、口縁部を有する土器、有文土器破片を抽出して、その型式内容を検討することとした。出土資料についての属性の特徴は、土器観察表に掲載した。観察表にかかげた「時期」、「器種」、「口縁部の特徴」、「文様帯」、「主要文様帯の特徴」といった項目は、基本的に第1次、2次調査報告書に記述した事項を受け継いだ（付

表1)。なお、装飾要素の分類では「変形工字文」を、O型、P型、A1型、A2型に、そしてC型を6類に区分して記述した（須藤　1986)。

P区出土土器

P区からは、総計5箱分、24kgの土器が出土している。出土土器の大半は、8、9、10層から出土しており、晩期V期から弥生II期までの土器型式に属する。弥生時代中期前半のIII期と考えられる土器（第14図1，2、第5図版3）がわずかに出土している。口縁部外反の甕（第14図2、PL.13－1－2）には、カナムグラと推定される植物茎を回転した擬似縄文（須藤他　1984）が施されている。P区8層から11層出土土器については、型式の判定できる54点を図に掲載した。10、11層では、晩期V期の台付鉢（第15図17)、VI期の鉢（同図11，12)、弥生I期の高杯（同図13，18）などが目につく。

次に遺構毎に出土遺物を検討する。

第3号配石遺構出土土器（第13図1～3、PL.12－1－2，4，5）

P区の中央付近に検出された第3号配石遺構からは、晩期終末と弥生時代の甕と深鉢が出土している。第13図1は弥生I期ないしIIa期の短い平坦口縁の甕で、口頸部はナデで調整されている。体部にはLR斜行縄文が施される。第13図3は晩期VI期の小波状口縁の深鉢で、口頸部が軽く外反し、体部上半はゆるやかに内彎する。頸部には沈線が1条めぐり、体部にはLR斜行縄文が施され、内面はナデによって調整される。

第4号配石遺構出土土器（第13図4、第4図版1、PL.5－1，12－1－3）

第4号配石遺構からは、深鉢と高杯の脚部が出土している。第13図4は晩期VI期から弥生IIa期の小波状口縁の深鉢で、体部にはLR斜行縄文が施される。器面はナデの後、横方向の篦ミガキによって仕上げられている。第4図版1は弥生I期からIIa期の高杯の脚部で、裾部に向かってひらく。底部との境と裾部に平行沈線文が施されている。ミガキが加えられ、朱が塗布されている。

第5号配石遺構出土土器（第13図5、第4図版2，3、PL.5－2，3、12－1－6）

第5号配石遺構からは、甕と深鉢が出土している。第13図5は晩期VI期から弥生I期とみられる深鉢で、口縁部には、頂部に押圧のある2個1対の小さな山形突起が飾られる。長い口頸部は軽く外反し、体部上半でゆるやかに膨らむ。頸部に太い匹字文がめぐる。口頸部はミガキによって調整され、朱が塗布されている。体部にはLR斜行縄文が施されている。他に大型の深鉢の体部下半1点（第4図版2）と高さ17cmの深鉢1点（同図版3）が出土している。後者は平坦口縁で短い無文の口頸部をもつ。いずれもLR斜行縄文が施されている。弥生前期I期の深鉢と推定される。

第11号土器埋設土壙出土土器（第4図版4、PL.5－4）

第11号土器埋設土壙からは、深鉢の体部下半から底部にかけての土器が出土している。底径7cm、体部にはLR斜行縄文がみられる。内面はミガキによって整えられている。胎土には海綿状骨針が含まれている。時期は、

器形、縄文、調整などから、縄文晩期終末から弥生前期Ⅰ期までに属すると推定される。

第12号土器埋設土壙出土土器（第4図版5、ＰＬ．5－5）

第12号土器埋設土壙からは、縄文時代晩期終末から弥生時代前期とみられる深鉢の体部下半が出土している。ＬＲ斜行縄文が施され、内面はかるく磨かれている。底部を欠く。

第13号土器埋設土壙出土土器（第4図版6、ＰＬ．5－6）

この土壙からは、縄文晩期終末から弥生前期と推定される深鉢の体部下半が出土している。底径は11cmで、ＬＲ斜行縄文が施され、内面は軽いナデによって調整されている。底部には木葉痕がみられる。

第15号土器埋設土壙出土土器（第13図6～9、第4図版7、ＰＬ．6－1、12－1－1，2－1，2，7）

この土器埋設土壙からは、深鉢、鉢、壺が出土している。第13図7は、晩期終末Ⅵ期から弥生Ⅰ期の小波状口縁の深鉢で、口頸部が短く、直立し、体部上半が膨らむ。体部にはＬＲ斜行縄文が施され、内面はナデとかるいミガキで仕上げられる。鉢は2点出土しており、いずれも口縁部から体部にかけて軽い膨らみをもつ。第13図6（ＰＬ.12－2－1）は、弥生Ⅰ期の装飾鉢で、体上部に変形工字文Ａ2型が展開する。この変形工字文は小さな貼付粘土粒をもつ。さらに丁寧なミガキが加えられ、朱が塗布されている。胎土には海綿状骨針がみられる。第13図8は、平坦口縁の鉢で、口縁部に5条の平行線がめぐり、口縁部内面に1条沈線が施されている。体部下半にＬＲ斜行縄文が施されている。器面はナデとかるいミガキによって調整される。

第4図版7（ＰＬ．6－1）は、口頸部がほぼ直立し、肩部が強く張る大型壺で、高さは35cm程度と推定される。弥生Ⅰ期に属すると考えられる。頸部は太く、比較的長い。口縁部と頸部の境に4単位の匹字文が施され、丁寧なミガキによって仕上げられている。器面には朱が塗布されている。弘前市砂沢遺跡、福島県墓料遺跡、あるいは秋田県諏訪台Ｃ遺跡などの弥生Ⅰ期の壺に共通した様相がみられる（須藤他　1984、利部・和泉　1990、村越他　1991）。

Ｐ区包含層出土土器（第13図10～第16図4、第5図版1～4、ＰＬ．6、12～14）

Ｐ区の4層、8ａ層、9層、10層、11層から、縄文晩期Ⅴ期から弥生Ⅲ期の土器が出土している。出土土器には層位的に明確な相違はみられず、各層を通して主体となるのは弥生Ⅱ期の山王Ⅲ層式の古段階（青木畑式）の土器である。

4層からは弥生Ⅱ期の深鉢が1点確認されている（第13図10）。平坦口縁で、口頸部は軽く外彎する。比較的小型であり、器面は磨かれ、炭化物が付着している。

8層では晩期Ⅵ期の鉢が1点出土している（同図11）。体部上半に4条の平行沈線文がめぐる。8ａ層からは、型式の判定できる4点の土器が出土した（同図12～15）。甕は平坦口縁で、器面は内外面ともに磨かれている（同図12）。深鉢は、口縁に、頂部に篦押圧のある山形突起が飾られ、頸部に太い沈線が1条施されている（同図14）。突起の形状などから、弥生Ⅰ期からⅡａ期に属すると考えられる。第13図15は、高杯脚部である。変形工字文Ｃ1型が施されている。器面はナデ調整され、朱が塗布されている。弥生Ⅱａ期に属する。

9層からは、弥生Ⅱａ期の土器が4点出土している（同図16～19）。甕は平坦口縁で、口頸部が3㎝前後のもの（同図17）と、1㎝程度の短いもの（同図16）がみられる。高杯、または鉢には平坦口縁で、体部から口縁部にかけて屈曲なく広がる類型がみられる（同図18）。体部には平行線文が展開し、弥生Ⅱａ期のものと推定される。第13図19の鉢は平坦口縁で、屈曲なく広がる（ＰＬ.12－２－13）。体部に変形工字文Ｃ１型が展開する。器面は丁寧に磨かれ、朱が塗布される。口縁部の内外面には炭化物が付着している。この鉢は、弥生Ⅱａ期に属する。

10層からは、晩期Ⅴ期から弥生Ⅲ期の土器が35点出土している（第14図１～13、第15図１～19、第５図版１～３、ＰＬ.６－２，３，７）。

弥生Ⅲ期の土器には、甕、壺がみられる。甕には平坦口縁で、短い口頸部がほぼ直立し、肩が強く張る類型（第14図１、ＰＬ.13－１－１）がみられる。口頸部に太い平行線、体部上半には１列の円形刺突列と太い平行線がめぐる。体部にはＬＲ斜行縄文が施される。谷起島遺跡などから出土する磨消縄文手法と列点文手法の併用された土器群と類似しており、弥生Ⅲ期の土器と推定される。また、口頸部が外反する平坦口縁の甕は、体部にカナムグラの茎の回転圧痕と推定される擬似縄文が施されている。口頸部はミガキによって調整されている（同図２、ＰＬ.13－１－２）。弥生中期前半に桝形囲式期に発達する擬似縄文がすでにこの地で出現していたことが確認され、重要な資料である。壺は広口壺で、体部中位に最大径を有し、磨消縄文手法による波状文帯が展開する。縄文が沈線帯中に文様に沿って展開する手法が特徴的である。内外面に朱が彩色され、内面には炭化物が付着している（第５図版３）。この土器は、弥生中期前半のⅢ期に属すると推定される。

さらに10層からは弥生Ⅱ期の甕、蓋、晩期Ⅵ期から弥生Ⅱ期の深鉢、高杯、鉢、壺が出土している。第14図３、13の甕は、平坦口縁で、口頸部が３～５㎝と比較的長い。口縁部は直上あるいは緩やかに外彎し、体部上半が張る。体部には横走するＬＲ縄文が施されている。器面はナデ調整が加えられ、内外面に炭化物が付着している。弥生Ⅱ期のものとみられる。同図４の深鉢は、口頸部が1.5㎝程度で短く、口縁部の屈曲も弱い。第15図３、４は、口縁部が軽く外反する小波状口縁の深鉢である。これらは、晩期終末から弥生Ⅰ期に一般的な土器である。同図６の鉢は、体部に変形工字文Ｃ１型が施され、器面は丁寧に磨かれている。弥生Ⅰ、Ⅱ期の高杯か鉢と推定される。また、第14図５は体部が緩やかに広がる鉢である。器面が磨滅しているが、比較的細い沈線で変形工字文、連孤文あるいは菱形文が施されている。高杯には３条の平行線による文様がめぐるもの（第14図７）、変形工字文Ｃ２型が展開する類型（第14図10）などがみられる。器面は丁寧に磨かれ、胎土には金雲母が混和されている。変形工字文Ｃ型が施された脚部が出土している（第14図11）。これらの高杯は、弥生Ⅱａ期の土器と考えられる。

弥生Ⅰ期の鉢、高杯が若干出土している。高杯は、円盤状粘土板の貼り付けのある大きな山形突起をもち、体部に変形工字文Ａ型が施されている（同図８、ＰＬ.14－１－６）。また、第15図10は、高杯の装飾口縁と推定され、頂部に押圧が加わる大きな山形突起が施されている。第15図13は口縁部が内彎するし、体部には変形工字文Ａ２型が展開する。

同図16は、強くひらく浅鉢で、平行線が口縁部外面に５条、内面に１条めぐる。弥生時代Ⅰ期からⅡａ期に属すると推定される。第15図18は、平坦口縁で、口縁は内彎し、変形工字文Ａ１型が施されている。高杯と推定される。

晩期Ⅵ期の土器としては深鉢、鉢が出土している。深鉢は短い口頸部をもち、小波状口縁で口頸部は軽く外反する（第15図14，15）。鉢は平坦口縁で、口縁部が屈曲なく広がり、体部には変形工字文Ａ２型が展開する（第15

図11，12)。

晩期Ⅴ期の土器には、深鉢、鉢がみられる。深鉢は口唇部に刻みが加えられ、口縁部に２条の平行沈線文が施される（同図19)。第15図17の鉢は、口縁部が強く内彎し、山形突起が飾られる。体部上半には上下に対向する匹字文が２段施される。器面は丁寧に磨かれ、朱が塗布されている。低い小型の台をもつとみられる。

11層からは、縄文晩期Ⅴ期から弥生Ⅱａ期の土器が10点出土している。第15図22（ＰＬ.15－１－１）は、口縁に大きな山形突起が飾られ、くの字に屈曲する口頸部をもつ。体部には変形工字文Ｃ１型が展開し、器面は磨かれている。また、平行線文のめぐる高杯脚部（第５図版４、ＰＬ.６－５）や、透しのある波状文の台部（第15図21、ＰＬ.14－２－13）が出土している。これらの土器は、比較的太く深い沈線によって文様が描かれ、器面が入念に磨かれ、内面はナデで調整されている。このような特徴から弥生Ⅱａ期の土器群と判断される。

第15図23は、体部上半が内彎し屈曲する器形の高杯である。口縁には頂部に押圧のある大きな山形突起が施される。口縁端面には、深い沈線が加えられ、内面には突起に沿った沈線が１条めぐる。器形、突起の形状から弥生Ⅰ期の土器と考えられる。また、第15図24は、口縁部がわずかに内彎して立ち上がる。平坦口縁で、変形工字文の一部とみられる沈線が６条めぐる。この土器は晩期Ⅴ期新段階からⅥ期に属すると推定される。

第16図２は、晩期Ⅴ期新段階からⅥ期の大型鉢である。口縁端面に沈線が加えられ、２個１対の低い山形突起が配される。体部上半には匹字文が１段展開し、器面には朱が塗布されている。

同図１、３は晩期Ⅴ期の深鉢である。１は、押圧による小波状口縁をもつ。口頸部は比較的長く、体部には横走するＬＲ縄文が施されている。Ⅴ期の中段階あるいは新段階に属すると推定される。同図３は、小波状口縁で、口頸部は短く直上する。口頸部は磨かれ、体部にＬＲ縄文が施されている。Ⅴ期新段階に属するとみられる。

同図４は、口縁部が軽く内彎して直上する深鉢である。口縁部は軽く肥厚し、端面が平坦に仕上げられている。ＬＲ縄文がやや浅く施されている。このような口縁部、縄文施文の特徴は縄文時代晩期前半から弥生時代の深鉢にはほとんどみられない特徴である。

（坂田、京野、須藤）

Ｑ区出土土器

Ｑ区では平箱で11箱分、約36kgの土器が出土している。特にＱ西区の南半では10層から25層において豊富な資料が出土した。また、竪穴状遺構、浅い土壙から完形に近い土器がまとまって出土している。東区では生活面、包含層が削平されており、弥生、縄文時代の堆積層は確認できなかった。Ｑ区中央は1965年度の調査発掘区の確認のために掘り下げたもので、出土遺物の大部分が２次堆積層の遺物である。ここでは、Ｑ西区の晩期後半から弥生前期の土器について記述する。

Ｑ西区出土土器（第16図５～17、17～22図、23図１～３、第５図版５～10、６～８図版、９図版１）

Ｑ西区では、第14号土器埋設土壙、竪穴状遺構、包含層の10～17層、20層、22層、24～25層において、縄文時代晩期後半から弥生時代中期前半の土器が133点出土した。これらの資料を検討したところ、弥生時代前期の土器型式の変遷が層位的に捉えられた。すなわち10～17層では、主に弥生時代Ⅱｂ期（山王Ⅲ層式）の土器が出土している。20、22層では、弥生Ⅱａ期（青木畑式）に属する土器が多数みられる。そして、23層を掘り込む竪穴状遺構では、弥生Ⅱａ期に属する土器が出土している。24層、25層では、弥生Ⅰ期（山王Ⅳ上層式）の土器が主

体である。

第14号土器埋設土壙出土土器（第５図版５、ＰＬ．６－６）

第14号土器埋設土壙からは小波状口縁の深鉢が出土した。口径が17cm、器高は23cmあり、体部にはＬＲ斜行縄文が幾分横走気味に施される。口縁部端面をヘラによる押圧で小波状とし、口頸部をナデによって調整している。内面に接合痕が１～1.5cm幅でみられる。また、外面では体部上半に、内面では体部下半に炭化物が付着している。この土器は晩期Ⅵ期から弥生Ⅰ期に属すると推定される。

竪穴状遺構出土土器群（第５図版６，７、ＰＬ．６－４，８、第16図５～13、ＰＬ.15－２）

Ｑ西区の竪穴状遺構からは主に弥生前期Ⅱａ期の土器が出土している。そのうち、11点を掲げた。第16図13（ＰＬ.15－２－３）は、口頸部から肩部にかけて軽く膨らみをもつ深鉢である。口縁部は短く直上する。口縁部外面に３条、内面には１条の沈線がめぐる。頸部の膨らみには１条の太い沈線が緩やかな波状に展開する。体部は、円筒形を呈するのが一般的である。この類型の深鉢は、一迫町青木畑遺跡、名取市十三塚遺跡、山形県酒田市生石２遺跡、蟹沢遺跡、秋田県秋田城跡（加藤　1982、恵美　1979、安部　1987、加藤他　1986、須藤　1997、小松他　1979）などから出土している。弥生Ⅰ期からⅡａ期に属する特徴的な深鉢である。

第５図版７の高杯は、口縁部が上方に立ち上がり、頸部でかるく内屈し、体部が緩やかに内彎して広がる。太い脚部をもつ。口縁部と体部には３条の平行線が施され、体部上半に無文帯がめぐる。体部下半には、ＬＲ斜行縄文が施されている。胎土には金雲母が混和され、器面には朱が彩色されている。焼成は良好である。このような特徴をもつ高杯は、青木畑遺跡、岩手県軽米町馬場野Ⅱ遺跡、和当地Ⅰ遺跡など、北上川水系に広く分布する（工藤他　1986、高橋他　1997）。高杯の脚部には、３条の波状文が施されるもの（第16図12）と、磨消縄文手法による垂下文の施されたもの（同図９）がみられる。前者は、山王囲遺跡1965年度調査のⅢｃ、ｌ層などⅢ層下層に多く、弥生時代Ⅱ期古段階に盛行する類型である。後者は、Ⅲａ、ｋ層などⅢ層上層から多く出土し、Ⅱ期の新段階に発達する類型である（須藤　1983）。

10～17層出土土器群

この地区の包含層のうち、10～17層では弥生Ⅱ期の土器が主体である。甕、深鉢、鉢、高杯、壺、蓋が出土している。甕は倒卵形で、外反あるいは直上する口頸部をもつ。口縁は大半が平坦で、幅２～３cmある。第６図版４（ＰＬ．９－１）は、発掘区南東部のＸ１Ｙ２ａ区の15層から出土した甕で、平坦口縁をもち、頸部で強く屈曲し、口縁部は軽く外彎気味に立ち上がる。肩部は強く膨らむ。口径は26cm、体部の最大径は32cmあり、高さは40cm程度とみられる。比較的大型な甕である。体部には全体に炭化物の付着がみられる。第20図１は、16層から出土した波状口縁の甕である。口頸部は短く軽く外彎する。肩部がわずかに膨らむ。第16図14、17も押圧による小波状縁の口頸部で、この類型に属するとみられる。

深鉢には、頸部に平行線がめぐり、強く膨らむ肩部をもつ類型（第５図版８、第19図13）と、口縁部に屈曲がなく緩やかに内彎するか、真直ぐに立ち上がり、体部から底部にかけてわずかに内彎し、すぼむ砲弾形深鉢（第６図版３、第17図３，10，11）が出土している。第５図版８は、口径35cm、器高が37cmあり、比較的大型である。頸

部から肩部に4条の平行線が施されている。口縁部には、2個1対の低い山形突起が6単位飾られている。突起の下には4～6㎝の長さの刻線が1条施され、内面に1条の沈線がめぐる。内外面ともに炭化物の付着がみられ、特に内面では体部下半に顕著である。第19図13は、口頸部に4条の平行線が施され、口縁部には2個1対の山形突起が飾られる。器面は軽く磨かれ、体部内外面に炭化物が付着している。突起の形状などから、弥生Ⅱa期の山王Ⅲ層式古段階（青木畑式）に属するとみられる。

蓋には笠状の器形で台状の摘みの付く類型がみられる。器外面にＬＲ縄文が施されるもの（第18図1、第20図12, 13, 14、第6図版5）、無文のもの（第19図14、第20図16、第5図版10、ＰＬ.７－２）、有文のもの（第19図16、ＰＬ.18－２－６）が出土している。縄文施文のものが主体であるが、無文の蓋も目につく。蓋の口縁部付近内面に炭化物が帯状に付着している。第18図1、第19図14、第20図13、16の場合、内面に口縁から3～4㎝の幅で帯状に炭化物の付着がみられ、外面では2～3㎝の範囲に黒色変化が観察される。これらの蓋は、甕などに口縁部端がわずかにはみ出すように被せられ、使用された結果、物の煮たきによって炭化物が付着したものとみられる。第5図版10（ＰＬ.７－２）の無文蓋は、内外面ともに帯状の炭化物付着がみられるが、口縁部付近の約1㎝幅に炭化物の付着は認められない。

第19図16は、口縁部にＬＲ縄文が施され、口縁に沿って2条の平行沈線がめぐる。体部に連続山形文が展開する。ＬＲ縄文は磨消されている。内面には炭化物が付着し、口縁から約1～4㎝の範囲に集中している。この同一個体破片が1965年の発掘調査資料（第30図19）にみられる。体部には沈線による複雑な入組文が施され、沈線区画外には、ＬＲ縄文が施される。宮城県角田市鱸沼遺跡（志間　1971）から多数出土する平底鉢を伏せたような円筒摘みのない類型の蓋である可能性が高く、直上口縁の砲弾形の装飾深鉢にセットになるとみられる。

高杯は、口縁部から体部にかけて明瞭な屈曲がなく緩やかに広がる器形が多い。磨消縄文手法、充填縄文手法を伴った変形工字文Ｃ２、３型が施される。第17図14（ＰＬ.17－１－８）は変形工字文Ｃ３型が展開し、縄文が充填されている。変形工字文の一部が入組文的に崩れ、その無文部に先端半円形の工具によって刺突列が1条加えられている。この刺突列は、体部下限の平行線間にもみられる。器面は丁寧に磨かれ、朱が施されている。胎土には金雲母が含まれている。これと同一個体の破片が1965年発掘調査資料に確認されている（ＰＬ.17－１－９）。第18図８（ＰＬ.17－１－10）は、太い沈線によって変形工字文Ｃ２型が描かれ、磨消縄文手法で飾られる。文様内に充填される沈線が上段では欠落している。中期に盛行する「王字文」へ文様の変化する様相がうかがえる。器面は丁寧に磨かれ、朱が彩色されている。

高杯の脚部は、中位に軽い膨らみをもつ円筒形を呈する。磨消縄文手法、充填縄文手法を用い、垂下文や波状文が施される。第6図版1（ＰＬ.７－４）は、磨消縄文手法で山形文と垂下文が組み合った幾分複雑な文様が施されている。また、第17図2（ＰＬ.16－１－４）は、充填縄文手法を用いた垂下文が展開する。胎土には、山王Ⅲ層式土器に特徴的にみられる金雲母が混和され、器面全体に朱が塗布されている。第18図9、10、第20図3は、磨消縄文手法を伴う波状文が施され、器面には朱が塗布されている。また、同図4は2条の沈線によって波状文が描かれている。縄文は施されず、器面が丁寧に磨かれている。第18図9、第20図4には胎土に金雲母が混和されている。高杯脚部の内面は、調整が粗く、幅1.5～2㎝の接合痕が明瞭に認められる。

第5図版9（ＰＬ.７－３）は無文の小型壺である。外面と体部下半の内面はナデによって調整されている。体部上半の内面は、口頸部から指で押さえて成形されており、幅1～1.5㎝の粘土紐の接合痕がみられる。このよ

うな土器は、山王囲遺跡Ⅲ層、秋田県諏訪台Ｃ遺跡、地蔵田Ｂ遺跡などからも出土している（菅原他　1986）。第20図10（ＰＬ.19－２－２）は、体部上半に変形工字文Ｃ５型（須藤　1983）に類する文様が描かれた壺である。変形工字文の反転部からのびる２条の斜線は横方向には連続しない。器面には朱が塗布されている。

20層、22層出土土器（第21図２～９、22図１～15、ＰＬ.20、21－１、21－２－１～５，７～９）

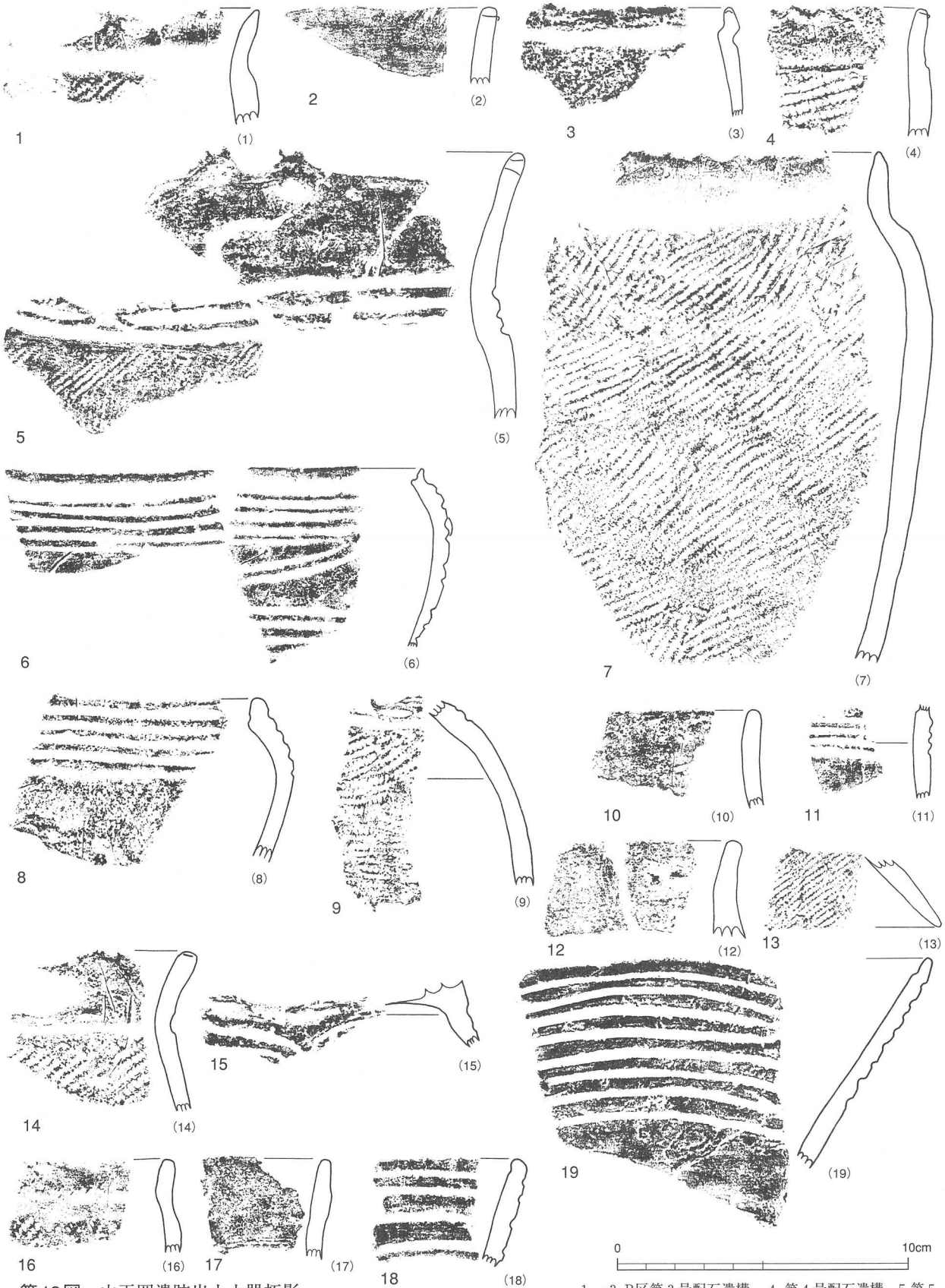
包含層の20～22層からは、主として弥生時代Ⅱ期の資料が出土した。器種には甕、深鉢、高杯、壷、蓋がみられる。第20図15は、平坦口縁の甕である。口縁部はほぼ直上する。頸部の括れは強く、肩部が張る。体部には、ＬＲ原体にｒ撚りの縄を巻きつけた付加条縄文が施されている（ＰＬ.20－２－１）。山王囲遺跡では弥生前期の土器に施される縄文は、一般的にＬＲ縄文であり、付加条縄文、無節のＲ縄文は極めて稀である。第６図版６（ＰＬ.８－２）は口径15cm、器高22cmで、比較的小型の甕である。体部にＬＲ斜行縄文が施され、外反する口縁部は無文である。第21図６は、平坦口縁の甕である。口頸部外面はミガキによって仕上げられている。内面は調整が粗く、幅約1.5～２cmの粘土紐接合痕がみられる。内外面ともに体部上半に炭化物が付着している。

第20図17（ＰＬ.19－２－１）の深鉢は、頸部に１条の沈線がめぐり、器面に朱が塗布されている。口頸部外、内面の調整は、磨きによって丁寧に行われている。第７図版１（ＰＬ.８－３）は、口縁が強く内彎する砲弾形の深鉢である。縦走ＬＲ縄文がみられる。縄文晩期終末から弥生前期の山王囲遺跡出土土器には、ＬＲ斜行縄文と横走縄文が一般的で、縦走縄文の土器は稀である。内面は、ナデ調整されている。内外面に炭化物が付着している。第22図11の深鉢は、押圧による不規則な小波状口縁をもつ。第22図15は、縄文晩期Ⅳ期の深鉢である。口唇部には押圧が加えられ、頸部と口縁部内面に１条の沈線が施されている。器面は非常に丁寧に磨かれている。

第21図５の蓋は、無文で内外面ともに軽い磨きによって調整されている。内面には炭化物が口縁から約４cm幅で帯状に付着している。第22図10の蓋は、外面に縄文が施され、内面は磨きによって調整されている。口径は14cmで小型である。炭化物は内外面ともに口縁から２～2.5cmの範囲に帯状に付着している。

高杯には変形工字文Ｃ１型とＡ型が展開する。第21図４は変形工字文Ｃ１型が施文されている。意匠の反転部の横にのびる沈線は調整によって消されることが多いが、この土器はそのまま残されている。胎土には金雲母が混和され、器面には朱が彩色されている。体部上半に炭化物の付着がみられる。第22図14は変形工字文Ａ型が施され、縄文晩期Ⅵ期から弥生Ⅰ期の土器と考えられる。高杯の脚部には、第21図９（ＰＬ.20－２－５）のように磨消縄文手法を伴う３条の沈線による波状文が施されたものがある。外面は沈線を描いた後に、磨きによって仕上げられ、内面はナデで調整されている。胎土には金雲母が混和され、外面には朱が塗布されている。

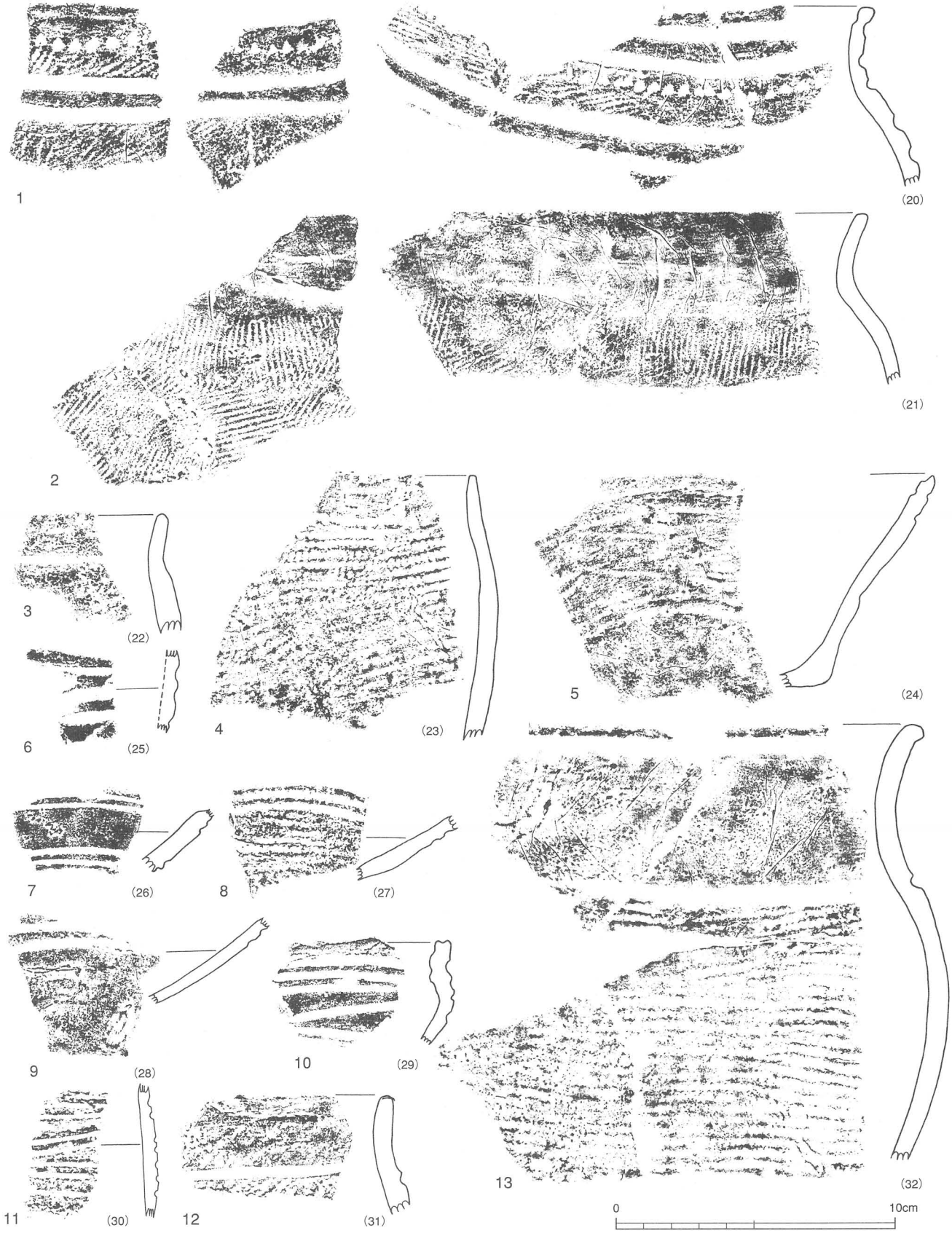
鉢には、比較的多様な器形がみられる。第21図２（ＰＬ.20－２－２）は、直線的に広がる鉢である。ＬＲ縄文を施した後、変形工字文Ｃ２型が描かれている。器面には朱がみられる。類例が宮城県青木畑遺跡から出土している。第７図版２（ＰＬ.８－４）は、外反口縁の小型鉢である。外面に幅1.5～２cmの粘土紐の接合痕がみられる。外面にはＬＲ斜行縄文が施され、内面はナデによって調整されている。第21図８は、口縁部と内面が丁寧に磨かれている。体部上半には部分的に浅い縄文がみられる。胎土に金雲母が混和され、器面には朱が塗布されている。第22図６（ＰＬ.21－１－１）は広口壺である。弥生Ⅱ期と推定される。類例は岩手県湯舟沢遺跡、上村貝塚などにみられる（昆野他　1991）。第22図12は、口縁部に２個１対の山形突起が配され、口縁部端面に沈線が施される。口縁から体部には３条の平行線が施され、内外面ともに磨き調整されている。



第13図　山王囲遺跡出土土器拓影

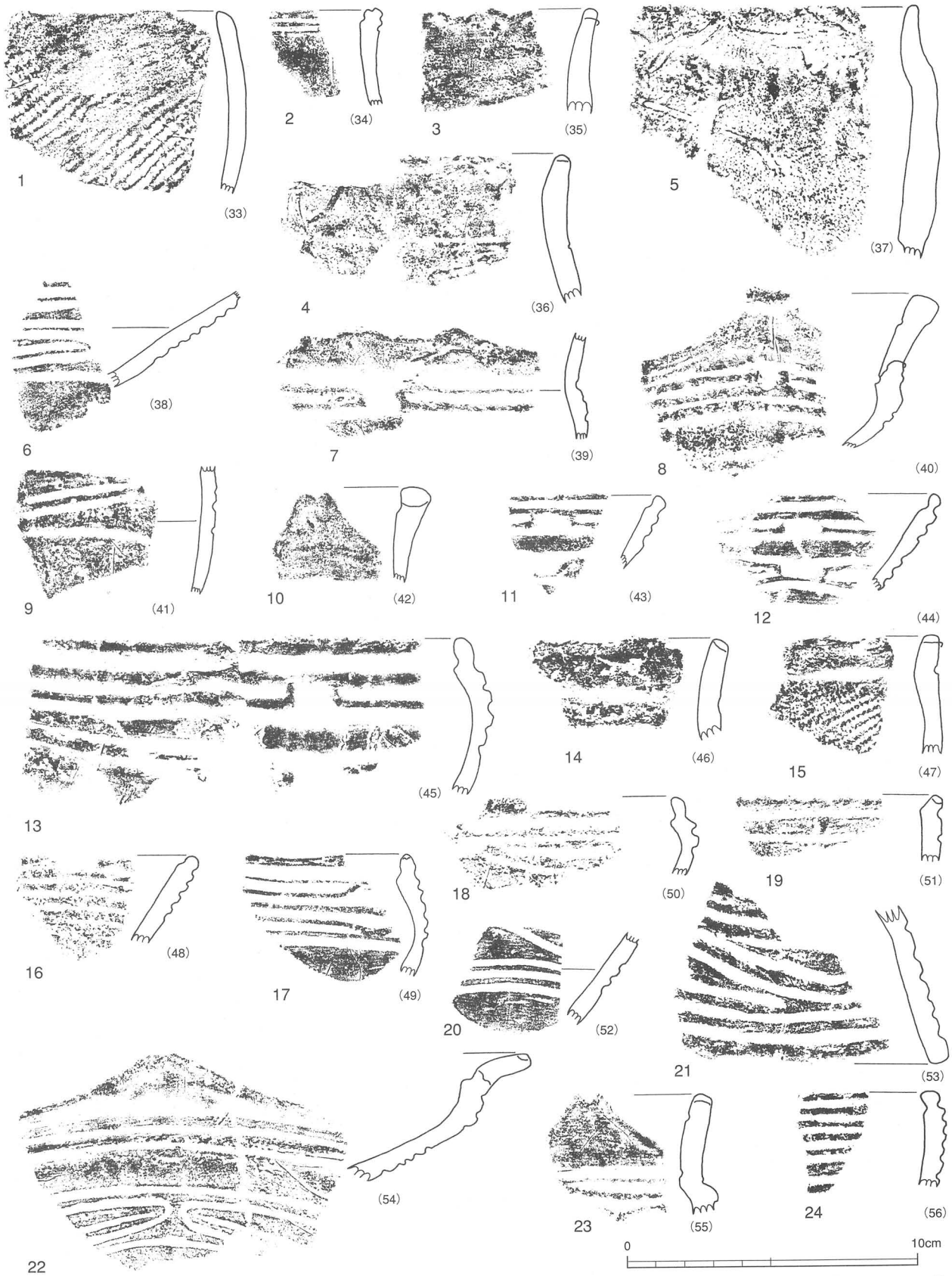
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～3 P区第3号配石遺構　4 第4号配石遺構　5 第5号配石遺構　6～9 第15号土器埋設土壙　10 P区4層　11 8層　12～15 8a層　16～19 9層



第14図　山王囲遺跡出土土器拓影　　1～13 P区10層

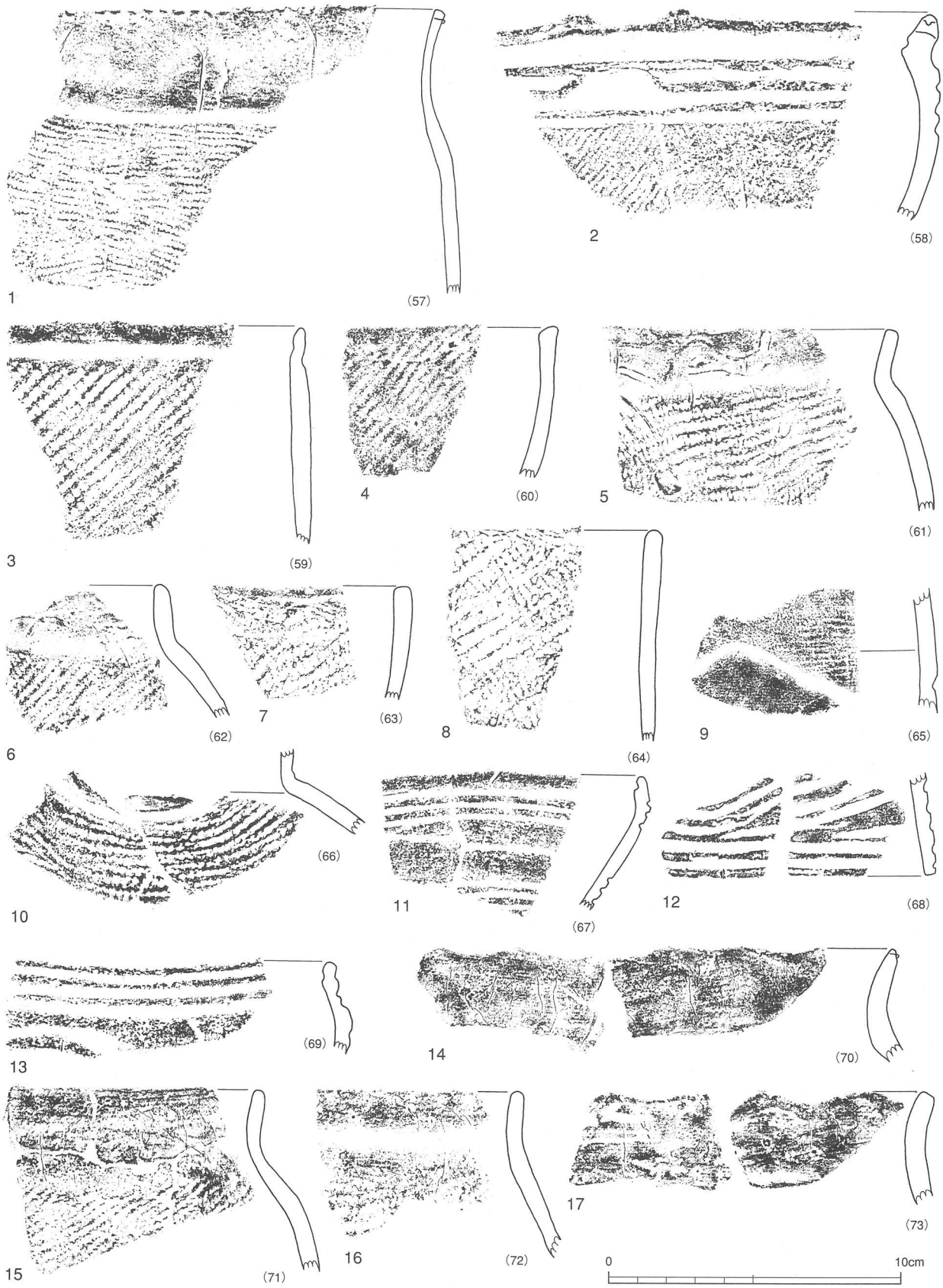
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



第15図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

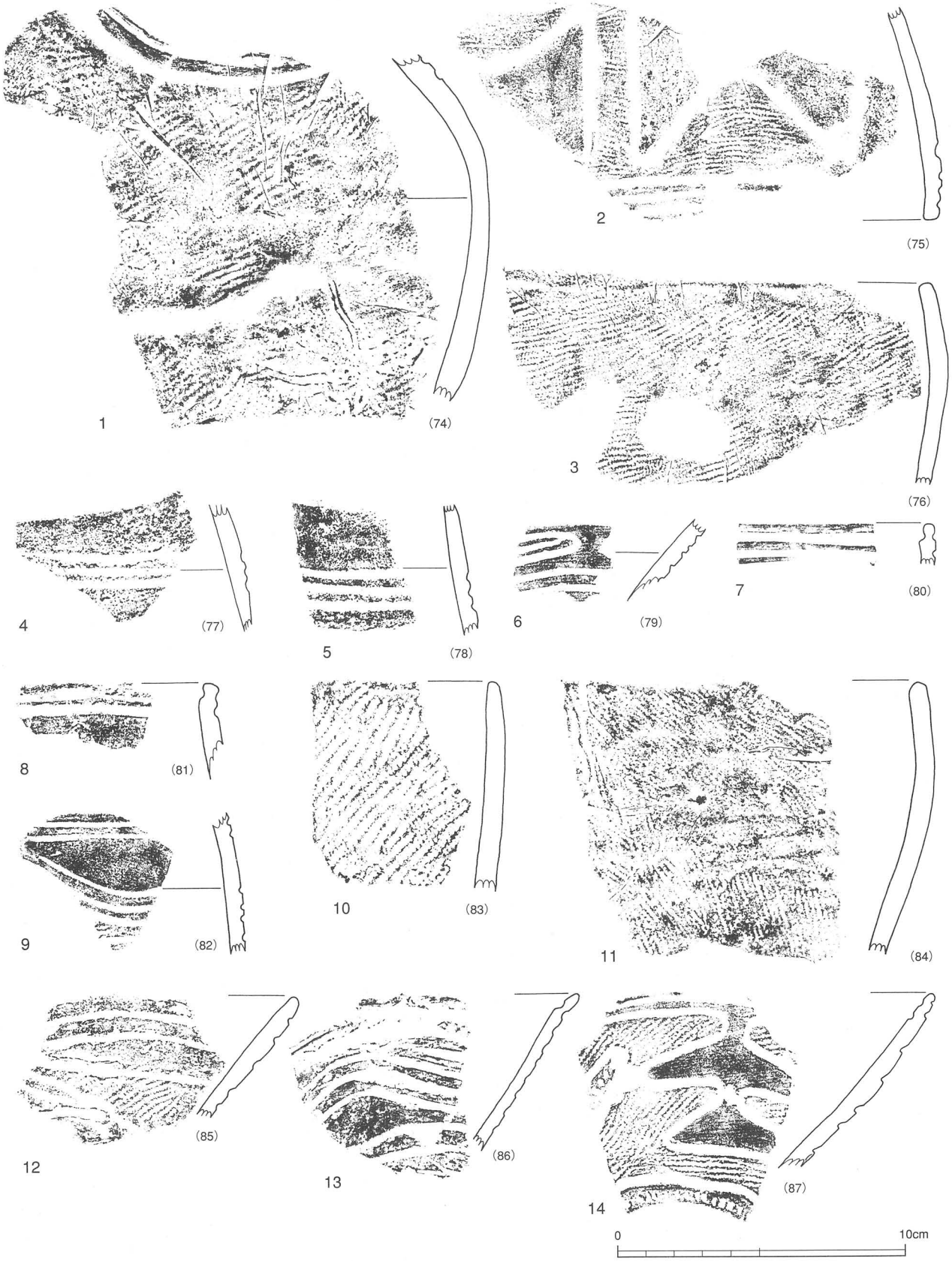
1～19 P区10層　20～24 11層



第16図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

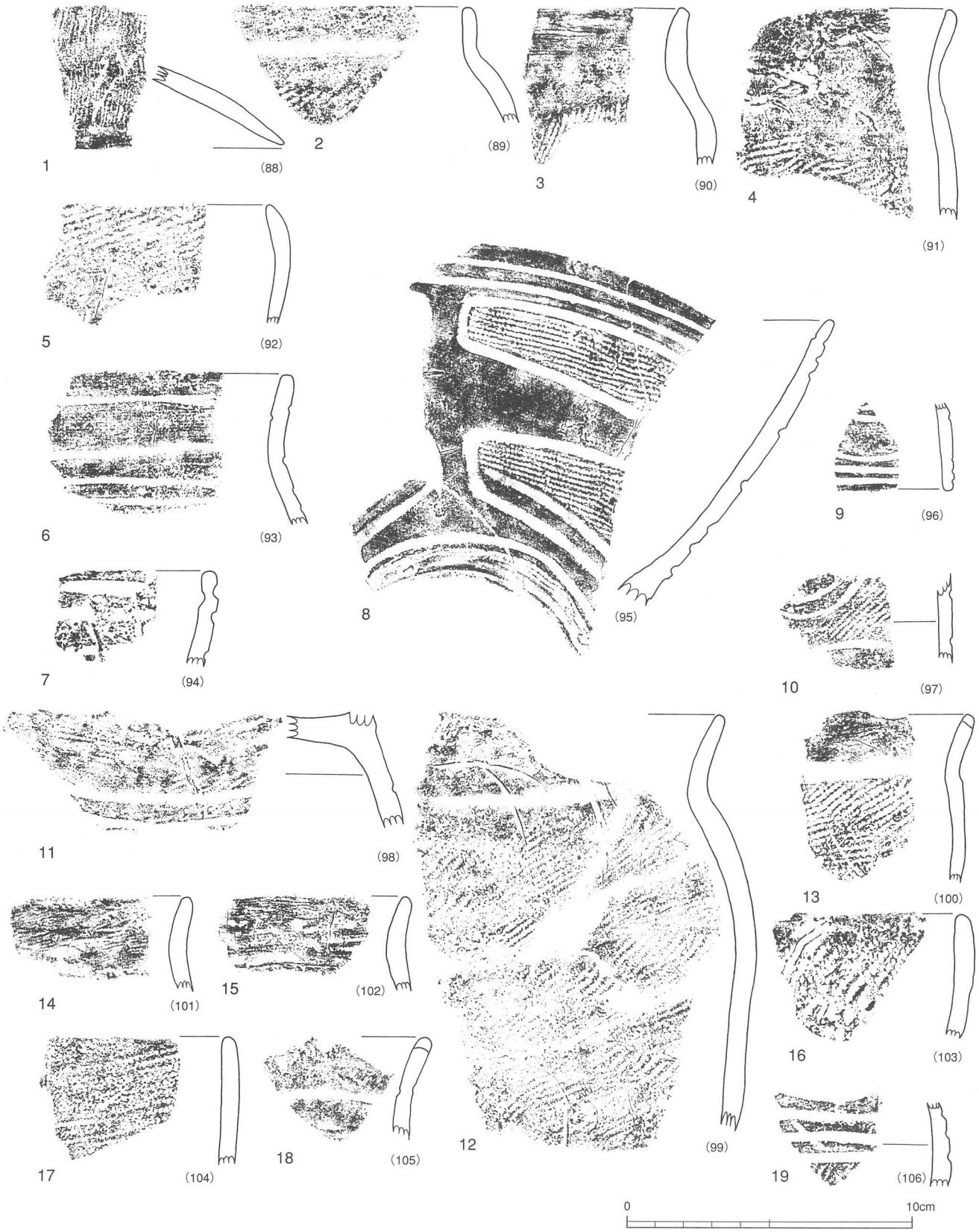
1～4　P区11層　5～13 Q西区第1号竪穴状遺構
14 Q西区10層　15 11～12層　16・17 11層



第17図　山王囲遺跡出土土器拓影

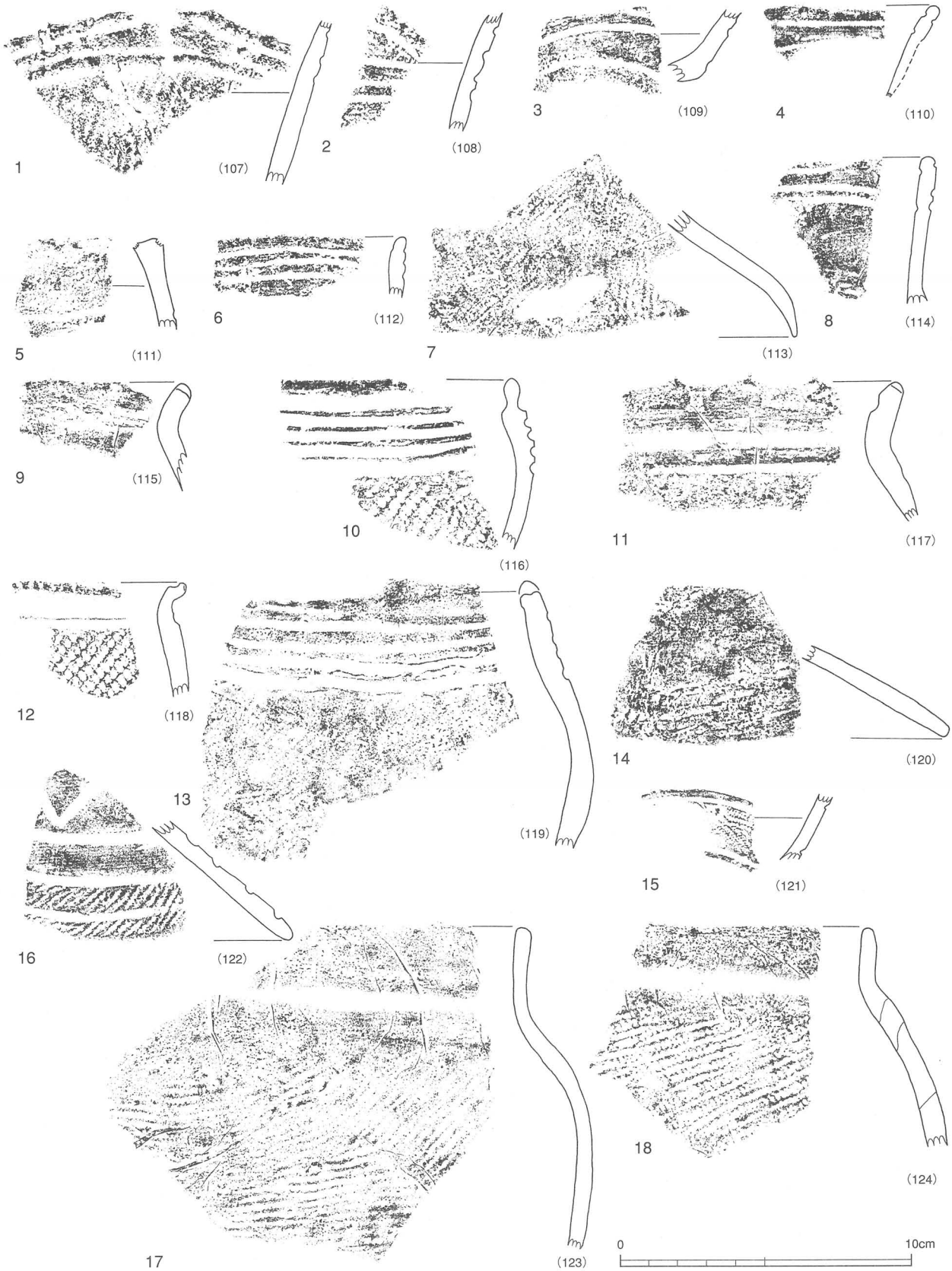
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～4・6～8 Q西区11層　5 11～13層
9～13 12層　14 13層



第18図　山王囲遺跡出土土器拓影　　1～19 Q西区13層

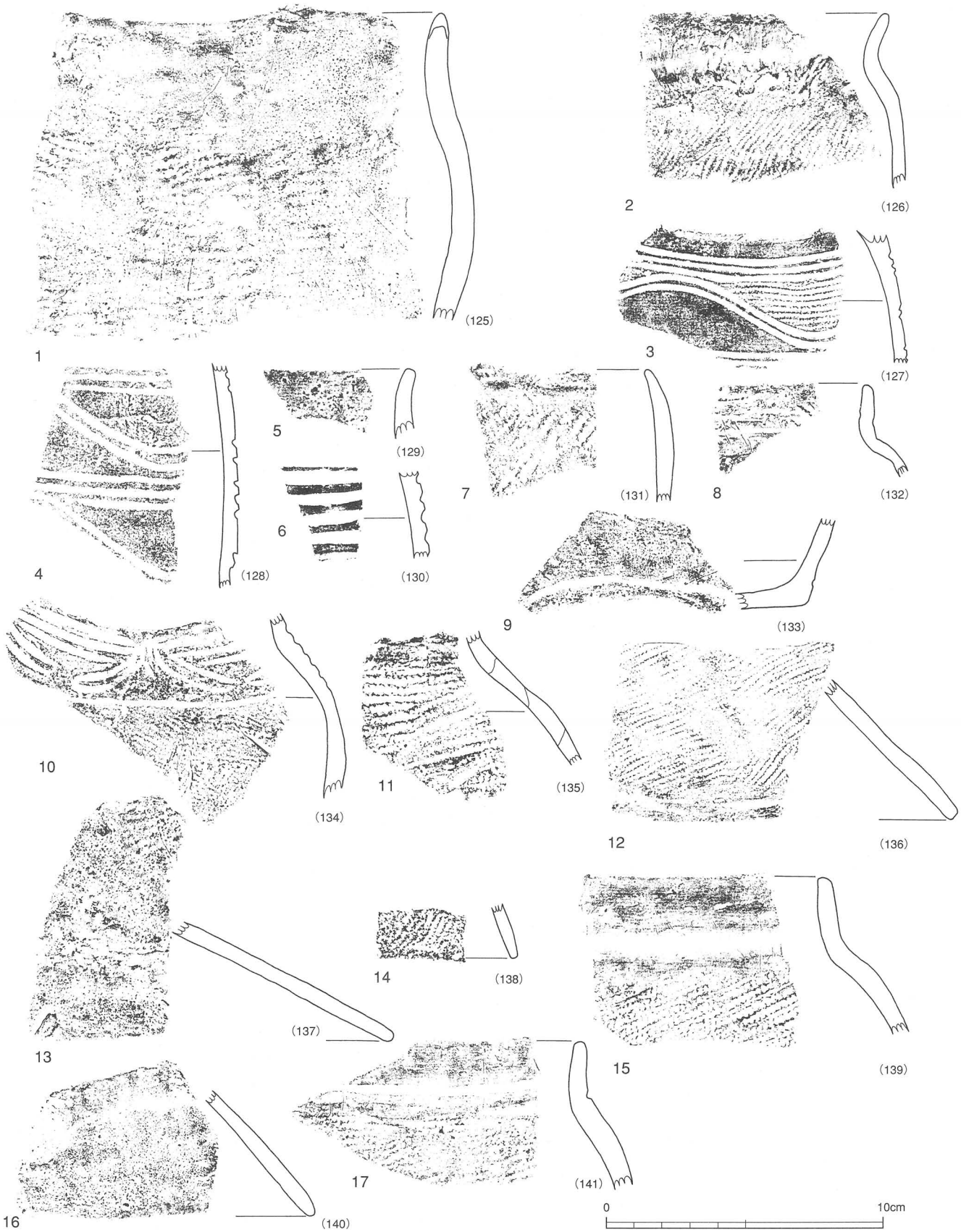
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



第19図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

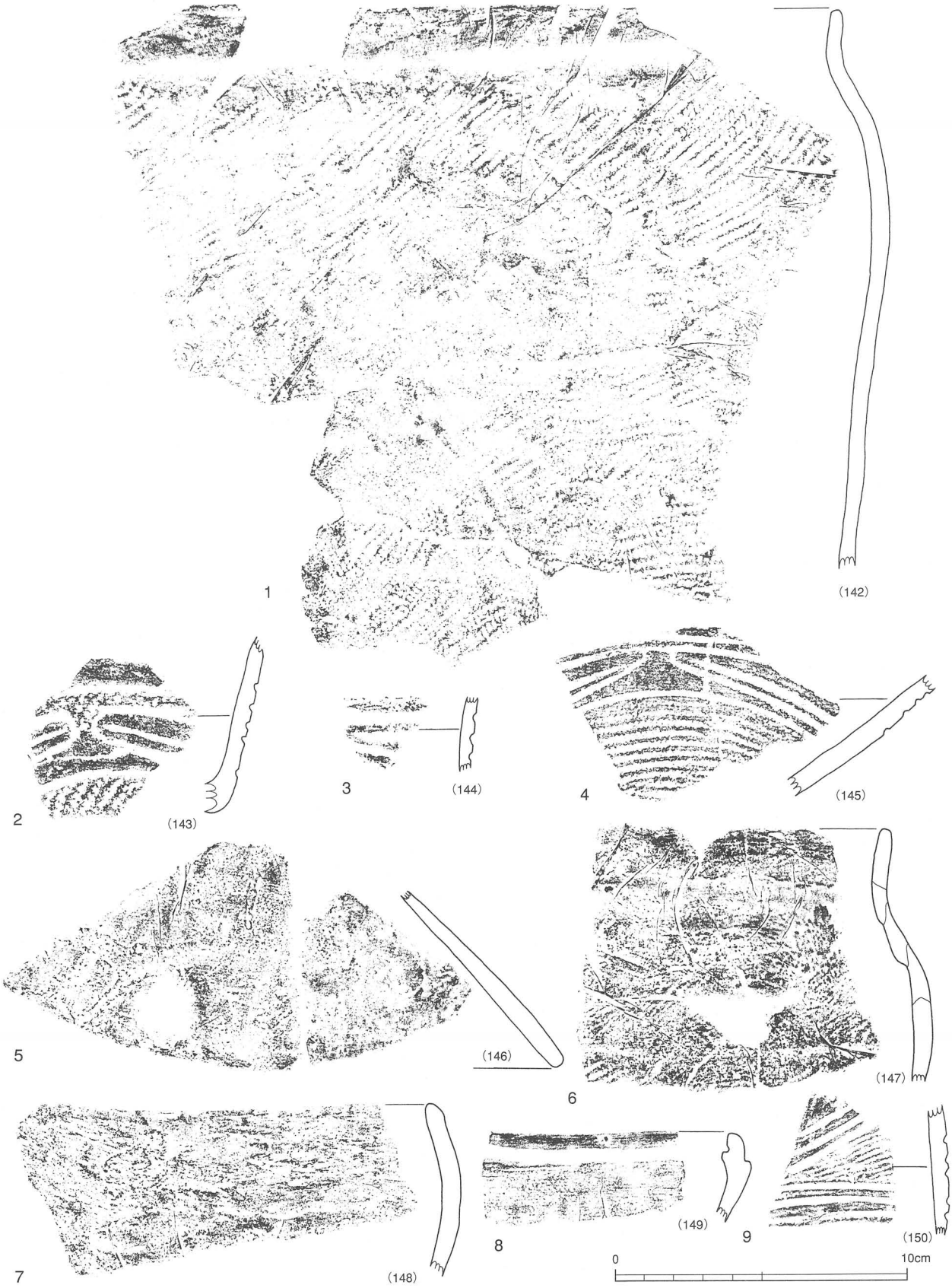
1～12 Q西区13層　13・14 14層　15 15層
16～18 16層



第20図　山王囲遺跡出土土器拓影

Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

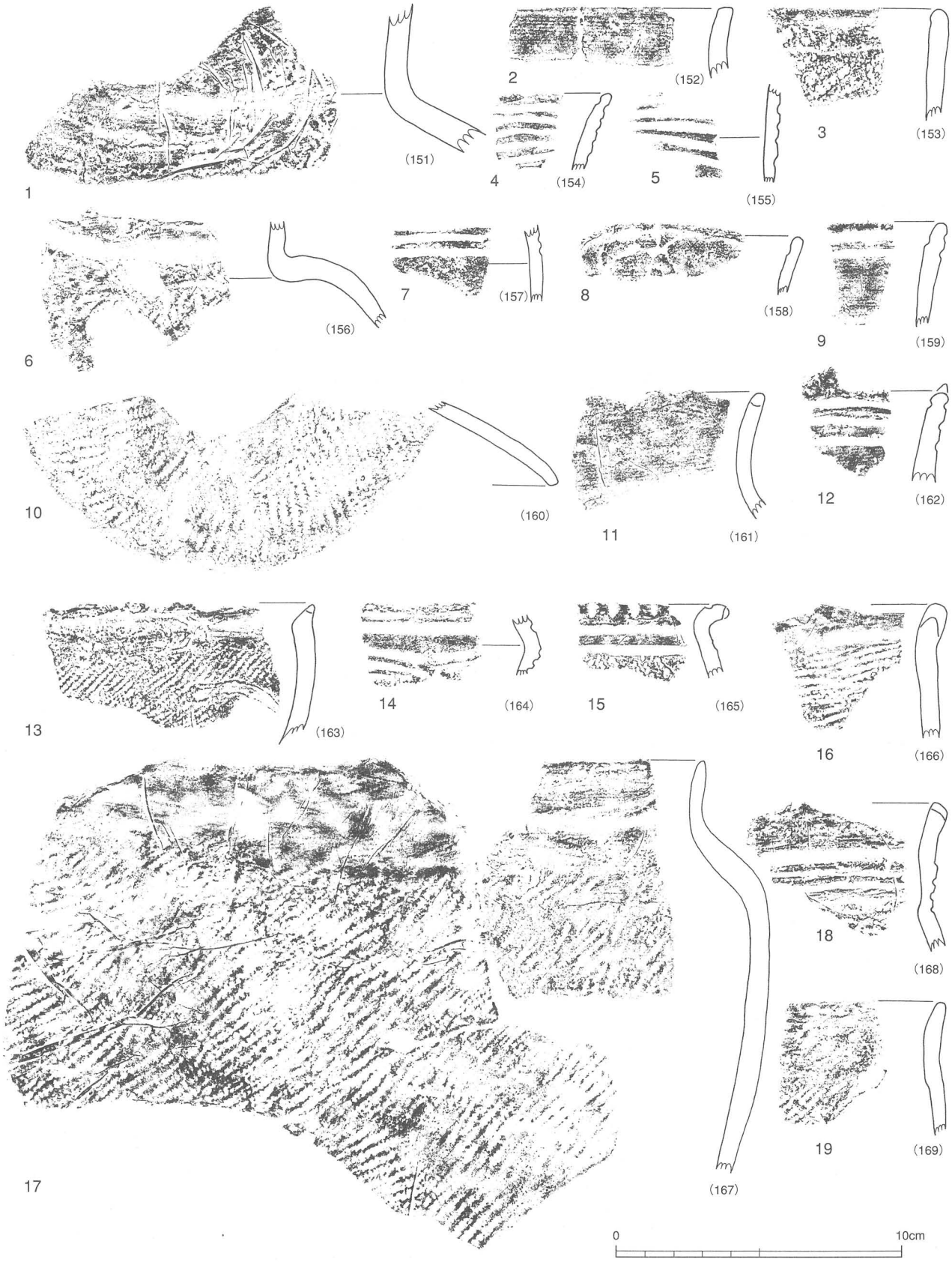
1～14 Q西区16層　15・17 20層　16 17層



第21図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

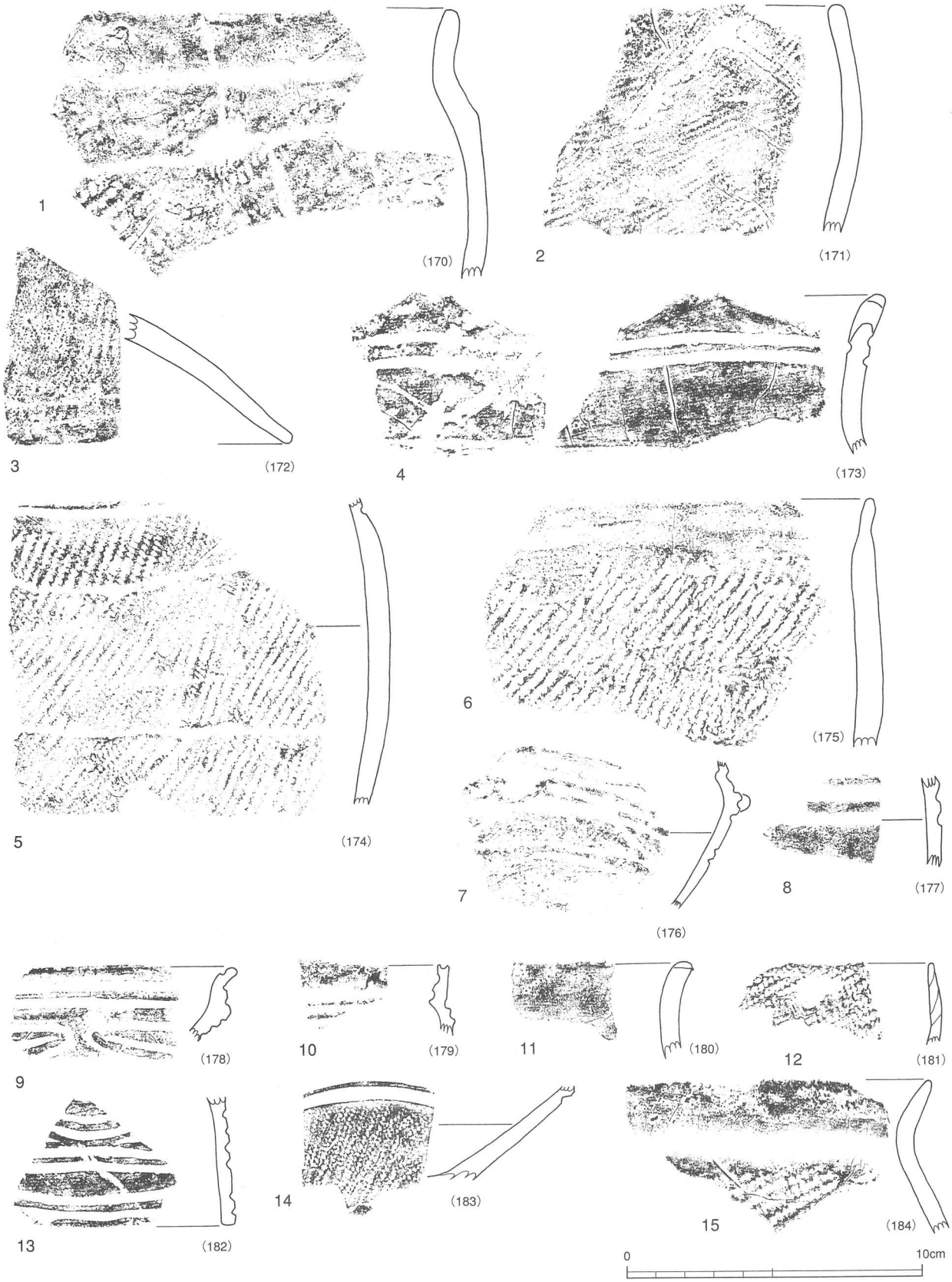
1　Q西区16層　2～5　20層　6～9　22層



第22図　山王囲遺跡出土土器拓影

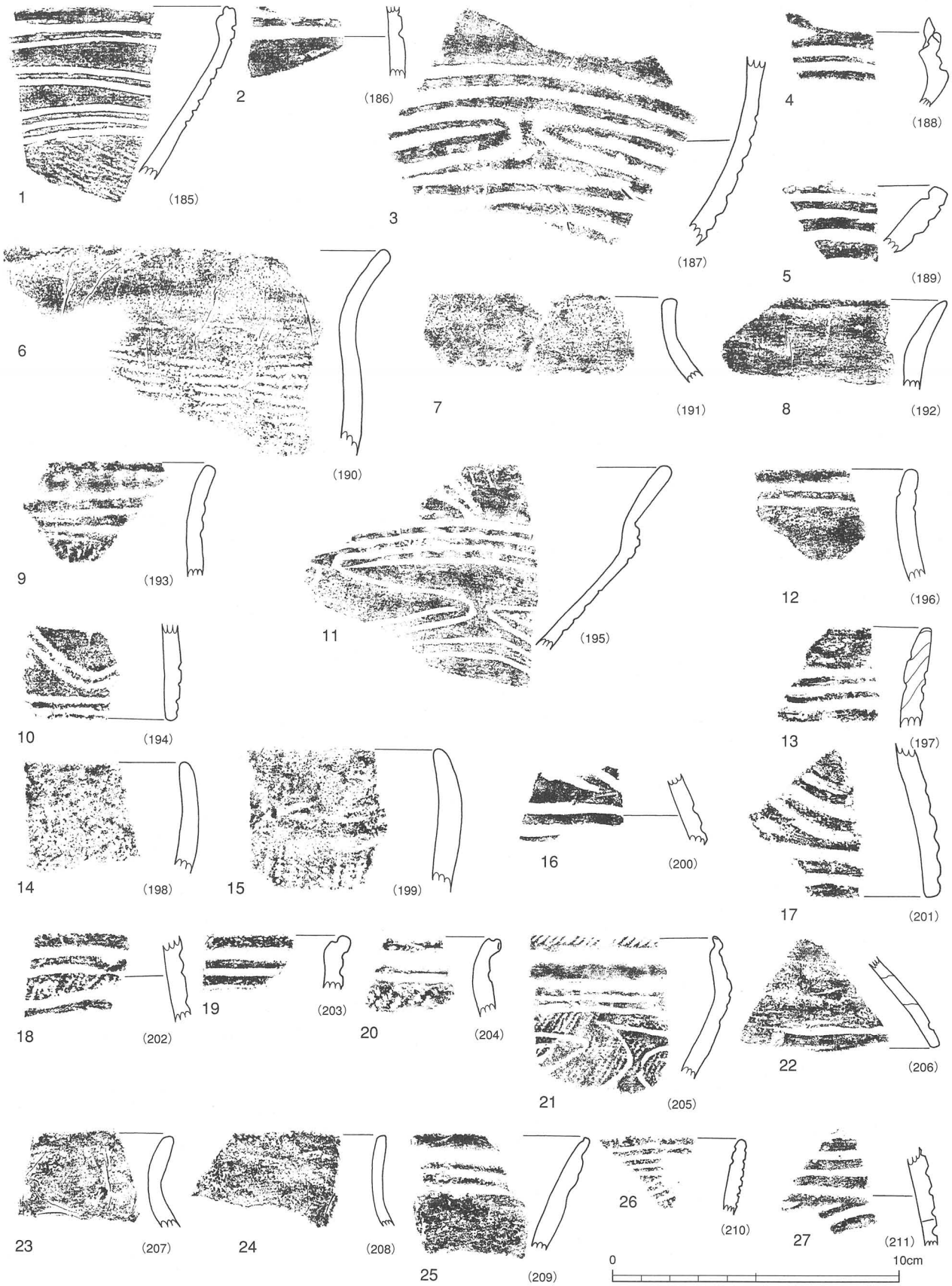
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～15 Q西区22層　16～18 24層　19 25層



第23図　山王囲遺跡出土土器拓影
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

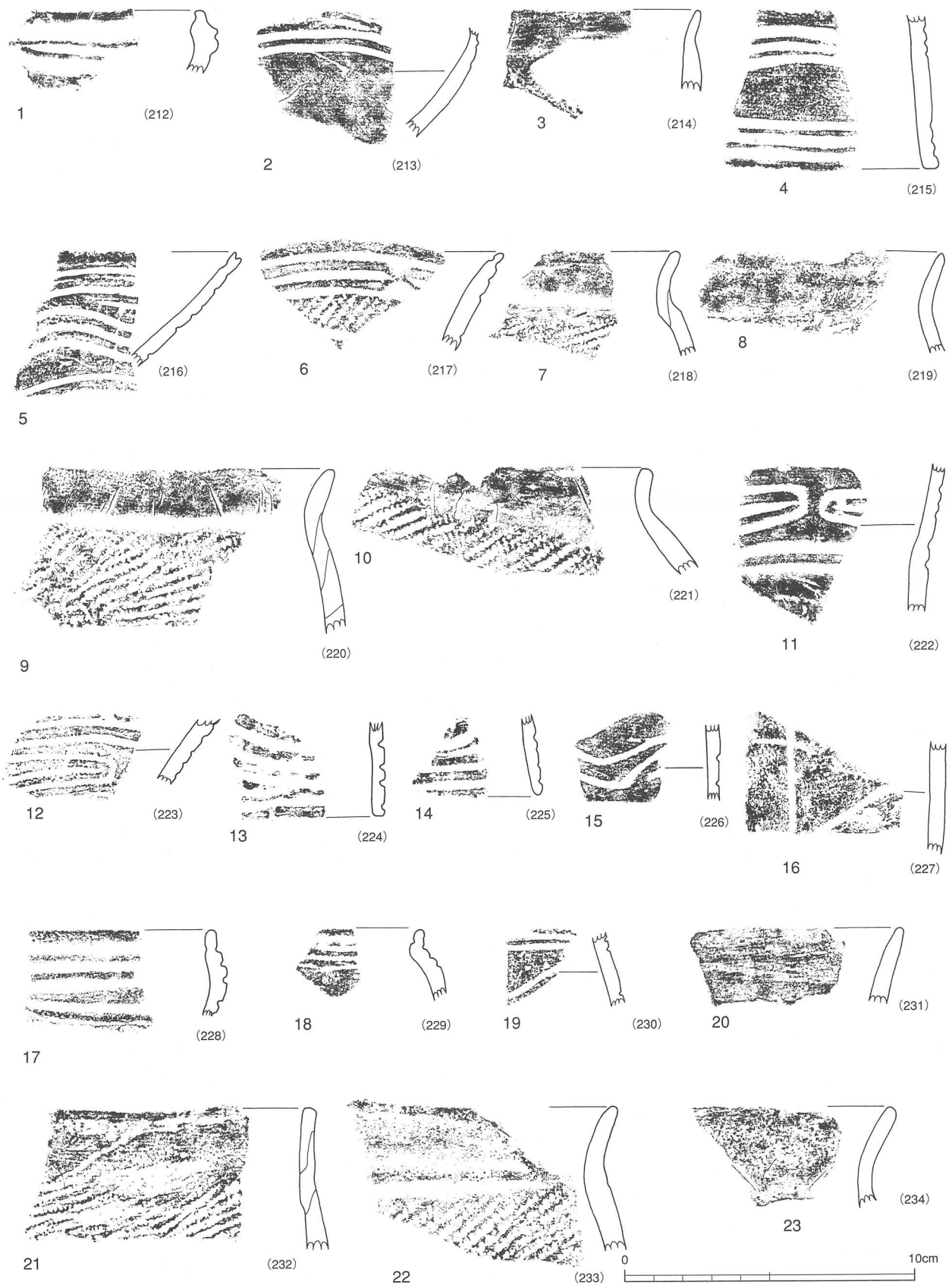
1・3 Q西区25層　2 24層　4～6 Q東区第10号土器埋設土壙　7 Q北区9層　8 Q北区包含層　9・10 R区ピット396　11～13 ピット397　14 ピット399　15 ピット402



第24図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

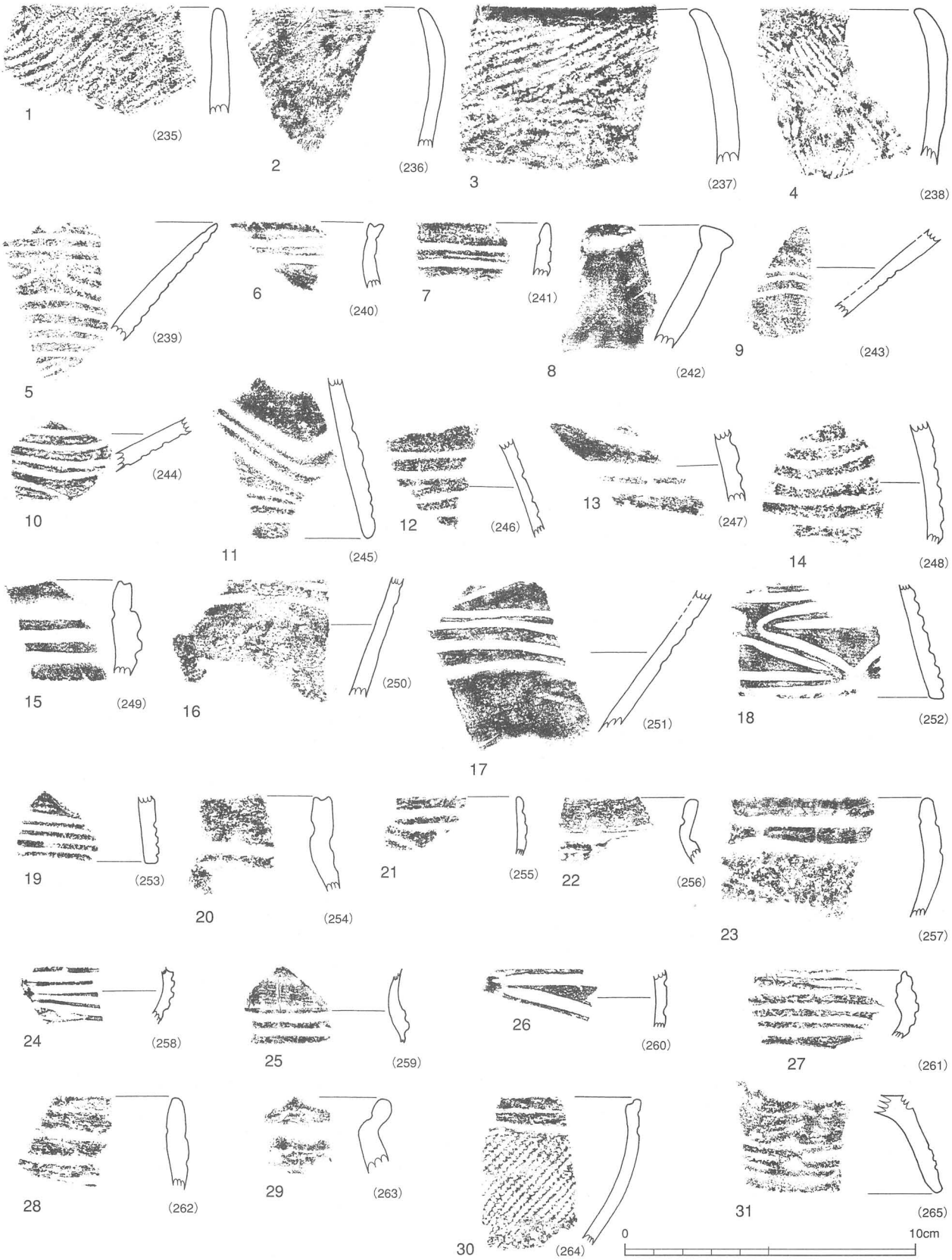
1～3　R区ピット402　4 ピット405　5 ピット406
6～22　R区1b層　23～27 2層上面



第25図 山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1・2 R西区2層上面 3～6 2層 7～23 2b層



第26図　山王囲遺跡出土土器拓影　　1～31　R区2b層

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

第22図８（ＰＬ.21－２－９）は、口頸部が軽く外彎する小型壺である。丁寧に磨かれ、朱が塗布されている。同図９（ＰＬ.21－２－２）は、口頸部が直上する壷で、器面は丁寧に磨かれ、口縁部に２条の平行線文がめぐる。胎土には金雲母が観察される。こうした土器群の大部分は、山王Ⅲ層式に属するとみられる。

24層、25層出土土器（第22図16～19、23図１～３、ＰＬ.８～11、21、22）

24層、25層では、弥生Ⅰ期の土器が主体的に出土している。発掘区の西寄りの地区から完形に近い土器が一括して出土した。

第８図版１（ＰＬ.10－１）は平坦口縁の甕で、口径26cm、体部最大径30cmと比較的大型である。体部にはＬＲ斜行縄文が施され、口頸部が軽く磨かれている。口頸部内面には磨きが加わり、体部はナデで調整されている。外面に約1.5cm幅で接合痕が観察される。第22図17は平坦口縁の甕で、口径は21cm程度と推定される。器面の調整方法や手順、土器の成形は第８図版１と非常によく似ている。

第７図版５（ＰＬ.９－２）は、口径20cm、器高20cmと比較的小型の砲弾形深鉢である。外面にはＬＲ斜行縄文が施され、内面はナデで調整されている。底部には木葉痕があり、内面全体に炭化物が付着している。第７図版６（ＰＬ.９－３）、８図版２（ＰＬ.10－２）は、口頸部が屈曲する小波状口縁の深鉢である。第７図版６は口径14cm、器高19cmと比較的小型で、８図版２は口径23cm、器高30cmの大型深鉢である。いずれもＬＲ縄文が体部に施されている。

第９図版１（ＰＬ.11－２）は、変形工字文Ａ２型の施される高杯で、弥生Ⅰ期の土器である。箆描文を施し、反転部を彫り込み、粘土粒が貼付される。さらに器面は丁寧に磨かれている。口縁には円形の小粘土盤を貼り付けた山形突起と、頂部に１個刻みをもつ山形突起が交互に３単位配されている。口唇部には沈線１条が加えられる。内外面ともに朱が塗布されている。杯部のひろがりが強いのが特徴的である。

第７図版４（ＰＬ.11－１）は口径36cmの大型鉢である。口縁には対向する２個１対の山形突起が６ヶ所配され、口唇部に沈線が施されている。体部上半には５条の平行線が施され、３条の沈線間を５カ所で彫り込み、長径約５mmの粘土粒を彫り込みの両端に貼り付けて匹字文を構成する。器面は丁寧に磨かれ、朱が彩色される。この土器は、突起の形状や体部文様、粘土粒などの貼付方法から、弥生Ⅰ期に属する鉢と考えられる。

第７図版３（ＰＬ.８－５）は、体部最大径が10cm、高さ12cm程の小型壺である。頸部と体部下半に１条の沈線がめぐり、外面は軽く磨かれている。器面には朱が塗布される。このような形態の土器は、秋田県地蔵田Ｂ遺跡、諏訪台Ｃ遺跡において出土しており、弥生Ⅰ期の土器と推定される。

Ｑ北区（第23図７、９図版２、ＰＬ.11、22）

この地区は、1965年度の調査区北側を確認するために発掘を行い、９層まで掘り下げた。９層から、２点の土器が出土した。第９図版２（ＰＬ.11－３）は、口縁部端面に押圧による刻み目の加わる深鉢である。頸部に２条の沈線がめぐり、体部にはＲＬ斜行縄文が施される。内外面に炭化物の付着がみられる。晩期Ⅳ期の深鉢である。また、第23図７（ＰＬ.22－２－８）は、晩期Ⅳ期の鉢である。体部には磨消縄文手法による平行線文化した雲形文が施され、縄文原体は細いＬＲ縄文が用いられている。この雲形文は、縄文晩期中頃の通常の雲形文に比べると平行線化し、反転部分が鋭く屈折する意匠構成となっており、Ⅳ期でもより新しい様相をおびる。

Q東区

第10号土器埋設土壙出土土器（第23図４～６、ＰＬ.22－１－５、22－２－１，２）

第10号土器埋設土壙からは３点の土器が出土した。深鉢と壺がみられる。第23図４は、壺の口頸部で、口縁部には頂部に押圧のある山形突起が飾られる。この突起形状と、筒状の頸部に太い平行線２条がめぐっている点から、弥生Ⅱ期に相当する壺と考えられる。類似した土器は岩手県上村貝塚から出土している。同図５は、口頸部に屈曲をもつ深鉢である。体部上半に平行沈線が２条施されている。また、同図６は、口縁部に屈曲をもたない深鉢である。これらの深鉢も弥生Ⅱ期に一般的にみられる土器である。（京野・須藤）

R区出土土器

R区からは、縄文晩期Ⅳ期から弥生Ⅱ期にかけての土器が出土しており、88点を資料化した。

ピット396（第23図９，10、ＰＬ.22－２－３，７）

ピット396からは、高杯が２点出土した。第23図９は、弥生Ⅱａ期の高杯で、体部には変形工字文Ｃ１型が展開する。器面は磨きによって調整され、金雲母がみられる。同図10は、弥生Ⅰ期から弥生Ⅱ期の山形突起をもつ高杯で、器面は磨きによって調整されている。口縁端面に沈線が施される。

ピット397（第23図11～13、ＰＬ.22－２－４，５，９）

ピット397からは、甕、深鉢、高杯が出土している。第23図11は、弥生Ⅱ期の甕で、口縁部は押圧によって小波状を呈する。器面は磨きによって調整されている。同図12は晩期Ⅵ期から弥生Ⅱａ期の砲弾形深鉢で、ＬＲ斜行縄文が施される。同図13は弥生Ⅱａ期の高杯脚部で、３条の並行線による波状文がめぐり、磨きによって調整されている。

ピット399（第23図14）

ピット399からは弥生Ⅰ期の高杯の体部が出土している。太い沈線による文様帯の区画線がみられ、体部下半にＬＲ斜行縄文が施されている。丁寧な磨きによって調整されている。

ピット402（第23図15、第26図１～３）

ピット402からは、弥生Ⅱ期の甕、高杯、鉢が出土している。第23図15は、弥生Ⅱ期の平坦口縁の甕で、体部にＬＲ斜行縄文が施されている。口頸部は横ナデによって調整されている。第24図１は弥生Ⅱｂ期の平坦口縁の高杯で、体部下半にＬＲ斜行縄文が施された後、変形工字文Ｃ２型が描かれ、磨きによって仕上げられている。胎土に金雲母が認められる。第24図３は、弥生Ⅱａ期の鉢、あるいは高坏で、体部に変形工字文Ｃ１型が展開する。器面には朱が塗布されている。器面に金雲母はみられない。

ピット405（第24図４）

ピット405からは、高杯が１点出土している。外面は磨き、内面はナデによって調整されている。口頸部、肩

部の形態、篦描文の様相から、縄文晩期Ⅵ期から弥生Ⅰ期の高杯と推定される。

ピット406（第24図5）

ピット406からは、弥生Ⅱ期の高杯が出土している。口縁部に突起が施されており、変形工字文C１型が展開すると推定される。器面はナデと磨きによって調整されている。

R区包含層出土土器（第24図6～27、第25図1～23、第26図1～31）

包含層1b層、2b層から、晩期Ⅳ期から弥生Ⅱb期の土器が出土した。出土土器には、層位的な変化はみられず、主体となるのは弥生Ⅱ期の土器である。

弥生Ⅱ期の土器は、甕、深鉢、鉢、高杯がみられる。甕は平坦口縁で、口縁部が緩やかに外彎する（第24図6，7，8，23，24）。口頸部は比較的長く無文である。体部には横走するLR縄文が施されている。深鉢は口縁部が外彎し、頸部に平行沈線がめぐる（第24図9，12）。鉢には、変形工字文C１型が施される（第25図11，12）。高杯は口頸部がくの字状に内屈し、体部に変形工字文C２型が施される（第24図11）。器面は丁寧に磨かれ、朱が塗布される。内面には炭化物が付着している。高杯脚部には、波状文（第24図10、第25図4，13～15）や、垂下文（第25図16）が施されている。胎土に金雲母が混和される。第24図10は、細く浅い2条の並行線によって波状文が描かれる。第25図4は、太い3条の沈線により波状文が描かれており、器面は丁寧に磨かれている。

弥生Ⅱa期の土器は、甕、鉢、高杯がみられる。第25図6は、屈曲なく広がる鉢で、口縁部にめぐる低い隆帯を上下から彫り込み、工字文としている。体部文様帯に磨消縄文手法による変形工字文（C１型）が展開するとみられる。このような装飾の鉢は、青木畑遺跡から出土している。

R区2層では高杯が目につく。この器種は、体部に波状文が展開するものがみられる（第25図5）。この土器は、山王囲遺跡Ⅲ層下部から多数出土している。脚部には、変形工字文C型（第26図18）や、3～5条の平行沈線（同図19）、透し孔を有する波状文（第24図17，27、第25図13，14、第26図13，14）が施されている。特に、平行沈線や波状文は、比較的太く鋭い沈線によって文様が描かれている。

弥生Ⅰ期の土器としては鉢がみられる。鉢は山形の波状口縁をもち、口縁端面に沈線が加えられるもの（第26図15、20）と、平坦口縁で口縁部が内彎するもの（第25図17、第26図21）がみられ、体部には変形工字文A２型が展開する。

晩期Ⅵ期の土器には鉢がみられる。平坦口縁で、体部上半が内彎し、匹字文（第25図1）や変形工字文A１型（第26図24）が施される。

晩期Ⅴ期の土器としては深鉢、鉢、台付浅鉢がみられる。深鉢（第26図29）は山形突起をもつ大波状口縁で、外反する口頸部をもつ。鉢（第26図30）は平坦口縁で、口縁部が内彎し、体部に平行線がめぐる。第26図31は鉢の台部で、匹字文が施されている。

晩期Ⅳ期の深鉢、鉢がみられる。深鉢（第24図20）は平坦口縁に刻みが施されたもので、体部に平行線がめぐる。鉢（第24図21）は口縁部が内彎し、平坦口縁に刻みが加えられる。体部には、磨消縄文手法のみられる雲形文が展開する。

（坂田、京野、須藤）

(3) 土 製 品

土製品としては土偶頭部１点、蓋形土製品１点が出土している。

a．土　　偶

Ｒ西区の南北トレンチ北端、ＢＺ68区２ｂ層から中空土偶の頭部が出土した（第９図版４、ＰＬ.25－２－１）。頭頂部は剥落がみられるが、飾髪土偶と考えられる。頂部に径５㎜の焼成前の穿孔がみられる。顔面はやや上向で、目、眉、耳、鼻、口は、粘土粒や粘土紐を貼付し、刺突や刻みを加えて表している。特に目と口は小さな環状の粘土帯で表されている。後頭部と胸部には篦描文が施されている。頸部と背部は丁寧に篦磨きを加えられている。類例は岩手県九年橋遺跡、中神遺跡（須藤編　1997）などにみられる。晩期Ｖ期の土偶と推定される。

b．蓋形土製品

大きな円錐形の蓋状の土製品がＲ西区ＢＺ68区２ｂ層から出土した（第９図版３、ＰＬ．４－１、25－２－２）。直径5.5㎝、高さ3.5㎝あり、底面がかるく凹面になる。十字に隆帯が貼付され、隆帯上とその区画内に細い沈線が放射状に施される。縁辺にも幅１㎝程の隆帯が貼り付けられ、４～５条の平行線が加えられる。中央部には径２㎜の焼成前穿孔が２個認められ、孔は垂直に貫通している。朱が塗布されている。岩手県軽米町大日向遺跡に類例がみられる（田鎖他　1995）。弥生時代Ⅰ、Ⅱ期に属する小型壷の蓋の可能性が考えられるが用途は明確ではない。

（坂田）

(4) 石器・石製品

Ｐ、Ｑ東、Ｑ西、Ｒ区の遺構および遺物包含層から出土した石器のうち定型的な石器、あるいは調整加工が明瞭な石器を抽出して属性を観察、検討した（付表３）。対象とした石器は92点である。石器の器種認定基準は、基本的に第１、２次調査の報告書に従った。

石　　鏃（第10図版１～17、ＰＬ.26－１～17）

石鏃は20点出土し、完形のものは７点である。長さは15.4㎜～37.3㎜の範囲で、20㎜前後のものが多い。重さは0.37ｇ～4.95ｇで１ｇ前後に多く集中する。凸基有茎式が最も多く11点、凹基無茎式１点、平基無茎式２点、不明のもの３点である。両面加工のものが９点、半両面加工石鏃が４点、周縁加工のものが３点みられ、自然面や素材剥片の剥離面が残存しているものは比較的少ない。石材は鉄石英が13点をしめ、最も多く、他に頁岩、黒曜石、珪質凝灰岩がみられる。破損は先端および茎に見られ、第10図版１の石鏃先端は衝撃剥離の可能性が考えられる。第10図版９、11は茎部に黒色の付着物が認められる。

石　　錐（第10図版18～22，24，25、ＰＬ.26－18～24）

石錐は７点出土している。完形品は１点、先端部が破損しているものが３点、基部が破損しているものが３点みられる。長さは27.4㎜～36.4㎜あり、重さは0.76ｇ～2.28ｇある。棒状の類型が多く、基部の断面形が扁平あるいは楕円形を呈する類型がある。石材は黒曜石、鉄石英、頁岩、珪質頁岩、碧玉などである。両面加工で側縁から丁寧に調整され、中央に自然面や素材剥片の腹、背面を残すものが多い。第10図版24（ＰＬ.26－22）の石錐は自然面のある剥片を横位に用い、剥片の左側に調整を加え錐部を作り出している。

石　　匙（第10図版23、ＰＬ.26－25）

頁岩製の石匙がＲ区ＢＹ68区ピット396の埋土から出土している。素材剥片の打面側につまみ部が整形され、背面側には整った周縁加工が施される。使用痕観察から、刃部に平行の線状痕を伴う使用痕光沢が確認された。

楔形石器（第11図版１、ＰＬ.27－１）

鉄石英製である。片面に大きな自然面を残し、上下からの剥離痕が認められる。

不定形石器（第11図版２～６、ＰＬ.２～６）

不定形石器は６点出土している。第11図版２は鉄石英製で、自然面が大きく残っている。第11図版３はＰ区から出土した。頁岩製で素材基部付近に二次加工が施される。第11図版５は、流紋岩製で素材末端の一部に連続的に二次加工が施される。第11図版４は鉄石英製でＰ区河川跡から出土している。一部に自然面を残し、素材背面側の周辺部に二次加工が施され、ノッチ状を呈する部分もある。第11図版６は頁岩製で分厚い剥片を素材とし、素材の背腹両面に比較的大きな二次加工が施される。

石　庖　丁（第11図版８、ＰＬ.26－27）

Ｐ区３ａ層から石庖丁が１点出土した。背部、刃部ともに外彎する半月形外彎刃型で、淡灰色の粘板岩製である。残存長56.4㎜、幅39.8㎜、厚さ6.7㎜で重量20.33ｇである。全体の２/３程度が欠損しており、一端がわずかに残ったもので、破損に伴う剥離面が複雑に観察される。穿孔部分は失われている。両面、刃部、背部いずれも全体に丁寧に磨かれている。敲打痕はみられず、粘板岩の剥離性から、敲打の段階が省略された可能性が考えられる。また使用痕観察により穀類光沢とみられる鮮明な使用痕光沢が認められた。

この石庖丁は弥生中期中葉から後半に仙台平野、相馬・磐城地方で多数みられる型式である。本遺跡では本資料を加えてこれまでに２点の石庖丁が出土している。

磨製石斧（第11図版７，12図版１～３、ＰＬ.27－７～10）

磨製石斧は４点出土している。完形品は１点（第12図版２）あり、他の３点と異なって断面形が円形に近く、長さは99.5㎜と小形の蛤刃石斧である。Ｐ区第３号配石遺構から出土した。敲打痕を身に多く残し、刃部は研磨によって敲打痕が除かれている。刃部には研磨面より新しい剥離と研磨痕があり、使用によって破損した部分を再成形したとみられる。第12図版１は平面形が撥形、断面形は楕円形で、本来は蛤刃石斧として製作されたと推定される。刃部と基部に新しい剥離と研磨、敲打痕がみられる。敲打具に転用された結果と考えられる。第11図版７は断面が楕円形であり基部は欠損している。刃部には使用による破損と考えられる新しい剥離痕が認められる。刃部は敲打と研磨によって整形されている。第12図版３は平面形が短冊形、断面形が楕円形であり、蛤刃石斧である。基部は欠損している。刃部と体部には縦方向の研磨痕がみられる。

磨　　石（第12図版４，６、ＰＬ.29－５，10）

磨石は３点出土している。６は完形品で重量1324.7ｇとかなり大型の資料である。磨面は２面に見られる。

凹　　石（第12図版５、第13図版１～６、ＰＬ.29）

凹石は19点出土している。完形は13点であり、長径801～1195㎜、短径622～991㎜である。石材は安山岩、デイサイト、花崗岩などである。14点が両面に凹みを有するが、第12図版５、第13図版３のように比較的深く２個１対の円形の凹みを有するものが５点含まれている。第13図版１は側面にも凹みを有している。片面のみに凹みを有するものは５点あり、そのうち１点が２個１対の凹みである。凹みの深さは２個１対のものは共通して深いが、それ以外の石器は斉一性は認められない。凹みの位置や深さに斉一性がみられないのは使用法の相違によると推定される。

石　　皿（第13図版７、ＰＬ.29－８）

破損品であるが、比較的大型で扁平な石皿が１点出土している。石材は安山岩である。中央に大きな凹みはみられず、平坦である。表面には敲打の痕跡がわずかに認められる。両面ともに全面が摩耗している。明瞭な擦痕は少ない。周縁にもある程度の摩耗が観察される。

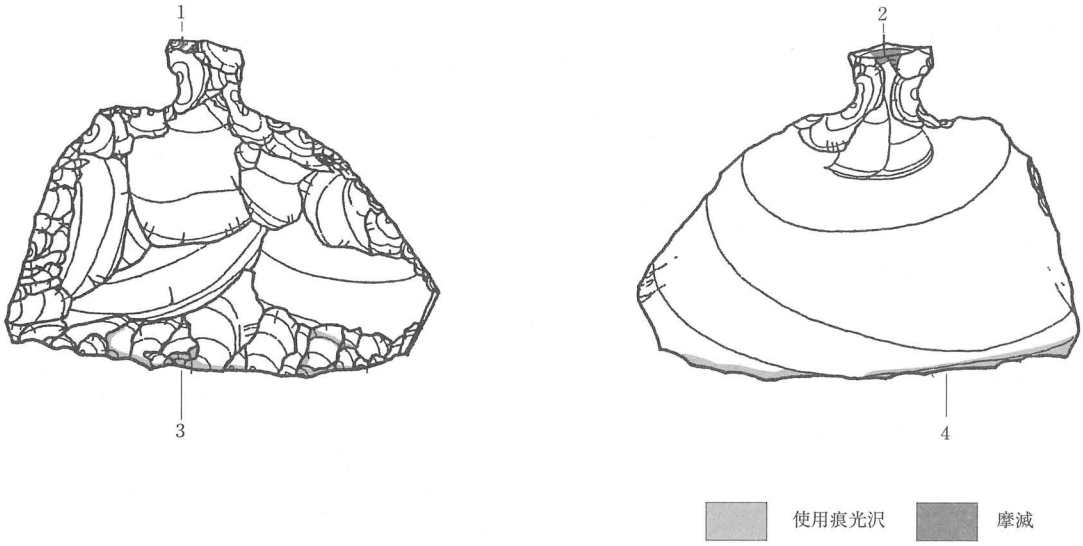
円盤状石器（第14図版１～４、ＰＬ.28－８～11）

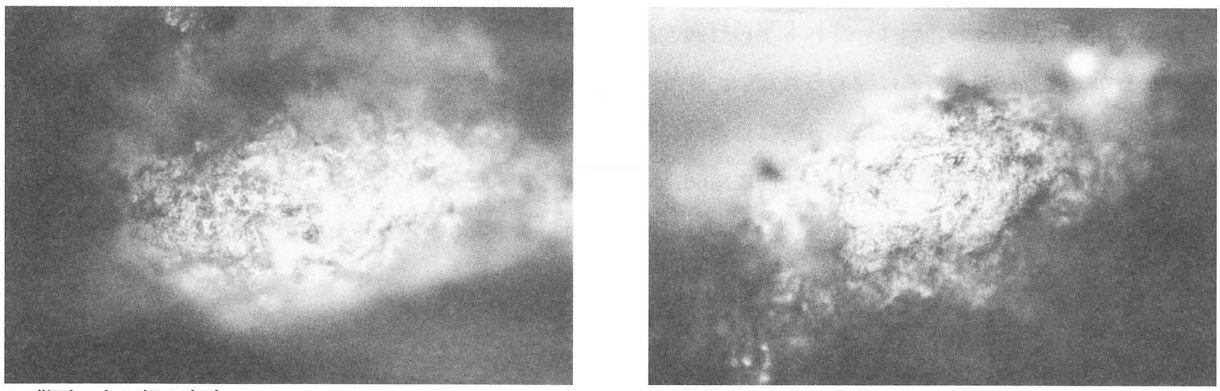
円盤状石器はＲ区のピット内と包含層からそれぞれ２点ずつ計４点出土している。石材は安山岩およびデイサイト質凝灰岩である。長径は６～７㎝、厚さは２～３㎝の間に分布し、ほぼ共通した大きさである。いずれも周縁を整形し、平面形はほぼ円形を呈する。断面形は最大厚が一方に片寄り台形を呈するものと厚さがほぼ均等で長方形を呈するものとが認められる。整形は、周縁を打ち欠く整形と周縁からの整形がみられる。今回出土した資料では、切り合い関係から常に周縁からの整形が新しいことがわかる。また、研磨と整形の先後関係について、研磨が新しいものとその逆のものとが出土しており、研磨と整形が繰り返されていた可能性がある。

石　　核（第14図版５～７、第15図版１～４、16図版１、ＰＬ.27－11，28－１～７）

石核は８点出土している。Ｐ区10層から７点、Ｑ西区から１点出土している。第16図版１は５号配石の下から出土している。石材は、鉄石英１点、頁岩３点、デイサイト質凝灰岩４点である。第15図版１、第16図版１の２点は打面と作業面を交互に剥離している。細かい剥離が剥離面の打点付近に多く見られる。これらは、剥片剥離の際の打面調整もしくは頭部調整であると考えられる。これらは、大型で自然面が多く残されている。第14図版５、６、15図版２～４の５点は、打面転位が行われているものである。このうち、石器№56、57、58は１～３回の打面転位が行われており、打面は約90度転位することが多い。また、これらは、大型で自然面が多く残されており、１個の原石から生産される剥片数は少ない。また、石器№52、53は、頻繁に打面転位が行われ、小型で自然面があまり残されていないものである。以上の７点は、いずれも頭部調整・打面調整があまり認められない。№54は、剥離が１回行われただけのものであり、大型で自然面が多く残されている。打面調整が認められる。

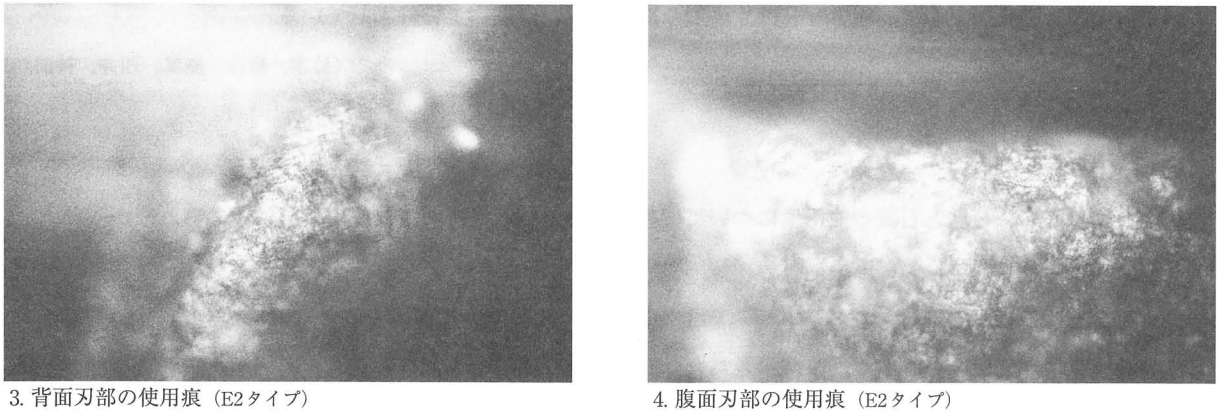
以上８点の石核の特徴から、①打面と作業面を交互に剥離するもの、②90度の打面転位を行うもの、の２種類に大別できる。①には調整技術が若干みられるものの、②には調整技術がほとんど認められない。また、自然面を残すものが多く、１個の石核から生産される剥片数は少ないと考えられる。





1. 背面つまみ部の摩滅

2. 腹面つまみ部の摩滅



3. 背面刃部の使用痕（E2タイプ）

4. 腹面刃部の使用痕（E2タイプ）

0　200μm

第27図　山王囲遺跡出土石匙の使用痕

Use-wear of knobbed scraper excavated from the Sanno-gakoi site

剥　　片（第16図版２～５、第17図版１～４）

剥片は多数出土している。Ｐ区10層から16点を測量記録している。これらのうちＰ区南東部の２号焼土およびその周辺から一括して出土した７点を資料化した（第16図版２～５、17図版１～４）。剥片の石材は、頁岩８点、鉄石英２点、珪化凝灰岩１点、凝灰岩１点、ガラス質デイサイト１点である。受熱痕のある剥片は16点中４点あり、そのうち３点はそれぞれ第１号焼土遺構、第２号焼土遺構から出土したものである。

完形剥片13点の長さ、幅、厚さ、重量の平均はそれぞれ、39.4㎜、45.7㎜、9.9㎜、17.1ｇである。長幅指数（長さ／幅×100）は平均90.6であり、13点の完形剥片は長幅指数50～200の間におさまる。これらのことから、出土した剥片は、長さと幅に大きな差のない不定形な剥片であると考えられる。

自然面のある剥片は16点中８点あり、自然面を打面としたものは３点ある。自然面を残す剥片が多いことがわかる。このことは、石核が大型で自然面を多く残すものが多いことと対応していると考えられる。

接合資料（第17図版１～４、ＰＬ.30－４～７）

Ｐ区東南隅のＢＨ49の２号焼土の周辺から出土した剥片３点が接合している（第17図版）。頁岩製である。剥離は№66（第17図版４）→№64（第17図版２）→№65（第17図版３）の順で行われている。№66の剥離後、90度の打面転位が行われ、№64、65が剥離されたことが分かる。このような90度の打面転位は出土した石核からも観察されている。打面を残す№66、64はいずれも平坦打面であり、打面調整はみられない。また、頭部調整は№66に若干みられるが、その他のものには認められない。２号焼土遺構から出土した№66は受熱しており、他の２点は受熱していない。また、№64、66には部分的に自然面が残っている。

この接合資料は、２号焼土遺構から北西に№66、№64、№65の順に分布しており、剥離順序と一致している。各剥片の距離は、№66から64が約10㎝、64から65の距離が約50㎝であり、それぞれ近接している。

石製小玉（第11図版９、ＰＬ.26－26）

大きさは長径10.4㎜で厚さが7.0㎜、重量は0.98ｇでヒスイ製である。全体の形状はやや偏平で不整形を呈する。平らな面を穿孔面としている。穿孔は片面のみに見られ、作業途上で終了している。

（鈴木、池谷、鹿又、西井、神田）

使用痕分析

出土石器のうち、石匙と石錐の使用痕について観察を行った。石錐に明瞭な使用痕跡は認められなかった。

石　　匙（第10図版23，27図）

つまみを有する横長の石匙である。つまみ部上端には背・腹面に摩滅が見られる（第27図写真１、２）。また、背面を構成する剥離面間の稜上には摩滅がみられ、直交の線状痕を伴う部分もある。刃部の縁辺と剥離面間の稜上には、平行の線状痕とＥ２タイプのポリッシュが広範囲に見られる（同図写真３）。腹面刃部の縁辺にはＥ２タイプのポリッシュに伴って、平行の線状痕がみとめられた（同図写真４）。部分的に直交や斜行の線状痕も認められる。使用痕観察の結果、乾燥皮のカッテイング、ソーイングが中心的な作業であったと推定される。

（池谷、鹿又）

第4章　考　　察

第1節　P区検出配石遺構・土壙の性格と時期

第3次調査では、第1次調査で精査したG区の西側、1次調査のJ区と第2次調査のI区との間に、南北12m、東西24mの発掘区（P区）を設け、自然堤防の北西部に広がる遺構群の検出に努めた。その結果、I区、J区と同様にP区の東半に自然堤防の高まりが確認された。そして、P区では、自然堤防の礫層の上に堆積する土層のうち、10層の上面で縄文時代晩期最終末から弥生時代前期の遺構が検出された。配石遺構3基と土器埋設土壙4基、焼土の広がり3ヶ所である。配石遺構は、拳大の礫が多数集中し、長径約70cmの広がりをもつ。その配石の構造は、礫の配列に規則性がみられず、きわめて確認しにくかった。3号配石遺構では不整形の土壙が検出された。また、5号配石遺構では、礫集中の東よりに高さ35cm、口径25cm程の深鉢と高さ18cm、口径14cm程の小型深鉢が入れ子になって、長径30cm、深さ20cm程度の小土壙に埋設されていた。4号配石遺構では、周囲の土壌がきわめて複雑な様相を呈しており、土壙の確認はできなかった。

土器埋設遺構11～13、15号の土壙には、いずれも晩期最終末から弥生時代前期にかけての深鉢が正立の状態で埋設されていた。15号埋設土壙では推定最大径29cm、高さ30cm程の大型壷の上半部が検出された。この壷は弥生I期に属するとみられる。これらの遺構は、P区の北壁中央部に集中している。これらの遺構は晩期終末から弥生前期にかけての土器棺墓であった可能性が高い。また、P区の東南部には、焼土の広がりが3ヶ所で検出された。1、3号焼土遺構は、10層の上面、2号焼土遺構は12層上面で確認され、焼土は、5cm前後の厚さをもっていた。柱穴、壁溝、壁などは検出されておらず、住居跡は確認できなかった。

このP区東半にひろがる配石遺構群、土器埋設、焼土遺構は、1次調査のG区で検出された礫の集中した配石遺構や土器埋設遺構と関連をもつと推定される。これらの遺構は、晩期終末から弥生時代前期後半に属し、G区とP区にかけての径20m程の範囲に広がる墓域を形成していた可能性が高いと考えられる。

第2節　V字溝の時期と性格

さらに、今回の調査では、P区において自然堤防の北西辺に沿ってのびる低湿地および旧河道が確認された。この旧河道は、P区の西端部を南南東から北北西にのび、幅は6m、深さは2mを超し、流路に砂、シルトが厚く堆積している。南から北への流れが推定される。砂層から遺物が出土していないため時期は確定できなかったが、弥生時代にも機能していた河道とみられる。

この河道に平行してI区7，8号溝に連なる浅い溝－9号溝－が南南東から北北西にのびる。9号溝は、幅が3mあり、深さは10～15cm程度である。北側で深く南よりが浅い。中央に灰白色シルトが堆積している。灰白色シルト層の幅は、P区北寄りで幅2m、南で狭くなり、幅1m程度である。北半は一段と幅広く、深さも一定していることから、このシルト層の下に水田跡が埋没している可能性が予想された。そのため、このシルト層の下に広がる暗灰色粘土層において、土壌中のイネのプラントオパールの遺存状況を検討した。しかし、いくつかの

採集地点からわずかなイネのプラントオパールが検出されたにすぎず、水田土壌は確認できなかった。

断面V字形を呈するK区7号溝がのびる方向を確認するために設けたS区において、その西端付近で、東のK区7号溝から西にのびる深いV字溝と北に分岐してI区7号溝に連なる浅い8号溝が確認された。この浅い8号溝は、その構造、それを埋めるシルト層の広がり、V字溝との分岐部の構造から、断面V字形の深い7号溝から取水し、北流する溝と推定される。このような構造から、7号溝と浅い8号溝は、基本的に灌漑水路としての調整機能をもっていたと判断した。浅い8号溝は、深い7号溝から水が流入し、北側の浅い9号溝（くぼち）へと流れる取水路と推定した。

この灌漑水路では、3次調査のP区9号溝から弥生土器の破片がわずかに出土したにすぎないが、2次調査では、I区8号溝の埋土から新段階の山王Ⅲ層式土器が多数一括出土している。さらに、I区北壁の深掘トレンチによってI区溝の断面を観察した結果、8号溝が掘りこんでいる包含層（601～612層）との関係から、弥生時代前期前半に8号溝が掘削され、前期末まで機能していたと推定した。そして、S区7号溝分岐点の検討から、K・S区7号溝（V字溝）とS・I区の浅い8号溝、P区9号溝は、基本的に一体で機能する灌漑水路の可能性が強いと考えている。

第3節　Q西区竪穴状遺構と包含層について

山王囲遺跡の所在する微高地北東辺とその北側に広がる沖積地との間には、現在2ｍ程の段差がみられる。これは、迫川が浸蝕した低段丘崖と考えられている。この低い段丘崖から南側約20ｍ離れて発掘区Q区を設け、自然堤防の北辺に広がる後背湿地の埋没状態と包含層の堆積状態を精査した。その結果、遺跡北東部の広がりを把握できた。このQ区の西南部発掘区（Q西区）では、1965年に調査された弥生時代前期包含層の西辺を検出した。この包含層は、全体に西にむかってゆるやかに傾斜しており、11層から25層まで15枚の堆積層がみられ、厚さ50㎝を超す。11層から22層までが1965年度調査のⅢ層に相当し、その包含層の西縁辺にあたると判断した。11層・13層は、厚さ10㎝程度、15・16層が厚さ5㎝前後、20・22層が厚さ10㎝程度と大きく3つの層群を形成し、多量の遺物が出土した。11、13、15、16層は山王Ⅲ層式新段階の土器群を出土する。20、22層は、古段階、青木畑式と共通する土器群が出土している。

そして、20層と22層の下から、浅い竪穴状遺構1基が検出された。遺構は、直径4.0ｍと小型の不整円形である。北半分が精査され、壁の立ち上がりは確認されたが、全体に掘り形が浅く、柱穴、炉跡は認められなかった。竪穴埋土と底面には炭化物、焼土の小塊が多量に含まれていた。遺構の埋土は、10㎝程の深さで、主として山王Ⅲ層式古段階の土器が含まれている。11点の出土土器について詳細に型式学的な検討を行った。この竪穴遺構出土一括遺物は、平坦口縁の甕が主体であるが、深鉢、壷、高杯の体部や脚部も若干ではあるがみられ、器種の組み合わせを多彩にしている。ことに口頸部がかるく膨らむ長胴深鉢はきわめて特徴的な器種類型である。頸部の膨らみに太い沈線で波状文が施されており、山王Ⅲ層式にはこれまで知られていない器形である。一方、この類型は青木畑式、生石2式に出土している。また、粗製の煮沸形態には波状口縁の深鉢と平坦口縁の甕の両類がみられる。完全に復元できる土器は出土しておらず、破片が遺構内の壁寄りに散在していた。

さらに、竪穴遺構が掘り込まれた23層の下層の24、25層から、弥生時代前期前半の山王Ⅳ上層式土器（第22図

16～19、23図１～３、第７図版３～６，８図版１，２、９図版１）が一括出土しており、この包含層は、弥生前期前半（弥生Ⅰ期）に形成されたと判断した。

この調査区では厚く遺物包含層が形成され、土器の一括出土はみられるが、土壙墓、埋設土器などはほとんど認められず、1965年に精査された遺物包含層の西辺にあたり、晩期終末から弥生時代前期の生活残滓の廃棄層が広がる。また、包含層で検出された竪穴遺構については、その埋土から土器、焼土、炭化物が出土する状況から、①土器の焼成遺構、②生活残滓の廃棄遺構、③竪穴住居跡といった可能性を検討したが、①あるいは②の可能性が高いと判断した。

土器作りに関わる遺構としては、近年、粘土採掘跡の類例が増加している。晩期中葉大洞Ｃ２式期の粘土採掘遺構が、仙台市三神峯遺跡においても検出されている。しかし、土器の野焼きを裏づける遺構の確認は難しく、これまでに例がない。今回の調査では、浅い不整円形土壙に焼土ブロック、炭化物が多量に堆積していたこと、浅い埋土に土器片が集中していたことなどから、ことに土器焼成遺構の可能性を検討した。今後、この遺跡における同様な遺構の検討が必要であると考える。この地域ではこの時期に多量の土器が出土しており、基幹集落で盛んに土器作りが行われていたと考えられ、こうした土器焼成遺構が集落に残されている可能性は高いと考えられる。

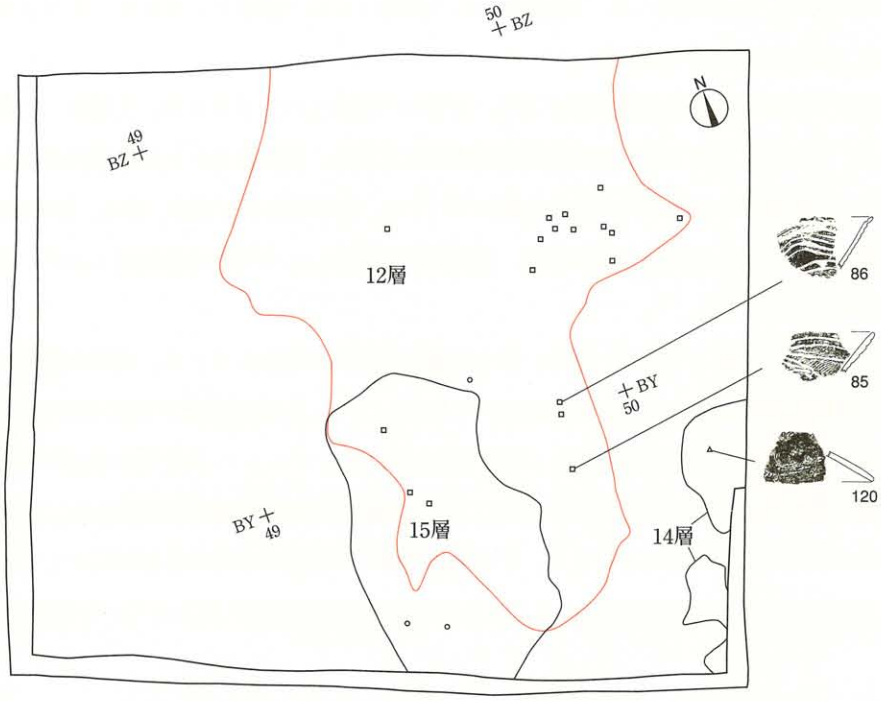
第４節　Ｑ区包含層出土弥生土器

Ｑ区西南部発掘区では、厚さ50㎝程の弥生時代前期遺物包含層を精査し、その出土遺物の詳細な検討を行った。この包含層のうち、11層から16層は厚さ10㎝から５㎝の堆積層が複雑に重なりあっている。13層、14層、16層は上下に重なり合っている。11層はその西側に広がり、13、14層の下層、16層の上層にある。これらの層群から出土する土器群は、11・13層から16層までその特徴が共通し、山王Ⅲ層式の新段階にあたる。器種としては、平坦口縁の甕、深鉢、鉢、壷、高杯、粗製蓋、そして精製蓋がみられる。高杯や鉢には太い篦描沈線による変形工字文Ｃ２型が施されている。その意匠は、晩期終末の変形工字文Ａ型が大きく変容し、流水文のような構成に変化した類型が主体となっている。この山王Ⅲ層式の主要意匠は、変形工字文Ｃ型と命名されている。しかもさらに大きく変化した意匠（第17図２，14、18図８、19図16、20図３）がみられ、山王Ⅲ層式においてより新しい段階に属すると考えられる。

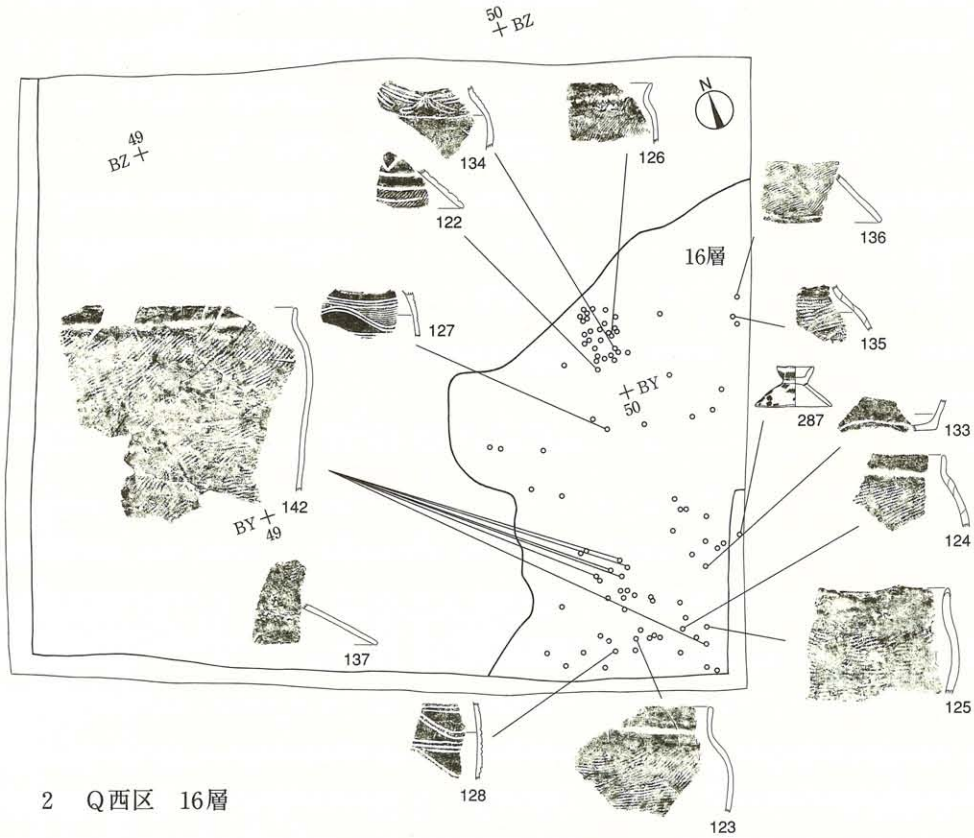
さらに、竪穴遺構の埋土から出土した土器群には、磨消縄文手法による波状文が展開する高杯脚部（第16図９）、３本の篦描線で波状文が展開する高杯脚部（同図12）、変形工字文Ｃ２型の展開する高杯（同図11）がみられ、やはりいずれも山王Ⅲ層式土器群である。また、口頸部に膨らみをもつ山王Ⅲ層式古段階の深鉢が出土しており、青木畑式、生石２式に近い土器群とみられる。

さらに、遺構が掘り込まれている23層から25層の出土土器群は、山王Ⅳ上層式（伊東・須藤　1985）に相当し、弥生時代前期前半の土器型式である。波状口縁深鉢、平坦口縁甕、粗製蓋が共伴する。

Ｑ西区の11層から16層、20層と22層、竪穴状遺構、24層と25層の出土遺物の内容を検討した結果、弥生時代前期前半から前期後半にかけての土器型式変遷をあらためて確認することができた。しかも中間に23層のような無遺物層、竪穴状遺構などが展開しており、前期前半から前期後半の古段階、そして新段階へと層位的に変化する関係を確実に捉えることができた。

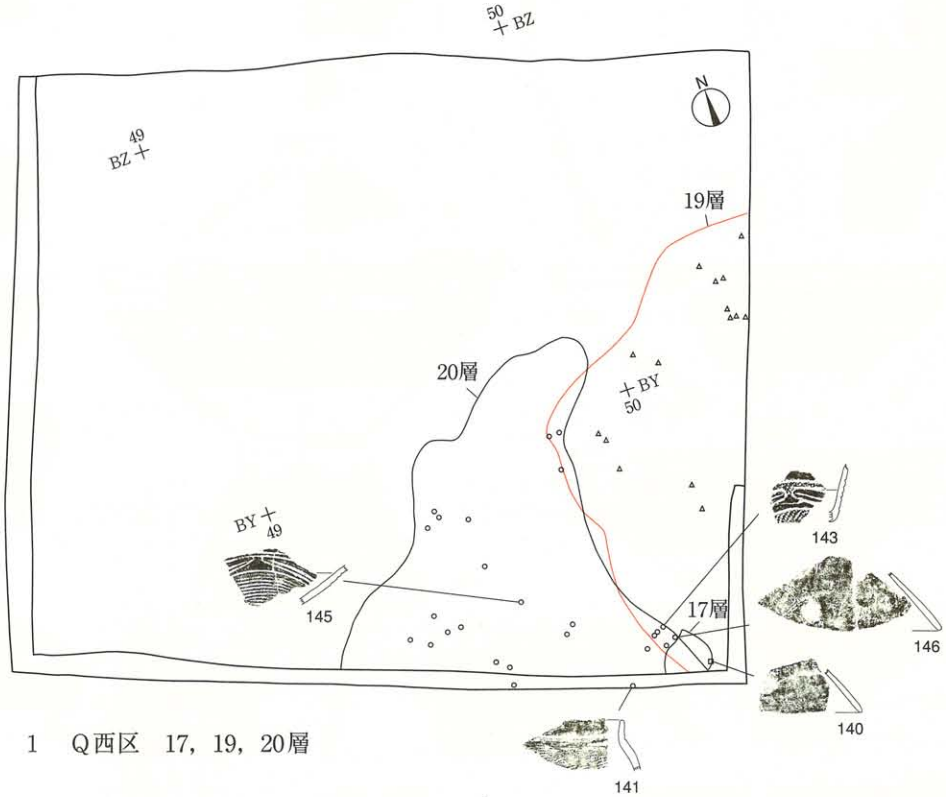


1　Q西区　12，14，15層

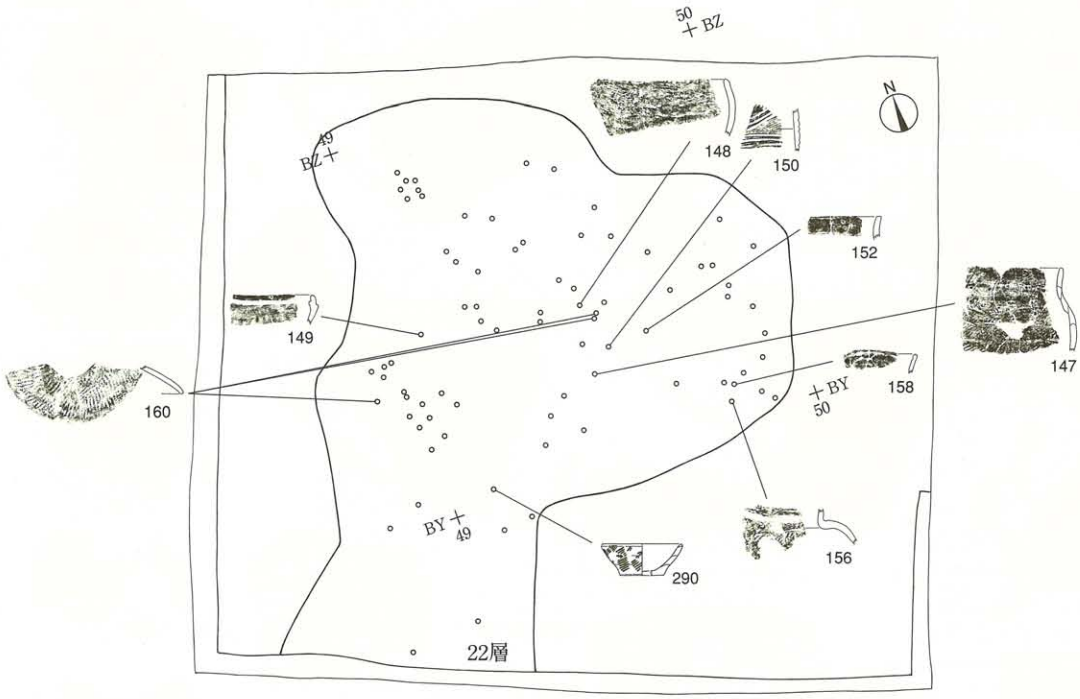


2　Q西区　16層

第28図　山王囲遺跡Q西区包含層のひろがりと土器分布状態（12～16層）〔Scale　1：60〕
Distribution of the excavated layers and pottery at the Q trench

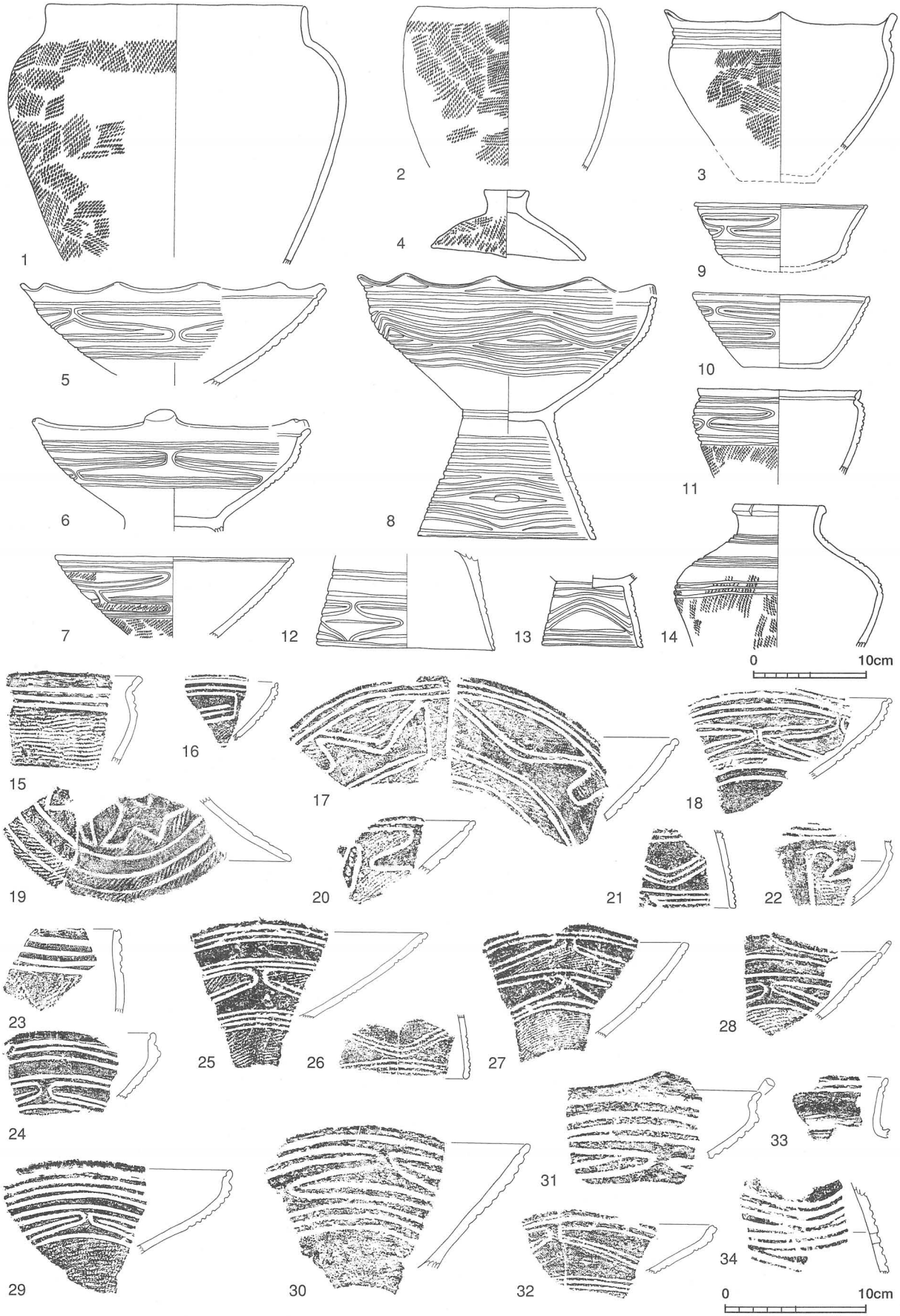


1　Q西区　17，19，20層



2　Q西区　22層

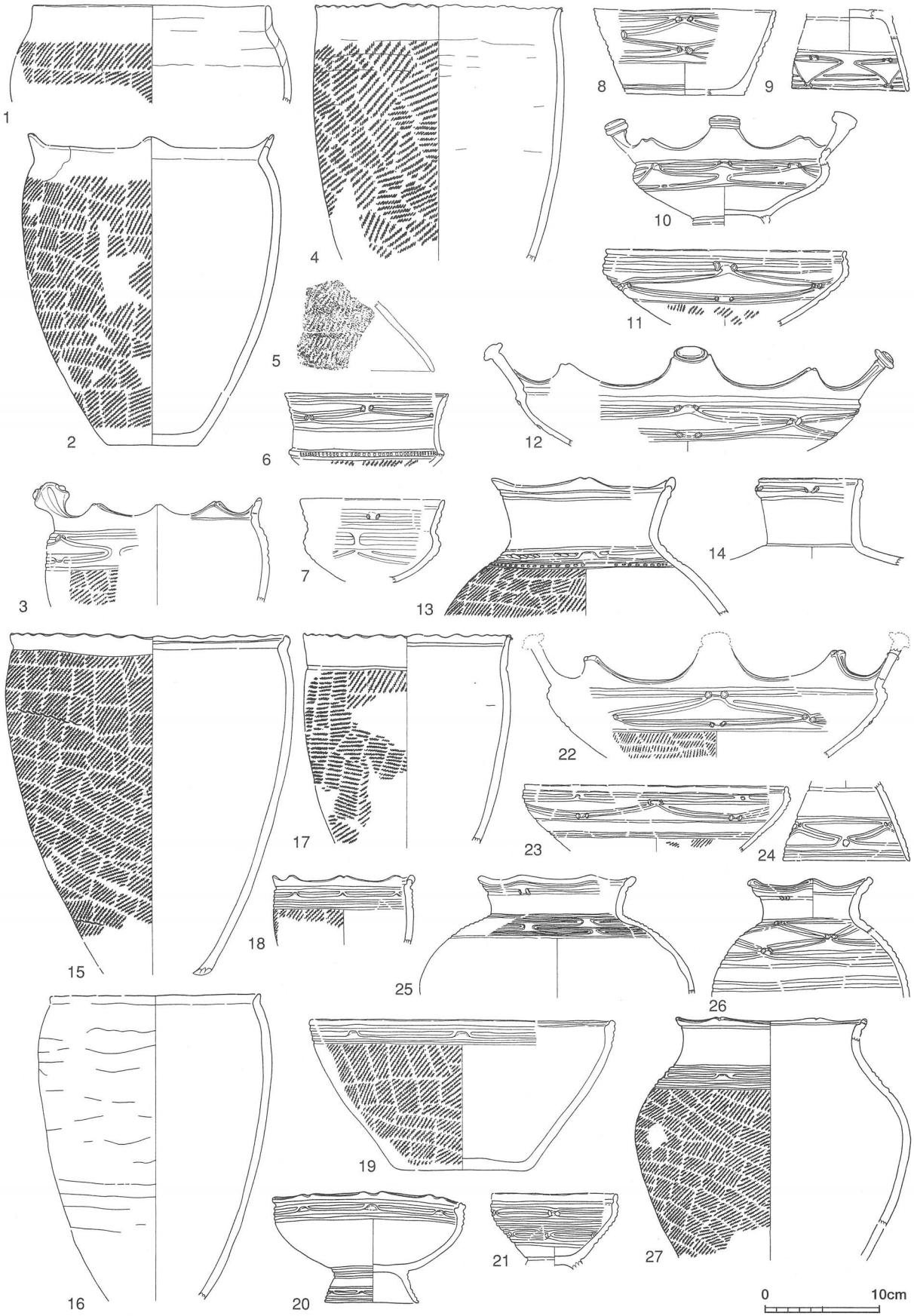
第29図　山王囲遺跡Q西区包含層のひろがりと土器分布状態（17～22層）〔Scale　1：60〕
Distribution of the excavated layers and pottery at the Q trench



第30図　山王囲遺跡　1965年第Ⅲ層出土土器（須藤 1983から作成）

Yayoi pottery from Layer Ⅲ at the Sanno-gakoi site in 1965

1～14・29～34 山王Ⅲ層式下層
15～22 山王Ⅲ層式上層
23～28 山王Ⅲ層式中層



第31図　山王囲遺跡　1965年第Ⅳ層出土土器

Jomon and Yayoi pottery from Layer Ⅳ at the Sanno-gakoi site in 1965

1～14 山王Ⅳ上層
15～27 山王Ⅳ下層

その土器型式の変化には、器種構成では、次のような特色がうかがえる。

① 晩期終末の粗製土器は、波状口縁の深鉢が主体であるが、弥生時代前期になると平坦口縁の甕が出現し、その頻度が上層で著しく増大する。

② 粗製甕とセットになる粗製蓋が出現し、上層でより多量に出土する。

③ 高杯が盛んに製作され、平坦口縁の高杯が上層で発達する。

④ 特徴的な形態の装飾鉢、深鉢が出現し、定着する。

⑤ これらに伴う装飾蓋がわずかに出現する。16層出土装飾蓋は、粗製蓋と異なった鉢を伏せた形態と推定される。1965年調査のⅢａ層出土土器と接合した。この蓋に磨消縄文手法による太い箆描の「入組文」が施されている。山王Ⅲ層式新段階に属する。中期前半への型式推移をうかがうことができる。

⑥ 大型壷は少なく、小型壷が目につく。

次に、装飾体系、施文手法、製作技法では次のような特色がみられる。

① 変形工字文Ａ型からＣ型への漸進的変化が認められる。

② 変形工字文から複雑な意匠構成の入組文、波状文が出現し、発達する。

③ 磨消縄文手法が用いられるようになり、上層で一層発達する。

④ 粗製の蓋は、基本的にＬＲ斜行縄文が外面に施されるが、11、20層では無文蓋も出土している。無文蓋には刷毛目調整手法は認められないが、西日本の遠賀川系土器の蓋との類似性がうかがえる。

⑤ 装飾土器と煮沸形態の間で器種によって胎土に大きな相違が確立する。ことに山王Ⅲ層式新段階の装飾土器における加熱され金色に発色した雲母の混和が特徴的である。

このように、山王Ⅳ上層式から山王Ⅲ層式への推移は、きわめて漸進的な側面と、器形や土器製作技術、意匠の新たな変革が複雑に絡みあっていることが指摘される。また、迫川・北上川流域・北上山系などの広い地域で土器型式が斉一性を確立していることも顕著な特色である。さらに、下層の山王Ⅳ上層式土器は、東北地方北部の砂沢式土器と器種構成、装飾体系で強い共通性を示している。この砂沢式期の弥生前期前半には、東北各地で遠賀川系土器が出現、共伴し、西日本の前期弥生社会から土器製作技術、土器そのものが盛んに導入されたことが裏づけられている。しかし、山王囲遺跡では、現在のところ、遠賀川系土器の搬入資料は確認されていない。今後、Ｑ西区の包含層下層から出土した無文粗製蓋などについては、刷毛目調整などの技術的特徴を有する遠賀川系土器の搬入品、あるいはその技術のみられる折衷型遠賀川系土器の確認が必要である。

山王囲遺跡のⅢ層から出土した多量の土器群を基準資料とする山王Ⅲ層式土器を出土する遺跡は、一迫町松風西、宮城県築館町浄土遺跡、嘉倉貝塚、横須賀貝塚、館貝塚、敷味遺跡、岩手県花泉町貝鳥貝塚など、迫川流域に多数の遺跡が知られている。また、北上川流域の宮城県中田町大泉遺跡、石巻市沼津貝塚、岩手県花泉町中神遺跡、白岩貝塚、一関市谷起島遺跡、滝沢村湯舟沢遺跡、松尾村長者屋敷遺跡、岩手町乙茂内遺跡など30ヶ所を超す遺跡が調査されている（須藤　1997、佐藤他　1987）。さらに、陸前高田市中沢浜貝塚、大船渡市長谷堂遺跡、宮古市上村貝塚など、北上山系と三陸海岸にも多数の遺跡が分布しており、豊富な資料が出土している。その分布域は、南北200km、東西80kmにおよぶ。弥生時代における土器型式の分布圏としてはきわめて大きな広がりをみせる。このように、著しく斉一性の強い土器型式が発達することから、この広い地域の弥生集団に著しく共通した生活様式が確立し、緊密な集団関係が繰り広げられたことがうかがえる。

また、Q西区包含層の24、25層からは、1965年度に調査した低湿地包含層Ⅳ層上部から出土した山王Ⅳ上層式土器が出土した。ことにその鉢、高杯の器形と篦描文の意匠構成、施文手法には、砂沢式土器との強い類似性が認められる。晩期終末から弥生時代前期にかけて広い地域で共通した土器作りが発達したことがうかがえる。このように砂沢式、山王Ⅳ上層式、山王Ⅲ層式には広い地域で土器の形態、意匠、製作技術、胎土に共通した特徴が認められる。この時期に東北地方の北部から中部にかけて広い範囲でこのような共通性の強い土器型式が成立する背景として、複雑多様な生活環境のなかにあって各地の集団間に緊密な交流関係が確立したことが考えられる。その集団相互の交流関係を明らかにするために、土器の器形や意匠などに関する型式学的研究を深めるとともに、PIXEやX線回折分析法、偏光顕微鏡観察などによる胎土の検討、土器製作手法の分析などを併せて行い、土器の生産と供給のシステムをより明確にすることも重要な研究方向である。

1965年の調査と1997年の第3次調査の結果、遺跡北東部の自然堤防北端西側にひろがる後背湿地が埋没したのち、晩期終末から弥生時代前期にかけて東西20ｍ、南北20ｍ以上にわたって厚さ50㎝程の包含層が形成されたことが明らかになった。包含層からは、1965年度の調査で膨大な量の土器、石器が層位的に出土しているが、今回の第3次調査でも包含層の西縁辺、竪穴状遺構とその周辺から豊富な資料が得られ、この時期の生活域が広い範囲で確認された。

こうした包含層の広がりと出土遺物の内容から、晩期中頃から後半に自然堤防の高まりで生活を営んでいた人々が、晩期終末から弥生前期にかけて北側に広がる後背湿地の埋没が進むとともに、生活域を西に拡大したことが明らかになった。そして弥生時代前期の遺物包含層からは、豊富な土器、石器などの遺物が出土しており、この時期の生活様式、物質文化の推移を捉えることができた。ことに、蓋をセットとして煮炊きに使用する甕の導入、定着、発達は、この時期に食生活のスタイル、生活様式の根幹に新たな変革があったことを示唆している。また、西側の7号溝の北側には前期後半の水田跡が展開する可能性が7号溝の深いV字状の構造と8号溝との連結・分岐関係から予想される。また、これまでに山王囲遺跡では2点の石庖丁が出土しており、この地域で弥生時代に水稲栽培が営まれていた可能性を一層強く示唆している。

第5節　出土石器について

第3次調査では、P区とQ西区において比較的多くの石器が出土した。今回、整理、分析を行った資料は、晩期後半から弥生前期にかけての包含層、配石遺構、焼土遺構から出土した石器群と石核、剥片の一部にとどまった。打製石器としては石鏃、石錐、石匙、楔形石器と不定形石器などが出土している。石材は、頁岩と鉄石英－碧玉－が目につき、山王囲遺跡の石器製作の特徴的様相といえる。時期的には、晩期後半から弥生前期後半の石器群とみられる。内容を検討した結果、この移行期に打製石器には石器組成、材質、製作技術に大きな変化は認められない。ことにQ西区の包含層11～24層において出土した弥生前期の石器群については、晩期後半と基本的な変容はみられなかった。

出土石器の主体となる石鏃は、凸基有茎式が圧倒的に多い。精巧で薄手、小型の石鏃が出土しており、晩期から弥生前期の山王Ⅲ層式期にかけて大きな変化はみられない。また、凹基無茎式で基部が軽く内彎する比較的入念な作りの石鏃が出土しており、晩期に発達する根挟みに着装する石鏃と同類型の可能性が指摘され、こうした

石鏃の製作、使用が晩期全体を通じて継続し、さらに弥生前期にも続いていたことが推定される。また、石錐には、やや幅広な剥片の一部を尖らせた類型、全体に細身に縁辺を調整して錐部を鋭くした類型、棒状石錐、と晩期に発達する類型のものが認められ、この種の石器にも基本的には大きな変容はみられない。楔形石器が1点確認されている。機能については特定できないが、その形態上の推定機能から、骨角器、木器の加工に欠かせない石器と推定される。出土量が少ない。

R区ピット396から、山王Ⅲ層式土器とともに石匙1点が出土した。弥生時代の石匙と推定される。丁寧な調整の縁辺、刃部、摘み部をもち、整った形態の横型石匙である。晩期からの伝統的な技術がよく踏襲されている。使用痕を観察した結果、光沢と線状痕が認められ、その機能、用途を推定する手掛かりが確認された。

こうした打製石器のあり方については、資料の出土量が限られているため、なお今後、調査資料全体についての詳細な検討が必要であると考えている。

剥片と石核が少数ではあるが出土し、基本的な剥片製作技術が検討された。石核は、盛んに打面転移されており、長さと幅に差の少ない剥片が作られ、石匙、石鏃、不定形石器など多様な形状と機能の石器が製作されている。こうした剥片製作技術のあり方は、縄文時代から弥生時代にかけて広く認められる技術体系といえる。また、P区南壁の東寄りにある第2号焼土遺構から出土した3点の頁岩製剥片は、接合した。1点は受熱している。この墓域と推定される場にある屋外炉における作業を考える上で重要な資料であるが、遺構、石器の性格を特定することは難しい。

1965年度調査で多量に出土した円盤状石器が、3次調査で4点出土した。いずれも扁平な礫の周辺に剥離調整と研磨がみられ、植物等を敲打したり、磨り潰す用途が推定される。この石器も中沢目貝塚や九年橋遺跡など晩期に多く認められる石器である。1965年度の調査では晩期Ⅳ期とⅤ期に多く（伊東他　1985)、弥生時代前期の山王Ⅲ層式期には皆無であり、これらの資料も晩期後半の石器とみられる。

また、ヒスイ製の小玉がR区包含層から1点出土した。この玉は晩期後半のものと推定される。径1㎝、重量1ｇ程度の小型品で穿孔途中の未成品である。比較的小さなヒスイがこの集落に搬入され、製品に加工されていたことがうかがえる。

さらに、今回の調査では、弥生磨製石器に蛤刃石斧2点と石庖丁1点がはじめて確認された。完形の蛤刃石斧1点は、長さ15㎝の小型品で、敲打痕がよく残った断面が楕円形の石斧である。他の1点は、幅8㎝、厚さ5㎝、長さ20㎝を超すとみられる大型蛤刃石斧である。いずれも形状は晩期の磨製石斧とは異質である。また、敲打調整が顕著にみられる点もこの時期の特徴とみられる。

石庖丁は、推定長15㎝前後、幅4㎝程の紡錘形、外彎刃外彎背の類型である。両面、背、刃、端部が丁寧に研磨されている。紐孔が欠損しており、穿孔法は不明である。P区の上層3ａ層から出土しており、時期は特定できない。しかし、その形態、整形法や粘板岩の石質などから、仙台平野と相馬・いわき地方にひろく分布する中期前半から中葉の石庖丁の中型品（須藤　1984）と推定される。この石庖丁には、金属顕微鏡の観察で穀物光沢が認められ、イネなどの収穫に盛んに使用したのち、廃棄されたものと推定される。蛤刃石斧、石庖丁が使用されていたことが確認されたことによって、迫川の最上流域において、前期の弥生集落が出現し、弥生文化が確実に定着、発展していった動向をうかがうことができたといえる。その間、この山王囲遺跡の弥生集落は、この地域の拠点集落として中核的で重要な位置を占めつづけたと考えられる。　（大場、須藤）

結　　語

今回の３次調査では、遺跡の西側と北側に重点をおいて、晩期から弥生時代にかけての集落構造の変遷を追求した。２次調査でＩ区北壁のトレンチで出土した晩期後半のクヌギ製竪杵、加工木、ヒエ、アサなどの栽培植物の出土から、この時期の農耕遺構の追求を低湿地において試みた。その結果、遺跡の中央部を東西に区画するＶ字溝－７号溝－が、浅い８号溝に分流する灌漑水路として機能していた可能性が指摘されるに至った。また、水路の北側には洪水後に沈殿したとみられる灰白色シルト層の堆積する浅いくぼ地（９号溝）が広がり、今後この北側では水田遺構の調査が必要と考えている。現在のところくぼ地の性格は不明である。

また、居住域の西側に晩期終末から弥生前期の配石遺構、埋設土器、焼土遺構などが群在する墓域の可能性が推定される遺構群が広がっていることが明らかになった。

さらに、遺跡の北東部での調査区では弥生時代の包含層の広がりが明らかにされ、その中に山王Ⅲ層式土器と炭化物を多量に出土する浅い竪穴状遺構が検出された。こうした遺構の性格については今後慎重な検討が必要である。また、これらの遺構と包含層からは層位的に多量の前期弥生土器が出土しており、その土器型式の変遷を詳細に検討し、縄文時代晩期終末から弥生前期後半にかけての東北地方中部における土器型式変遷の漸進性と新たな変容との動向をより明確に捉えることができた。山王囲遺跡はこの地方の縄文・弥生変革期を代表する重要な遺跡でもある。

さらに北端の調査区では晩期終末から前期後半の土壙が確認され、自然堤防上の広い範囲でこの時期の集落が営まれていたことが確認された。

さらにＱ区において、1965年度に伊東信雄東北大学教授が調査した低湿地包含層についてもその現状を確認するための旧発掘区の検出調査を実施した。その結果、発掘調査区の北壁と西壁を確認し、その保存状態を確かめることができた。涌水が激しく、崩壊しやすい状態であり、この地区の再調査については極めて慎重な取り組みが必要であることがあらためて確認された。また調査の体制、方法を充分に計画して４次調査を実施することが必要であると判断された。

このような成果をふまえ、今後、４次調査計画を策定していくこととしたい。　（須藤）

引用・参考文献

安部　実　他　1987　「生石２遺跡発掘調査報告書（３）」『山形県埋蔵文化財調査報告書』117　（山形県教育委員会）

伊東信雄　1966　「縄文時代の布」『文化』30－１　pp.１－20

伊東信雄・須藤　隆　1985　『山王囲遺跡調査図録』　（宮城県一迫町教育委員会）

恵美　昌之　1979　「十三塚遺跡」『昭和53年度遺構確認調査報告書』（名取市教育委員会）

小野田哲憲・高橋義介　1991　「上村貝塚発掘調査報告書」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』158　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

加藤道男　1982　「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書』85　（宮城県教育委員会）

加藤道男　他　1986　「中沢目貝塚」『田尻町文化財調査報告書』　第２集　（田尻町教育委員会）

桐生正一　1986　「湯舟沢遺跡」『滝沢村文化財調査報告書』２　（滝沢村教育委員会）

工藤哲司　他　1996　「中在家南遺跡他」『仙台市埋蔵文化財調査報告書』213

工藤利幸・中川重紀・田村荘一　1986　「馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書」『岩手県文化事業団埋蔵文化財調査報告書』99　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

小林圭一・大泉寿太郎　1997　「北柳１・２遺跡」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』48　（山形県埋蔵文化財センター）

佐藤正彦・蒲生琢磨　1987　『中沢浜貝塚発掘調査概報』Ⅲ（陸前高田市教育委員会）

志間　泰治　1971　『鱸沼遺跡』

菅原俊行・安田忠市　1986　「地蔵田Ｂ遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　pp.11－262　（秋田市教育委員会）

須藤　隆　1983　「東北地方の初期弥生土器－山王Ⅲ層式－」『考古学雑誌』68－3　pp.１－53

須藤　隆　1986　弥生時代・続縄文　図説発掘が語る日本史　１　北海道・東北編　pp.113－148

須藤　隆　1990　「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』１　pp.238－303

須藤　隆　1990　「東北地方の弥生文化」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』pp.243－322

須藤　隆　1997　「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』89　pp.44－82

須藤　隆　編　1984　「福島県会津若松市墓料遺跡」『1980年度発掘調査報告書』（会津若松市教育委員会）

須藤　隆　編　1997　『中神遺跡の調査』（東北大学文学部考古学研究室）

田鎖寿夫・斉藤邦雄　他　1995　「国道395号改良工事関連遺跡発掘調査　大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第２次～第５次調査－」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』225　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

高橋忠彦・広嶋　司　1984　『中山－中山遺跡発掘調査報告書』（五城目町教育委員会）

高橋與右衛門　他　1997　岩手県県北農業技術センター（仮称）関連遺跡発掘調査　和当地Ⅰ遺跡発掘調査報告書　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第259（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

利部　修・和泉昭一　1990　「諏訪台Ｃ遺跡発掘調査報告書」『秋田県埋蔵文化財調査報告書』196

永井久美男　1996　『日本出土銭総覧』1996年版（兵庫埋蔵銭調査会）

中里寿克・江本義理・石川陸郎　1971　「宮城県山王遺跡出土弁柄漆塗櫛の技法と保存処置」『保存科学』７　pp.47－60　（東京国立文化財研究所保存科学部）

村越　潔・成田正彦　他　1991　『砂沢遺跡発掘調査報告書－本文編－』（青森県弘前市教育委員会）

明治大学考古学博物館　1991　明治大学考古学博物館蔵品図録２　『縄文晩期の世界』pp.86、87

本山幸一、滝沢秀一　他　1963　『越後のアンギン』（津南町教育委員会）

渡辺　誠　1990　「編布の研究」『荒屋敷遺跡Ⅱ』（小柴吉男編）pp.750－758

付章１　山王囲遺跡の灰白色火山灰の分析結果

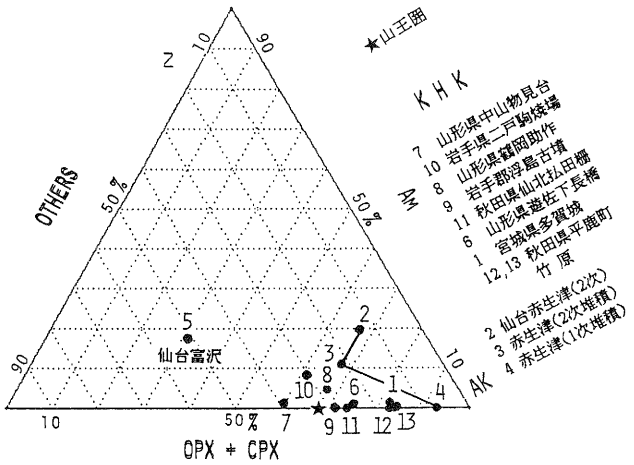
阿子島　功（山形大学人文学部環境地理学）・檀原　徹（京都フイショントラックk.k.）

分析を行った火山灰はＰ区トレンチ北壁の第４層の灰白色火山灰層である。

この火山灰層は浅い谷を埋める堆積層にはさまれていて、層厚は最大数cmで、きれぎれになっている。Ｐ区トレンチの北西部は微高地を刻む浅い谷であり、西側にわずか深くなっている。試料採取位置は、谷のほぼ中心で、地表より約0.5ｍ下、弥生時代の遺物包含層の上面より0.5ｍ上の層準にある。その上は氾濫堆積層の細砂層、下は同じく細砂および細礫層である。谷の基底の断面形に比べて、「より浅い凹形～ほとんど水平」を示す。すなわち、浅い谷がほとんど埋もれきった状態で火山灰層が堆積している。

分析結果を表４、図32、33に示す。重鉱物組成（図32）は、従来より灰白色火山灰KHKとよばれていた十和田ａ（To－ａ）火山灰に似ている。火山ガラスの屈折率の最頻値（60％以上集中）は1.506＜＝Nd＜1.507であり、多賀城東門溝、仙台市富沢水田跡遺跡、仙台市赤生津水田遺跡、山形県遊佐町下長橋遺跡（雨落ち溝）、秋田県横手市竹原（窯跡）遺跡、秋田県仙北郡払田柵ほか（いずれも阿子島・檀原、1991が分析値を記載）のKHK火山灰のそれとよく似ている。比較のため図33右に赤生津遺跡第６層（１次堆積の層準）の火山ガラス屈折率頻度グラフを示す。**したがって、山王囲遺跡の灰白色テフラは時期的にも915年A.D.のTo-a火山灰に対比してよいと考えられる。**

白頭山火山灰Ｂ-Tmとされる秋田県峰浜村土井の試料では1.511付近と1.519付近に２つのピークがあり、KHKとは異なる。なお、山王囲テフラの火山ガラスに、屈折率が1.498＋、1.500＋、1.502＋の粒子が各１個含まれているが、ほかのテフラからの混入も考えられるし、また岩手県二戸町駒焼場（ST埋め土中、９Ｃ後葉－10Ｃ前葉）のKHKは1.495付近にもうひとつのピークをもっている。



第32図　灰白色火山灰の重鉱物組成
Heavy minerals of the grayish white tephra.
★ KHK tephra in Sanno-gakoi.

試料の分析方法

（１）前処理　半湿潤状態の生試料を適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させ、乾燥重量測定後、２ビーカー中で数回水替えしながら水洗し、そののち超音波洗滌を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度１～２％程度となるように適宜加え、懸濁がなくなるまで洗滌水の交換を繰返す。乾燥後、使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、３段階の篩別（60、120、250mesh）を行い、各段階の秤量をする。このうちの120～250mesh（1/8～1/16㎜）の粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤（Nd＝1.54）を用いて岩石用薄片を作成した。

第4表　テフラ分析結果表

Analysed result of the grayish white tephra.

Whole Mineral composition (4-2), Heavy minerals (4-3) and refractive index of volcanic glass particle (4-4).

4-1　試　料　名	処理生試料 乾燥重量 (g)	篩別試料重量 (g) >1/4 mm	1/4～1/8 mm	1/8～1/16 mm	色　調	以下試料の分析方法は(1)～(4)を参照。
山王囲P区北壁4層の灰白色火山灰	6.49	——	0.20	0.77	10YR8/2 灰白色（乾） 10YR7/2 にぶい黄橙色（湿）	

4-2　全鉱物組成

火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	備考
159	27	5	9	–	200個	pm>bw型ガラスを主とする軽石質テフラ。pmガラスは n=1.506－1.508, bwガラスはn=1.499－1.502。hydration layerが2－3μmで非常に若いテフラ。少量のスコリアガラスも含む。岩片はガラス質で一部黒曜石。
79.5	13.5	2.5	4.5	0.0	100.0%	

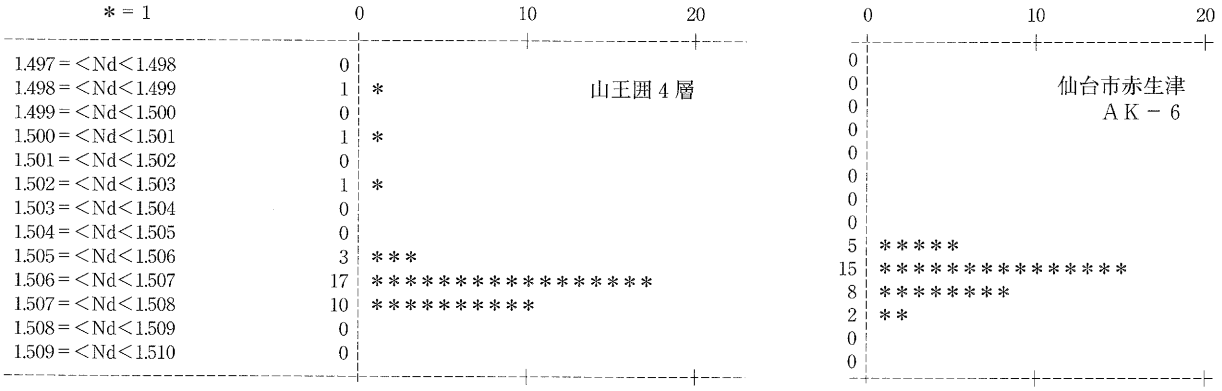
4-3　重鉱物組成

Ol	Pyroxene Opx	Pyroxene Cpx	Amphibole BHo	Amphibole GHo	Opq	Cum.	Zr	Bi	Ap	total		備考
–	71	48	–	–	26	–	–	31	2	178	個	
0.0	39.9	27.0	0.0	0.0	14.6	0.0	0.0	17.4	1.1	100.0	%	

4-4　火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range) 最小	最大	屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
1.499	1.502	1.5004	3	1.506≦Nd<1.507 ＊60%	→H型　H：扁平型 C：中間型 T：多孔質型 (吉川，1976)
1.506	1.508	1.5067	30		→T，C型　It：不規則型

＊全測定数に対するmode範囲内にある火山ガラスの含有を示す。



第33図　火山ガラス屈折率のヒストグラム

Histogram of refractive index of volcanic glass particles.

（２）全鉱物組成分析　封入薄片を用い、表４－２の５項目について１薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数し含有粒子数の量比百分率を測定した。

（３）重鉱物分析　主要重鉱物（カンラン石（Ol）・斜法輝石（Opx）・単斜輝石（Cpx）・角閃石（Am）・黒雲母（Bi）・アパタイト（Ap）・ジルコン・イディングサイト・不透明鉄鉱物（Opg）等）を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に178個体を計数してその量比を百分率で示した。一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理による重鉱物の濃集を行うことが多いが、特に火山ガラスに包埋された重鉱物はみかけ比重が減少するため、重液処理過程で除外される危険性があり、さらに風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

（４）火山ガラスの屈折率測定　120～250mesh（1/8～1/16㎜）粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS、檀原、1993ほか）を用い火山ガラスの屈折率を測定した。屈折率のhistogram（図33）は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現され、混入も識別できる。

＊一つが１個の火山ガラス片の測定結果を示す。

文　　献

阿子島功・檀原　徹　1991「東北地方、10Ｃ頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念論文集』１－９

檀原　徹　1993「温度変化型屈折率測定法」（日本第四紀学会編）、『第四紀試料分析法２』「研究対象別分析法」pp.149－157（東京大学出版会）　＃PAT.　1803336，1888831

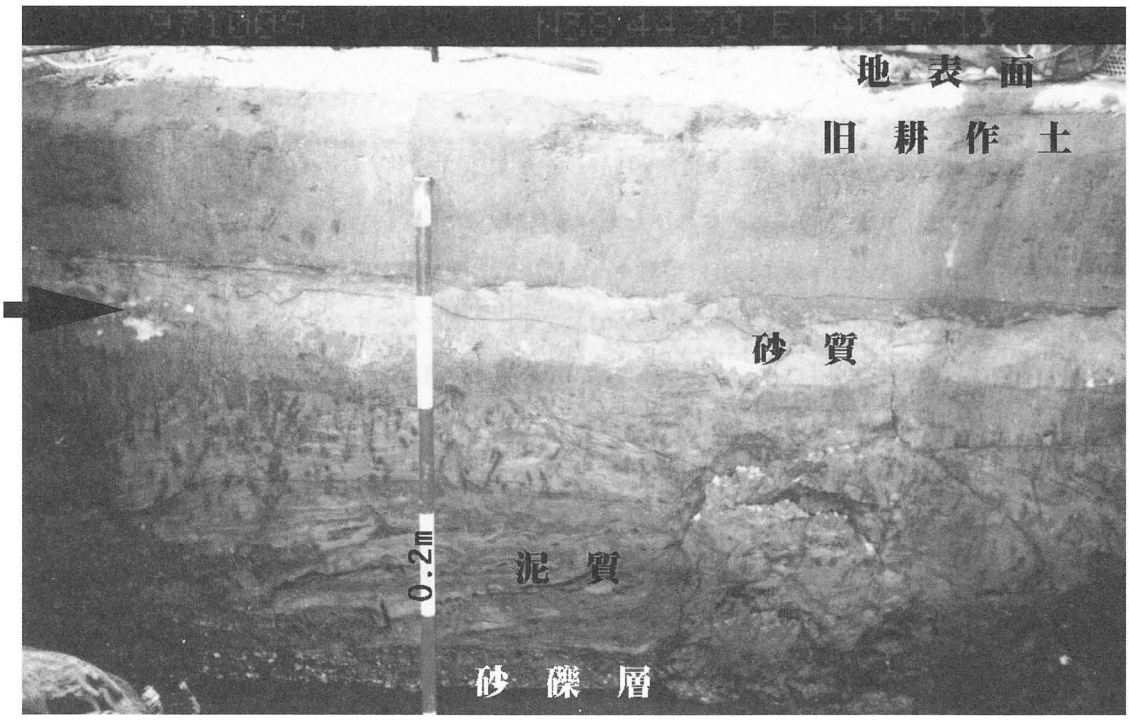


写真１　山王囲遺跡Ｐ区トレンチ北壁　　➡は灰白色テフラの層準

North-side wall of Trench in the Section P. Arrow indicates the horizon of grayish white tephra layer.

灰白色テフラの薄層は西側で地表下0.5～東側で0.4ｍにあり、下層の泥層の深いところでは灰白色テフラの深さも少し深い。凹所にのみ、きれぎれに分布している。灰白色テフラ直上の砂質層準は洪水性の可能性がある。

付章２　山王囲遺跡出土木材の樹種

鈴木　三男（東北大・理学研究科）・能城　修一（農水省森林総合研究所）

宮城県栗原郡一迫町の山王囲遺跡の縄文時代晩期の遺物包含層（Ｉ試掘トレンチ）から出土した自然木74点と木製品（竪杵）１点の樹種を調査した結果、表５に示すように17の樹種の18タイプが同定された。

以下にそれら18タイプの同定の識別点を簡略に記載し、また、代表的な標本の顕微鏡写真を写真１～18に示した。

記　載

１　オニグルミ　Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis (Miyabe et Kudo) Kitamura　クルミ科

写真　１ａ－ｃ．(MYG－3639)

茶褐色に着色している出土材で、中型（直径約60－200μｍ）の楕円形の道管が、斜め放射方向に連なってまばらに散在する半環孔材。道管は単独、あるいは２－３個放射方向に複合し、直径は年輪界にむけて緩やかに減少する。木部柔組織は１細胞幅の接線状で、年輪の半ば以降で著しい。道管の穿孔は単一、チローシスが多く、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。随伴状の柔組織との単壁孔は交互状で、やや横ながの楕円形となり、数多い。放射組織は同性で３－５細胞幅くらい。

２　ヤナギ属　Salix　ヤナギ科

写真　２ａ－ｃ．(MYG－3619)

小型（直径100μｍ以下）で放射方向にややのびた丸～多角形の道管がやや密に散在する散孔材。道管は単独あるいは２－３個複合し、直径は年輪界にむけて緩やかに減少し、晩材部と早材部ではハッキリと大きさが違う。道管の穿孔は単一で、道管相互の壁孔はやや大きめで、交互状で密に分布する。木部柔組織は目立たない。放射組織は単列異性で、道管との壁孔はやや大型の多角形で蜂の巣状に密にある。

３　クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科

写真　３ａ－ｃ．(MYG－3636)

漆黒に着色した出土材で、年輪の始めには楕円形あるいは卵形の大道管（直径約200－350μｍ）がほぼ単独で年輪にそって１－３層に並び、晩材部にかけて道管は多角形の小型（直径約20－50μｍ）で薄壁となり、徐々に径を減じ、火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、道管内部にはチローシスが著しい。木部柔組織はいびつな接線状－短接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は不定形。

４　クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科

写真　４ａ－ｃ．(MYG－3672)

褐色に着色した出土材で、大型（直径約250－400μｍ）で丸い単独道管が年輪のはじめに１－２層配列し、晩材部では中～小型（直径約150－50μｍ）で厚壁の丸い単独道管が放射方向に配列する環孔材。道管の直径は早材から晩材にかけて急速に減少し、それ以降はあまり大きさが小さくならない。道管の穿孔は単一で、内部にはチローシスが見られる。木部柔組織は１－３列ほどの帯状で著しい。放射組織は同性で、単列のものと、大型の複合放射組織とからなる。放射組織と道管との壁孔は柵状。

５　ニレ属　幹材　Ulmus　ニレ科

写真　５ａ－ｃ．（MYG－3618）

やや大型で丸いやや厚壁の道管が、単独あるいは２－３個複合して年輪のはじめに１－２層ならび、晩材部では小型（直径約15－60μｍ）で薄壁の角張った道管が集合して、斜め～接線方向の帯をなす環孔材。道管の直径は早材から晩材にかけてやや急激に変化する。道管の穿孔は単一で、小道管の内部には顕著ならせん肥厚が認められる。

木部柔組織は周囲状で、晩材部では小道管の固まりを取り囲み、しばしば大型の結晶が連なる。放射組織は同性で１－４細胞幅、細胞の接線面での径は小さい。

６　ニレ属　根材　Ulmus　ニレ科

写真　６ａ－ｃ．（MYG－3670）

基本構造は幹材と共通だが、道管の密度が低く、早材部の大道管は小さいのに対し晩材部の小道管は太いので、散孔材的になる、等の形質からニレ属の根材と同定した。

７　ヤマグワ　根材　Morus bombycis Koidz.　クワ科

写真　７ａ－ｃ．（MYG－3621）

中型の楕円形の道管が単独あるいは２－数個複合して、年輪内に均一に分布する散孔材で、年輪界に向かって少しつづ径が小さくなる半環孔材。年輪界はしばしば不明瞭。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は上下端の１－３細胞ほどが直立細胞からなる異性で、１－３細胞幅くらい。

８　ヒサカキ　Eurya japonica Thunb.　ツバキ科

写真　８ａ－ｃ．（MYG－3630）

薄壁多角形の微細な道管が密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状である。木部柔組織は散在状で、放射組織は１－３細胞幅の典型的な異性で、単列部の背がやや高い。単列放射組織は直立細胞のみから成る。

９　サイカチ　Gleditschia japonica Miq.　マメ科

写真　９ａ－ｃ．（MYG－3668）

やや大型で丸い道管が単独あるいは２－３個複合し、年輪のはじめに緩く集合し、その後はまばらに径を減じ

ながら散在し、晩材では外形多角形、内腔円形のやや壁の厚い小型の道管が数個～十数個複合した塊をなす環孔材。道管の穿孔は単一、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は早材で周囲状、晩材で翼状から連合翼状。層階状の配列を示す。放射組織は同性で、８細胞くらい。

10　イヌエンジュ　Maackia amurensis Rupr. et Maxim. var. buergeri (Maxim.) C.K.Schn.　マメ科

写真　10ａ－ｃ．(MYG－3648)

やや大型で丸い道管が年輪のはじめに、単独あるいは２個複合して１－３層に集合し、年輪の中間部分では中型の丸い道管が単独あるいは２－３個複合してまばらに散在し、晩材では薄壁の角張った道管が多数集合して、接線方向にのびる塊をなす環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、道管内部にはしばしば濃褐色のゴム状の物質が見られる。木部柔組織は周囲状。層階状の配列を示す。放射組織は同性で５細胞幅くらい。サイカチに似るが、晩材部の小道管の塊の形態が違う。

11　コクサギ　Oryxa japonica Thunb.　ミカン科

写真　11ａ－ｃ．(MYG－3616)

ごく小型で薄型のやや角張った道管が多数集合し、木部柔組織とともに斜め方向に継続する不規則な帯をなす紋様孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性にちかい異性で、上下端の単列部にはときに方形あるいは直立細胞をふくみ、１－２細胞幅。

12　キハダ　Phellodenron amurense Rupr.　ミカン科

写真　12ａ－ｃ．(MYG－3603)

大型で丸い道管が単独あるいは２－３個複合して年輪のはじめに２－３列配列し、晩材部ではごく小型で薄壁の方形の道管が多数集合して接線方向の帯をなして配列する環孔材。早材から晩材にかけて道管の直径と配列は急激に変化する。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、道管内部には濃褐色のゴムの物質が詰まる。放射組織は同性で１－４細胞幅くらい、背の低い紡錘型が整っている。イヌエンジュによく似るが、層階状構造とならないこと、放射組織の輪郭がきれいに調った紡錘形であることなどで区別される。

13　ミズキ　Swida controversa (Hemsl.) Sojak　ミズキ科

写真　13ａ－ｃ．(MYG－3652)

小型でややまるい道管が単独あるいは２－３個放射方向に複合してややまばらに均一に散在する散孔材。道管の直径は年輪の終わりでやや減少する。道管の穿孔多数の横棒からなる階段状。木部柔組織は短接線状。放射組織は異性で、直立細胞からなる単列のものと、２－４細胞幅で紡錘形の多列のものとからなる。道管と放射組織との壁孔はごく小型で交互状に密に分布する。

14　ハリギリ　Kalopanax pictus (Thunb.) Nakai　ウコギ科

写真　14ａ－ｃ．(MYG－3612)

大型でまるい道管が年輪のはじめに１列にならび、その後は急に径を減じた薄壁で角張った小道管が多数集合して斜め接線方向につらなる帯をなす環孔材。道管の穿孔は単一で、道管内部にはチローシスが見られる。放射組織は上下端の１細胞が直立細胞からなる異性で、５細胞幅くらい、背のひくい紡錘形をなす。道管と放射組織との壁孔は楕円形で疎ら。ニレ属、ケヤキによく似るが小道管にらせん肥厚がないこと、道管－放射組織間壁孔が大振りであることなどで区別される。

15　ウコギ属　Acanthopanax　ウコギ科

写真　15ａ－ｃ．(MYG－3646)

小型でまるい道管が主に接線方向に多数複合して、斜め接線方向の帯をなして配列する散孔材。道管の直径は年輪界にむけて徐々に減少する。道管の穿孔は単一で、道管内部には薄壁のチローシスが著しい。木部柔組織は周囲状で、道管との壁孔は交互状の楕円形でまばら。放射組織は異性で、構成細胞は大振りで、上下端に１－２個の直立細胞をもち、高さ４㎜以上となり、８細胞幅くらいで明瞭な鞘細胞をもつ。

16　ニワトコ　Sambucus racemosa L. subsp. sieboldiana (Miq.) Hara　スイカズラ科

写真　16ａ－ｃ．(MYG－3613)

小型で薄壁の角張った道管が、年輪界にむけて徐々に径を減じながら、単独あるいは数個－数十個複合して、断続的に接線方向の帯をなして配列する散孔材で、晩材部で波状の紋が目立つ。道管の穿孔は単一で、内部にはしばしば薄壁のチローシスがある。放射組織は異性で５細胞幅くらい、背のひくい紡錘形で、大振りの細胞から成り、明瞭な鞘細胞をもつ。道管と放射組織との壁孔は楕円形－方形でやや密。

17　オオカメノキ　Viburnum furcatum Blume ex Maxim.　スイカズラ科

写真　17ａ－ｃ．(MYG－3665)

多角形の小道管が年輪の前半でやや大きく、後半では小さくて半環孔的に見える散孔材。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状。木部柔組織は短接線状だが目立たない。放射組織は幅２列の典型的な異性で、単列及び単列放射組織は直立細胞のみからなり、多列部の幅は単列部よりわずかに広いだけである。

18　竹笹類　Bambusoideae　イネ科

写真　18ａ－ｂ．(MYG－3634)

向軸側に原生木部腔、その外側の左右に１対の大きな後生木部道管、外側の中央に篩部があって、それら全体を繊維が取り囲んで１本の維管束となっものが、均一に散在し、表皮は平滑、髄は空隙（髄腔）となっている。稈の直径があまり太くないことから見て竹類ではなく笹類であるといえる。

樹種組成の特徴

同定された自然木のうち、クリが21点ともっとも多く、ついでオニグルミ（14点）、コクサギ（９点）、ニワトコとイヌエンジュ（４点）、ミズキ、オオカメノキ、ニレ属（以上３点）、クヌギ節、ウコギ属、ヤナギ属、サイカ

チ（以上２点）、それにキハダ、ハリギリ、ヒサカキ、ヤマグワ（根材）、竹笹類（以上１点）である。これらのデータから縄文時代晩期の山王囲遺跡周辺の森林植生を推定してみよう。

同定結果の特徴として、まず、ヒサカキ１点を除いて、残りは全て落葉広葉樹であることが挙げられる。調査された試料数は決して多くはないので明確には言えないが、針葉樹を全く欠いていることは、スギ、ヒノキ、モミと言った有用樹が付近には生育していなかったことを示す可能性がある。

高木となる樹種ではクリがもっとも多く、オニグルミ、イヌエンジュ、ミズキ、クヌギ節、ニレ属、サイカチ、キハダ、ハリギリ、ヤマグワが挙げられる。特にニレ属とヤマグワは根材が出土しており、遺跡近辺での生育を示す証拠である。オニグルミが多くてミズキ、ヤマグワもあることから、水湿地近くであることが言え、クリ、クヌギ節の存在から二次林的であったとも言える。

一方、低木ではコクサギが大変多く、それにニワトコの存在もかなり湿潤な林の林床にこれらが生えていたことを示しているのだろう、また、ニワトコ、ウコギ属の存在は集落あるいは人家周囲の人による撹乱が頻繁に入った「薮」のような状況が推定できる。

また、610ａ層と611層ではクリ、オニグルミ、イヌエンジュ、ミズキは共通するものの、オオカメノキとクヌギ節、サイカチは610ａ層にのみあり、反対にコクサギ、ニワトコなどは611層のみにある。これらが層位による植生の違いを反映しているのかは試料が少ないため分からないが、もっとも優先する２種が共通していることから、基本的には同じ植生の反映であった可能性が言える。

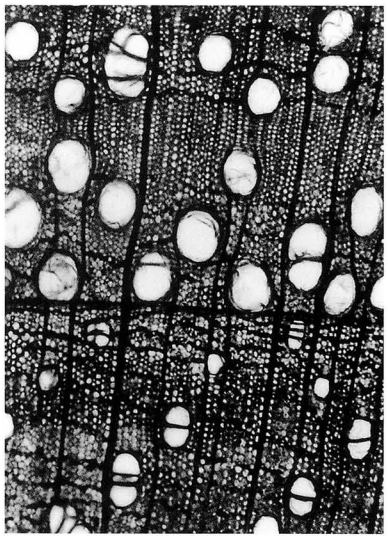
以上のことを総括すると、山王囲遺跡周辺にあった植生は、温帯性の水湿地性の落葉広葉樹からなる二次林で、人の手がずいぶんと入ったものであったといえる。ただ、冷温帯に多いオオカメノキと暖温帯の指標になるヒサカキの同時的存在は、更にデータを追加して、どうしてその両者が同時存在していたのかを検討する必要がある。

ただ１点調べられた木製品である竪杵はクヌギ節であった。

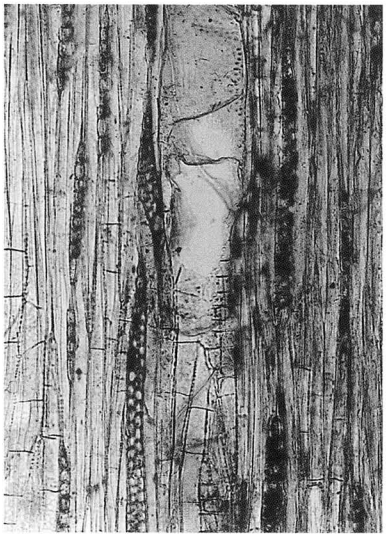
第５表　山王囲遺跡出土木材の樹種

List of woods excavafed from the Sanno-gakoi site

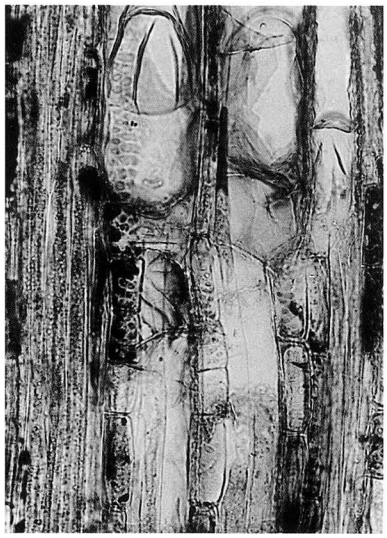
樹　　種	610ａ層	611層	612層	総　　計
クリ	5	16		21
オニグルミ	5	9		14
コクサギ		9		9
ニワトコ		4		4
イヌエンジュ	1	3		4
ミズキ	2	1		3
オオカメノキ	3			3
クヌギ節	2	1		3
ニレ属		2		2
ニレ属　　根			1	1
ウコギ属		2		2
ヤナギ属		2		2
サイカチ	2			2
キハダ		1		1
ハリギリ		1		1
ヒサカキ		1		1
ヤマグワ　　根		1		1
竹笹類		1		1
総　　計	20	54	1	75



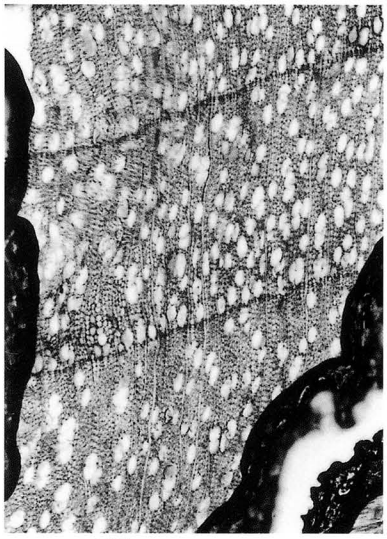
1a. オニグルミ　MYG-3639
木口　×40.



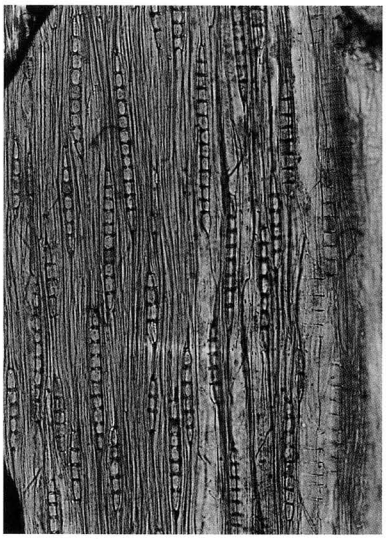
1b. 同　板目　×100.



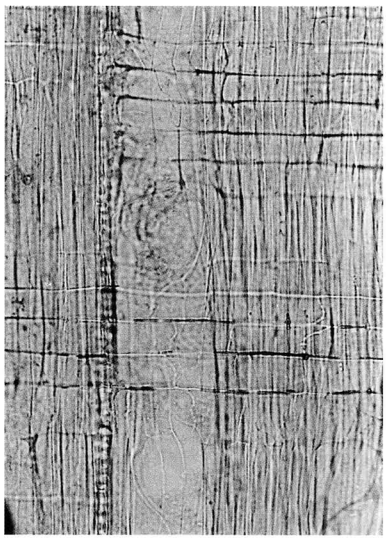
1c. 同　柾目　×200.



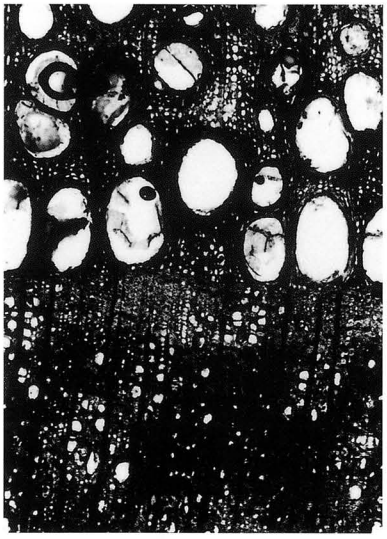
2a. ヤナギ属　MYG-3619
木口　×40.



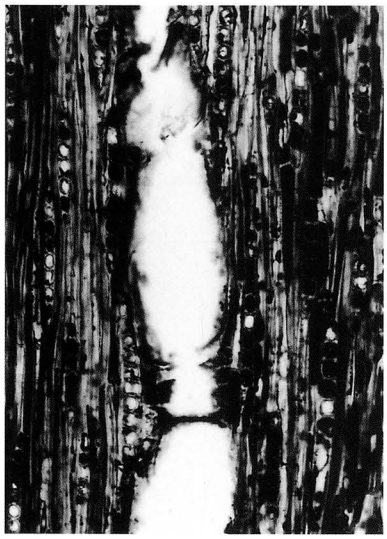
2b. 同　板目　×100.



2c. 同　柾目　×200.



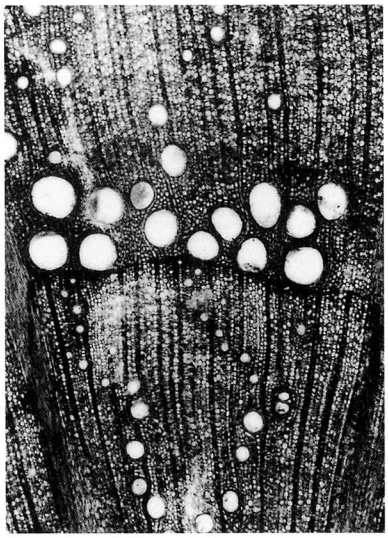
3a. クリ　MYG-3636
木口　×40.



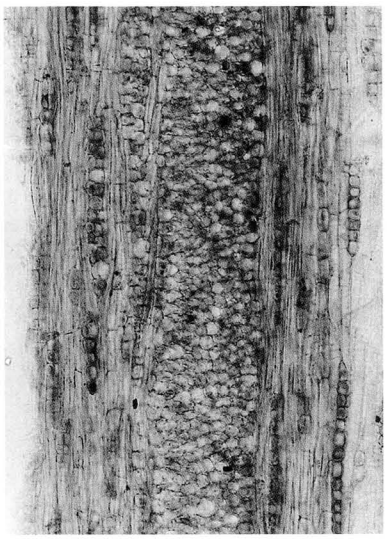
3b. 同　板目　×100.

3c. 同　柾目　×200.

写真２　山王囲遺跡出土木材顕微鏡写真
Micrographs of woods excavated from the Sanno-gakoi site

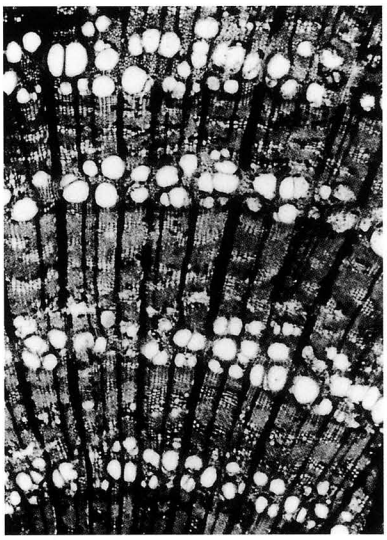


4a. クヌギ節　MYG-3672
木口　×40.



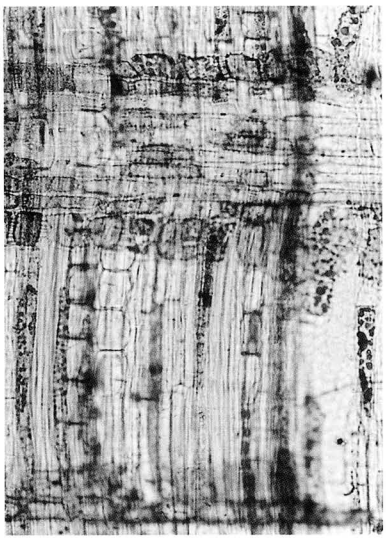
4b. 同　板目　×100.

4c. 同　柾目　×200.

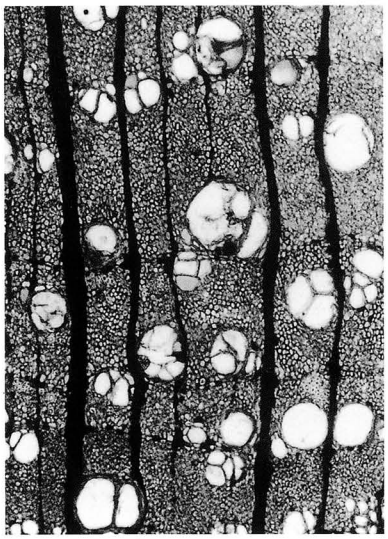


5a. ニレ属　MYG-3618
木口　×40.

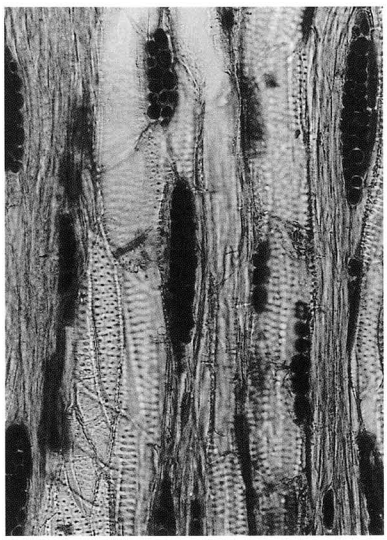
5b. 同　板目　×100.



5c. 同　柾目　×200.



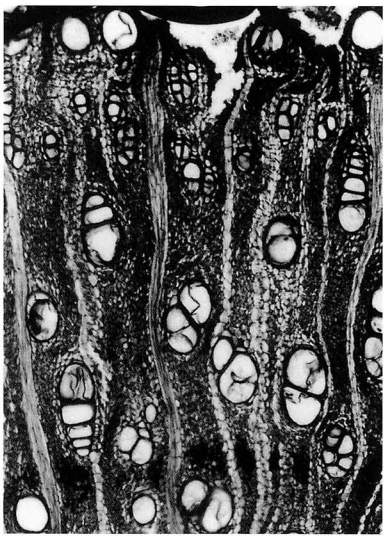
6a. ニレ属　根　MYG-3670
木口　×40.



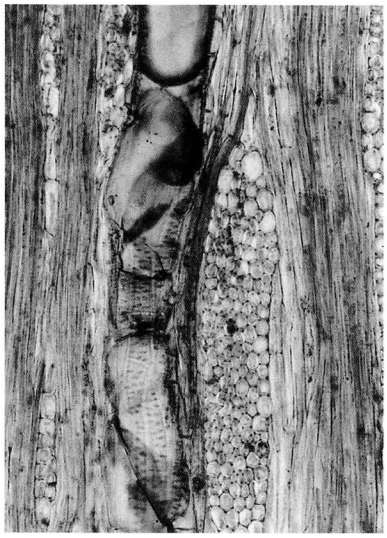
6b. 同　板目　×100.

6c. 同　柾目　×200.

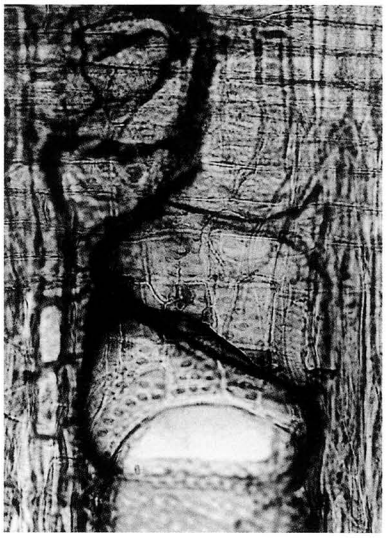
写真 3　山王囲遺跡出土木材顕微鏡写真
Micrographs of woods excavated from the Sanno-gakoi site



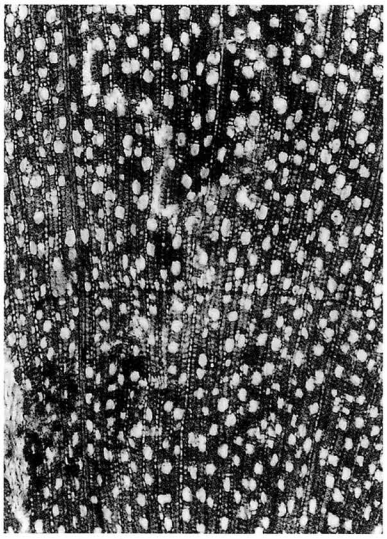
7a. ヤマグワ　根　MYG-3621
木口　×40.



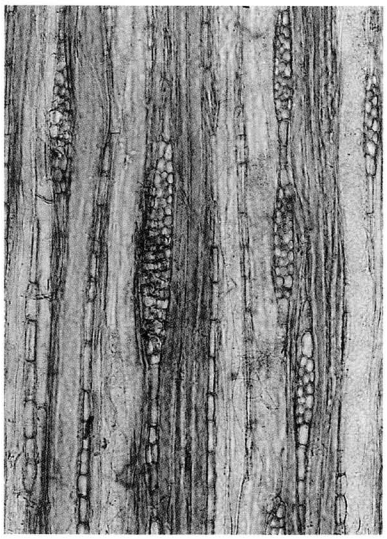
7b. 同　板目　×100.



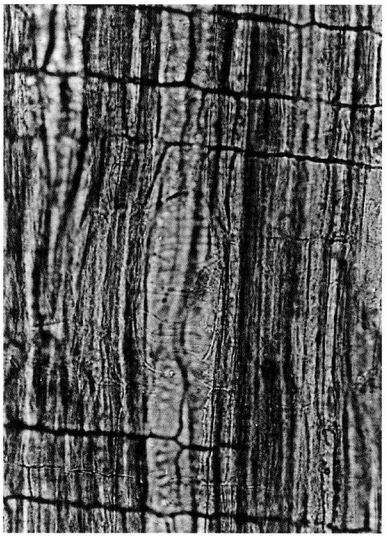
7c. 同　柾目　×200.



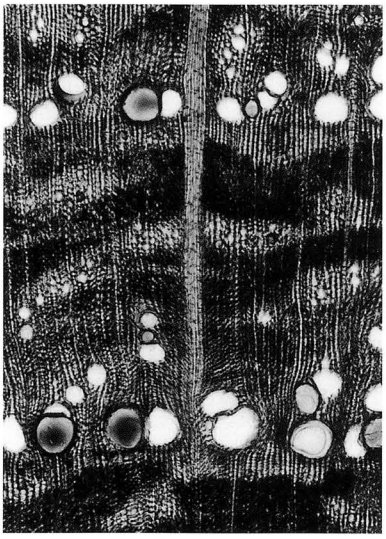
8a. ヒサカキ　MYG-3630
木口　×40.



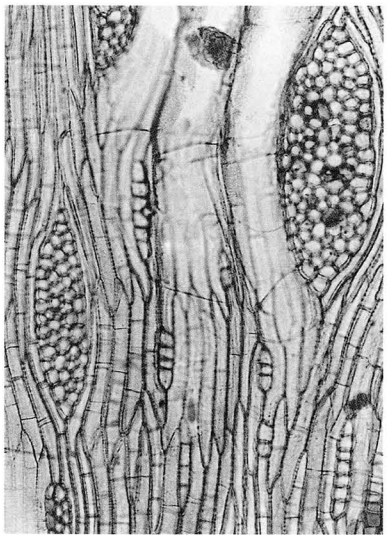
8b. 同　板目　×100.



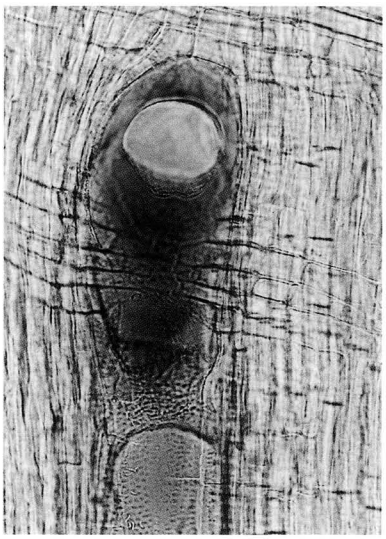
8c. 同　柾目　×200.



9a. サイカチ　MYG-3668
木口　×40.

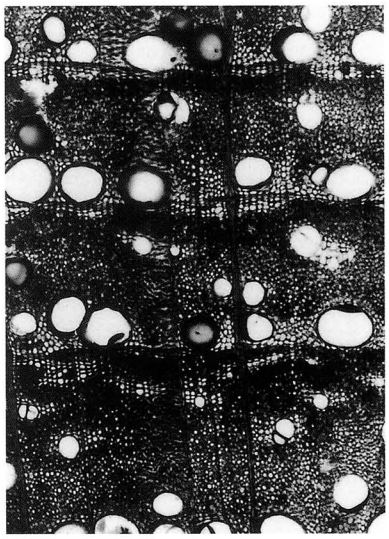


9b. 同　板目　×100.

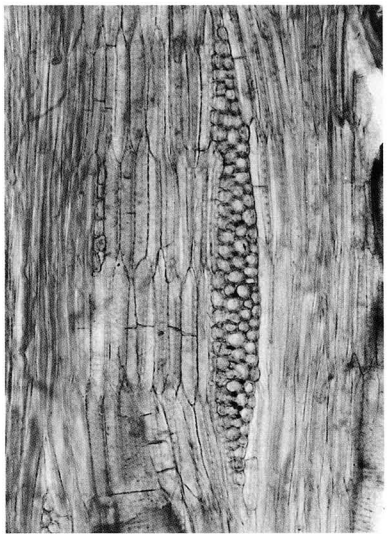


9c. 同　柾目　×200.

写真 4　山王囲遺跡出土木材顕微鏡写真
Micrographs of woods excavated from the Sanno-gakoi site

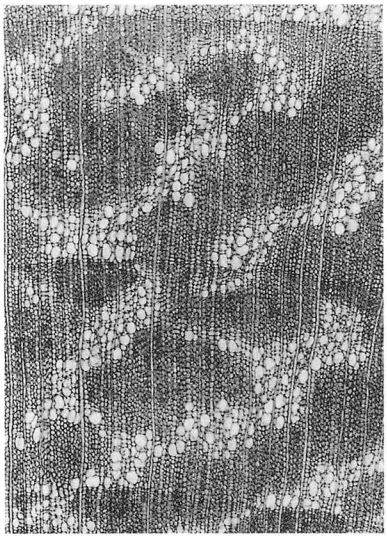


10a. イヌエンジュ　MYG-3648
木口　×40.

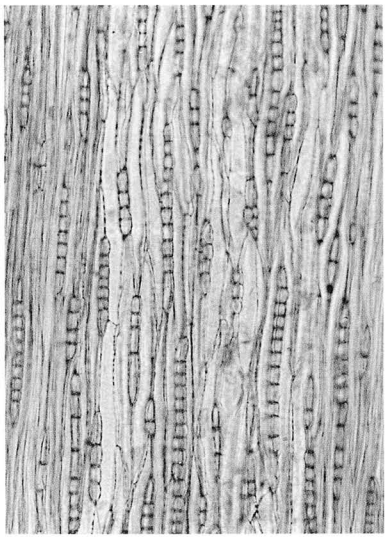


10b. 同　板目　×100.

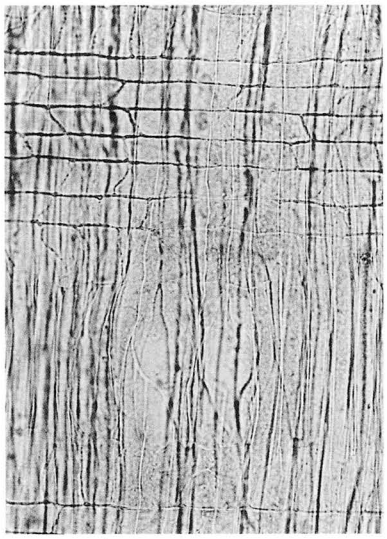
10c. 同　柾目　×200.



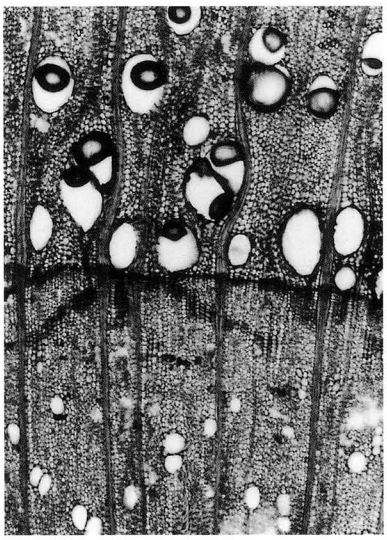
11a. コクサギ　MYG-3616
木口　×40.



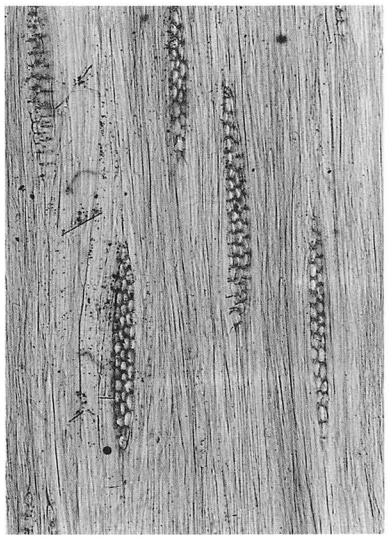
11b. 同　板目　×100.



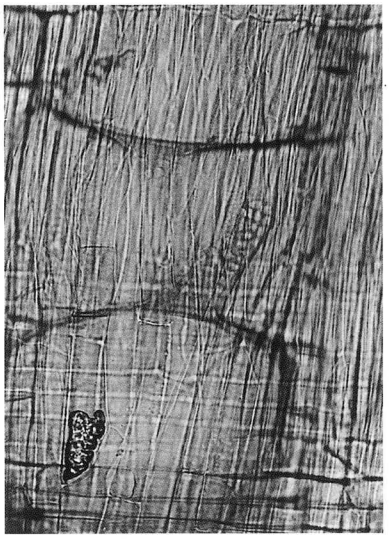
11c. 同　柾目　×200.



12a. キハダ　MYG-3603
木口　×40.

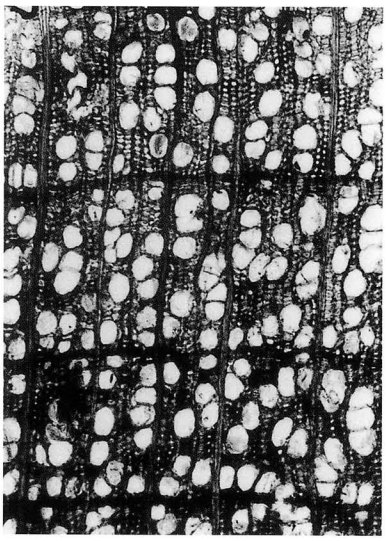


12b. 同　板目　×100.



12c. 同　柾目　×200.

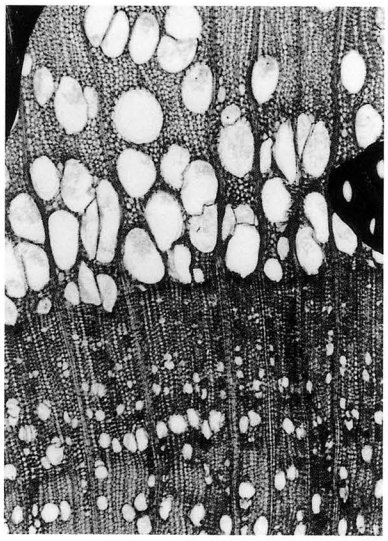
写真５　山王囲遺跡出土木材顕微鏡写真
Micrographs of woods excavated from the Sanno-gakoi site



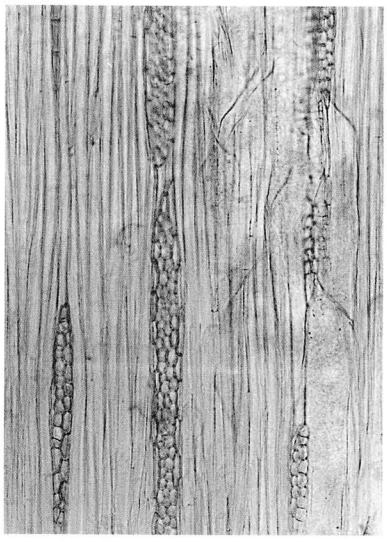
13a. ミズキ　MYG-3652
木口　×40.

13b. 同　板目　×100.

13c. 同　柾目　×200.

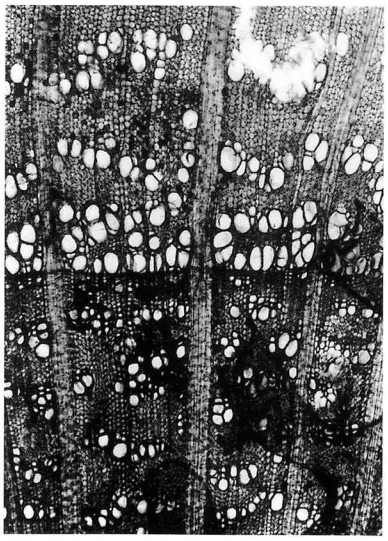


14a. ハリギリ　MYG-3612
木口　×40.

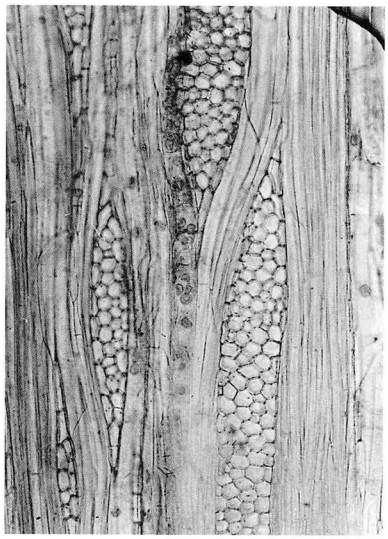


14b. 同　板目　×100.

14c. 同　柾目　×200.



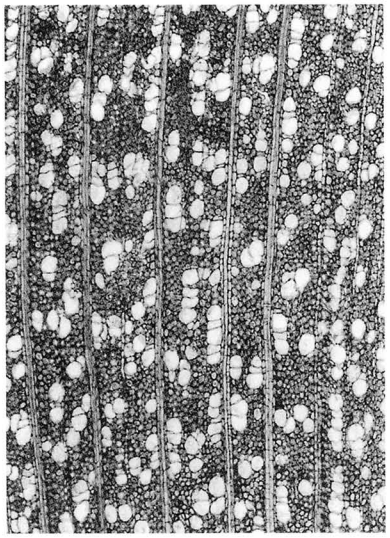
15a. ウコギ　MYG-3646
木口　×40.



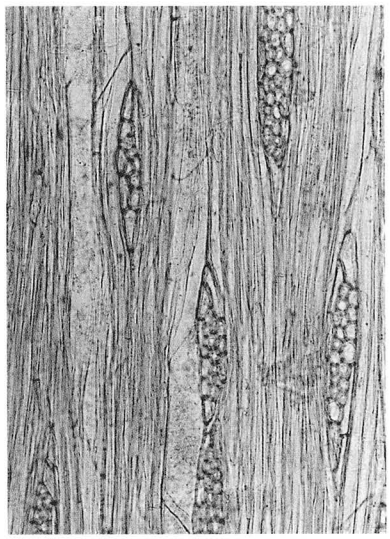
15b. 同　板目　×100.

15c. 同　柾目　×200.

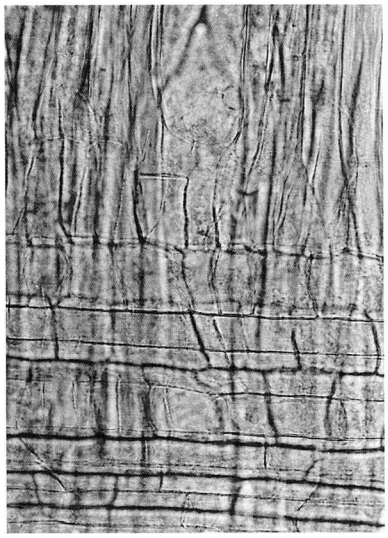
写真６　山王囲遺跡出土木材顕微鏡写真
Micrographs of woods excavated from the Sanno-gakoi site



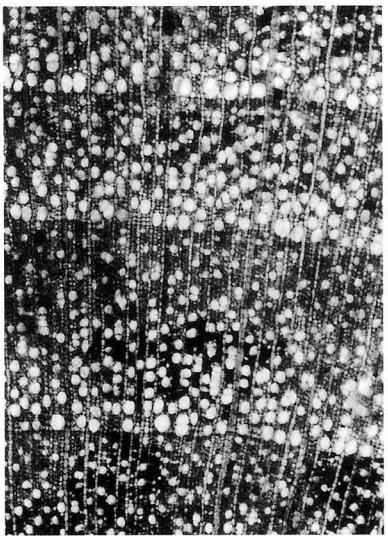
16a. ニワトコ　MYG-3613
木口　×40.



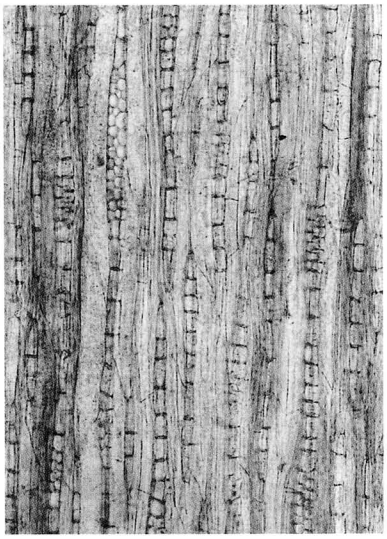
16b. 同　板目　×100.



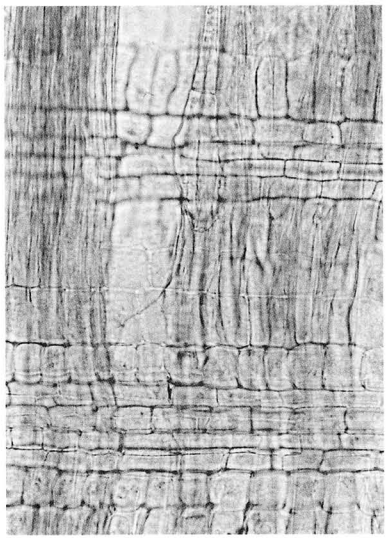
16c. 同　柾目　×200.



17a. オオカメノキ　MYG-3665
木口　×40.

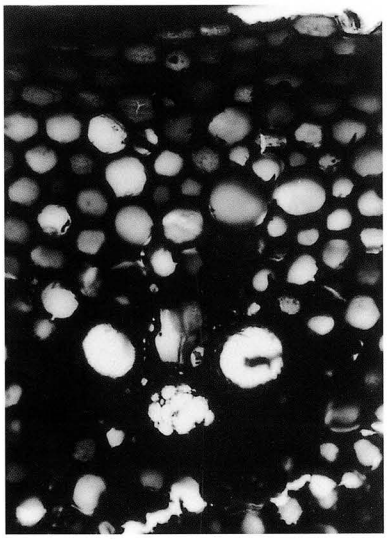


17b. 同　板目　×100.



17c. 同　柾目　×200.

18a. 竹笹類　MYG-3634
木口　×40.



18b. 同　木口　×100.

写真７　山王囲遺跡出土木材顕微鏡写真
Micrographs of woods excavated the from the Sanno-gakoi site

付　　表

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表(1)

Attribute list of pottery from the Sanno－gakoi site(1)

個体No	出土地点	遺　構	層位	時　期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・器面調整の特徴	備　考	図版No	写真No
1	P	3号配石		弥Ⅰ～Ⅱa期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ナデ		13-1	12-1-2
2	P	3号配石		弥Ⅱ期	甕	波状口縁?	Ⅰ無文（ナデ）	ナデ・ミガキ（内）ナデ		13-2	12-1-5
3	P	3号配石		晩Ⅵ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ無文（ナデ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ナデ		13-3	12-1-4
4	P	4号配石	10	晩Ⅵ～弥Ⅱa期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ無文（ナデ・ヨコミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ナデ・ヨコミガキ（内）ナデ・ミガキ	炭化物	13-4	12-1-3
5	P	5号配石（断ち割り）		晩Ⅵ～弥Ⅰ期	深　鉢	山形突起	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ匹字文・縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	13-5	12-1-6
6	P	第15号土器埋設土壙	埋　土	弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅲ変形工字文A2	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱・海綿状骨針	13-6	12-2-1
7	P	第15号土器埋設土壙	埋土１	晩期終末～弥Ⅱ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ・ミガキ）Ⅲ・Ⅳ縄文	ナデ・ミガキ・LR斜行縄文（内）ナデ・ミガキ	炭化物	13-7	12-1-1
8	P	第15号土器埋設土壙	埋　土	晩Ⅵ～弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ刻み Ⅲ平行沈線文 Ⅳ縄文	LR斜行縄文・刻み・沈線文・ナデ・ミガキ（内）ナデ・ヨコミガキ		13-8	12-2-7
9	P	第15号土器埋設土壙	埋　土	晩Ⅴ～Ⅵ期	壺	－	Ⅱ変形工字文?・平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行・横走縄文・沈線文・ナデ・ミガキ（内）ナデ	炭化物	13-9	12-2-2
10	P	ベルト	4	弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	13-10	12-2-3
11	P-BJ47	包含層	8	晩Ⅵ期	鉢	－	Ⅲ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		13-11	12-2-5
12	P	ベルト	8a	弥Ⅰ～Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）	ミガキ（内）ミガキ		13-12	12-2-11
13	P	包含層	8a	弥Ⅱ期	蓋	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ナデ・ミガキ		13-13	12-2-8
14	P	包含層	8a	弥Ⅰ～Ⅱa期	深　鉢	山形突起	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ナデ・ミガキ	炭化物	13-14	12-2-10
15	P	包含層	8a	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ変形工字文C1	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	13-15	12-2-12
16	P	包含層	9	弥Ⅱa期	甕	平坦口縁	Ⅰ無文（ナデ・ミガキ）Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ナデ・ミガキ・ヨコミガキ（内）ナデ・ミガキ	炭化物	13-16	12-2-6
17	P	サブトレンチ	9	弥Ⅱa期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		13-17	12-2-4
18	P-BK43	包含層	9	弥Ⅱa期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ変形工字文?	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	朱・炭化物	13-18	12-2-9
19	P-BK43	包含層	9	弥Ⅱa期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ変形工字文C1・平行沈線文	沈線文・ナデ・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	朱・炭化物	13-19	12-2-13
20	P	包含層	10	弥Ⅲ期	甕	平坦口縁	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ刺突列・平行沈線文	LR斜行縄文・沈線文・刺突・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	14-1	13-1-1
21	P	包含層	10	弥Ⅲ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ擬縄文	擬縄文・ヨコミガキ（内）ナデ・ヨコミガキ		14-2	13-1-2
22	P-BK48	包含層	10	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ無文（ナデ）Ⅱ平行沈線文	ナデ・沈線文（内）ナデ		14-3	14-1-13
23	P	包含層	10	弥Ⅱb期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ヨコナデ・ミガキ		14-4	13-2-2
24	P	包含層	10	弥Ⅰ～Ⅱb期	鉢	山形波状口縁	Ⅰ・Ⅳ無文（不明）Ⅲ変形工字文	沈線文・不明（内）不明		14-5	13-2-1
25	P	南壁サブトレンチ	10	晩Ⅵ期～弥Ⅱb	鉢	－	Ⅲ変形工字文・平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		14-6	14-1-10
26	P	包含層	10	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅲ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	14-7	14-1-2
27	P	包含層	10	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅳ平行沈線文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	14-8	14-1-11
28	P	包含層	10	晩Ⅵ期～弥Ⅱb	高　杯	－	Ⅲ変形工字文? Ⅳ無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）不明	朱	14-9	14-1-14
29	P	包含層	10	晩Ⅵ期～弥Ⅱb	高　杯	突起	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ変形工字文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		14-10	14-1-1
30	P-BK48	包含層	10	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ変形工字文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		14-11	14-1-12
31	P	包含層	10	弥Ⅱ期	甕	小波状口縁	Ⅰ無文（ヨコナデ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	ナデ・LR斜行縄文・沈線文（内）ヨコナデ		14-12	14-1-3
32	P	包含層	10	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ隆帯貼り付け・無文（ヨコミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ・Ⅳ縄文	隆帯貼り付け・LR横走縄文・沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	14-13	13-2-3
33	P	包含層	10	弥Ⅱ期	深　鉢	山形波状口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ナデ・ミガキ	炭化物	15-1	14-2-7
34	PS	包含層	10	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱	15-2	14-1-5
35	P-BI50	包含層	10	晩期終末～弥Ⅰ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコナデ・ミガキ）	ヨコナデ・ミガキ（内）ヨコナデ		15-3	14-1-4
36	P-BI47	包含層	10	晩期終末～弥Ⅰ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ無文（ナデ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	沈線文・LR斜行縄文・ナデ（内）ナデ		15-4	14-2-12
37	P-BJ48	包含層	10	弥Ⅱa期	甕	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコナデ）	ヨコナデ（内）ナデ		15-5	14-1-16
38	P-BJ48	包含層	10	弥Ⅰ～Ⅱ期	鉢or高杯	－	Ⅲ平行沈線文・変形工字文C1	沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	朱	15-6	14-1-9
39	P	包含層	10	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	深　鉢	－	Ⅱ無文（ナデ）Ⅲ変形工字文A	沈線文・ナデ（内）不明		15-7	14-1-15
40	P	包含層	10	弥Ⅰ期	高　杯	山形突起	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅲ変形工字文A	沈線文・粘土粒貼り付け・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	15-8	14-1-6
41	P	包含層	10	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	－	Ⅲ変形工字文A?	沈線文・不明（内）不明		15-9	14-2-4
42	P-BI49	包含層	10	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	高　杯	山形突起	Ⅰ無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ	朱	15-10	14-1-7
43	P-BJ48	包含層	10	晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅲ変形工字文A2・平行沈線文	沈線文・粘土粒貼り付け・彫り込み・ミガキ（内）ミガキ		15-11	14-1-8
44	P-BJ48	包含層	10	晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅲ変形工字文	沈線文・ヨコミガキ（内）ミガキ		15-12	14-2-3
45	P	包含層	10	弥Ⅰ期	高　坏	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ匹字文・変形工字文A2	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母・炭化物	15-13	14-2-1
46	P-BJ47	包含層	10	晩Ⅵ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ不明	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		15-14	14-2-11
47	P	包含層	10	晩Ⅵ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ無文（ナデ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ナデ（内）ナデ		15-15	14-2-10
48	P	南壁サブトレンチ	10	弥Ⅰ～Ⅱa期	浅　鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅲ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		15-16	14-2-8
49	P-BK48	包含層	10	晩Ⅴ期	台付鉢	山形突起	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅱ平行沈線文・匹字文 Ⅲ無文（ヨコミガキ）	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	朱	15-17	14-2-2
50	P	包含層	10	晩Ⅵ期	高　杯	不明	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ変形工字文A1	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		15-18	14-2-5
51	P	包含層	10	晩Ⅴ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ平行沈線文	ナデ・沈線文（内）ミガキ		15-19	14-2-6
52	P	南壁サブトレンチ	11	弥Ⅱ期	台付鉢	－	Ⅲ波状文?・平行沈線文 Ⅳ無文（ヨコミガキ）	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		15-20	14-2-9
53	P	南壁サブトレンチ	11	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ波状文・透かし孔	沈線文・ナデ（内）ナデ		15-21	14-2-13
54	P-BJ44	包含層	11	弥Ⅱa期	高　杯	山形突起	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ変形工字文C1	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		15-22	15-1-1
55	P-BK44	包含層	11	弥Ⅰ期	高　杯	山形突起	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ平行沈線文?	沈線文・ヨコミガキ（内）ミガキ・ヨコミガキ	朱	15-23	15-1-6
56	P-BK44	包含層	11	晩Ⅴ～Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ変形工字文・平行沈線文	沈線文・ナデ（内）ヨコナデ・ミガキ		15-24	15-1-5
57	P	包含層	11	晩Ⅴ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ平行沈線文・縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		16-1	15-1-4
58	P	包含層	11	晩Ⅴ～Ⅵ期	鉢	山形突起	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅲ匹字文 Ⅳ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	朱	16-2	15-1-7
59	P	包含層	11	晩期Ⅴ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		16-3	15-1-3
60	P	サブトレンチ	11	後期後半	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ヨコミガキ		16-4	15-1-2

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表(2)

Attribute list of pottery from the Sanno－gakoi site(2)

個体No	出土地点	遺　構	層位	時　期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・器面調整の特徴	備　考	図版No	写真No
61	QW	第１号竪穴状遺構	埋土１	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ）Ⅲ縄文	ナデ・LR斜行縄文（内）ナデ		16-5	15-2-7
62	QW	第１号竪穴状遺構	埋土１	弥Ⅱb期	甕	不明	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	ミガキ・LR斜行縄文（内）ミガキ	炭化物	16-6	15-2-4
63	QW	第１号竪穴状遺構	埋土１	晩Ⅵ～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ		16-7	15-2-10
64	QW	第１号竪穴状遺構	埋土１	晩Ⅵ～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ヨコミガキ	炭化物	16-8	15-2-6
65	QW	第１号竪穴状遺構	埋土１	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ垂下文	横走縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ		16-9	15-2-5
66	QW	第１号竪穴状遺構	埋土１	弥Ⅱ期	壺	－	Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	沈線文・LR横走縄文（内）ミガキ・ナデ	金雲母	16-10	15-2-2
67	QW	第１号竪穴状遺構	埋土Ⅰ	弥Ⅱa期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ平行沈線文 Ⅳ縄文 Ⅴ平行沈線文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ	金雲母	16-11	15-2-1
68	QW-X1Y2g	第１号竪穴状遺構	20・埋土１	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ波状文・透し孔	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		16-12	15-2-9
69	QW	第１号竪穴状遺構	埋土１	弥Ⅰ～Ⅱa期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ波状文	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	朱	16-13	15-2-3
70	QW	包含層	10	弥Ⅱa期	甕	小波状口縁	Ⅰ無文（ミガキ）	ミガキ（内）ミガキ		16-14	15-2-8
71	QW	包含層	11～12	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	ミガキ・LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物	16-15	16-2-1
72	QW	包含層	11	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ）Ⅲ縄文	ナデ・LR斜行縄文（内）ナデ		16-16	16-2-2
73	QW	包含層	11	弥Ⅱb期	甕	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）	ミガキ（内）ナデ	炭化物	16-17	16-1-2
74	QW	包含層	11	弥Ⅰ～Ⅱb期	深　鉢	－	Ⅲ平行沈線文 Ⅳ縄文	ナデ・LR斜行縄文・沈線文（内）ナデ・ミガキ	炭化物	17-1	16-1-5
75	QW-BYZ48～50	包含層	11	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ垂下文	沈線文・ミガキ・LR縄文（内）ナデ	金雲母・朱	17-2	16-1-4
76	QW	包含層	11	晩Ⅵ～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）不明	炭化物	17-3	16-1-1
77	QW	包含層	11	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	17-4	16-2-3
78	QW	包含層	11～13	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	17-5	16-2-4
79	QW	包含層	11	弥Ⅰ期?	鉢	－	Ⅲ変形工字文・平行沈線文	沈線文・ヨコミガキ（内）ミガキ		17-6	16-1-3
80	QW	包含層	11	晩Ⅵ～弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅲ平行沈線	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	17-7	16-2-5
81	QW	包含層	11	弥Ⅰ期	壺	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ無文（ヨコミガキ）	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	17-8	16-2-6
82	QW	包含層	12	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ波状文	縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	炭化物・朱	17-9	16-2-11
83	QW	包含層	12	晩Ⅵ～弥Ⅱb期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		17-10	16-2-8
84	QW	包含層	12	晩Ⅵ～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	RL斜行縄文（内）ミガキ	炭化物	17-11	16-2-7
85	QW	包含層	12	弥Ⅱ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ変形工字文C2?	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	朱	17-12	16-2-10
86	QW	包含層	12	弥Ⅱa期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ波状文	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		17-13	16-2-9
87	QW-BYZ48～50	包含層	13	弥Ⅲ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ・Ⅳ変形工字文C3・沈線文・刺突	沈線文・LR斜行縄文・刺突・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	17-14	17-1-8
88	QW	包含層	13	弥Ⅲ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ擬縄文	擬縄文（内）ナデ・ミガキ	炭化物	18-1	17-2-10
89	QW	包含層	13	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ）Ⅲ縄文	ナデ・LR斜行縄文（内）ナデ		18-2	17-1-2
90	QW-BY49	包含層	13	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ヨコミガキ（内）ナデ	炭化物	18-3	17-2-9
91	QW-BX49	包含層	13	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ縄文	LR縄文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		18-4	17-2-7
92	QW	包含層	13	晩Ⅵ～弥Ⅱb期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		18-5	17-1-3
93	QW-BX49	包含層	13	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ平行沈線文	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		18-6	17-1-1
94	QW	包含層	13	弥Ⅱb期	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	炭化物	18-7	17-1-5
95	QW	包含層	13	弥Ⅱb期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ・Ⅳ変形工字文C2	LR縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	朱・炭化物	18-8	17-1-9
96	QW-BX49	包含層	13	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ波状文	沈線文・ヨコミガキ（内）ナデ	金雲母	18-9	17-1-7
97	QW	包含層	13	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ波状文・縄文	LR縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱	18-10	17-2-6
98	QW	包含層	13	晩Ⅵ～弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ平行沈線文	沈線文・LR斜行縄文（内）ケズリ・ナデ	朱	18-11	17-2-11
99	QW-BXZ48～50	包含層	13	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ・Ⅳ縄文	LR斜行縄文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		18-12	17-2-1
100	QW	包含層	13	弥Ⅱ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ無文（ナデ・ミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ナデ・ミガキ（内）ナデ・ミガキ		18-13	17-2-8
101	QW	包含層	13	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	18-14	17-2-2
102	QW-BX49	包含層	13	弥Ⅱ期	甕	小波状口縁	Ⅰ無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ		18-15	17-2-3
103	QW	包含層	13	晩Ⅵ～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ナデ）Ⅲ縄文	ナデ・LR斜行縄文（内）ナデ		18-16	17-1-6
104	QW-BX49	包含層	13	晩Ⅵ～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ縄文	LR横走縄文（内）ヨコミガキ		18-17	17-2-4
105	QW	包含層	13	弥Ⅱ期	鉢	突起（山形突起）	Ⅰ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	朱	18-18	17-1-4
106	QW	包含層	13	弥Ⅱ期	鉢	－	Ⅲ変形工字文C・縄文	LR縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ		18-19	17-2-5
107	QW	包含層	13	弥Ⅰ～Ⅱ期	鉢	－	Ⅲ・Ⅳ平行沈線文・縄文	LR斜行縄文・沈線文（内）ミガキ		19-1	18-1-1
108	QW	包含層	13	弥Ⅰ～Ⅱ期	鉢	－	Ⅲ変形工字文 Ⅳ縄文	LR横走縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	19-2	18-1-2
109	QW	包含層	13	弥Ⅰ～Ⅱ期	鉢	－	Ⅳ沈線文 Ⅴ無文（ナデ）	沈線文・ミガキ（内）ナデ		19-3	18-1-3
110	QW-BX49	包含層	13	弥Ⅱ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ波状文?	沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ		19-4	18-1-4
111	QW	包含層	13	弥Ⅰ～Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ沈線文	沈線文・ナデ（内）ナデ		19-5	18-1-5
112	QW-BX49	包含層	13	弥Ⅱ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	朱	19-6	18-2-2
113	QW	包含層	13	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ヨコミガキ	炭化物	19-7	18-1-10
114	QW-BX49	包含層	13	弥Ⅰ～Ⅱ期	壺	突起	Ⅰ口縁に沿った沈線・平行沈線文	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		19-8	18-1-6
115	QW	包含層	13	弥Ⅱa期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）	ミガキ（内）ミガキ		19-9	18-1-7
116	QW	包含層	13	晩Ⅵ～弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱	19-10	18-1-11
117	QW	包含層	13	晩Ⅴ～Ⅵ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅱ・Ⅲ平行沈線文・縄文	沈線文・LR斜行縄文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ		19-11	18-1-8
118	QW-BX49	包含層	13	晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・刻み	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		19-12	18-2-1
119	QW	包含層	14	弥Ⅱa期	深　鉢	平坦口縁・山形突起	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ・Ⅳ縄文	沈線文・ヨコナデ・LR斜行縄文（内）ヨコミガキ	炭化物・朱	19-13	18-1-9
120	QW	包含層	14	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ無文（ミガキ）	ミガキ（内）ミガキ	炭化物	19-14	18-2-4

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表(3)

Attribute list of pottery from the Sanno－gakoi site(3)

個体No	出土地点	遺　構	層位	時　期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・器面調整の特徴	備　考	図版No	写真No
121	QW	包含層	15	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅳ平行沈線文・縄文	縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	19-15	18-2-3
122	QW	包含層	16	弥Ⅲ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ平行沈線文・入組文・縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ		19-16	18-2-6
123	QW	包含層	16	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文(ナデ) Ⅲ縄文	ナデ・LR横走縄文（内）ナデ		19-17	18-2-5
124	QW	包含層	16	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ縄文	ヨコミガキ・LR＋L付加条縄文（内）ヨコミガキ	炭化物	19-18	19-1-1
125	QW	包含層	16	弥Ⅱb期	甕	山形波状口縁	Ⅰ無文（ナデ）Ⅱ・Ⅲ縄文	ナデ・LR横走縄文（内）ナデ	炭化物	20-1	19-1-4
126	QW	包含層	16	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	炭化物	20-2	19-1-5
127	QW	包含層	16	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ波状文・平行沈線文・縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	朱	20-3	18-2-7
128	QW	包含層	16	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ波状文・平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ヨコナデ	朱・金雲母	20-4	19-2-3
129	QW	包含層	16	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		20-5	19-1-6
130	QW-X1Y2b	包含層	16	弥Ⅰ～Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ平行沈線文	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	朱	20-6	19-2-7
131	QW	包含層	16	弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ縄文	LR斜行縄文（内）ヨコミガキ	炭化物	20-7	19-1-2
132	QW-X0Y2b	包含層	16	弥Ⅰ～Ⅱ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅱ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ		20-8	19-1-7
133	QW	包含層	16	弥Ⅰ～Ⅱ期	鉢	－	Ⅳ平行沈線文 Ⅴ無文（ナデ）	沈線文・ミガキ		20-9	19-1-8
134	QW	包含層	16	弥Ⅱ期	壺	－	Ⅲ・Ⅳ平行沈線文・変形工字文・縄文	RL斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	20-10	19-2-2
135	QW	包含層	16	弥Ⅱ期	壺	－	Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ縄文	ヨコミガキ・LR縄文（内）ヨコミガキ	炭化物	20-11	19-1-3
136	QW	包含層	16	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ無文（ナデ・ミガキ）Ⅲ縄文	ナデ・LR斜行縄文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ		20-12	19-2-10
137	QW	包含層	16	弥Ⅰ～Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ナデ・ミガキ		20-13	19-2-6
138	QW	包含層	16	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ縄文	LR斜行縄文（内）ヨコミガキ	炭化物	20-14	19-2-8
139	QW	包含層	20	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコナデ・ヨコミガキ）Ⅲ縄文	ヨコナデ・ヨコミガキ・LR＋L付加条縄文（内）ミガキ・ヨコナデ		20-15	20-2-1
140	QW	包含層	17	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ無文（ナデ・ミガキ）	ナデ・ミガキ（内）ナデ・ミガキ		20-16	19-2-9
141	QW	包含層	20	弥Ⅱb期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ヨコミガキ	朱	20-17	19-2-1
142	QW	包含層	16	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ・Ⅳ縄文	ヨコミガキ・LR斜行縄文（内）ヨコミガキ	炭化物	21-1	20-1-1
143	QW	包含層	20	弥Ⅱb期	鉢	－	Ⅲ変形工字文C2 Ⅳ縄文	沈線文・LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ	朱	21-2	20-2-2
144	QW-X2Y2a	包含層	20	弥Ⅱ期	鉢	－	Ⅲ変形工字文C?	沈線文・ミガキ（内）ナデ		21-3	19-2-4
145	QW	包含層	20	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅲ変形工字文C1 Ⅳ縄文	LR横走縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱・金雲母・炭化物	21-4	19-2-5
146	QW	包含層	20	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ミガキ	炭化物	21-5	20-2-7
147	QW	包含層	22	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	ミガキ・LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物	21-6	21-1-7
148	QW	包含層	22	晩Ⅵ期～弥Ⅱb	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ	炭化物	21-7	21-1-6
149	QW	包含層	22	弥Ⅰ～弥Ⅱb期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱・金雲母	21-8	20-2-3
150	QW	包含層	22	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ波状文・縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱・金雲母	21-9	20-2-5
151	QW	包含層	22	弥Ⅱ期	甕	－	Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ナデ		22-1	21-1-4
152	QW	包含層	22	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	22-2	21-2-4
153	QW-X0Y1a	包含層	22	晩Ⅵ～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ		22-3	20-2-4
154	QW-X1Y1b	包含層	22	弥Ⅱ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文・変形工字文C	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		22-4	21-1-3
155	QW-X1Y2d	包含層	22	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ波状文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		22-5	20-2-6
156	QW	包含層	22	弥Ⅱ期	壺	－	Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ縄文	ナデ・LR斜行縄文（内）ヨコミガキ		22-6	21-1-1
157	QW-X1Y1c	包含層	22	晩Ⅵ～弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	22-7	21-2-3
158	QW	包含層	22	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ無文（ミガキ）	ミガキ（内）ヨコミガキ	朱	22-8	21-2-9
159	QW-X0Y1c	包含層	22	弥Ⅰ～Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	22-9	21-2-2
160	QW	包含層	22	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ	炭化物	22-10	21-1-5
161	QW-X1Y1b	包含層	22	弥Ⅱa期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		22-11	21-2-5
162	QW-X1Y1a	包含層	22	弥Ⅰ～Ⅱa期	鉢	突起（山形突起）	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ無文（ミガキ）（口唇部に沈線）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	22-12	21-2-8
163	QW-X1Y1c	包含層	22	弥Ⅱa期	甕	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ縄文	ヨコミガキ・LR斜行縄文（内）ヨコミガキ		22-13	21-1-2
164	QW	包含層	22	晩Ⅵ～弥Ⅰ期	高　杯	－	Ⅲ平行沈線文 Ⅳ変形工字文A	（内）ヨコミガキ	朱	22-14	21-2-1
165	QW-X1Y1g	包含層	22	晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ		22-15	21-2-7
166	QW-X2Y0i	包含層	24	弥Ⅱa期	深　鉢	山形波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ナデ	炭化物	22-16	22-1-1
167	QW	包含層	24	弥Ⅰ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ・ミガキ）Ⅲ縄文	ナデ・LR斜行縄文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ		22-17	21-2-6
168	QW	包含層	24	弥Ⅱ期	深　鉢	山形波状口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		22-18	22-1-3
169	QW	包含層	25	弥Ⅰ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	ミガキ・LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物	22-19	22-1-4
170	QW	包含層	25	弥Ⅰ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ）Ⅲ縄文	ナデ・LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物	23-1	22-1-2
171	QW	包含層	24	晩Ⅵ期～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ヨコナデ・ナデ	炭化物	23-2	22-1-6
172	QW	包含層	25	弥Ⅰ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物	23-3	22-1-7
173	QE	第10号土器埋設土壙		弥Ⅱ期	壺	突起（頂部に押圧のある山形突起）	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ無文	沈線・ヨコミガキ		23-4	22-1-5
174	QE	第10号土器埋設土壙		弥Ⅰ期～弥Ⅱ期	深　鉢	－	Ⅲ平行沈線文・縄文	縄文・沈線		23-5	22-2-1
175	QE	第10号土器埋設土壙		晩Ⅵ期～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ無文 Ⅱ縄文	ヨコナデ・縄文		23-6	22-2-2
176	QN	包含層	9	晩Ⅳ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ雲形文	LR斜行縄文・沈線・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	23-7	22-2-8
177	QN	包含層		弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅲ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	金雲母	23-8	22-2-6
178	R(W)-BY68	ピット396	埋　土	弥Ⅱa期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ変形工字文C1	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	23-9	22-2-7
179	R(W)-BY68	ピット396	埋　土	弥Ⅰ～Ⅱ期	高　杯	平坦口縁・山形突起	Ⅰ無文（ミガキ），（口唇部に沈線）Ⅲ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		23-10	22-2-3
180	R(W)	ピット397	埋　土	弥Ⅱ期	甕	小波状口縁・押圧	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ミガキ		23-11	22-2-5

付表1　山王囲遺跡出土土器観察表(4)

Attribute list of pottery from the Sanno－gakoi site(4)

個体No.	出土地点	遺　構	層位	時　期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・器面調整の特徴	備　考	図版No.	写真No.
181	R(W)	ピット397	埋　土	晩Ⅵ期～弥Ⅱa	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ縄文	LR斜行縄文（内）ヨコナデ・ナデ		23-12	22-2-4
182	R(W)	ピット397	埋　土	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ波状文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		23-13	22-2-9
183	R(W)-BY68	ピット399	埋　土	弥Ⅰ期	高　杯	－	Ⅳ平行沈線文，縄文	LR斜行縄文・沈線・ミガキ・（内）ミガキ		23-14	23-1-5
184	R(W)	ピット402	埋　土	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコナデ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ヨコナデ（内）ヨコナデ	炭化物	23-15	23-1-3
185	R(W)-BX68	ピット402	埋　土	弥Ⅱb期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ），（口唇部に沈線）Ⅲ変形工字文C2 Ⅳ縄文	沈線文・LR斜行縄文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ・ミガキ	炭化物・金雲母	24-1	23-1-1
186	R(W)	ピット402	埋　土	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ平行沈線文，波状文	沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱	24-2	23-1-2
187	R(W)	ピット402	埋土1	弥Ⅱa期	鉢or高杯	－	Ⅲ・Ⅳ変形工字文C1	沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱・白色砂粒	24-3	23-1-4
188	R(W)	ピット405	埋　土	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	高　杯	不明	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ヨコナデ		24-4	23-1-6
189	R(W)-BY68	ピット406	埋　土	弥Ⅱ期	高　杯	平坦口縁・突起	Ⅰ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ・ナデ	朱	24-5	23-1-7
190	R(W)-BY68	包含層	1b	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ縄文	LR横走縄文・ヨコミガキ（内）ミガキ	R-69と同一	24-6	23-1-13
191	R(W)-BY68	包含層	1b	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ縄文	LR横走縄文・ヨコミガキ（内）ミガキ	R-69と同一	24-7	23-1-12
192	R(W)-BY68	包含層	1b	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	朱	24-8	23-1-11
193	R(W)-BY68	包含層	1b	弥Ⅱb期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ナデ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ナデ（内）ヨコミガキ	朱	24-9	23-1-10
194	R(W)-BY68	包含層	1b	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ波状文，平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ナデ	金雲母	24-10	23-1-9
195	R(W)-BY68	包含層	1b	弥Ⅱb期	高　杯	波状口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅲ変形工字文	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	朱・炭化物	24-11	23-2-2
196	R(W)-BY68	包含層	1b	弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		24-12	23-2-11
197	R(W)-BY68	包含層	1b	弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコナデ）Ⅲ平行沈線文	沈線文・ヨコナデ（内）ナデ		24-13	23-2-12
198	R(W)-BY68	包含層	1b	晩Ⅵ期～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		24-14	23-2-5
199	R(W)-BY68	包含層	1b	晩Ⅵ期～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ナデ）Ⅲ縄文	LR縦走縄文・ナデ（内）ナデ		24-15	23-2-4
200	R(W)-BY68	包含層	1b	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅵ波状文，平行沈線文	沈線文・ヨコミガキ（内）ナデ	朱	24-16	23-1-8
201	R(W)	包含層	1b	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ波状文 透かし	沈線文・ナデ（内）ナデ		24-17	23-2-9
202	R(W)-BX68	包含層	1b	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ工字文	沈線文・LR斜行縄文・彫り込み・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	24-18	23-2-7
203	R(W)-BY68	包含層	1b	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文，（口唇部に沈線）Ⅲ無文（ナデ）	沈線文・ナデ（内）ナデ	金雲母	24-19	23-2-1
204	R(W)-BY68	包含層	1b	晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・刻み	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		24-20	23-2-10
205	R(W)-S	包含層	1b	晩Ⅳ期	鉢	平坦口縁・刻み	Ⅰ刻み，平行沈線文 Ⅱ平行沈線文 Ⅲ雲形文，縄文	沈線文・LR斜行縄文・刻み・ナデ（内）刻み・ミガキ		24-21	23-2-3
206	R(W)-BY68	包含層	1b	不明	壷	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ無文（ナデ）	沈線文・ナデ（内）ナデ	金雲母	24-22	23-2-8
207	R(W)	包含層	2上面	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母・炭化物	24-23	23-2-18
208	R(W)	包含層	2上面	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ナデ	金雲母・炭化物	24-24	23-2-17
209	R(W)	包含層	2上面	弥Ⅱb期	鉢	小波状口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ無文（ナデ）	沈線文・ナデ（内）ナデ		24-25	23-2-16
210	R(W)	包含層	2上面	弥Ⅱb期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ波状文?	不明（内）不明		24-26	23-2-6
211	R(W)	包含層	2上面	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ波状文・透かし	沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱	24-27	23-2-14
212	R(W)	包含層	2上面	晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ匹字文 Ⅲ無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	25-1	23-2-13
213	R(W)	包含層	2上面	晩Ⅵ期	鉢	－	Ⅳ変形工字文A	沈線文・粘土粒貼り付け（内）ミガキ	金雲母	25-2	23-2-15
214	R(W)-BZ58	包含層	2	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ不明	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母・炭化物	25-3	24-1-3
215	R(W)-S	包含層	2	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ平行沈線文・波状文	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	25-4	24-1-2
216	R(W)-S	包含層	2	弥Ⅱa期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ），（口唇部に沈線）Ⅲ平行沈線文，波状文 Ⅳ平行沈線文	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	25-5	24-1-1
217	R(W)-S	包含層	2	弥Ⅱa期	鉢	平坦口縁	Ⅰ工字文 Ⅲ縄文	沈線文・彫り込み・LR斜行縄文・ミガキ（内）ナデ・ミガキ	金雲母	25-6	24-1-5
218	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ヨコミガキ・ミガキ（内）ヨコミガキ		25-7	24-1-17
219	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱb期	甕	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	25-8	24-1-16
220	R(W)-BY68	包含層	2b	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ミガキ・ナデ		25-9	24-1-4
221	R(W)-BX68	包含層	2b	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ミガキ・ナデ（内）ナデ		25-10	24-1-9
222	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱb期	鉢	－	Ⅲ変形工字文C2	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	25-11	24-1-12
223	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱb期	鉢	－	Ⅲ平行沈線文，変形工字文C2	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	朱	25-12	24-1-10
224	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ波状文・透かし	沈線文・ナデ（内）ナデ		25-13	24-1-15
225	R(W)-BZ68	包含層	2b	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ波状文・透かし	沈線文・ミガキ（内）ナデ		25-14	24-1-11
226	R(W)-BX68	包含層	2b	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ平行沈線文，波状文	沈線文・ヨコミガキ（内）ミガキ	朱・金雲母	25-15	24-1-14
227	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ垂下文，縄文	沈線文・不明横走縄文・ミガキ?（内）ヨコミガキ	金雲母	25-16	24-1-13
228	R(W)	包含層	2b	弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ変形工字文	沈線文・ナデ（内）ナデ		25-17	24-1-7
229	R(W)	包含層	2b	晩Ⅵ期～弥Ⅱb	高　杯	平坦口縁	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅲ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	25-18	24-1-6
230	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅵ平行沈線文，波状文	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	25-19	24-1-8
231	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	25-20	24-2-10
232	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ縄文	LR斜行縄文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	25-21	24-2-13
233	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコナデ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	沈線文・LR斜行縄文・ヨコナデ・ナデ（内）ミガキ・ヨコナデ	金雲母・朱	25-22	24-2-14
234	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	25-23	24-2-5
235	R(W)-BY68	包含層	2b	弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）不明	金雲母	26-1	24-2-1
236	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ縄文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		26-2	24-2-6
237	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ縄文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ	炭化物	26-3	24-2-12
238	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ縄文	LR斜行縄文（内）ヨコナデ・ナデ	炭化物	26-4	24-2-4
239	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	鉢	不明	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ変形工字文C2，平行沈線文 Ⅳ縄文	沈線文・LR斜行縄文・ナデ（内）ミガキ		26-5	24-2-2
240	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ変形工字文，平行沈線文，（口唇部に沈線）	沈線文・ナデ（内）ナデ	朱	26-6	24-2-15

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表(5)

Attribute list of pottery from the Sanno－gakoi site(5)

個体No.	出土地点	遺　構	層位	時　期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・器面調整の特徴	備　考	図版No.	写真No.
241	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅲ平行沈線文，斜位短沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	26-7	24-2-8
242	R(W)-BX68	包含層	2b	弥Ⅱ期	高　杯	山形突起（ボタン状貼付突起）	Ⅰ無文（ミガキ），（口唇部に沈線）	ミガキ（内）ミガキ		26-8	24-2-11
243	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅲ波状文	沈線文・ナデ（内）ミガキ	朱	26-9	24-2-7
244	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅲ変形工字文C，平行沈線文	沈線文・ナデ（内）ナデ	朱	26-10	24-2-9
245	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ波状文	沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱	26-11	24-2-3
246	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅴ波状文	沈線文・ナデ（内）ナデ		26-12	25-1-2
247	R(W)-BX68	包含層	2b	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅵ波状文	沈線文・ナデ（内）ナデ	朱	26-13	25-1-4
248	R(W)-BY68	包含層	2b	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ波状文	沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱	26-14	25-1-17
249	R(W)	包含層	2b	弥Ⅰ期	鉢	山形波状口縁	Ⅰ無文（ミガキ），（口唇部に沈線）Ⅲ平行沈線文	沈線文・ミガキ・ナデ（内）ミガキ	朱・金雲母	26-15	25-1-1
250	R(W)	包含層	2b	晩Ⅵ期～弥Ⅱ期	高　杯	－	Ⅲ平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		26-16	25-1-11
251	R(W)-BZ68	包含層	2b	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅲ沈線文，平行沈線文 Ⅳ無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	26-17	25-1-18
252	R(W)	包含層	2b	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ変形工字文C1	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		26-18	25-1-20
253	R(W)-BY68	包含層	2b	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ波状文，平行沈線文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ		26-19	25-1-7
254	R(W)	包含層	2b	弥Ⅰ期	鉢	山形波状口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ），（口唇部に沈線）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ無文（ヨコミガキ）	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	26-20	25-1-14
255	R(W)-BY68	包含層	2b	弥Ⅰ期	鉢	不明	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅲ変形工字文A2	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母・朱	26-21	25-1-6
256	R(W)-BX68	包含層	2b	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	山形波状口縁	Ⅰ無文（ナデ）Ⅲ平行沈線文	ナデ（内）ナデ	炭化物	26-22	25-1-5
257	R(W)	包含層	2b	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ縄文	沈線文・LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物・朱	26-23	25-15
258	R(W)	包含層	2b	晩Ⅵ期	鉢	－	Ⅲ平行沈線文，変形工字文A	沈線文・粘土粒貼り付け・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		26-24	25-1-9
259	R(W)	包含層	2b	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	－	Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ平行沈線文，匹字文	沈線文・彫り込み・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	朱	26-25	25-1-10
260	R(W)	包含層	2b	弥Ⅰ期	鉢	－	Ⅲ平行沈線文，変形工字文A	沈線文・粘土粒貼り付け・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	26-26	25-1-8
261	R(W)	包含層	2b	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	高　杯	波状口縁	Ⅰ平行沈線文，（口唇部に沈線）Ⅲ平行沈線文	沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ・ナデ		26-27	25-1-3
262	R(W)	包含層	2b	晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ無文（ヨコミガキ）Ⅲ平行沈線文，変形工字文	沈線文・ヨコミガキ（内）ミガキ		26-28	25-1-12
263	R(W)-BX68	包含層	2b	晩Ⅴ期	深　鉢	大波状口縁 山形突起	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ不明	ヨコミガキ（内）ヨコミガキ・ミガキ	金雲母	26-29	25-1-13
264	R(W)-BY68	包含層	2b	晩Ⅴ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ・ヨコナデ・ナデ		26-30	25-1-19
265	R(W)	包含層	2b	晩Ⅴ期	台付浅鉢	－	Ⅴ匹字文	沈線文・彫り込み・ミガキ・ナデ（内）ミガキ・ナデ		26-31	25-1-16
266	P	4号配石		弥Ⅰ～Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ平行沈線文	沈線文・ヨコミガキ	朱	4-1	5-1
267	P	5号配石		晩期～弥生	深　鉢	－	Ⅳ・Ⅴ縄文	LR斜行縄文・（内）ミガキ		4-2	5-2
268	P	5号配石		弥Ⅰ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ）Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ縄文	ナデ・LR斜行縄文	炭化物	4-3	5-3
269	P	11号埋設		晩期～弥生Ⅰ期	深　鉢	－	Ⅳ・Ⅴ縄文	LR斜行縄文・ミガキ	海綿状骨針	4-4	5-4
270	P	12号埋設		晩期～弥生前期	深　鉢	－	Ⅲ・Ⅳ縄文	LR斜行縄文・（内）ミガキ		4-5	5-5
271	P	13号埋設		晩期～弥生前期	深　鉢	－	Ⅳ・Ⅴ縄文・木葉痕	LR斜行縄文（内）ナデ		4-6	5-6
272	P	第15号土器埋設土壙		弥Ⅰ期	壺	平坦口縁	Ⅰ平行沈線文・匹字文 Ⅱ・Ⅲ無文（ミガキ）	沈線文・粘土粒貼付・ヨコミガキ	朱	4-7	6-1
273	P	包含層	10	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ～Ⅳ縄文 Ⅴ木葉痕	縦走LR縄文（内）ナデ	炭化物	5-1	6-2
274	P	包含層	10	弥Ⅰ～Ⅱ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ・ミガキ）Ⅲ・Ⅳ縄文 Ⅴ木葉痕	LR斜行縄文・ミガキ（内）ナデ	炭化物	5-2	6-3
275	P-BJ46	包含層	10	弥Ⅲ期	壺	－	Ⅲ・Ⅳ平行沈線文・波状文・縄文	沈線文・LR斜行縄文・ミガキ	朱・炭化物	5-3	6-7
276	P	包含層	11	弥Ⅱa期	高　杯	－	Ⅴ平行沈線文	沈線文・ヨコミガキ	朱	5-4	6-5
277	QW	14号埋設		晩Ⅵ～弥Ⅰ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ヨコミガキ）Ⅲ・Ⅳ縄文 Ⅴ木葉痕	LR斜行縄文・ナデ・ヨコミガキ	炭化物	5-5	6-6
278	QW	第１号竪穴状遺構	埋土１	弥Ⅰ～Ⅱ期	深　鉢	－	Ⅳ縄文 Ⅴ無文（ナデ）	LR斜行縄文	炭化物	5-6	6-4
279	QW	第１号竪穴状遺構	埋土１	弥Ⅱa期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ平行沈線文 Ⅳ縄文 Ⅴ平行沈線文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ	朱・金雲母	5-7	6-8
280	QW	包含層	11	弥Ⅱa期	深　鉢	平坦口縁・山形突起	Ⅰ突起下に短沈線 Ⅱ平行沈線文 Ⅲ・Ⅳ縄文 Ⅴ木葉痕	LR横走縄文・沈線文・ヨコミガキ	朱・炭化物	5-8	7-1
281	QW	包含層	11	弥Ⅰ～Ⅱ期	壺	－	Ⅱ～Ⅳ無文（ナデ）	ナデ		5-9	7-3
282	QW	包含層	11	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ～Ⅴ無文（ミガキ）	ミガキ	炭化物	5-10	7-2
283	QW	包含層	11	弥Ⅱb期	高　杯	－	Ⅴ波状文・垂下文	LR横走縄文・沈線文・ミガキ	朱	6-1	7-4
284	QW	包含層	13	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ・Ⅳ縄文	LR斜行縄文・ミガキ	炭化物	6-2	7-5
285	QW	包含層	12	晩Ⅵ期～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ～Ⅳ縄文 Ⅴ無文（ミガキ）	LR斜行縄文	炭化物	6-3	8-1
286	QW	包含層	15	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ・Ⅳ縄文	LR斜行縄文・ミガキ	炭化物	6-4	9-1
287	QW	包含層	16	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ～Ⅴ縄文	LR斜行縄文	炭化物	6-5	8-2
288	QW	包含層	22	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ・ミガキ）Ⅲ・Ⅳ縄文 Ⅴ無文（ナデ）	LR斜行縄文・ミガキ	炭化物	6-6	8-3
289	QW	包含層	22	晩Ⅵ期～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ～Ⅳ縄文	LR斜行縄文	炭化物	7-1	8-4
290	QW	包含層	22	弥Ⅱ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ～Ⅳ縄文 Ⅴ無文（ナデ）	LR斜行縄文		7-2	8-5
291	QW	包含層	25	弥Ⅰ期	壺	－	Ⅱ・Ⅳ平行沈線文 Ⅲ無文（ヨコミガキ）Ⅴ無文（ナデ）	沈線文・ミガキ	朱	7-3	8-6
292	QW	包含層	24	弥Ⅰ期	鉢	突起（頂部の向き合う２個一対の山形突起）	Ⅰ平行沈線文 Ⅱ匹字文 Ⅲ縄文	縄文・沈線・ケズリ込み・粘土粒貼付・ヨコミガキ	朱	7-4	11-1
293	QW	包含層	24	晩Ⅵ期～弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ～Ⅳ縄文 Ⅴ木葉痕	LR斜行縄文	炭化物	7-5	9-2
294	QW	包含層	24	弥Ⅰ期	深　鉢	山形波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ・Ⅳ縄文	LR斜行縄文・ミガキ	炭化物	7-6	9-3
295	QW-X2Y1g	包含層	24	弥Ⅰ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ミガキ）Ⅲ・Ⅳ縄文	LR斜行縄文・ミガキ・ナデ		8-1	10-1
296	QW	包含層	24	弥Ⅰ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ無文（ナデ）Ⅲ・Ⅳ縄文 Ⅴ無文（ナデ）	ナデ・LR斜行縄文		8-2	10-2
297	QW	包含層	24	弥Ⅰ期	高　杯	突起（山形突起・貼付突起）	Ⅰ平行沈線文 Ⅲ変形工字文A Ⅳ無文（ミガキ）Ⅴ平行沈線文	沈線文・粘土粒貼付・ミガキ	朱・炭化物	9-1	11-2
298	QN	包含層	9	晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ無文（ミガキ）Ⅱ平行沈線文 Ⅲ縄文	RL斜行縄文・沈線文・ミガキ	炭化物	9-2	11-3

付表２　山王囲遺跡出土土製品観察表

Attribute list of clay objects from the Sanno-gakoi site

No.	出土地点	層位	時期	種別	計測値（cm）	重さ（g）	付着物	備考	図版No.	写真No.
1	RW-BZ68	2b	晩期Ⅴ期	土偶	高さ　6.35 幅　5.53 厚さ　5.47	86.75	無	中空　頭頂部は剥落欠損 頂部に径５㎜の焼成前穿孔あり	9-4	25-2-1
2	RW-BZ68	2b	晩期～弥生Ⅱ	蓋形土製品	高さ　3.55 長径　5.56 短径　5.45	40.16	朱	中央に２個の径２㎜の焼成前穿孔あり 縁辺の約3分の1を欠損	9-3	25-2-2

付表３　山王囲遺跡出土石器・石製品観察表（1）

Attribute list of stone implement from the Sanno-gakoi site（1）

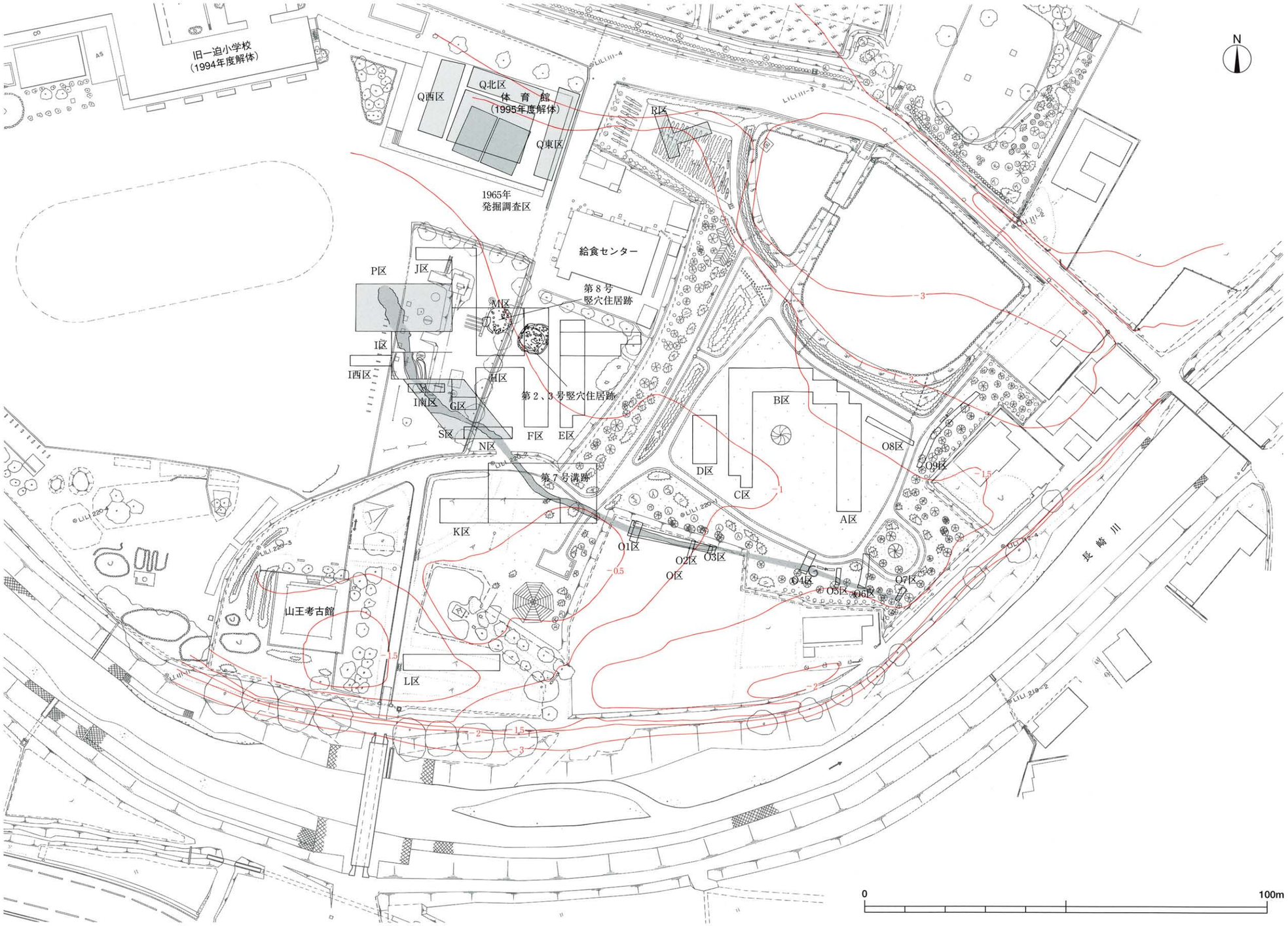
個体No.	器種	出土地点	遺構	層位	石材	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重量（g）	備考	図版No.	写真No.
1	石鏃	Ｑ西		22	碧玉	27.4	11.1	5.2	1.26	破損	10-1	26-10
2	石鏃	Ｒ（W-S）			ガラス質デイサイト	26.2	13.2	5.2	1.26	破損	10-2	26-9
3	石鏃	Ｒ（W）			流紋岩	24.2	10.6	6.4	0.92	破損	10-3	26-8
4	石鏃	Ｑ西		16	鉄石英	21.5	16.1	8.6	2.44		10-4	26-13
5	石鏃	Ｒ（W）-ＢＹ68	ピット397	埋土1	鉄石英	20.7	8.3	3.5	0.44	受熱	10-5	26-4
6	石鏃	Ｒ（W-S）			鉄石英	19.5	8.5	4.0	0.54		10-6	26-3
7	石鏃	Ｑ西		16	黒曜石	17.2	11.2	6.3	0.70	破損	10-7	26-6
8	石鏃	Ｒ（W）-ＣＡ68		1b	鉄石英	18.4	12.2	5.0	0.83		10-8	26-5
9	石鏃	Ｐ		10	玉髄	15.4	9.4	3.6	0.37	破損、付着物有り	10-9	26-2
10	石鏃	Ｒ（W）-ＣＡ68		2b	玉髄	18.1	11.4	5.5	0.75	破損	10-10	26-1
11	石鏃	Ｑ西		20	鉄石英	22.1	12.3	6.5	1.38	破損、付着物有り	10-11	26-7
12	石鏃	Ｒ		2	珪質頁岩	23.7	9.0	4.2	0.99	破損	10-12	26-11
13	石鏃	Ｑ西		11	鉄石英	20.3	12.8	3.6	1.08		10-13	26-12
14	石鏃	Ｒ（W）		2b	鉄石英	37.3	18.2	8.1	4.95	破損	10-14	26-17
15	石鏃	Ｒ（W-S）		2b	鉄石英	17.3	12.5	5.8	1.11	破損	10-15	26-14
16	石鏃	Ｑ西-Ｘ０Ｙ2ａ		17	鉄石英	21.9	13.8	5.7	1.91		10-16	26-15
17	石鏃	Ｒ（W）-ＣＡ68		4	珪質頁岩	23.6	14.9	4.4	0.91		10-17	26-16
18	石錐	Ｒ（W）-ＢＸ68	ピット400	埋土1		31.9	9.7	5.1	1.42	破損	10-18	26-19
19	石錐	Ｐ	第4号配石遺構	12	碧玉	26.7	11.0	8.8	2.28	破損	10-19	26-21
20	石錐	Ｑ西		11	碧玉	36.4	8.6	6.8	1.97	破損	10-20	26-20
21	石錐	Ｑ西	第１号竪穴状遺構	埋土1	黒曜石	20.6	8.8	3.9	0.71	破損	10-21	26-23
22	石錐	Ｒ（W-S）	ピット	4層上面	玉髄	27.4	7.0	3.9	0.76		10-22	26-18
23	石匙	Ｒ（W）	ピット396	埋土1	頁岩	43.3	56.5	11.6	21.16		10-23	26-25
24	石錐	Ｒ（W）			珪質頁岩	26.3	35.2	6.8	5.42	破損	10-24	26-22
25	石錐	Ｑ西		20		31.9	11.5	7.2	2.30	破損	10-25	26-24
26	楔形石器	Ｑ西	第１号竪穴状遺構	埋土1	鉄石英	25.0	32.4	11.5	9.27		11-1	27-1
27	不定形石器	Ｐ	第4号配石遺構	10	鉄石英	34.5	33.4	15.4	16.13		11-2	27-4
28	不定形石器	Ｐ		10	頁岩	52.0	59.9	11.7	37.19	破損	11-3	27-6
29	不定形石器	Ｐ-ＢＫ44	河川跡	埋土	鉄石英	21.4	19.0	6.8	3.10		11-4	27-2
30	不定形石器	Ｐ		10	流紋岩	41.6	69.5	11.6	26.81	破損	11-5	27-3
31	不定形石器	Ｐ		10	頁岩	37.8	40.4	18.8	29.68	破損	11-6	27-5
32	磨製石斧	Ｐ		10	砂質頁岩	69.2	43.1	28.2	131.68	破損	11-7	27-7
33	石庖丁	Ｐ		3ａ	粘板岩	56.4	39.8	6.7	20.33	破損	11-8	26-27
34	石製小玉	Ｒ		包含層（撹乱）	ヒスイ	10.4	8.9	7.0	0.98		11-9	26-26
35	磨製石斧	Ｐ		10	デイサイト	85.3	47.8	32.0	217.35	破損	12-1	27-8
36	磨製石斧	Ｐ	第3号配石遺構	12	安山岩	99.5	39.0	32.3	178.23		12-2	27-10
37	磨石	Ｐ	第5号配石遺構		花崗岩	89.2	94.1	48.6	569.40	破損	12-4	29-5
38	磨製石斧	Ｒ（W）-ＢＺ68		2b	デイサイト質凝灰岩	106.9	57.1	36.7	311.20		12-3	27-9
39	凹石				安山岩	80.1	66.6	37.8	296.00		12-5	29-1
40	磨石	Ｑ西		20	安山岩	105.9	96.6	83.3	1324.70		12-6	29-10
41	凹石	Ｐ-ＢＪ45		6	安山岩	119.5	92.7	48.3	831.30		13-1	29-9
42	凹石	Ｐ		10	砂岩	80.5	65.8	53.0	416.00		13-2	29-7
43	凹石	Ｐ		10		106.8	85.9	31.6	455.20		13-3	29-3
44	凹石	Ｑ東	第10号土器埋設土壙		花崗岩	105.5	99.1	24.0	322.30		13-4	29-6
45	凹石	Ｒ（W-N）		2b	安山岩	88.9	81.5	38.7	426.20		13-5	29-2
46	凹石	Ｐ		10	花崗岩	97.9	86.5	67.1	688.10		13-6	29-4
47	石皿	Ｐ	第3号配石遺構	12	安山岩	132.0	151.6	37.3	1135.90	破損	13-7	29-8
48	円盤状石器	Ｒ（E）		2ｂ	デイサイト質凝灰岩	63.0	63.0	22.2	118.09		14-1	28-8
49	円盤状石器	Ｒ（W）	ピット	埋土1	安山岩	69.5	64.3	21.9	184.49		14-2	28-11

付表３　山王囲遺跡出土石器・石製品観察表（2）

Attribute list of stone implement from the Sanno-gakoi site（2）

個体No.	器種	出土地点	遺構	層位	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考	図版No.	写真No.
50	円盤状石器	R（W-N）		2b	デイサイト質凝灰岩	64.8	60.4	26.6	146.19		14-3	28-9
51	円盤状石器	R-BX68	ピット401	埋土	デイサイト質凝灰岩	61.5	60.3	20.0	104.00		14-4	28-10
52	石核	P		10	デイサイト質凝灰岩	33.0	31.1	29.4	36.80		14-5	28-4
53	石核	P		10	鉄石英	35.4	39.1	23.0	33.30		14-6	28-5
54	石核	P		10	デイサイト質凝灰岩	58.5	88.1	104.8	612.10		14-7	28-3
55	石核	P		10	頁岩	116.4	152.7	48.0	873.50		15-1	27-11
56	石核	P		10	頁岩	83.7	81.0	49.4	402.10		15-2	28-7
57	石核	P		10	頁岩	73.4	75.3	46.5	294.20		15-3	28-6
58	石核	Q西		18	デイサイト質凝灰岩	83.3	98.7	65.9	501.40	SP5	15-4	28-1
59	石核	P		10	デイサイト質凝灰岩	111.9	76.3	59.6	490.90	№24	16-1	28-2
60	剥片	P		10	頁岩	33.3	41.0	9.3	10.17		16-2	30-1
61	剥片	P	第2号焼土遺構	10	頁岩	49.3	38.4	6.5	13.63	受熱	16-3	30-2
62	剥片	P		10	頁岩	41.4	45.9	11.2	20.91		16-5	
63	剥片	P		10	頁岩	25.7	47.1	6.6	6.98		16-4	30-3
64	剥片	P		10	頁岩	58.7	45.2	12.2		破損	17-1、2	30-4、5
65	剥片	P		10	頁岩	75.0	52.5	14.5		破損	17-1、3	30-4、6
66	剥片	P	第2号焼土遺構	10	頁岩	53.2	72.5	5.8		受熱	17-1、4	30-4、7
67	石鏃	R（W）		2b		18.2	12.6	3.2	0.63	破損		
68	石鏃	R（W）		2b		15.9	10.5	4.5	0.63	破損		
69	石鏃	R（E）		2b		12.5	8.9	3.8	0.39	破損		
70	不定形石器	R（W）-BX68	ピット400	埋土1	碧玉	25.4	15.9	9.0	3.15			
71	磨石	Q西		11～12	デイサイト	94.0	65.4	37.3	334.70			
72	凹石	P		10	デイサイト	117.0	62.2	42.1	462.80			
73	凹石	Q西		15	デイサイト	78.5	88.4	41.9	367.30	破損		
74	凹石	Q		10	デイサイト	93.7	85.0	45.8	446.90	破損		
75	凹石	Q西		11	安山岩	70.4	73.4	40.6	294.30	破損		
76	凹石	Q西		12	安山岩	120.4	72.8	40.0	531.10			
77	凹石	Q西		13	デイサイト	100.9	82.9	39.9	468.20			
78	凹石	P		10	デイサイト	93.9	81.2	49.6	515.60			
79	凹石	Q西-X0Y2b		16	安山岩	59.5	64.5	39.0	193.50	破損		
80	凹石	Q西		25	凝灰岩	93.1	81.4	28.3	218.00			
81	凹石	P		10	デイサイト	93.8	82.5	41.6	387.60			
82	凹石					106.7	93.0	43.6	609.00			
83	凹石	Q		20	安山岩	75.5	70.3	39.0	303.60	破損		
84	剥片	P		10	凝灰岩	40.6	27.6	8.4	8.79			
85	剥片	P		10	ガラス質デイサイト	41.6	50.4	6.2	13.57			
86	剥片	P		10	頁岩	44.4	46.0	22.2	50.62			
87	剥片	P		10	珪化凝灰岩	36.7	53.4	7.9	13.17			
88	剥片	P		10	鉄石英	41.6	31.6	17.5	19.83			
89	剥片	P		10	珪質凝灰岩	50.5	38.5	7.1	15.19			
90	剥片	P		10	鉄石英	44.5	48.9	11.0	15.73			
91	剥片	P	第1号焼土遺構	10		28.2	48.5	10.4	15.20	受熱		
92	剥片	P		10	碧玉	31.9	43.2	6.2	7.86			

図　　版

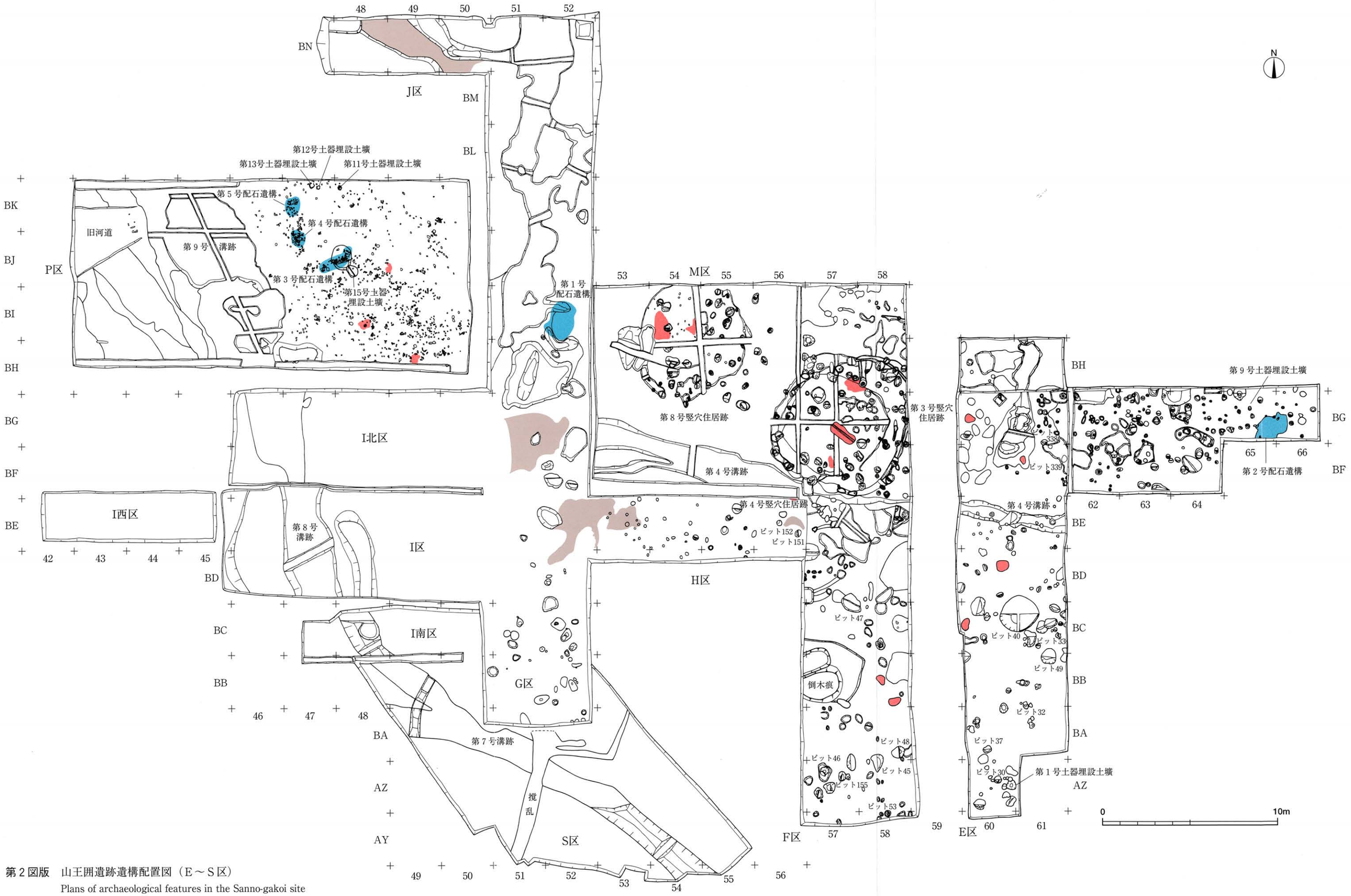


第1図版　山王囲遺跡発掘区配置図

Location of excavated grids in the Sanno-gakoi site

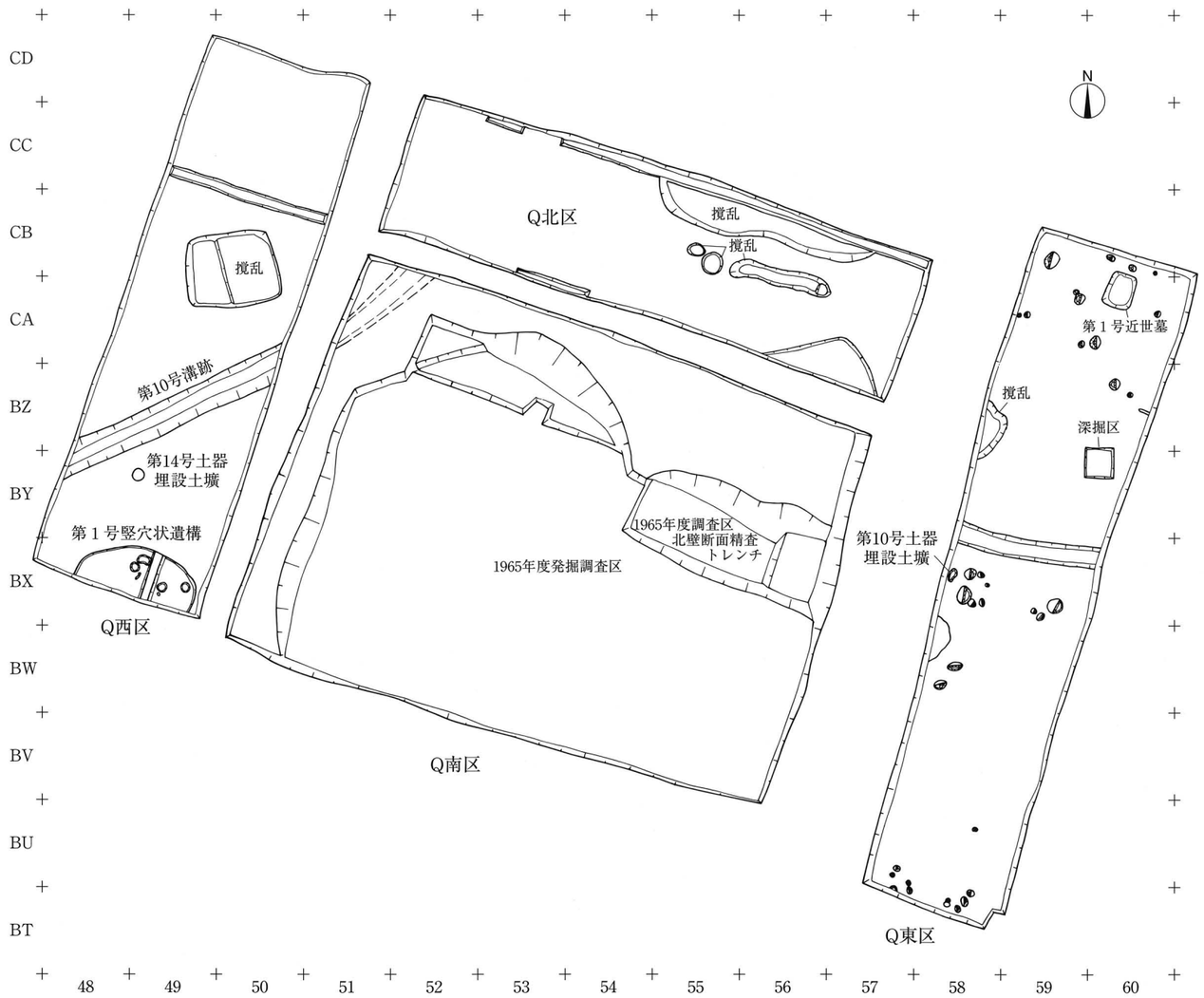
発掘区は第3次調査区

等高線は1962年明治大学考古学研究室作成の測量図による

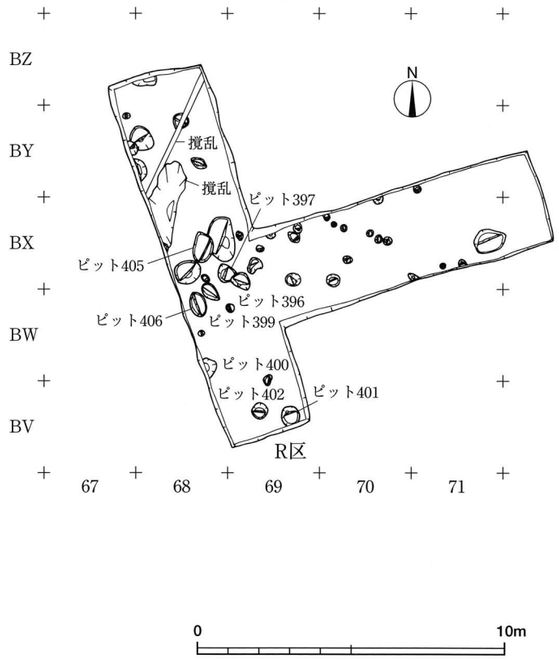


第2図版　山王囲遺跡遺構配置図（E～S区）

Plans of archaeological features in the Sanno-gakoi site



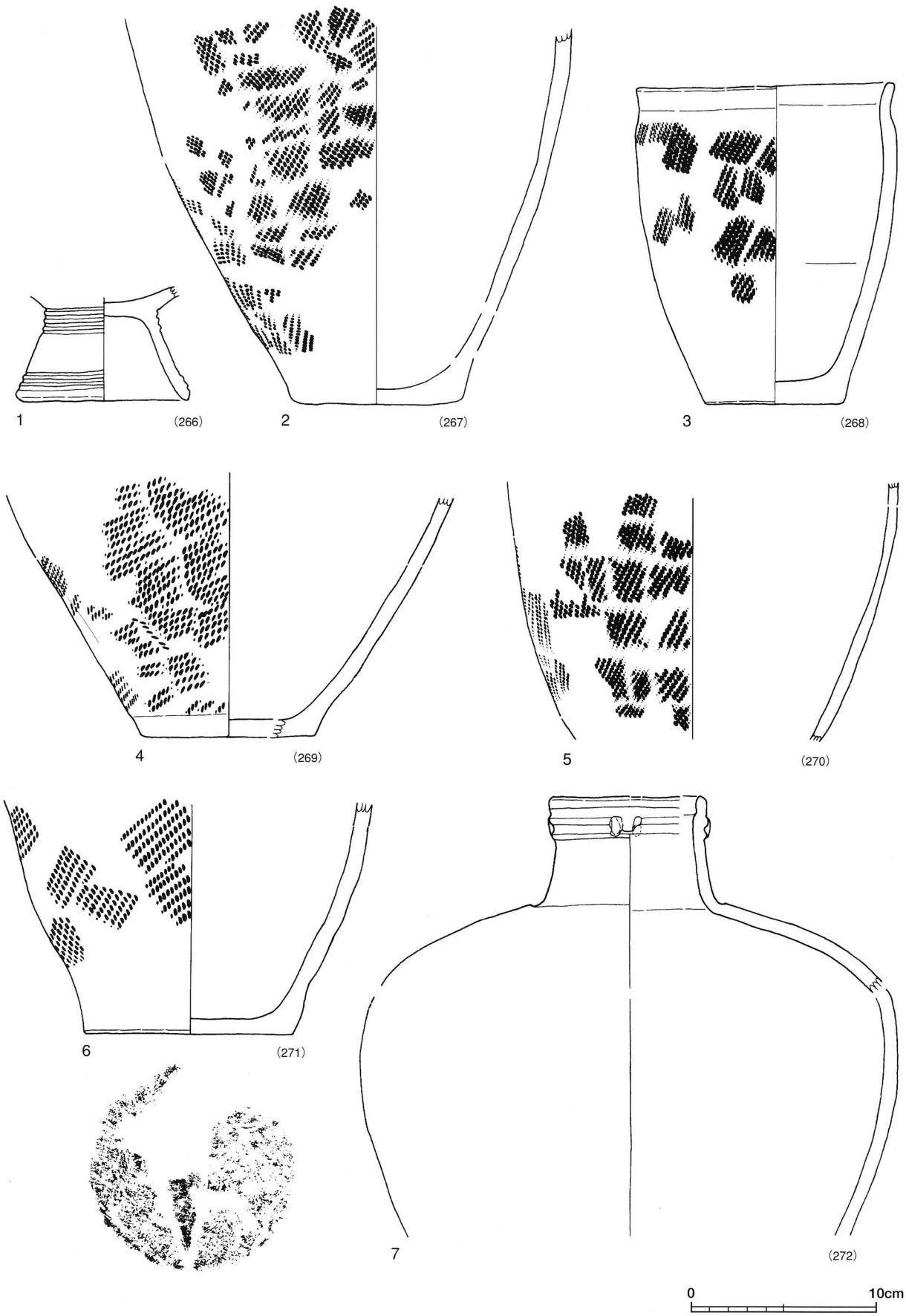
１．Ｑ区検出遺構配置図



２．Ｒ区検出遺構配置図

第３図版　山王囲遺跡遺構配置図（Ｑ・Ｒ区）

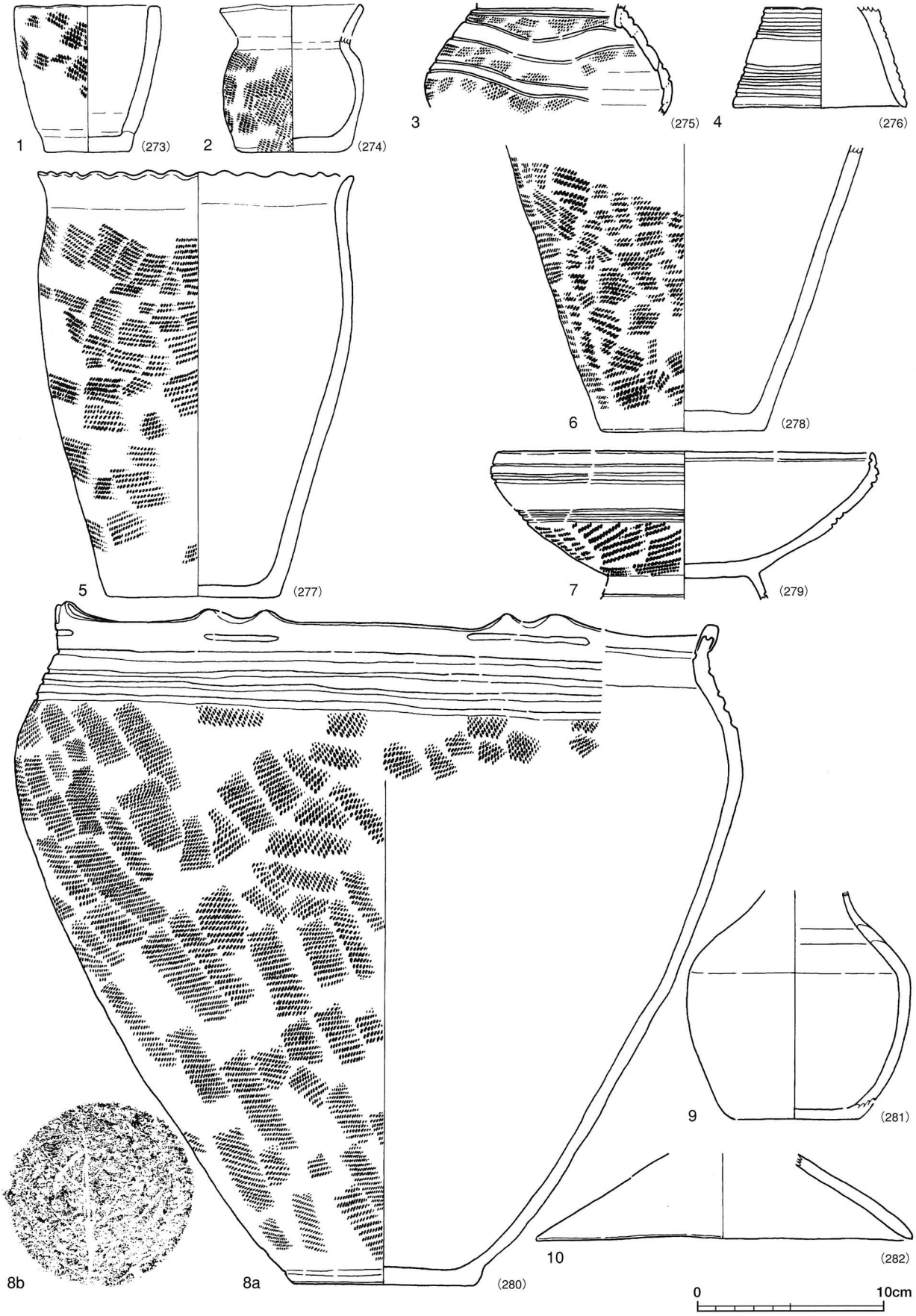
Plans of archaeological features in the Sanno-gakoi site（Q，R Grid）



第4図版　山王囲遺跡出土土器実測図

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 P区第4号配石遺構　2・3 第5号配石遺構
4 第11号土器埋設土壙　5 第12号土器埋設土壙
6 第13号土器埋設土壙　7 第15号土器埋設土壙



第５図版　山王囲遺跡出土土器実測図

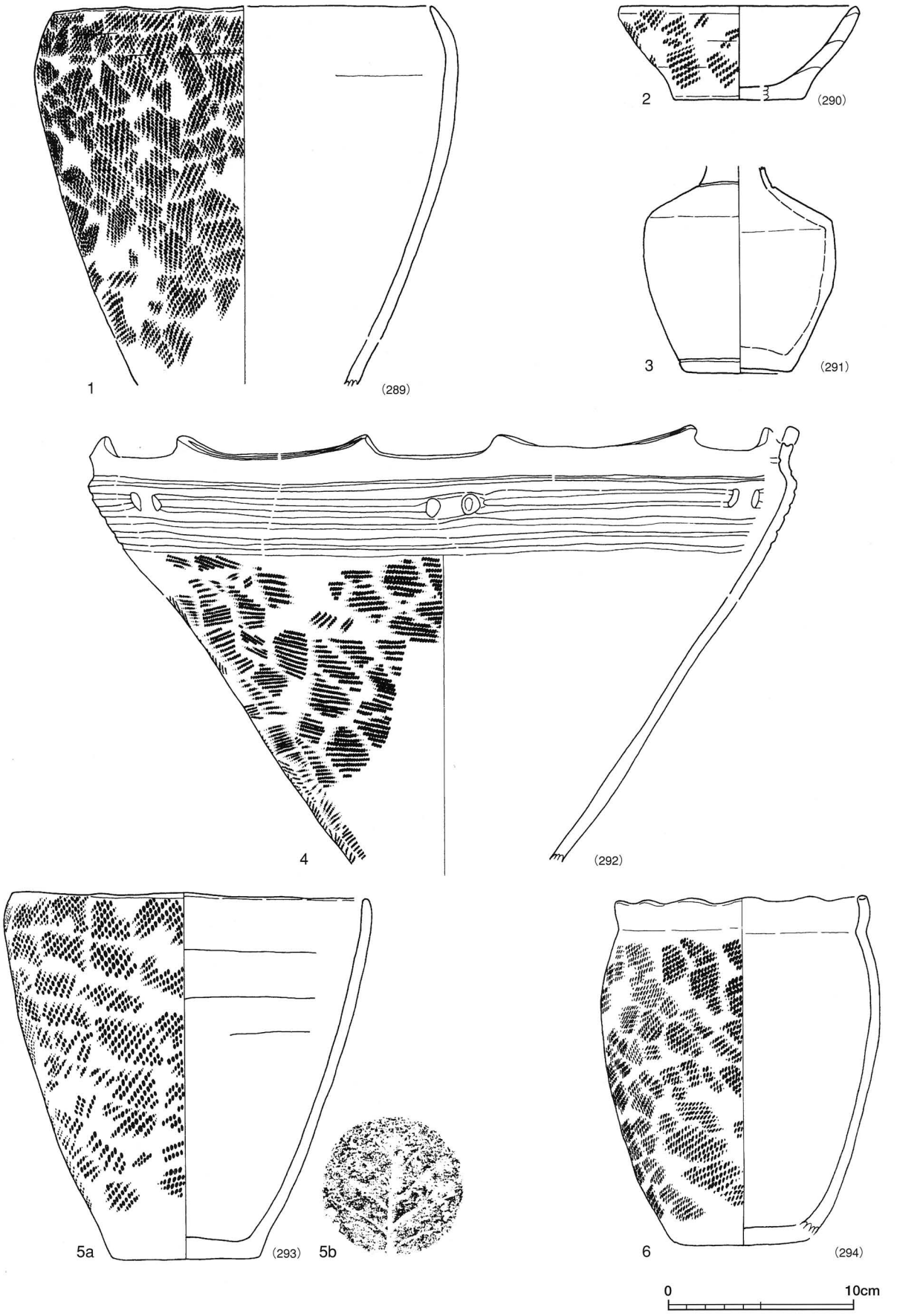
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

１～３ P区10層　４ 11層　５ Q西区第14号土器埋設土壙　６・７ 第１号竪穴状遺構　８～10 Q西区11層

第6図版　山王囲遺跡出土土器実測図

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

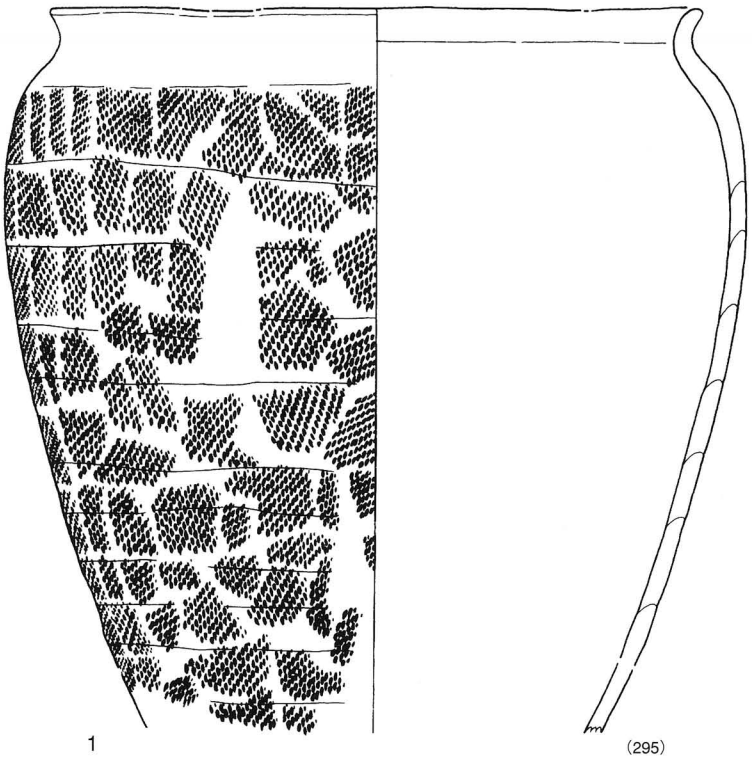
1 Q西区11層　2 13層　3 12層
4 15層　5 16層　6 22層

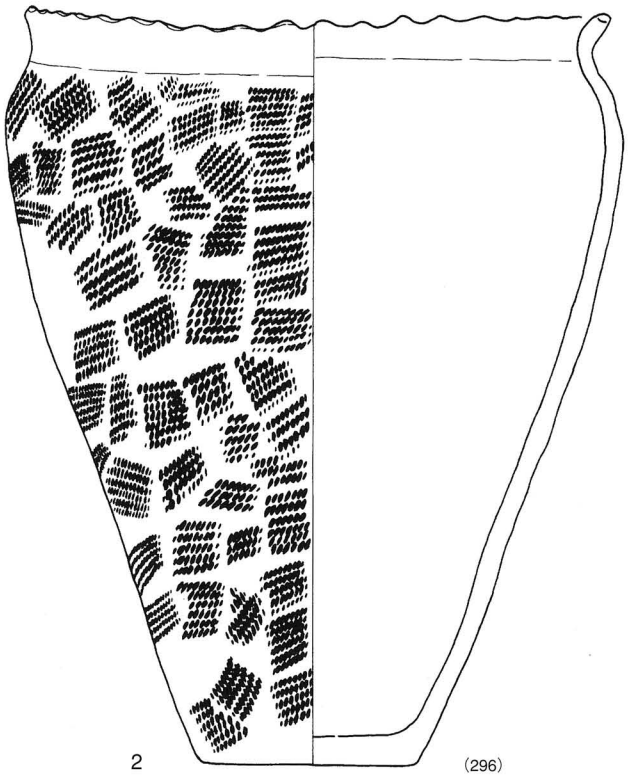


第７図版　山王囲遺跡出土土器実測図

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

１・２ Ｑ西区22層　３ 25層　４～６ 24層



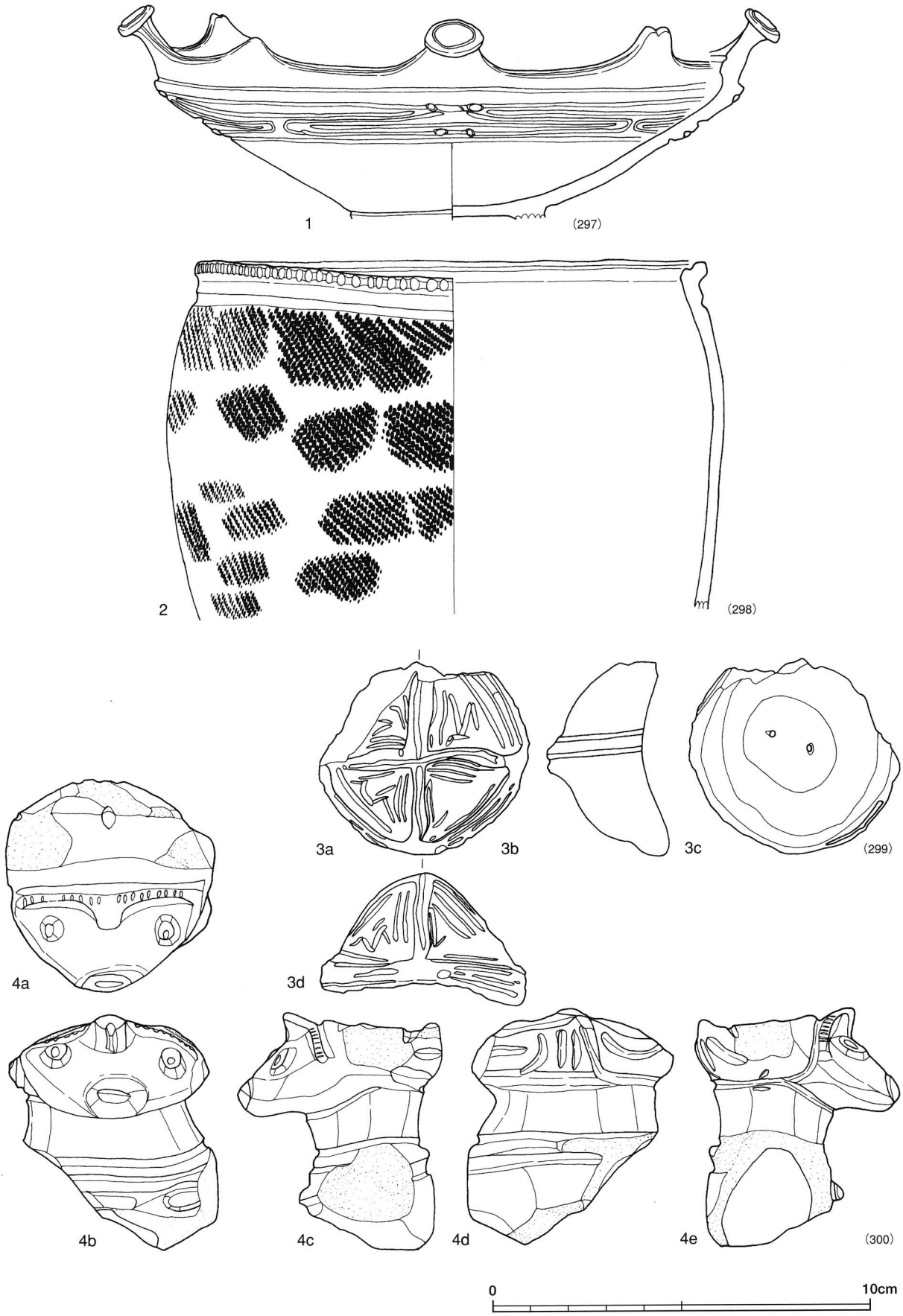


0 10cm

第８図版　山王囲遺跡出土土器実測図

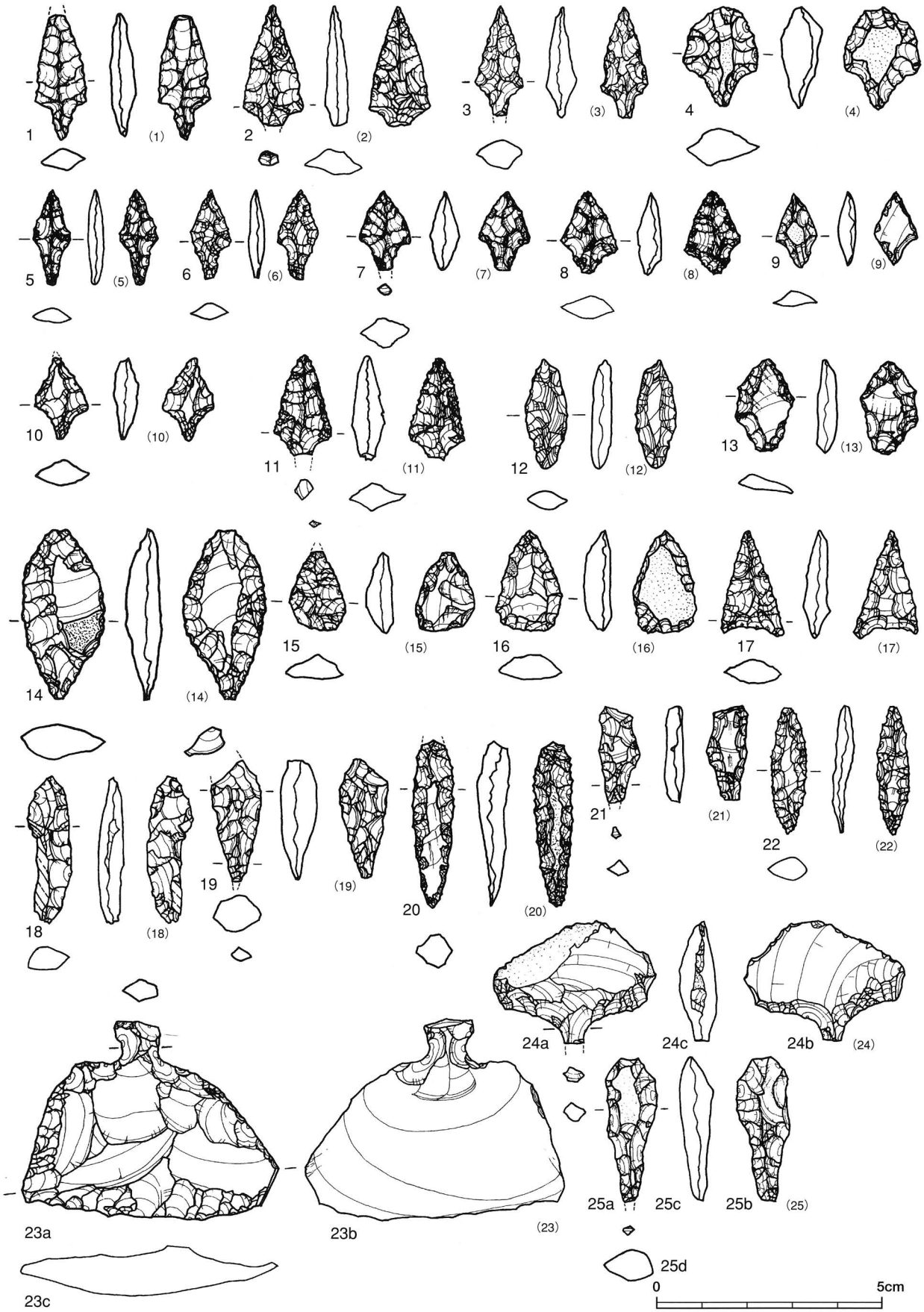
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

１・２　Ｑ西区24層



第９図版　山王囲遺跡出土土器・土製品実測図
Jomon and Yayoi pottery,clay figurine and baked clay object from the Sanno-gakoi site

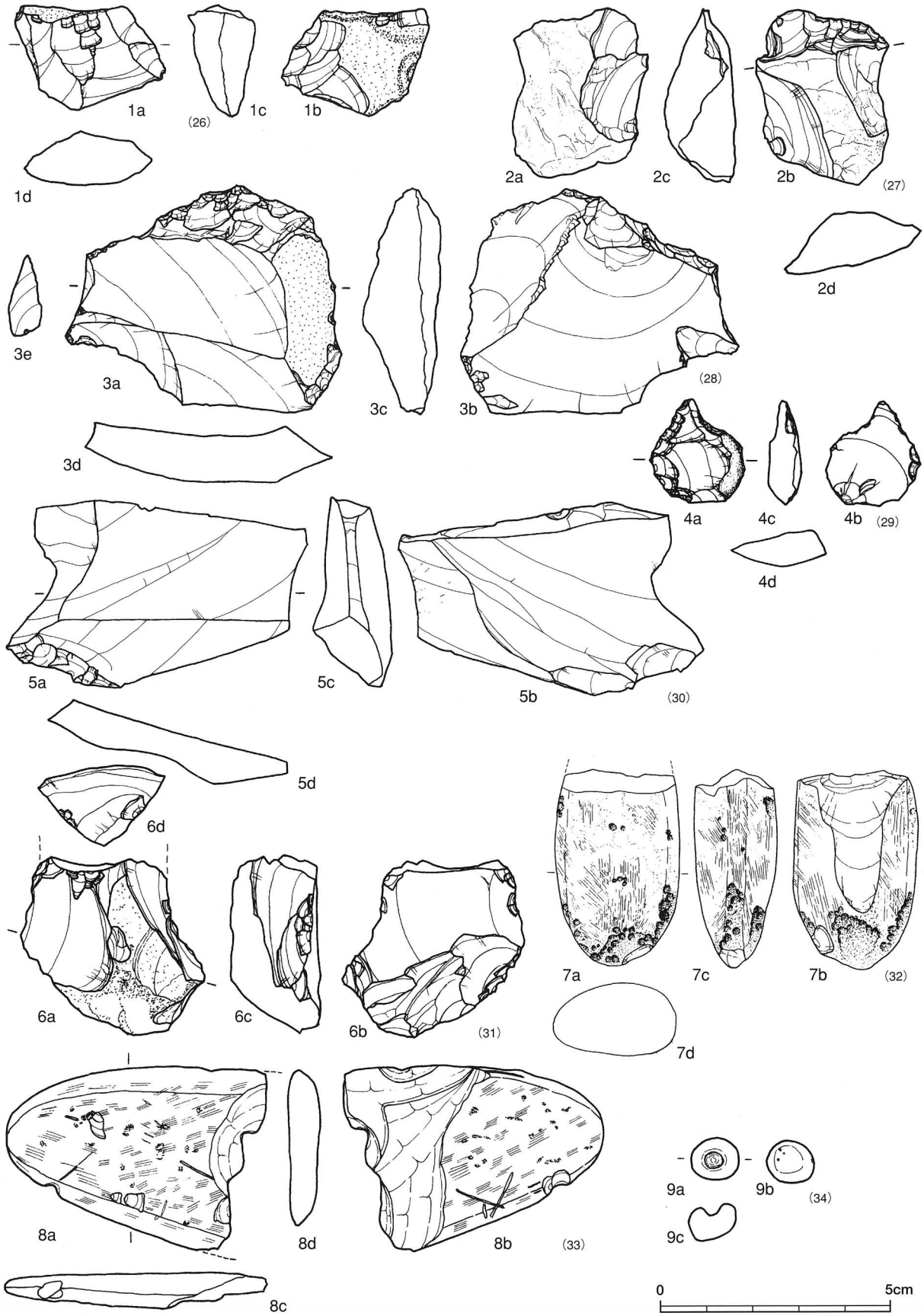
1 Q西区24層　2 Q北区９層　3 R区蓋形土製品
4 土偶



第10図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implements from the Sanno-gakoi site

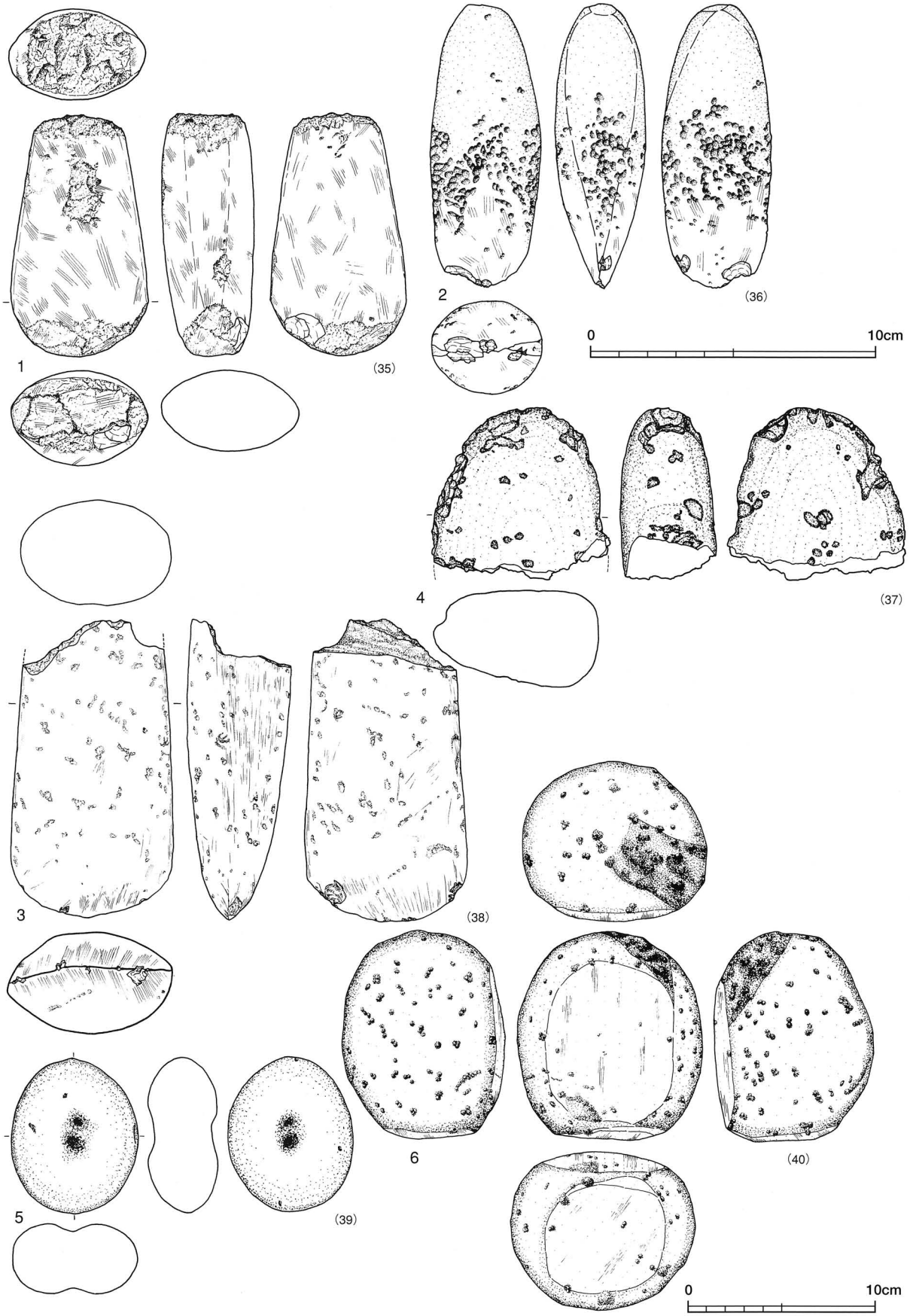
1～17 石鏃　18～22・24・25 石錐
23 石匙



第11図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implements from the Sanno-gakoi site

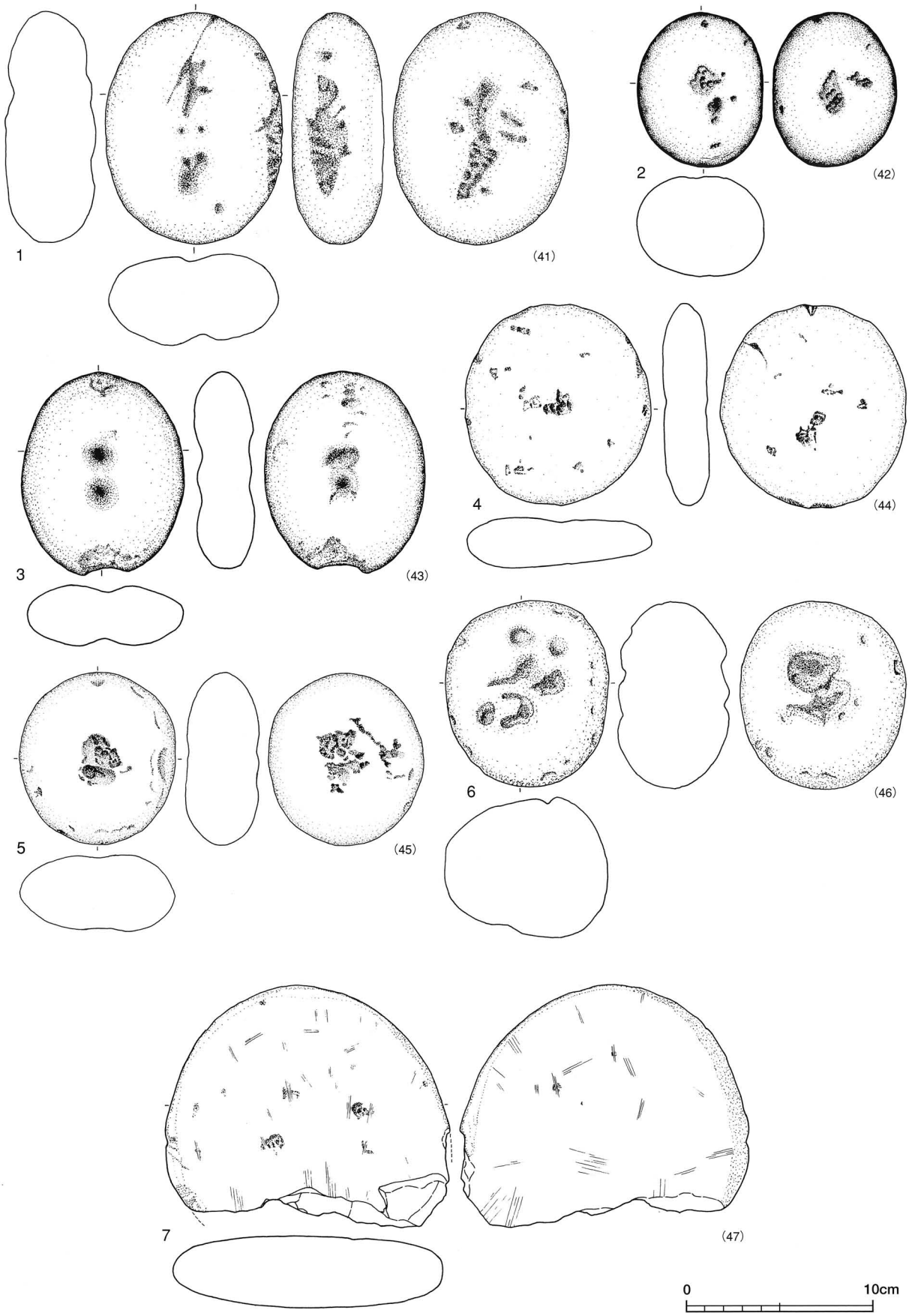
1　楔形石器　2～6　不定形石器
7　磨製石斧　8 石庖丁　9 石製小玉



第12図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implements from the Sanno-gakoi site

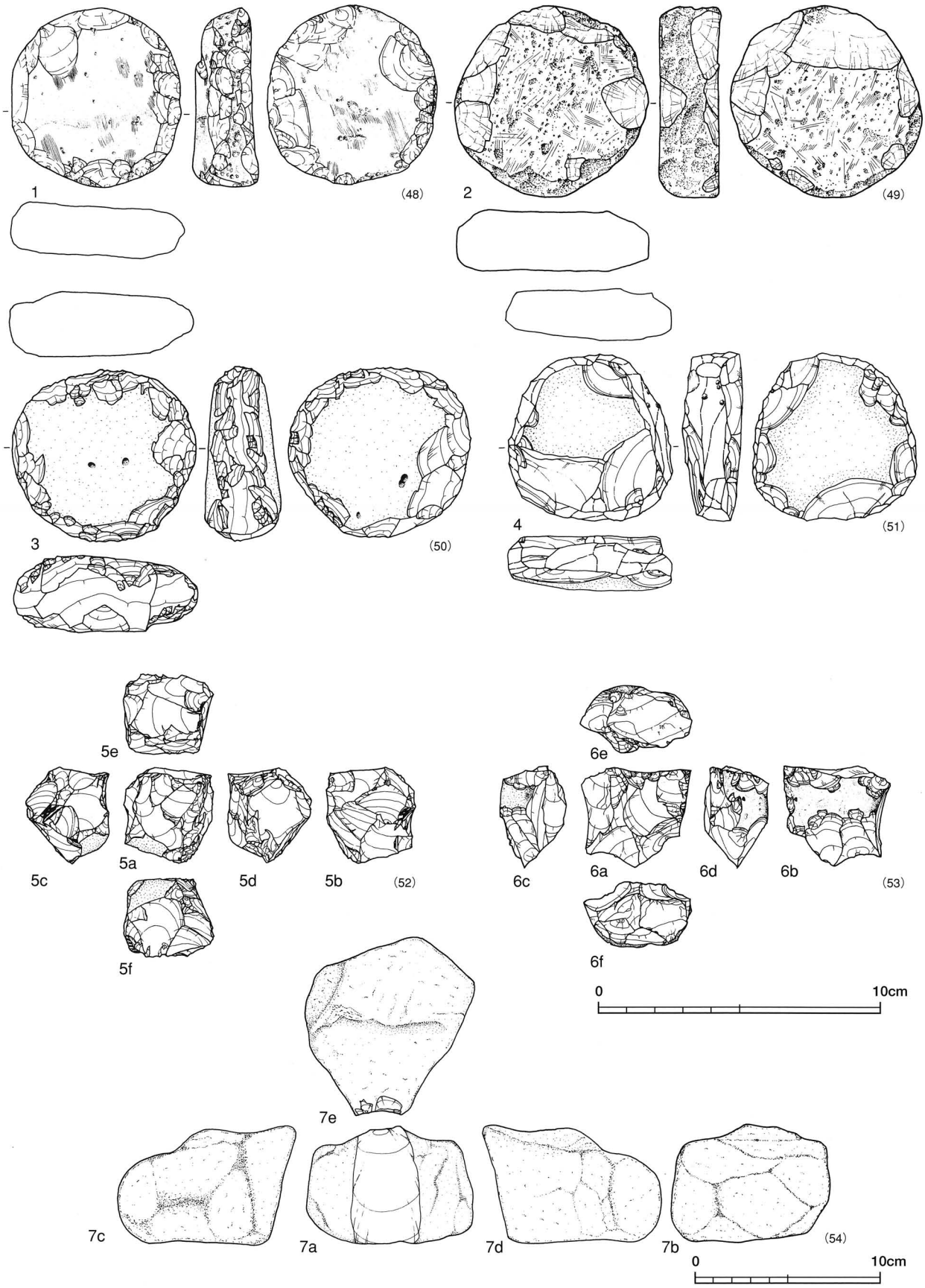
1～3　磨製石斧　4・6　磨石
5　凹石



第13図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implements from the Sanno-gakoi site

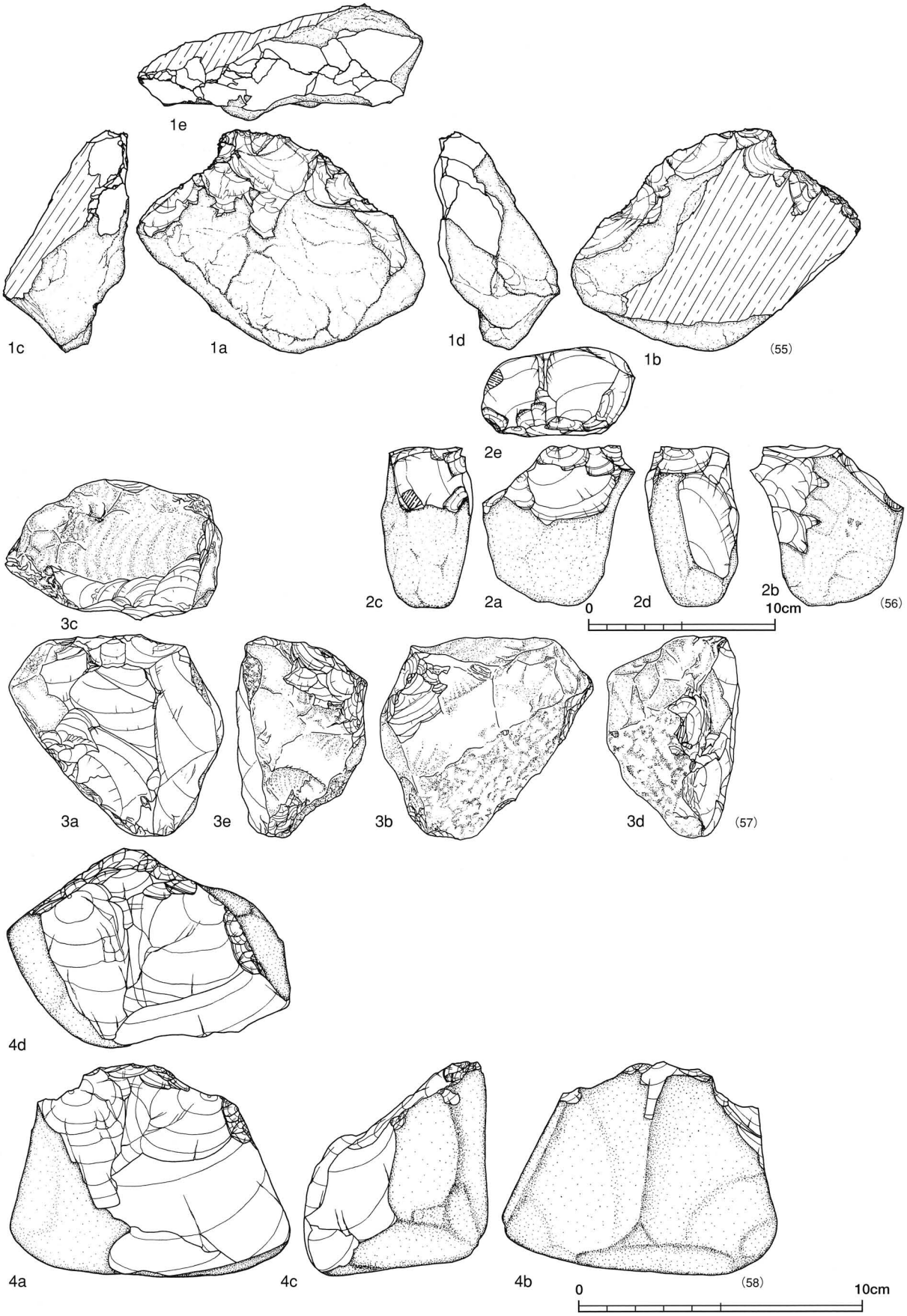
1～6　凹石　7　石皿



第14図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implements from the Sanno-gakoi site

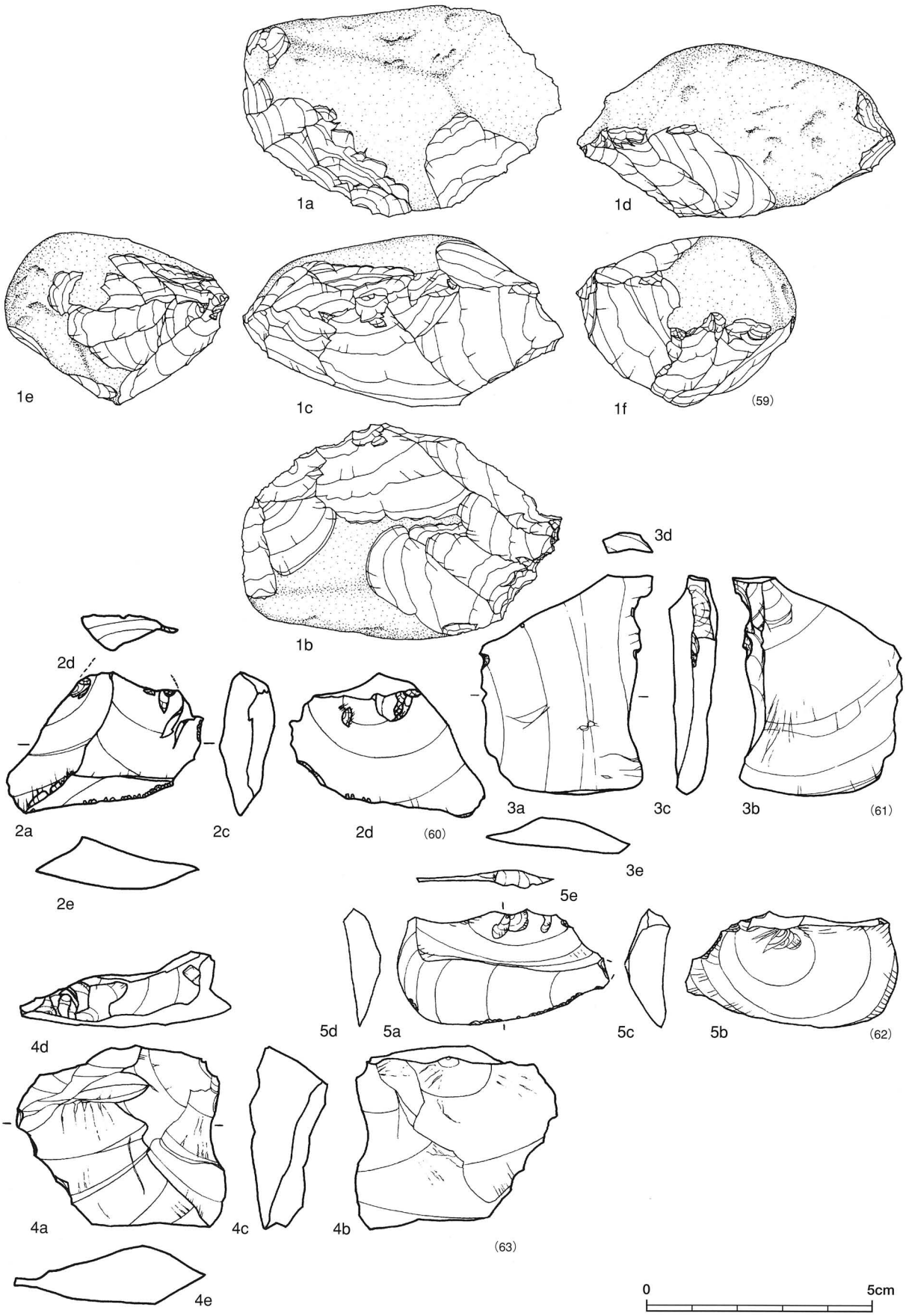
1～4　円盤状石器　5～7　石核



第15図版　山王囲遺跡出土石核

Cores from the Sanno-gakoi site

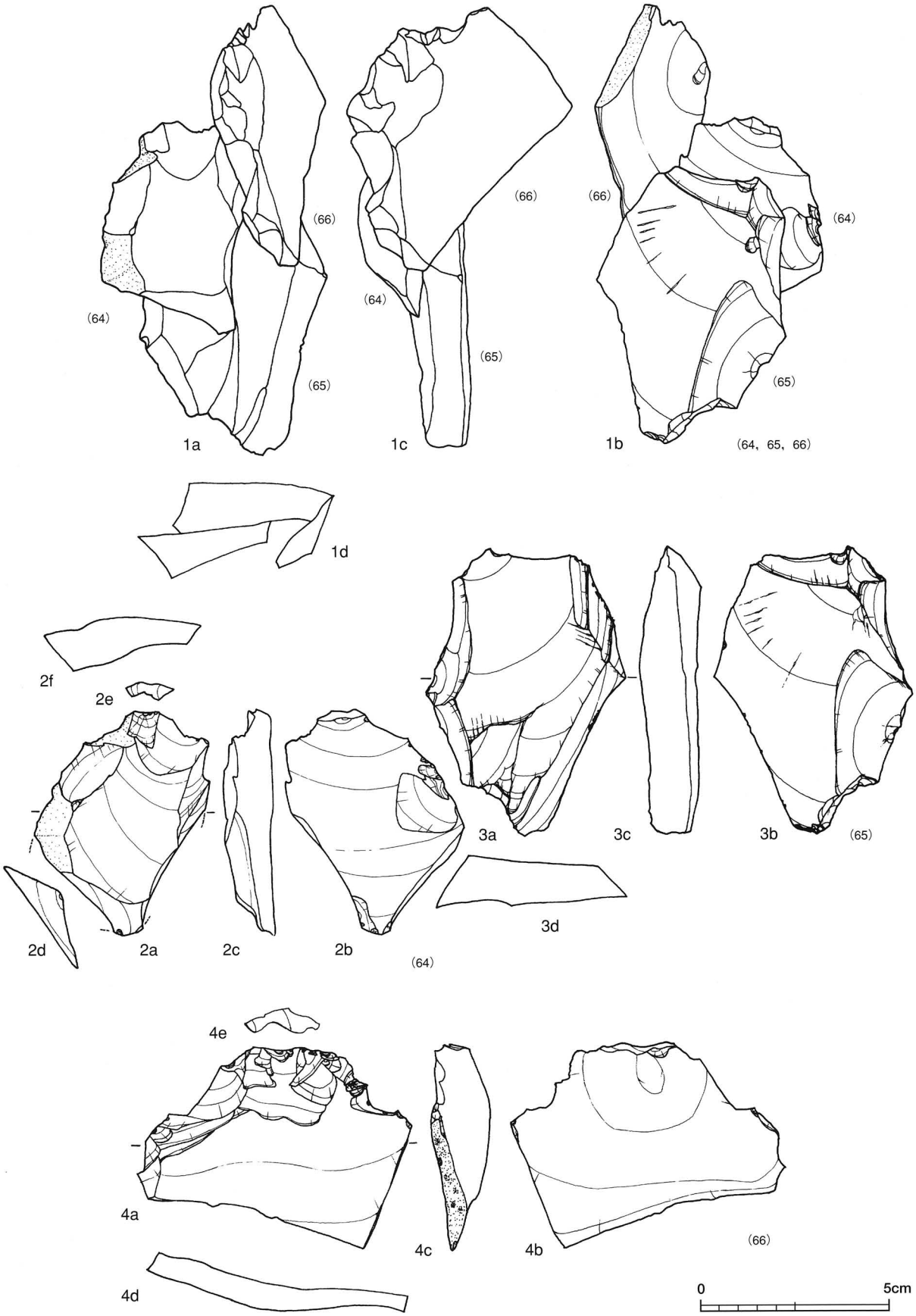
1～4　石核



第16図版　山王囲遺跡出土石核・剥片

Cores and flakes from the Sanno-gakoi site

1 石核　2～5 剥片



第17図版　山王囲遺跡出土接合剥片

Refitted flakes from the Sanno-gakoi site

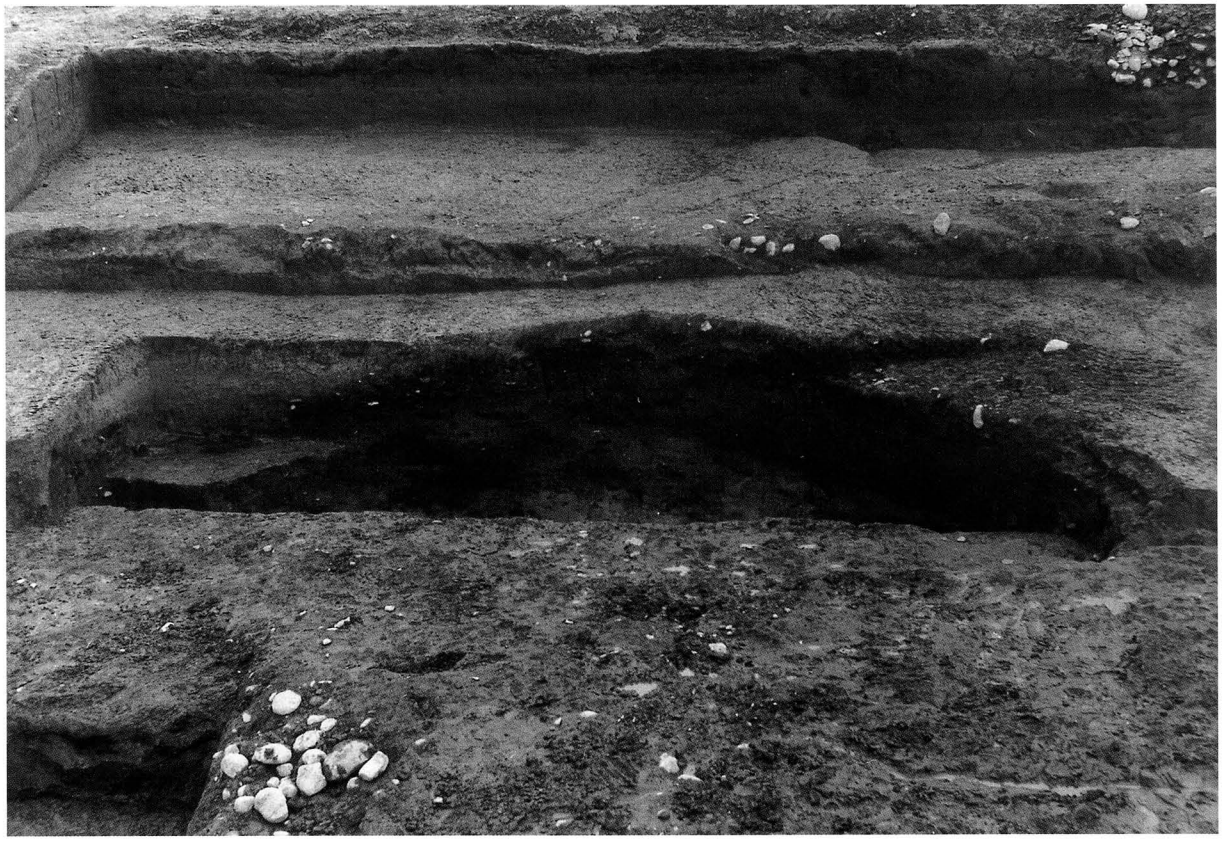
1　剥片接合図　2～4　接合剥片

写　真　図　版

1　P区第３号配石遺構および第15号土器埋設土壙（南から）

2　P区第１号焼土遺構（南から）

PL．1　P区第３号配石遺構・第15号土器埋設土壙およびP区第１号焼土遺構
Stony feature3 and Pit15 with buried pottery and Burned soil feature 1



1　1965年時調査区（西区）北壁

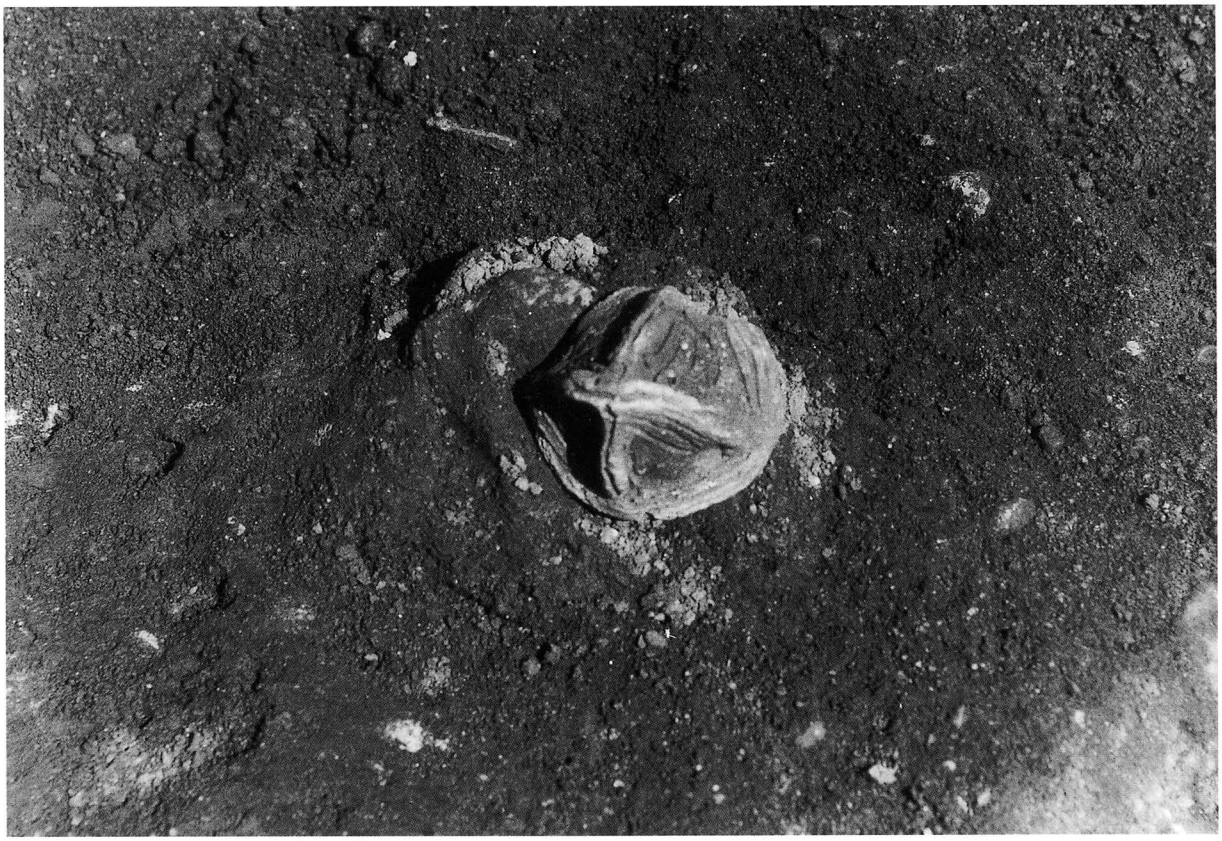
2　1965年時調査区（東区）北壁

ＰＬ．２　1965年時調査区北壁
View of excavated trench in 1965

1　Q東区全景

2　Q東区第１号近世墓

ＰＬ．３　Q東区全景および第１号近世墓
View of excavated trench and Grave 1 in Edo era



1　R区蓋形土製品

2　R区ピット402

ＰＬ．４　R区蓋形土製品出土状況およびピット402
Clay object and Pit402

1 (266)

2 (267)

3 (268)

4 (269)

5 (270)

6 (271)

PL. 5 山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 P区第4号配石遺構 2・3 第5号配石遺構
4 第11号土器埋設土壙 5 第12号土器埋設土壙
6 第13号土器埋設土壙

1 (272)

2 (273)

3 (274)

4 (278)

5 (276)

6 (277)

7 (275)

8 (279)

PL. 6 山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 P区第15号土器埋設土壙 2・3・7 P区10層
4・8 Q西区第1号竪穴状遺構 5 P区11層
6 Q西区第14号土器埋設土壙

1 (280)

2 (282)

5 (284)

3 (281)

4 (283)

6 (287)

1～4 Q西区11層　5 13層　6 16層

PL. 7　山王囲遺跡出土土器
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 (285)

2 (288)

3 (289)

4 (290)

5 (291)

PL. 8 山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 Q西区12層 2～4 22層
5 25層

1 (286)

2 (293)

3 (294)

1 Q西区15層　2・3 24層

PL. 9　山王囲遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 (295)

2 (296)

1・2 Q西区24層

PL. 10 山王囲遺跡出土土器
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 (292)

2 (297)

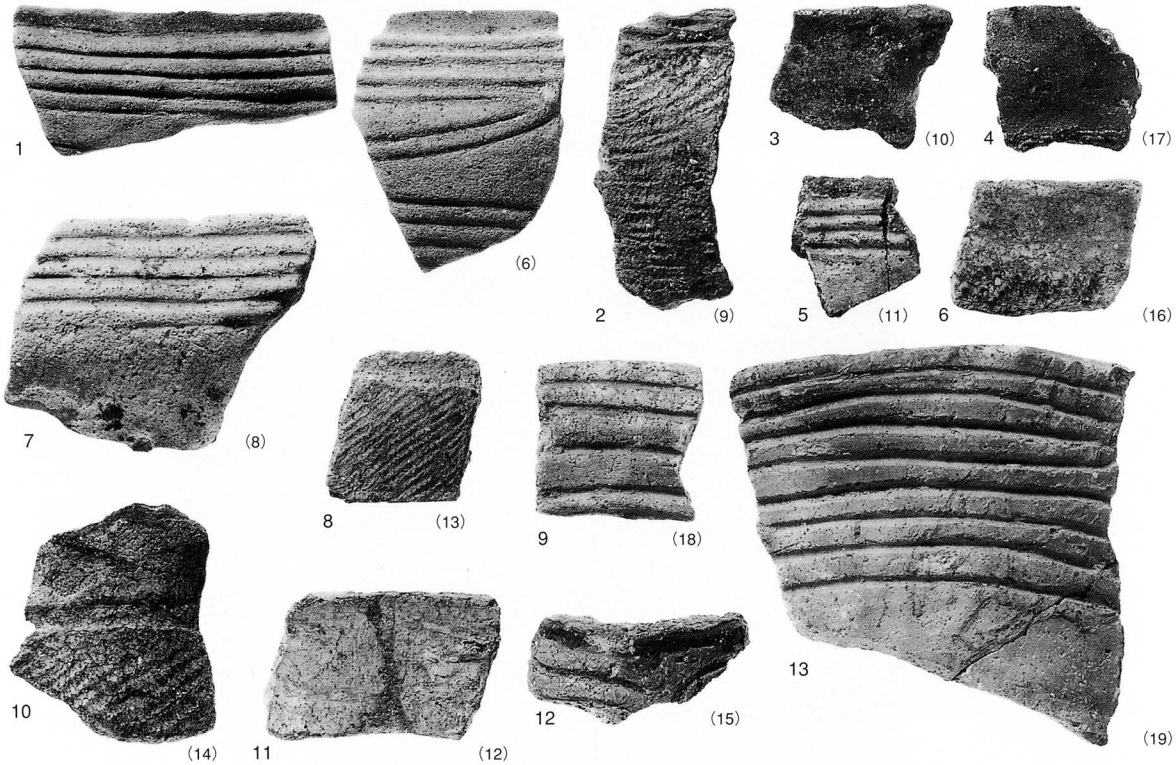
3 (298)

1・2 Q西区24層　3 Q北区9層

PL. 11　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1　P区出土土器

1 P区第15号土器埋設土壙　2・4・5 第3号配石遺構
3 第4号配石遺構　6 第5号配石遺構

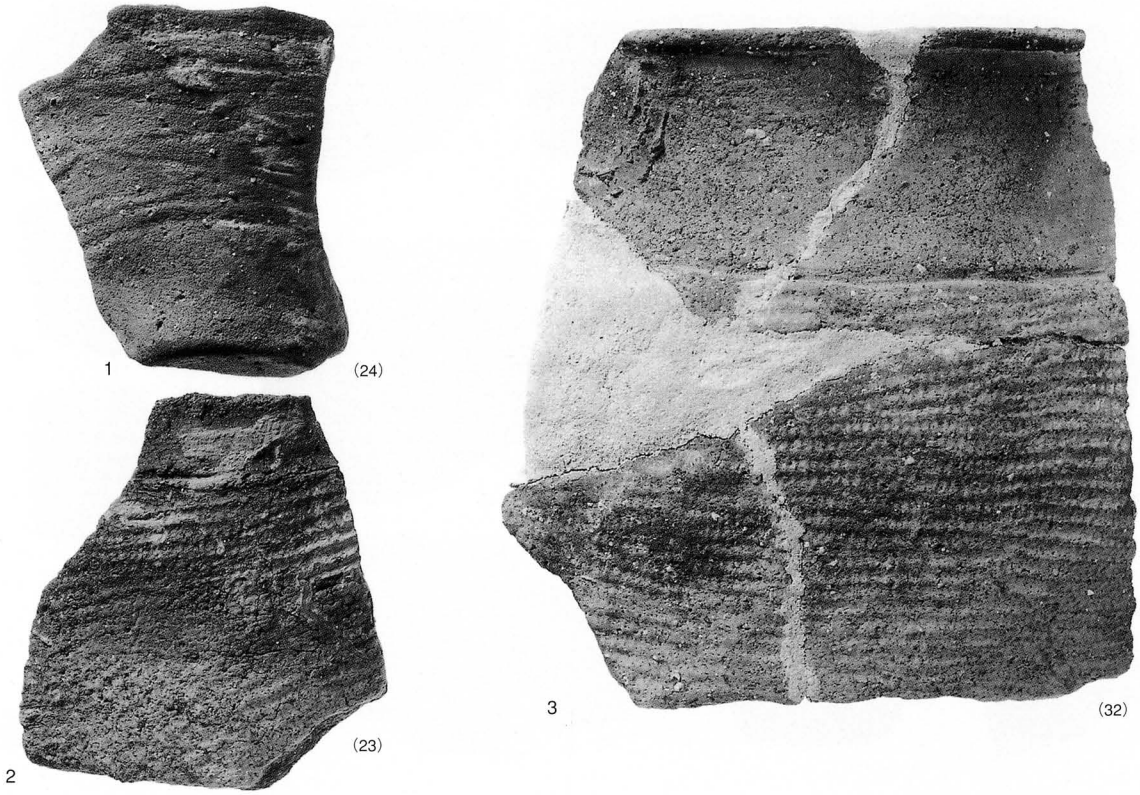


2　P区出土土器

1・2・7 P区第15号土器埋設土壙　3 P区4層
4・6・9・13 9層　5 8層　8・10～12 8a層

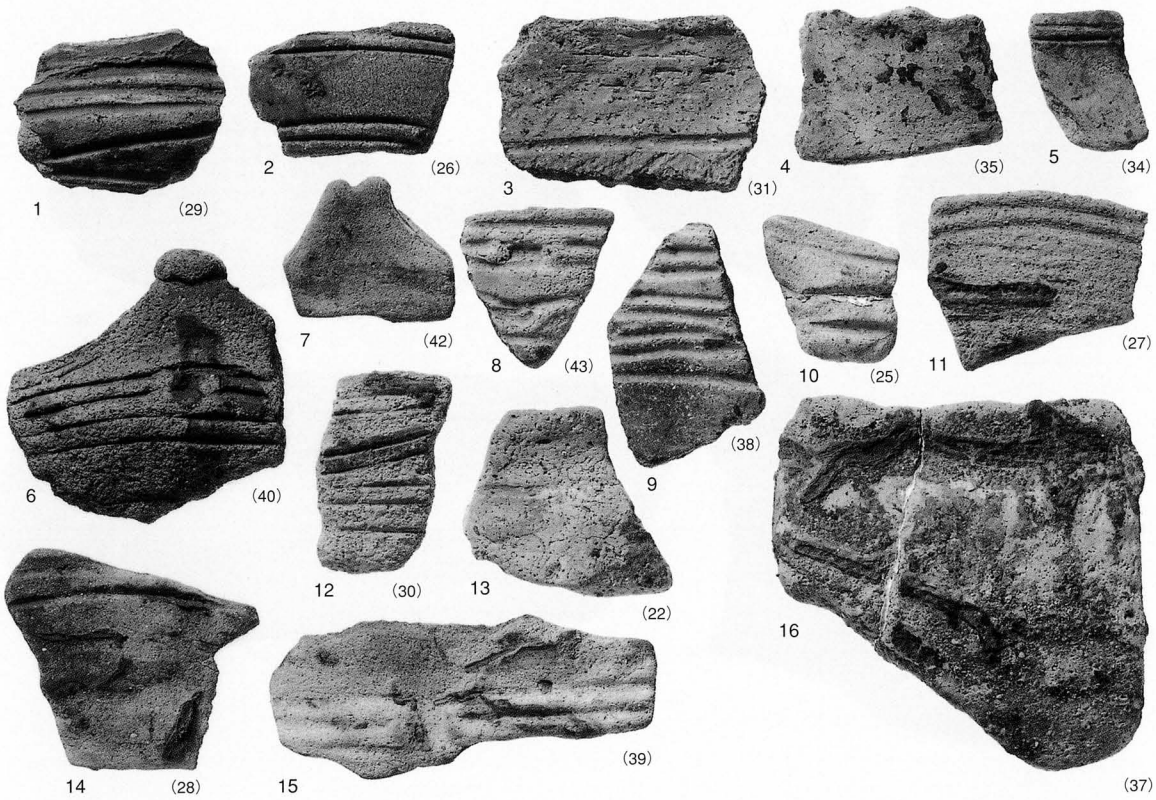
PL. 12　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1　P区出土土器　　1・2　P区10層

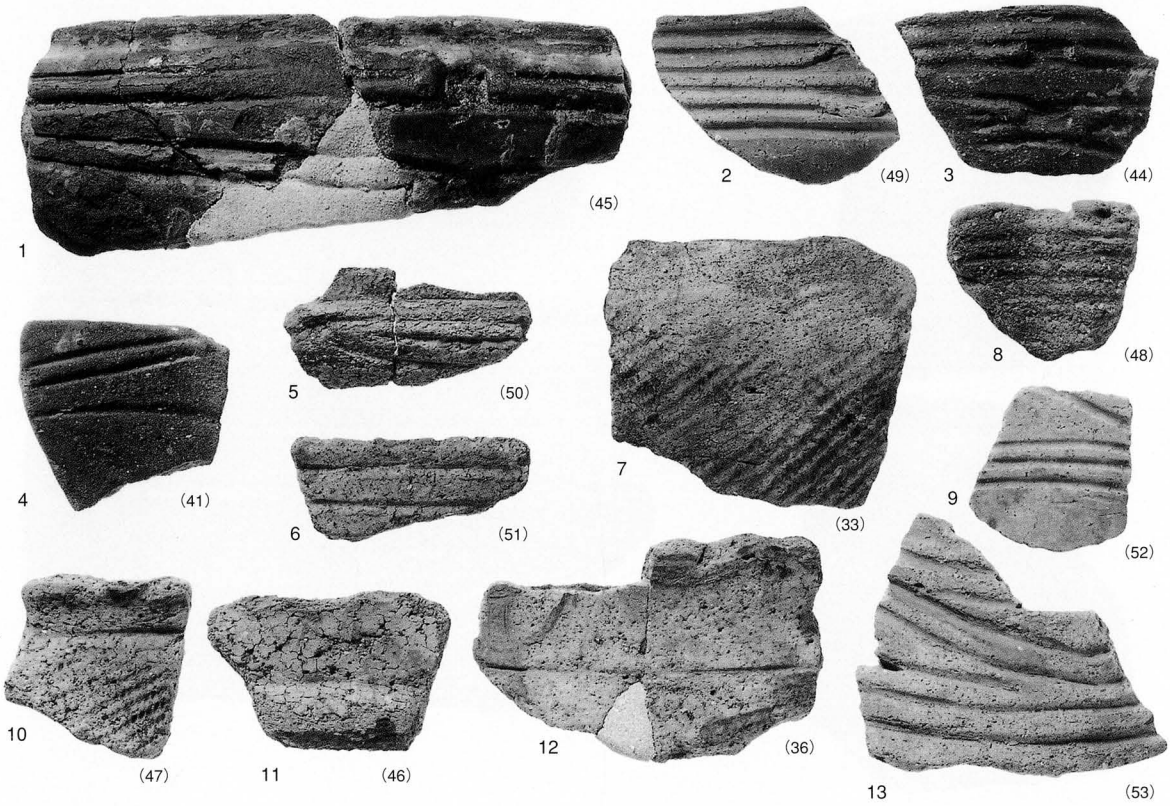


2　P区出土土器　　1～3　P区10層

PL．13　山王囲遺跡出土土器
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

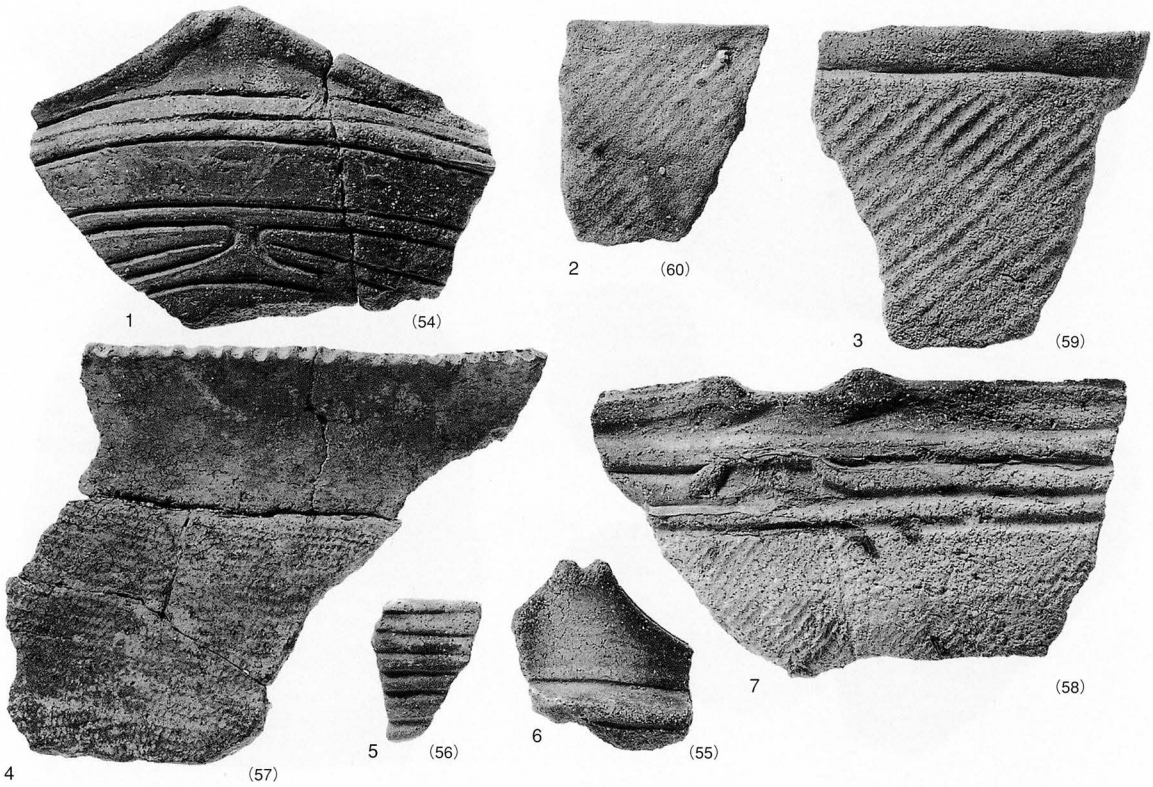


1　P区出土土器　　1～16　P区10層

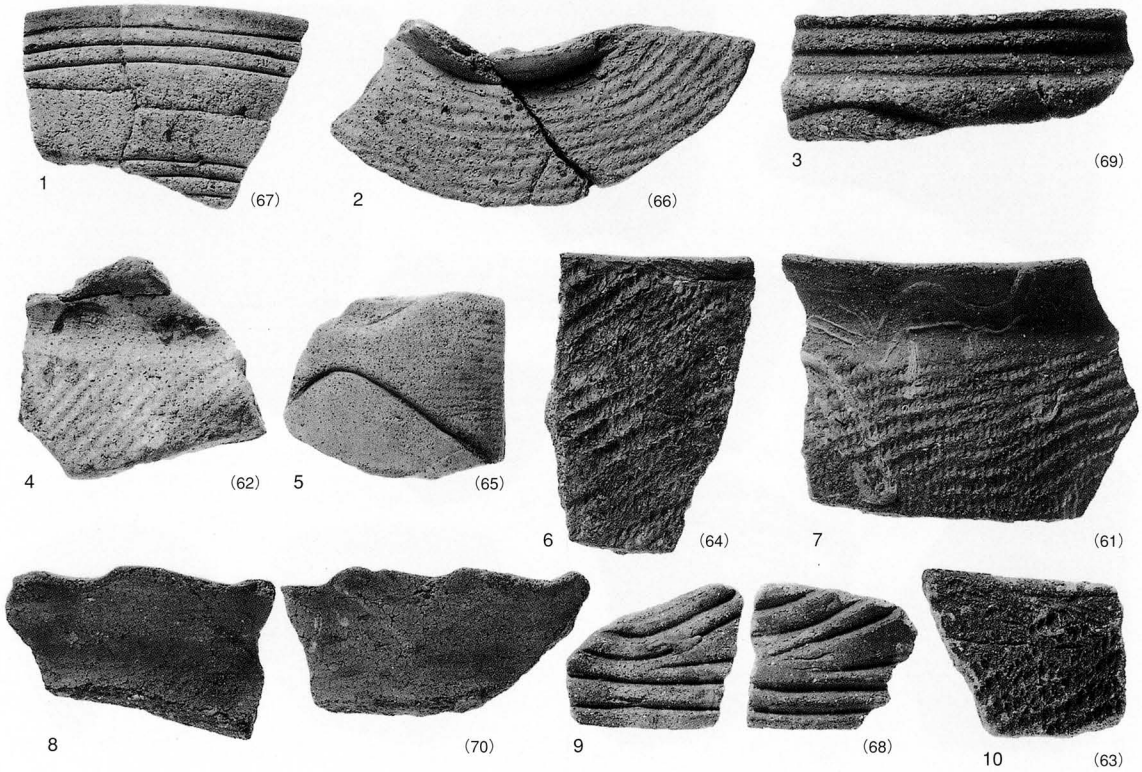


2　P区出土土器　　1～8・10～12 P区10層　9・13 11層

PL. 14　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

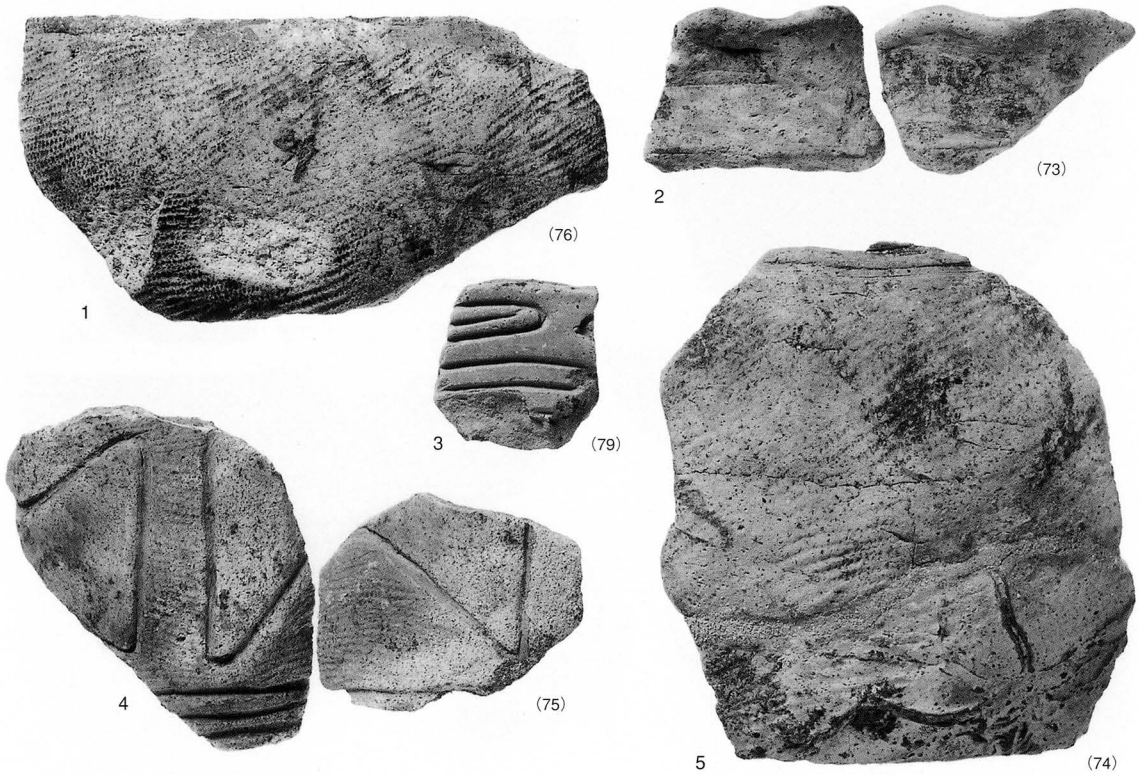


1　P区出土土器　　1～7　P区11層

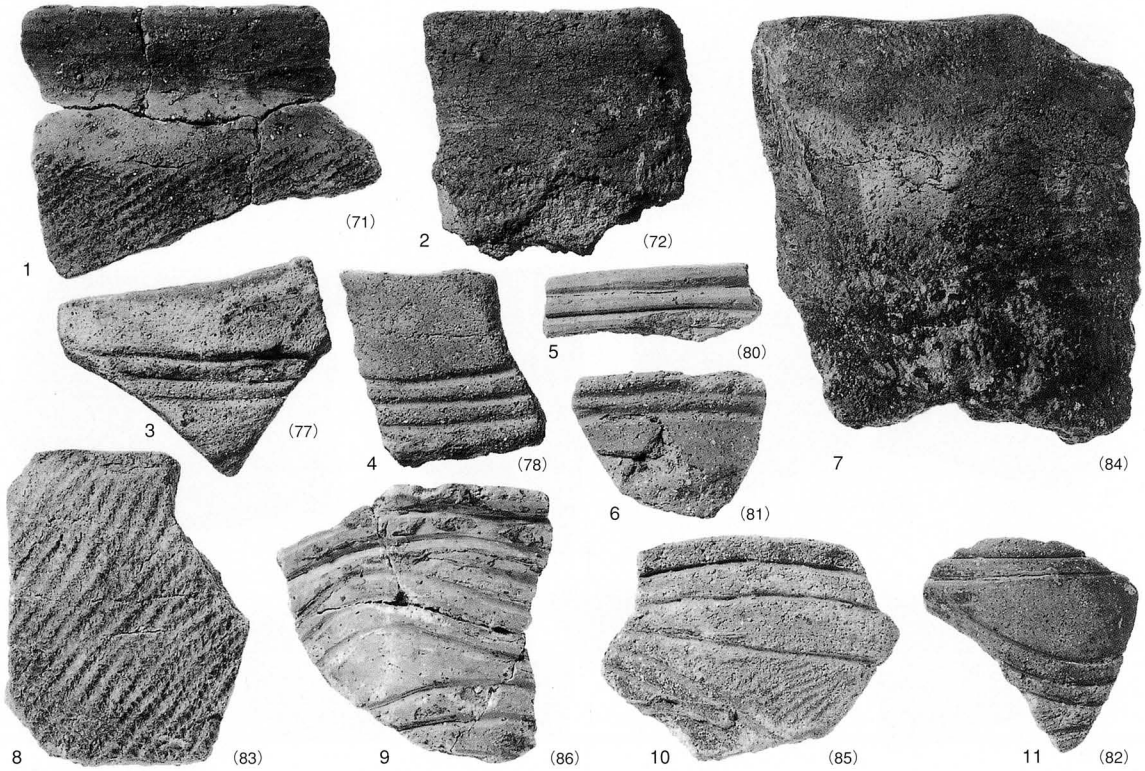


2　Q西区出土土器　　1～7・9・10　Q西区第1号竪穴状遺構　8　Q西区10層

PL. 15　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

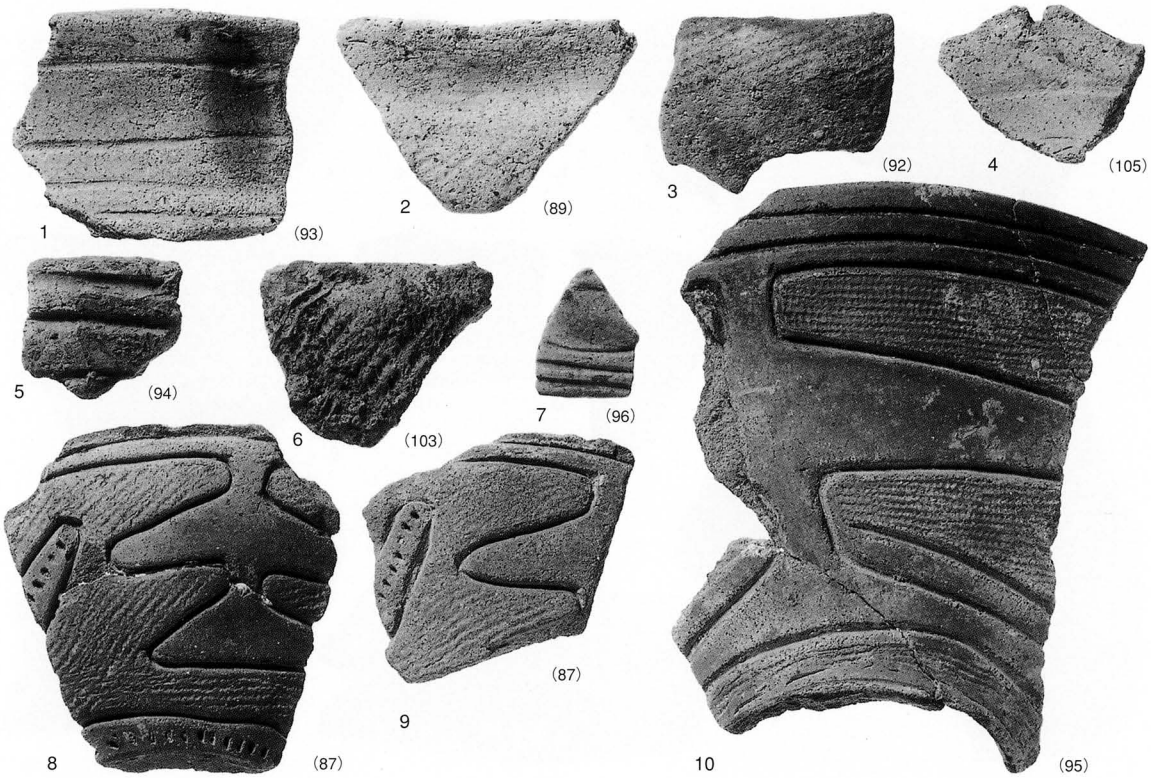


1　Q西区出土土器　　1～5　Q西区11層

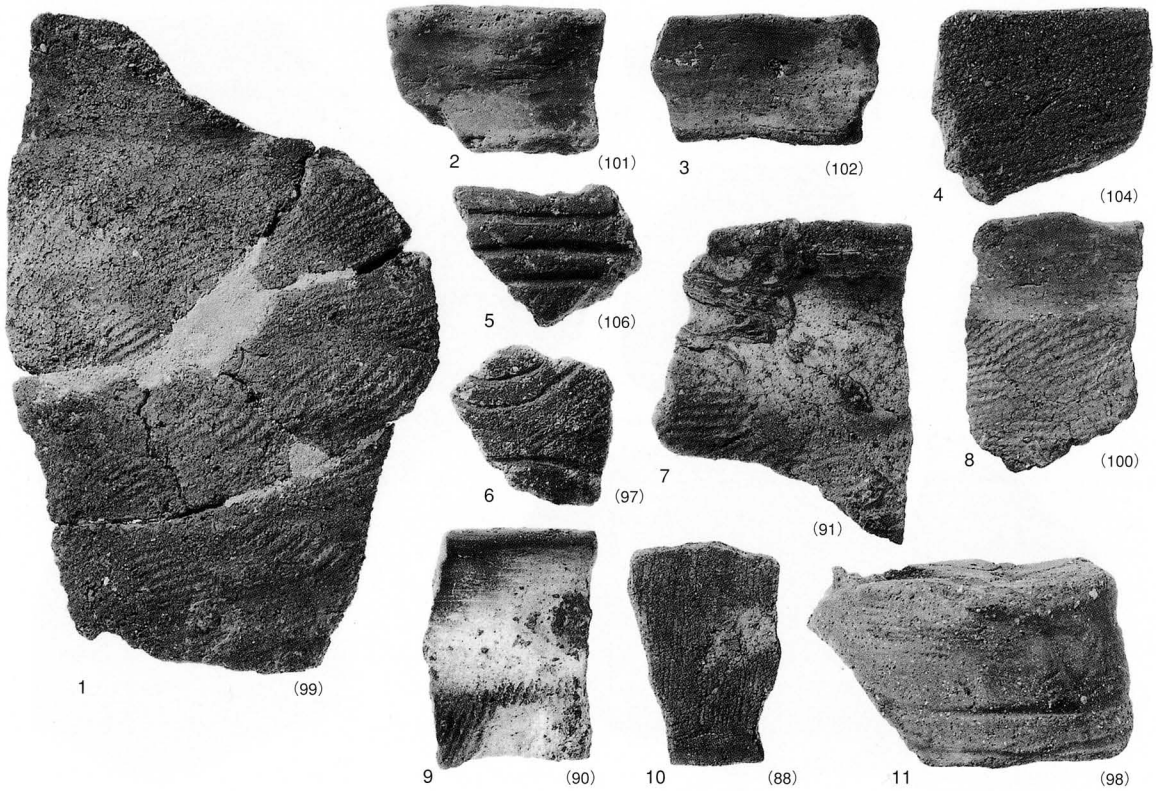


2　Q西区出土土器　　1　Q西区11～12層　2・3・5・6　11層
4　11～13層　　7～11　12層

PL. 16　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

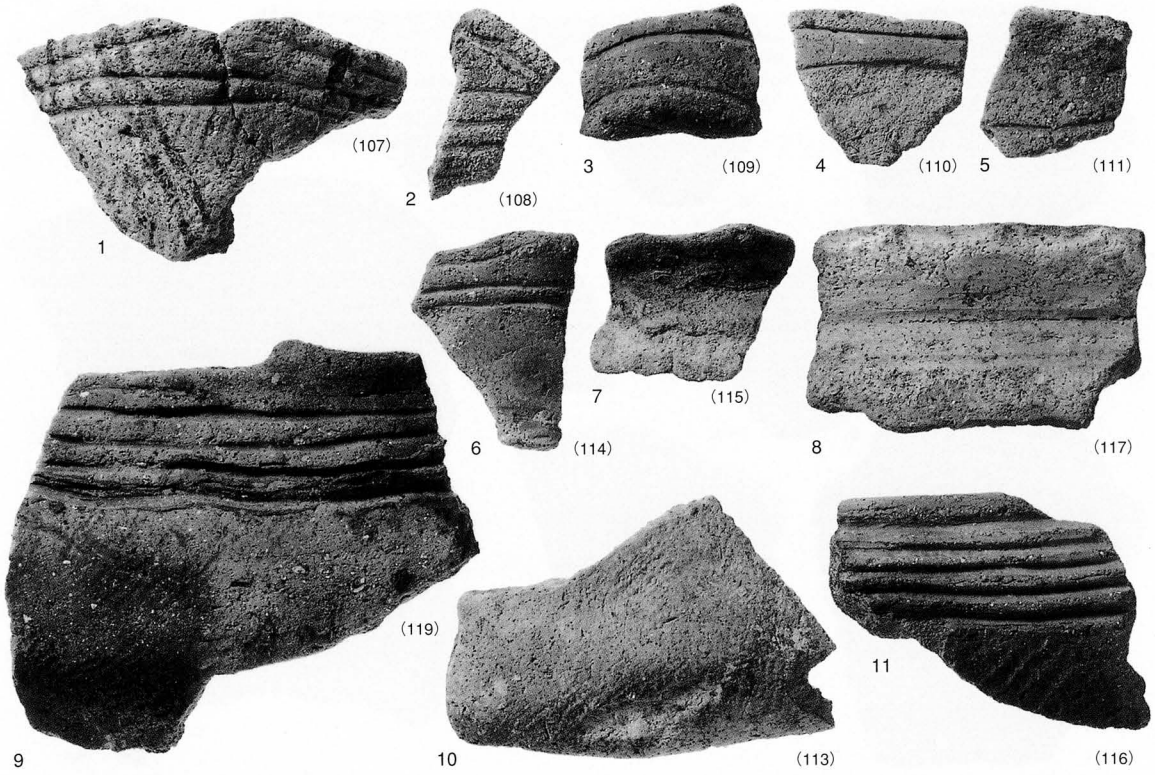


1　Q西区出土土器　　1～8・10 Q西区13層　9 1965年調査資料



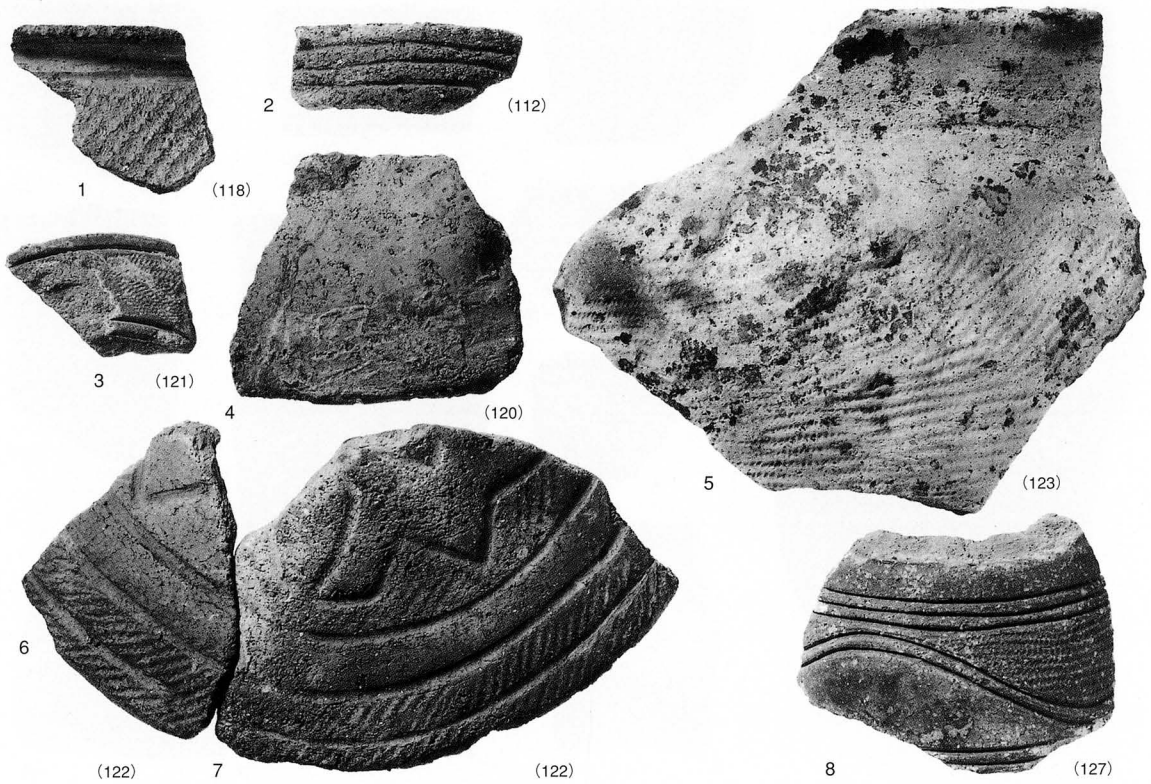
2　Q西区出土土器　　1～11 Q西区13層

PL. 17　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1　Q西区出土土器

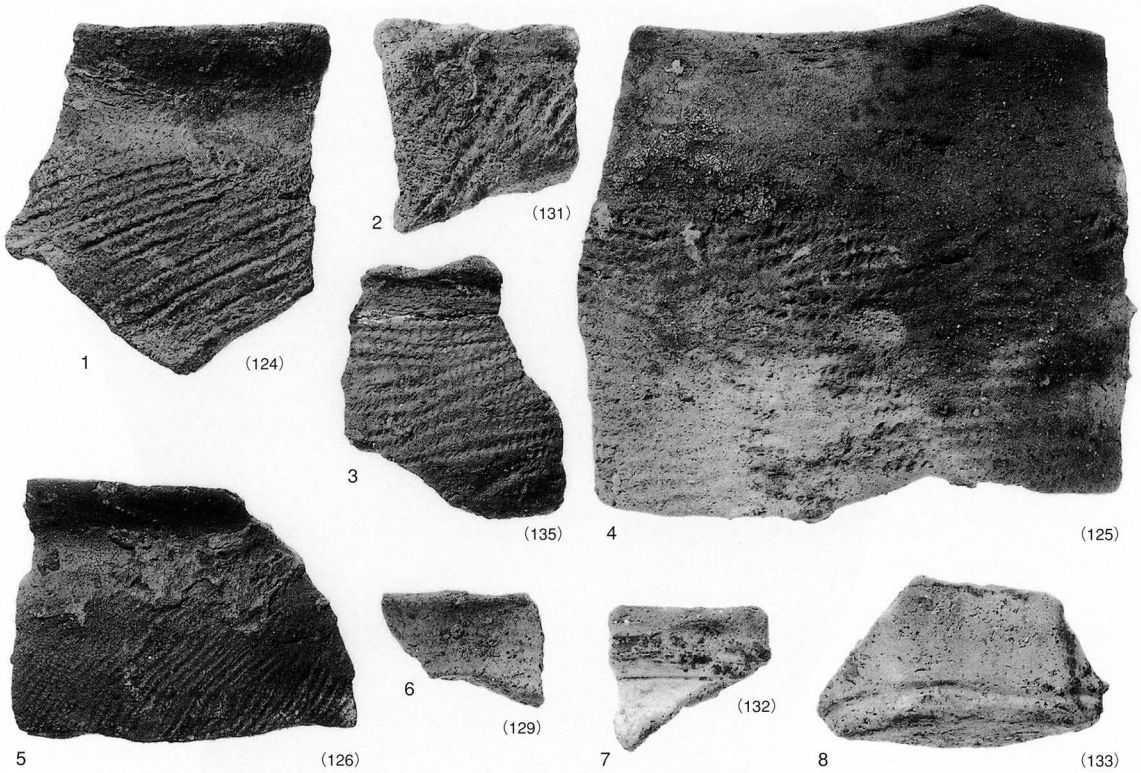
1～8　Q西区13層　9　14層　10・11　13層



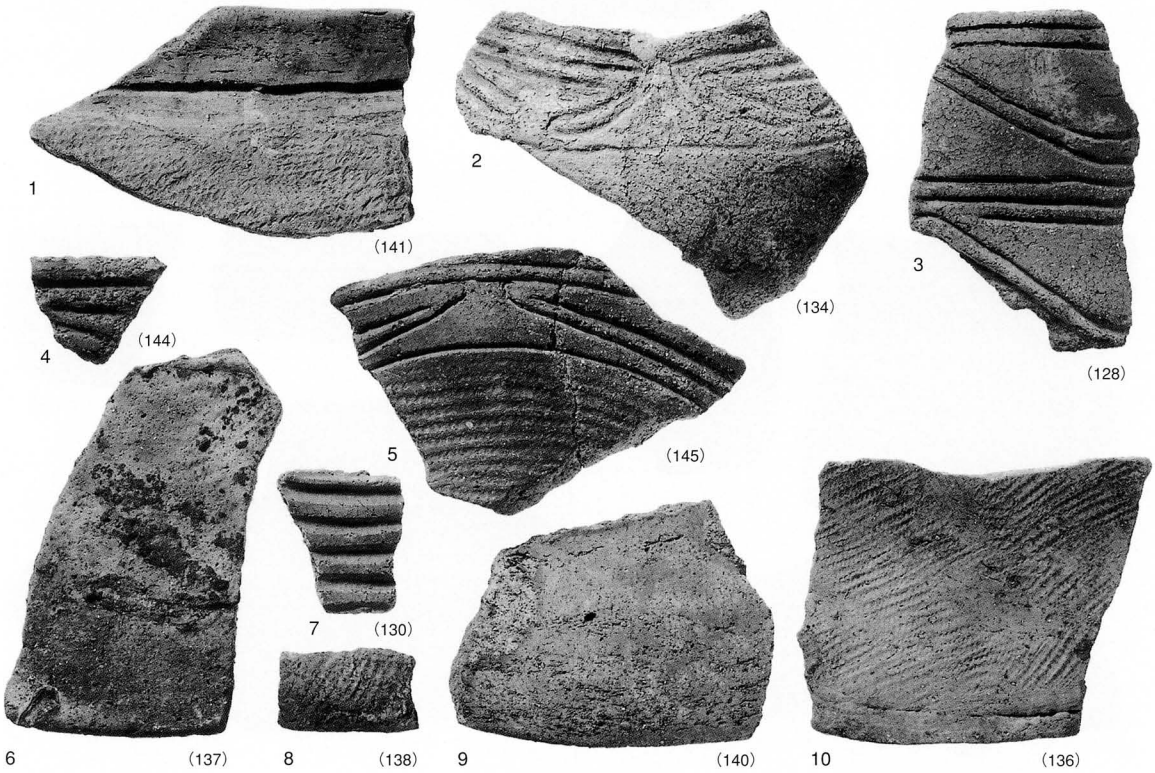
2　Q西区出土土器

1・2　Q西区13層　3　15層　4　14層　5・6・8　16層
7　1965年調査資料

PL. 18　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1　Q西区出土土器　　1～8 Q西区16層

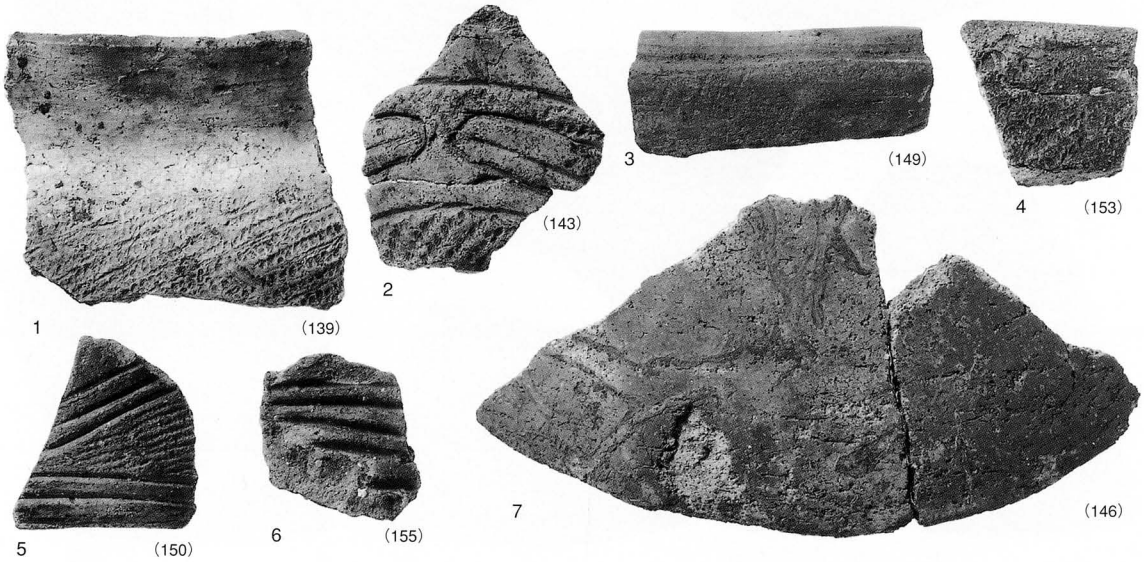


2　Q西区出土土器　　1・4・5 Q西区20層　2・3・6～8・10 16層　9 17層

PL. 19　山王囲遺跡出土土器
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

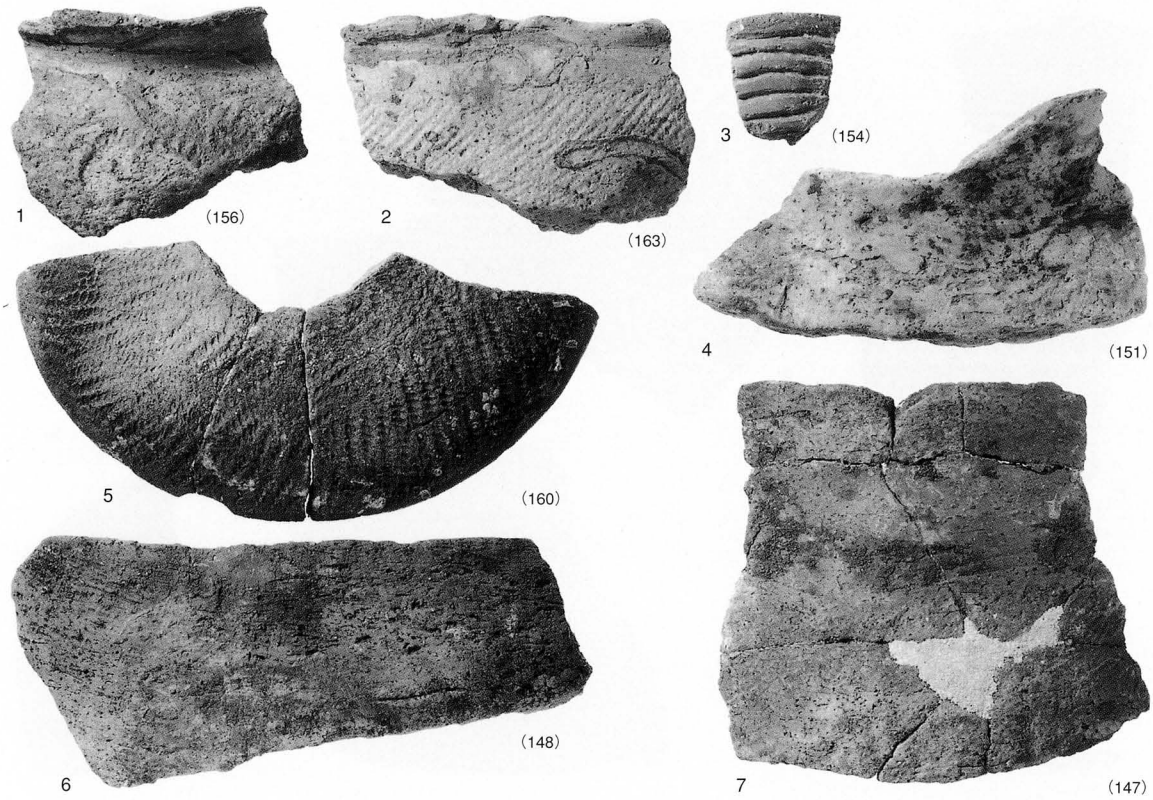
1 (142)

1　Q西区出土土器　　1 Q西区16層

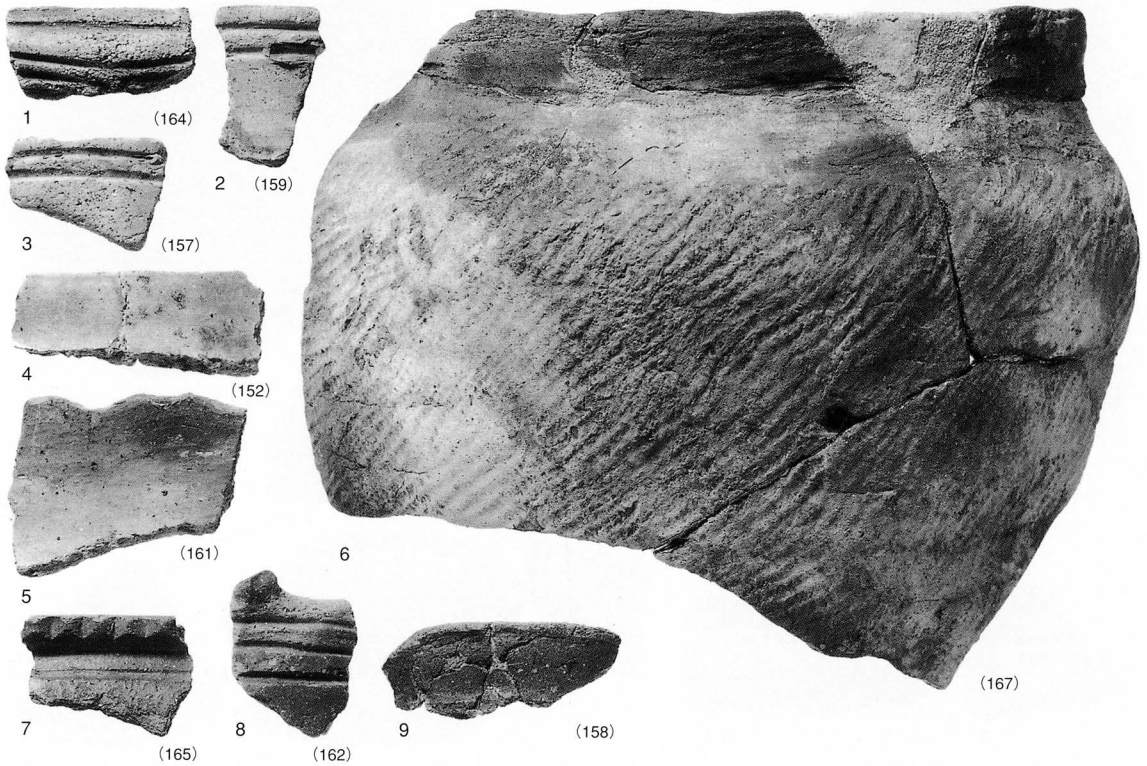


2　Q西区出土土器　　1・2・7 Q西区20層　3～6 22層

PL. 20　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

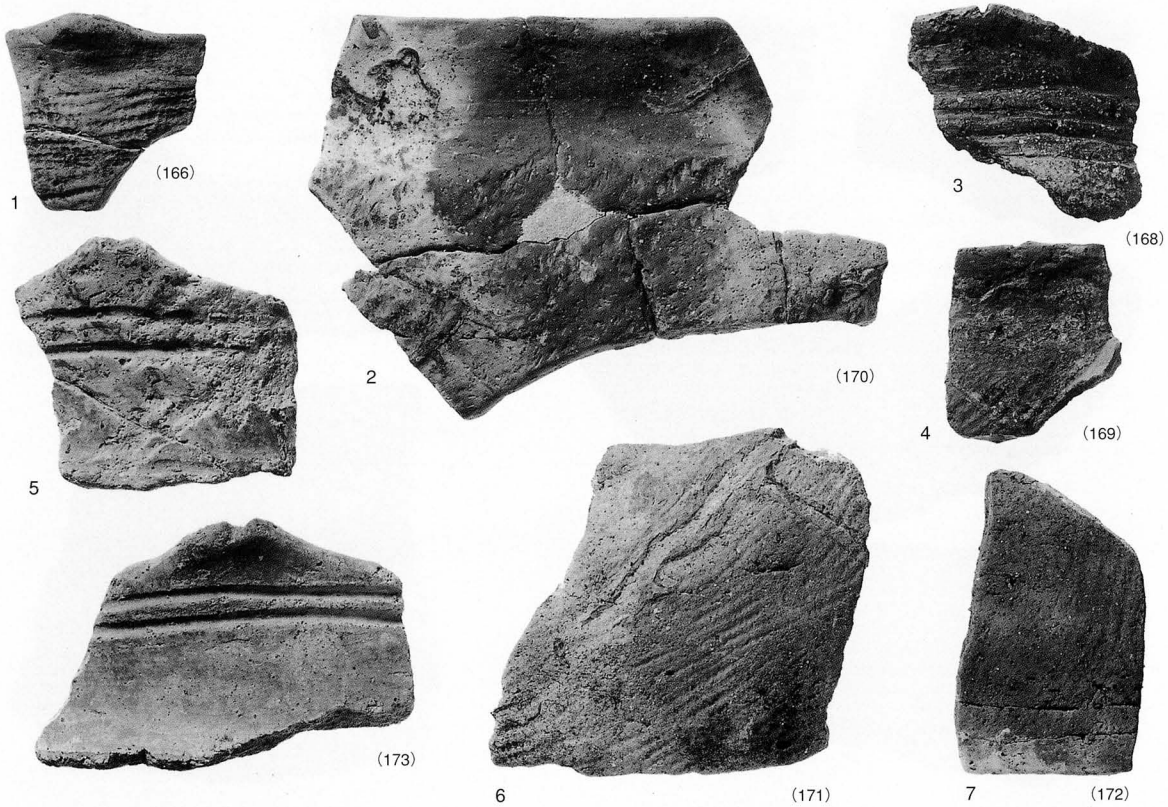


1　Q西区出土土器　　1～7　Q西区22層



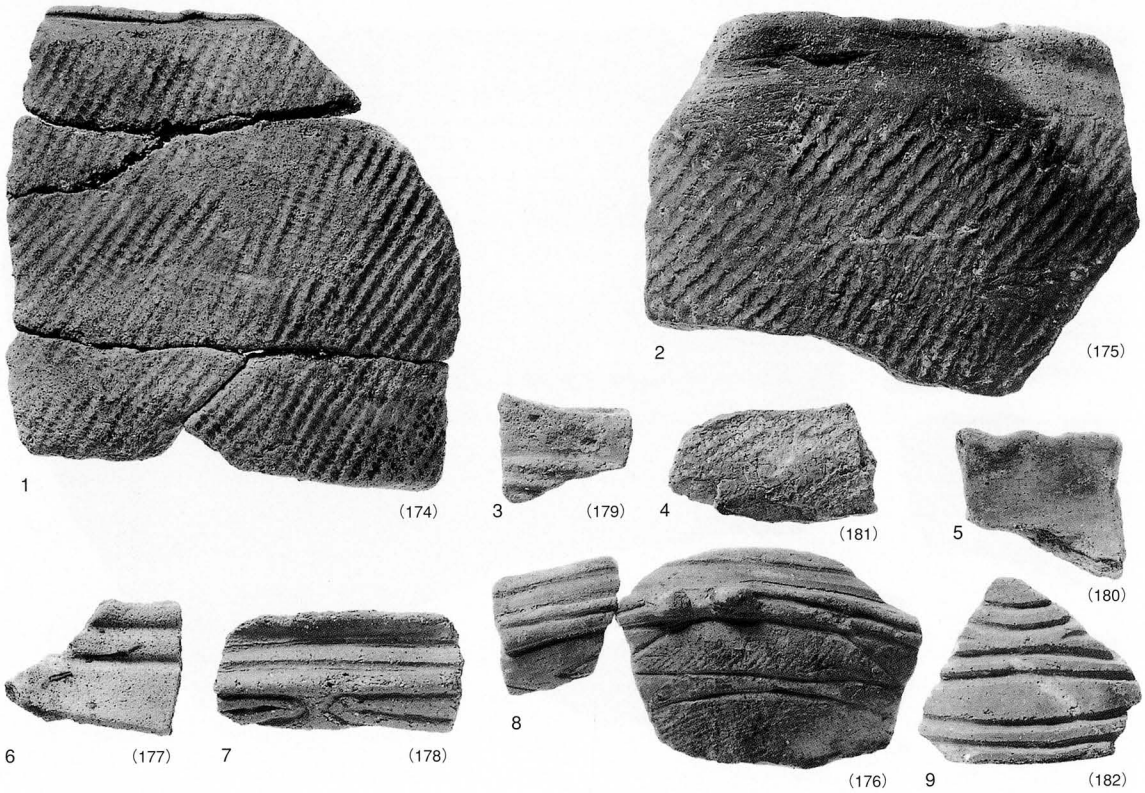
2　Q西区出土土器　　1～5・7～9　Q西区22層　6　24層

PL. 21　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1　Q西、Q東区出土土器

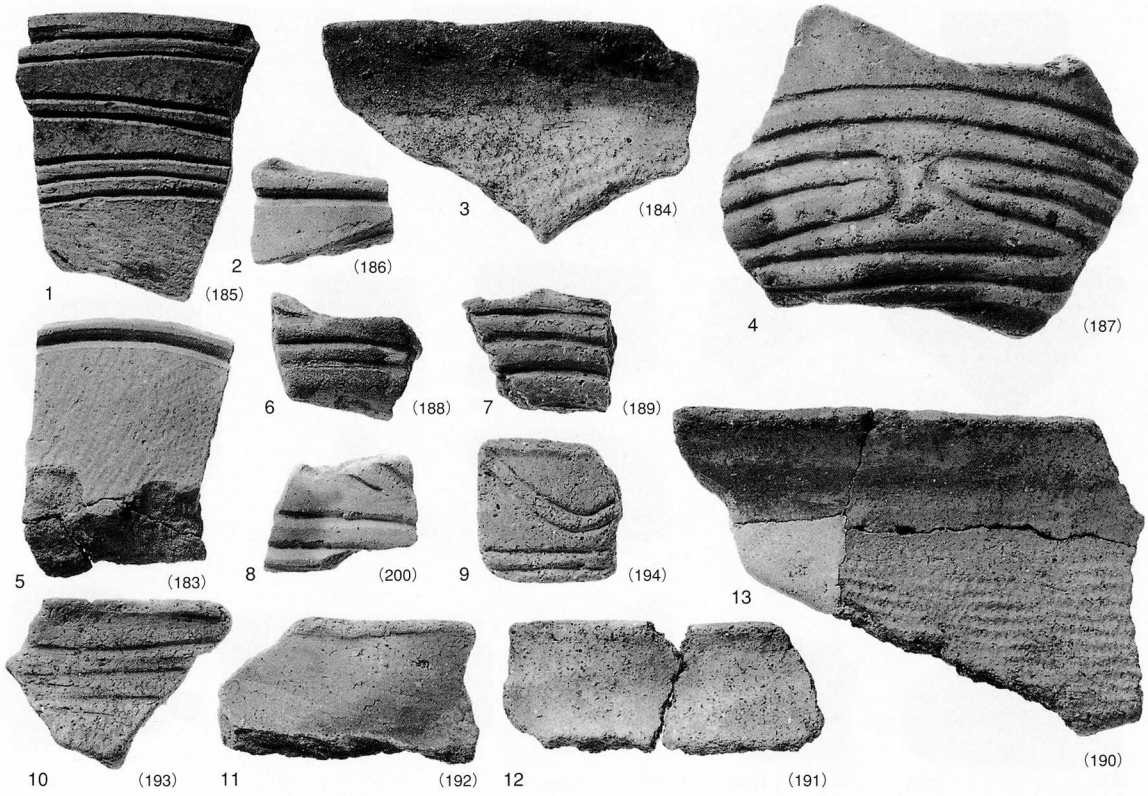
1・3・6　Q西区24層　2・4・7　25層
5　Q東区第10号土器埋設土壙



2　Q東、Q北、R区出土土器

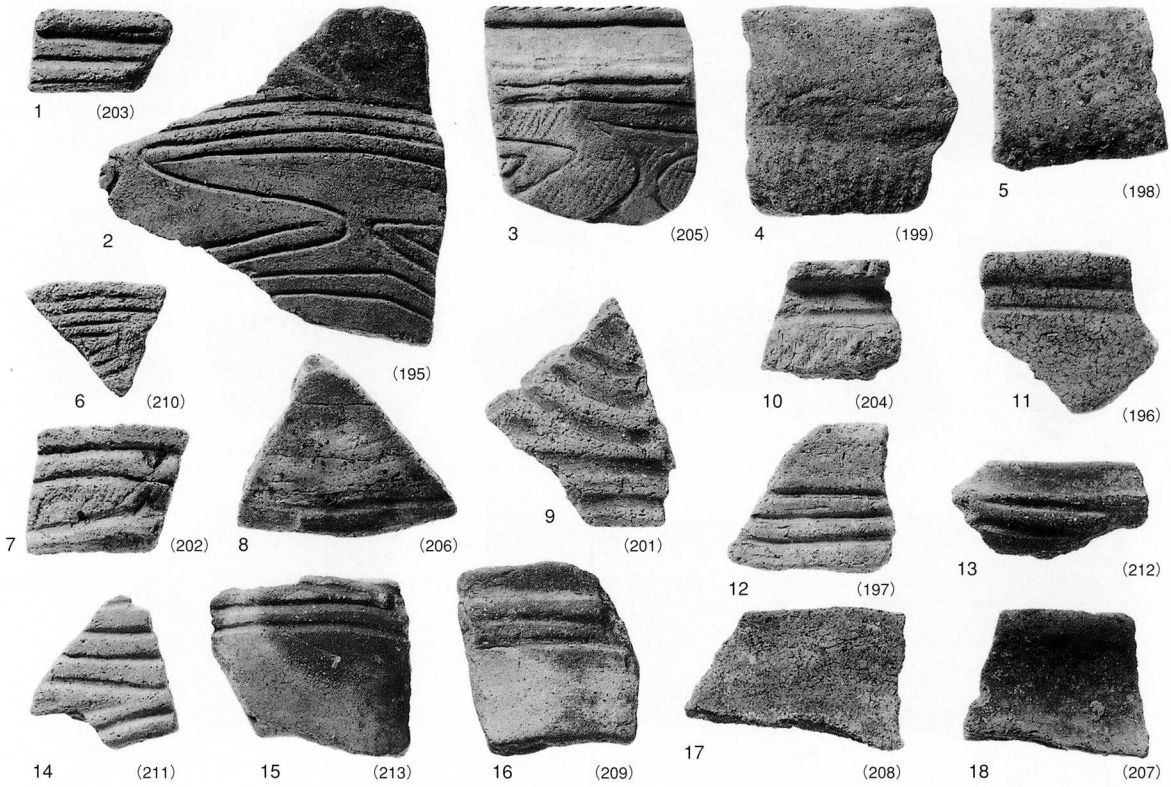
1・2　Q東区第10号土器埋設土壙　3・7　R区ピット396
4・5・9　ピット397　6　Q北区包含層　8　Q北区9層

PL. 22　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1　R区出土土器

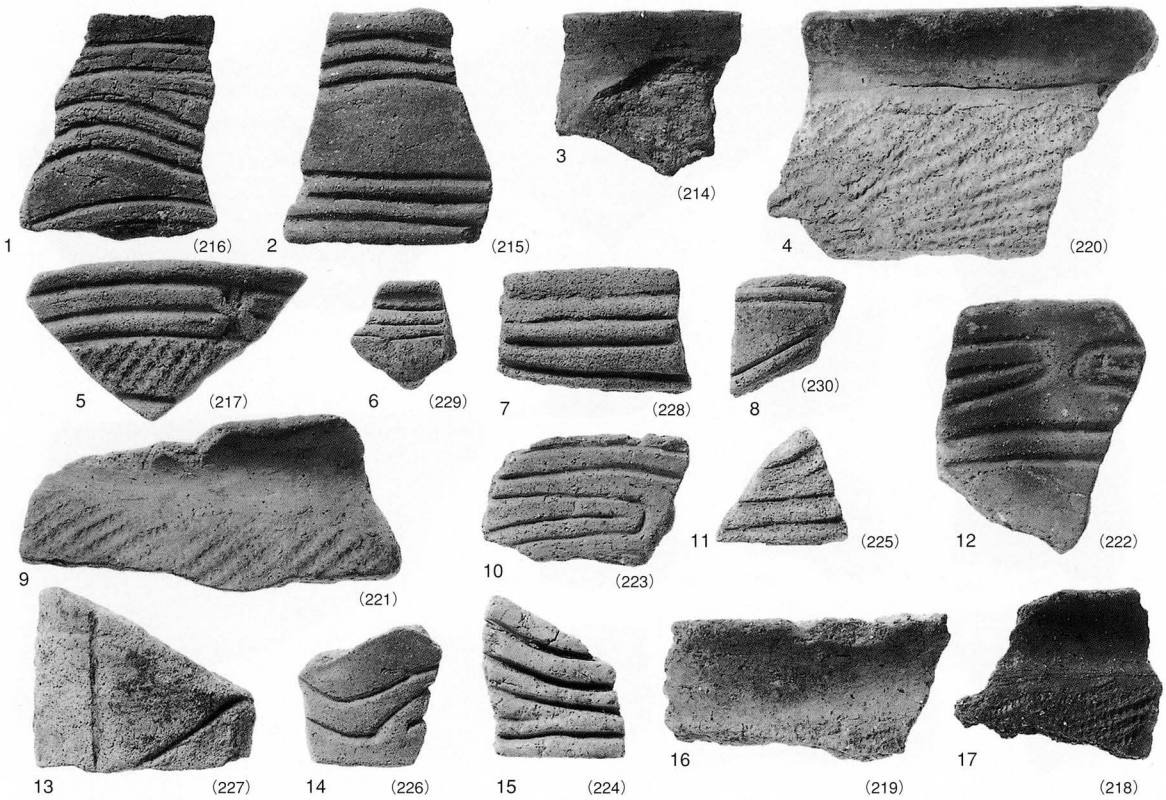
1～4　R区ピット402　5　ピット399
6　ピット405　7　ピット406　8～13　1b層



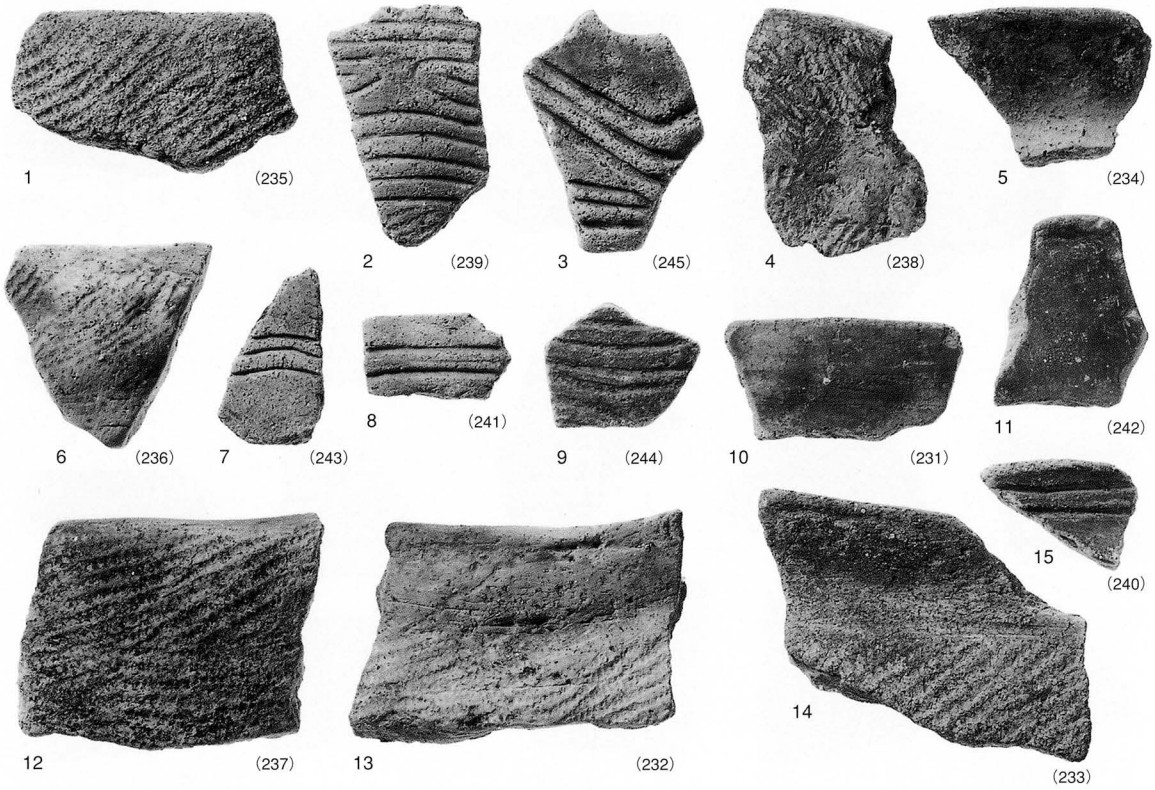
2　R区出土土器

1～5・7～12 R区1b層　6・13～18 2層上面

PL. 23　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

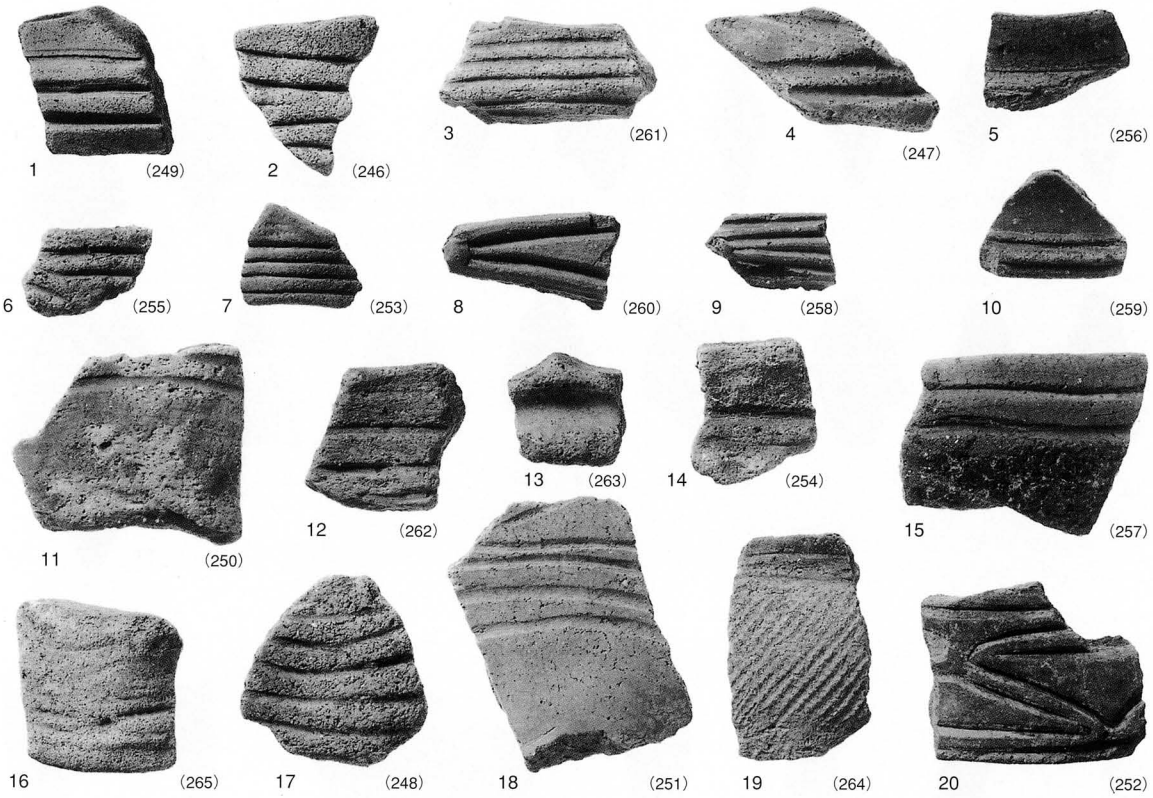


1　R区出土土器　　1～3・5 R区2層　4・6～17 2b層

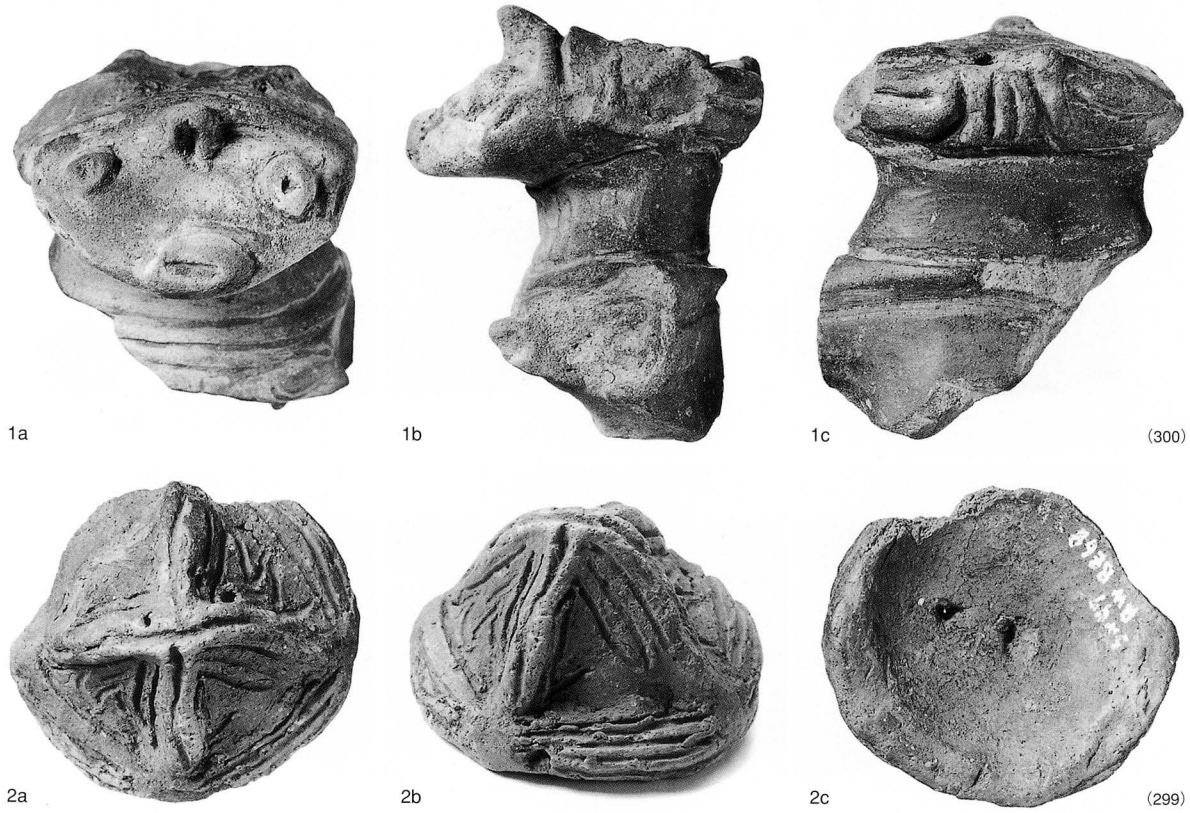


2　R区出土土器　　1～15 R区2b層

PL. 24　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



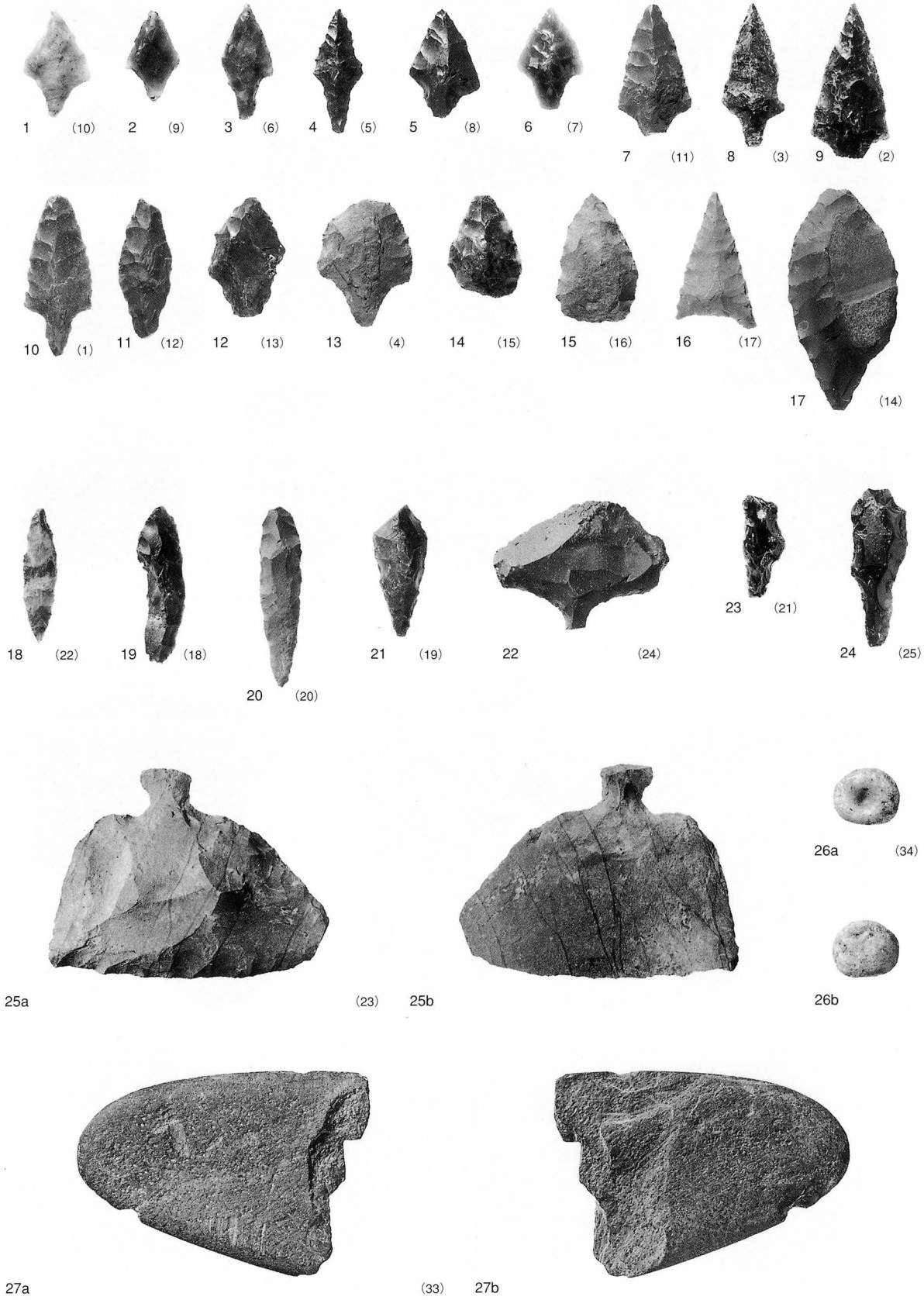
1　R区出土土器　　1～20 R区２b層



2　R区出土土製品

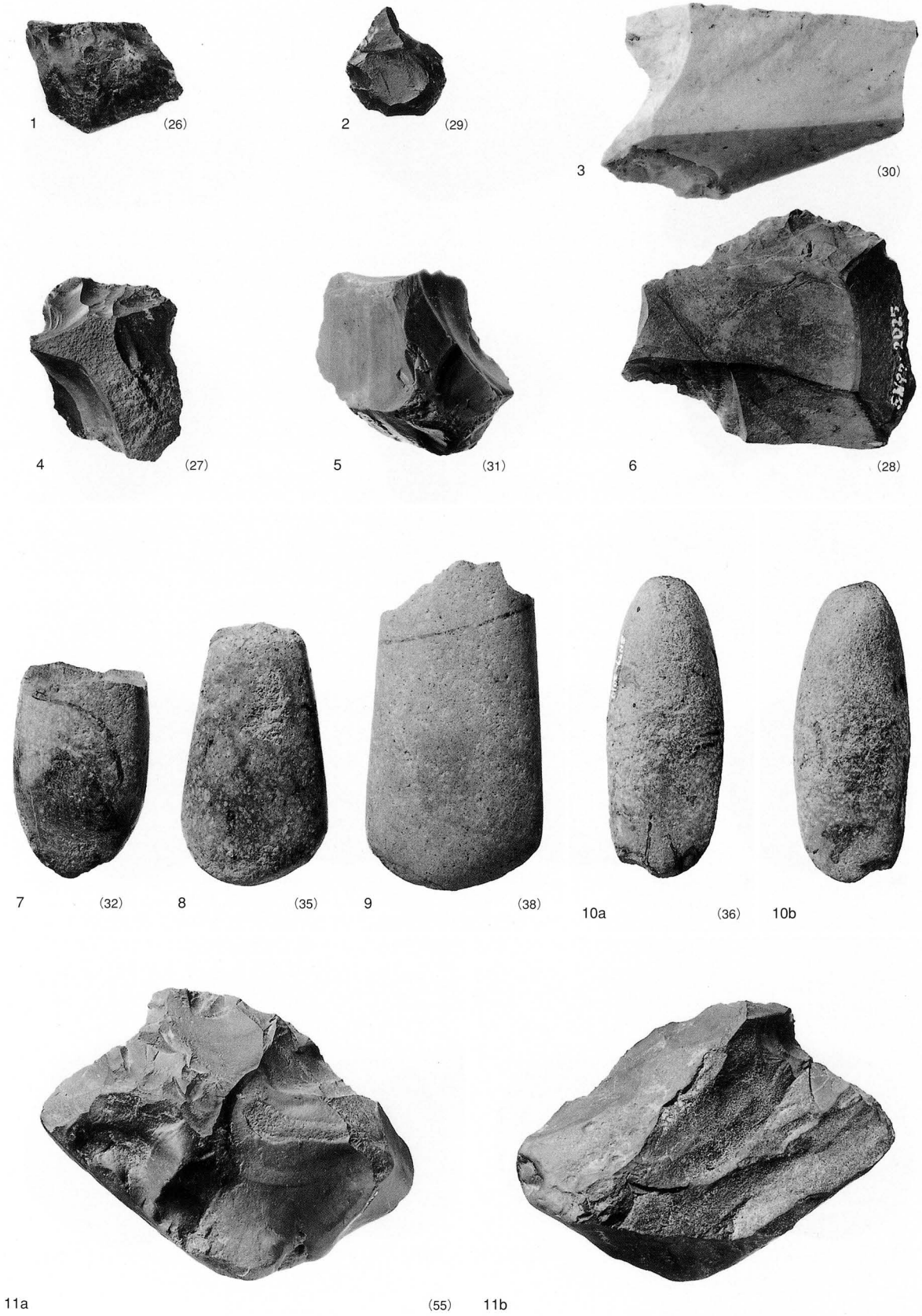
1 R区 ２b層出土土偶
2 R区 ２b層出土蓋形土製品

PL. 25　山王囲遺跡出土土器、土製品
Jomon and Yayoi pottery and clay objects from the Sanno-gakoi site



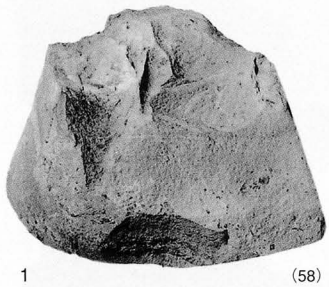
1～17 石鏃　18～24 石錐　25 石匙
26 石製小玉　27 石庖丁

PL. 26　山王囲遺跡出土石器、石製品
Stone implements from the Sanno-gakoi site

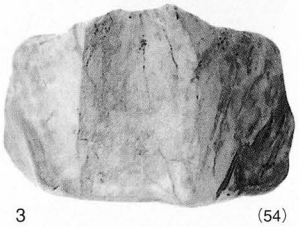


1 楔形石器　2～6 不定形石器
7～10 磨製石斧　11 石核

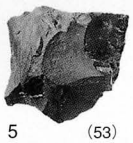
PL. 27　山王囲遺跡出土石器
Stone implements from the Sanno-gakoi site

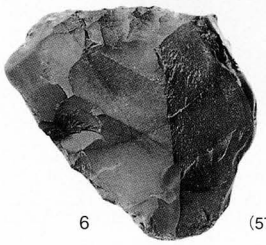

1 (58)

2 (59)


3 (54)

4 (52)


5 (53)

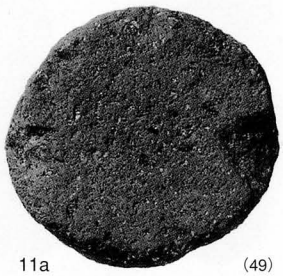

6 (57)

7 (56)

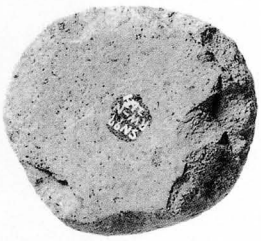
8a (48)

9a (50)

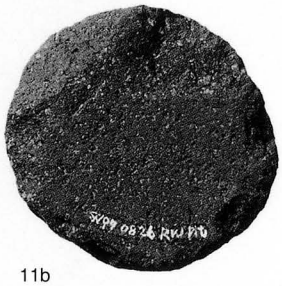
10a (51)


11a (49)

8b

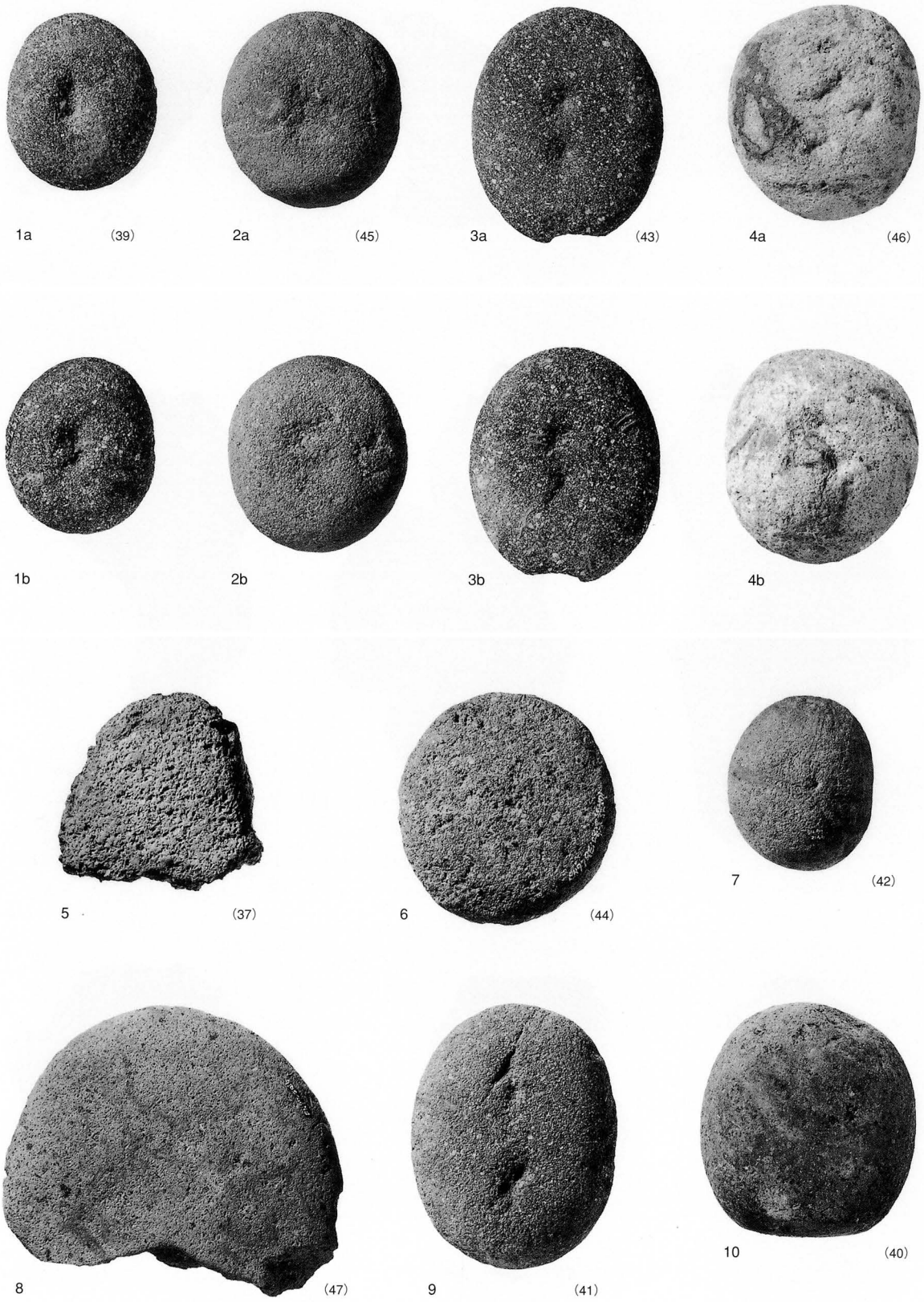

9b

10b


11b

1～7 石核　8～11 円盤状石器

PL. 28　山王囲遺跡出土石器
Stone implements from the Sanno-gakoi site

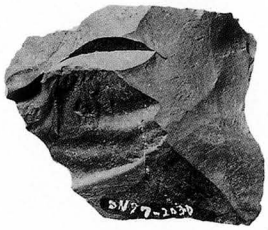


1～4 凹石　5 磨石　6・7 凹石
8 石皿　9 凹石　10 磨石

PL. 29　山王囲遺跡出土石器
Stone implements from the Sanno-gakoi site

1 (60)

2 (61)



3 (63)

4a (64・65・66)

4b

4c

5 (64)

6 (65)

7 (66)

1～3 剥片　4 剥片No.64～66接合状態
5～7 接合剥片

PL. 30　山王囲遺跡出土石器
Stone implements from the Sanno-gakoi site

国史跡 山王囲遺跡
発掘調査報告書Ⅲ

平成10年３月10日　印 刷
平成10年３月25日　発 行

発 行　宮城県一迫町教育委員会
栗原郡一迫町真坂字清水田河前５番地
ＴＥＬ　０２２８－５２－２１１１

印 刷　㈲ 平 電 子 印 刷 所
福島県いわき市平北白土字西ノ内13
ＴＥＬ　０２４６－２３－９０５１